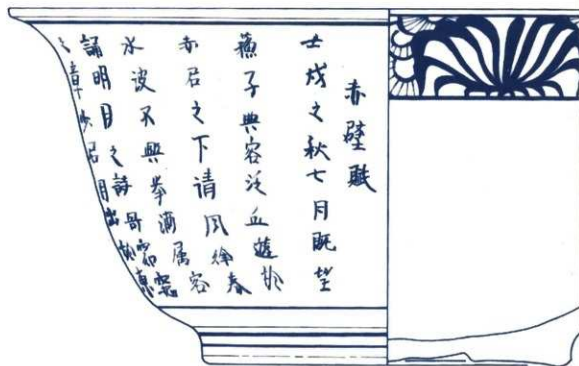


# 有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—



1995.3

伊丹市教育委員会  
大手前女子大学史学研究所

# 有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—



1995.3

伊丹市教育委員会  
大手前女子大学史学研究所



武田政義所藏 (325.8×167.0cm)



第51次調査 A-1区2次面(垂直)



第51次調査 A-1区1次面(垂直)

# 序

有岡城跡の発掘調査は、昭和50年度に始まり現在では150次をこえる調査が行われてきています。その間、昭和54年12月には、念願がかなって国史跡に指定されました。そして、昭和58年からはJR伊丹駅東側に残されていた本丸地区の整備を、発掘調査の成果をもとに実施してまいりました。この史跡復元工事は平成5年度に完了し、現在では郷土の歴史を今に伝える歴史公園として、また市民憩いの場として活用されています。このように発掘調査の成果が、一つの具体的な形で市民に還元されることは大変有意義なことであります。また同様に、調査の成果を記録した報告書についても、研究者による歴史解明に寄与するだけでなく、郷土史料として広く市民に活用されるものと考えております。

本書は、宮ノ前地区市街地再開発事業地区内で実施した有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査成果であります。この再開発事業に伴う発掘調査は、昭和61年度から現在に至るまで継続して行っており、これまで数々成果がありました。

特に発掘調査に際しては、大手前女子大学の全面的な協力をいただきました。そしてここに、発掘調査の成果が見事に整理され報告書として刊行されますことは敬服の至りであります。酷暑酷暑の中、直接調査の指導に当たられた藤井直正教授をはじめ調査員の方々の一方ならぬご苦勞に対し、心から謝意を申し上げます。

平成7年3月

伊丹市教育委員会

教育長 乾 一雄



## 序

伊丹市の前身ともいえる有岡城は、16世紀の末近く、荒木村重によって築かれた。内部には計画的な町割がほどこされ、周囲には惣構えといわれる壮大な土塁をめぐらしていた。日本近世の城郭として、きわめて類例のまれなもので、国の史跡に指定されている。

この史跡地に本格的な考古学調査がなされたのは比較的新しく、昭和50年、伊丹市教育委員会によって行われたのが初めてである。わが大手前女子学園も、昭和60年以来、伊丹市の委託を受けて、この学術的事業に参加し、幾多の注目すべき成績を取めた。その成果が「有岡城跡・伊丹郷町」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの報告書で、伊丹市教育委員会と本学史学研究所の名において出版されている。

今回の調査は、有岡城から発展した伊丹郷町の中でも、もっとも中心をなす宮ノ前地区の市街地再開発事業に関連してである。宮ノ前商店街の西側に設定せられたA・B二地区を本学園が担当し、昭和62年9月に発掘調査を始めてから、引続き一応の結末がつくまで、実に6ヵ年に亘ったが、これは既設家屋の撤去など複雑な問題が多く、一方的に調査を進めることができなかったからである。

ところが、この地域は伊丹郷町にとって、とくに重要な部分を占めていて、有岡城時代から江戸時代をへて今日に至る伊丹の町の変遷を解明する鍵を握っているところといつてよい。従って、その面積は必ずしも広くはないが、調査の成果としては、発掘遺構の精密な実測記録はもとより、発見された埋蔵物にも、他に出土例のまれなものも少なくないのである。これらの貴重な資料を主に、年代順に配列収録し、3分冊にして出版する予定で、本冊はその最初のものである。

さて、今回の宮ノ前地区の調査とその資料整理は、伊丹市からの委託を受け、同市教育委員会の指導のもとに、本学藤井直正教授を担当責任者として行われた。現場における発掘調査は、藤井とともに川口宏海・前川 要の両氏が当たり、濱田幸司氏がこれを補佐し、多数の本学史学科の学生が参加・協力したのである。調査資料と出土遺物は川口・前川両氏のほか、藤本史子氏をはじめ、小笠原典子・赤松和佳・木南アツ子・山崎晴世・川上啓子ら、本学の卒業生が分担し、平井千保がこれらの事務を総括した。本報告書の執筆は、主として川口・前川両氏であるが、上記の者が一部分担した。

終りに当たり、発掘調査の実施には伊丹市都市開発事務所関係諸氏、資料整理には同市教育委員会教育長以下関係諸氏から有益な指導と助言をいただいた。なお兵庫県教育委員会社会教育・文化財課担当の諸氏からも多くの指導・援助を与えられたことを特記して、深甚の謝意を表するものである。

平成7年3月

大手前女子大学学長 日比野丈夫





## 例 言

1. 本書は、兵庫県伊丹市による宮ノ前地区市街地再開発事業に伴って、伊丹市宮ノ前1丁目・2丁目において実施した、有岡城跡と伊丹郷町の発掘調査の報告書である。
2. 現場における調査は、大手前女子大学日比野丈夫学長を委員長とする「有岡城跡調査委員会」を組織し、大手前女子大学史学科教授藤井直正を調査担当者として、大手前女子学園が伊丹市の委託による事業として実施した。なお、これにかかる経費は委託料として伊丹市より支出を受けた。
3. 本書に取めた調査は、第43次調査（昭和62年3月9日から同年6月2日までの61年度と62年度に分けて行う）、第51次調査（昭和62年9月8日から昭和63年3月31日まで）および第78次調査（平成元年6月23日から8月31日まで）である。
4. 現場における調査は、調査担当者である藤井直正の管理・指導のもとに、主任調査員として、川口宏海（大手前栄養文化学院助教授）・前川 要（当時、大手前女子大学研究嘱託、現在、富山大学人文学部助教授）、主任調査員補佐として、濱田幸司（当時、大阪教育大学修士課程、現在、寝屋川市教育委員会技手）が専従した。また、調査員及び事務員は大手前女子大学卒業生を充てた。この詳細については、「調査の経過」で述べた。さらに、大手前女子大学史学科所属学生のほか、多数の学生諸君の参加・協力を得、調査補助員とした。これら参加者の名簿は巻末に掲げた。
5. 調査資料ならび出土の整理作業は主任調査員川口宏海・前川 要・藤本史子（大手前女子大学研究嘱託・現在、大阪市立大学修士課程）と、その指導のもとに、調査員小笠原典子・赤松和佳・木南アツ子（現在、芦屋市教育委員会嘱託）・山崎晴世、事務員平井千保、卒業後新たに調査員に加わった川上啓子によって、現場の終了後、逐次、これも多数の学生諸君の協力を得て進めてきた。  
資料整理および本報告書作成に向けての作業は、改めて平成5年度より6カ年継続事業の一部として伊丹市教育委員会より委託を受けた。  
なお、整理作業と報告書の作成は、平成元年5月以後、学内調査組織の整備に伴い、大手前女子大学史学研究所周文化財調査室、有岡城跡・伊丹郷町調査部に引き継いで実施したことを付記する。
6. 本整理事業は、調査担当者毎にまとまった調査区域を2年毎に3回に分けて順次報告することとしているが、今回の報告は、そのうちの第1期分である。

	川口担当	前川担当
第Ⅰ期 (平成5・6年度)	第43次調査	第51次調査A-1・2・3・4区 第78次調査A-5・B-8区
第Ⅱ期 (平成7・8年度)	第51次調査B-1-1・2-1 2-2・3・D-2区 第63次調査B-5・D-4区 第97次調査D-6・B-13区	第51次調査B-1-4区 第78次調査B-7区
第Ⅲ期 (平成9・10年度)		第51次調査B-1-2・1-3・1-4区 第63次調査B-4・6区 第83次調査B-9・10区 第86次調査B-11-1・11-2・12区

7. 本報告書の作成は企画段階で、藤井の指導・助言のもとに、原稿の執筆と編集の作業は主任調査員及び調査員の全員が担当し、学生諸君多数の協力によって進めた。原稿の執筆分担については、目次に明記した通りである。但し、第51次・78次調査の建物跡（S B01～S B20）は前川が執筆した。
8. 巻頭に掲げた口絵写真のうち、『天保15年伊丹郷町分間絵図』は、原本が武田政義氏所蔵で伊丹市博物館を通して提供を受けた。
9. 遺構写真は川口・前川、遺物写真は赤松・山崎・川上がそれぞれ撮影した。
10. 遺構表示記号は、奈良国立文化財研究所の用例にほぼ従ったが、SS（礎石）・SF（堀）のみ独自のものを使用した。

SA 欄 SB 建物 SD 溝 SE 井戸 SF 堀 SI 塼

SK 土壌 SP 柱穴 SS 礎石 SX その他（カマドなど）

11. 位置の記載は、平面直角座標系Vによる。建設省基本点・基準点、および伊丹市公共基準点を使用し、記載している数値は、X・Yともm単位で、水準はO、P（大阪湾中等潮位）である。
12. 遺構・遺物の色調については、『新版・標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局昭和51年）を併用し、すべて肉眼観察によって比定した。土層断面図において、石や瓦は $\text{|||||}$ のスクリントーンを使って表した。遺物の検付けにおいては、 $\text{|||||}$ 赤色・ $\text{|||||}$ 緑色・ $\text{|||||}$ 茶色・ $\text{|||||}$ 黄色のスクリントーンを使って表した。瓦質土器は断面図に $\text{|||||}$ のスクリントーンを使って表した。
13. 現場における発掘調査の実施に当っては、伊丹市都市開発事務所関係者諸氏、および平成5年度から2か年にわたる資料整理に至るまで、伊丹市教育委員会教育長以下、担当部局各位の懇切なご指導とご配慮を得た。

また、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の担当各位の指導・助言を得たほか、株式会社染の川組、西村興業株式会社、写測エンジニアリング株式会社、イビソク株式会社の協力、その他多くの機関と多数の方々への援助を受けた。

さらに、大手前女子学園藤井健造前理事長（平成3年2月10日逝去）、現福井秀加理事長、大手前女子大学日比野丈夫学長、企画・運営委員会諸先生には、調査の進行から本報告書の刊行に至るまで指導・助言と各方面にわたってご配慮を得たことを付記する。

14. 今回の報告書作成にあたり、多くの方がた、および機関のご協力・ご教示を賜ったが、ここに、関係各氏の芳名を載せ、謝意を表する。なお、敬称は略させていただきます。

稲垣正宏（滋賀県立安土城考古博物館）

大橋康二（佐賀県九州陶磁文化館）

酒井義仁（信楽伝統産業会館）

和島恭仁男（伊丹市立博物館）

# 本文目次

序	伊丹市教育委員会教育長 乾 一雄	i
序	大手前女子大学学長 日比野丈夫	iii
例 言		v
第1章 調査の経過	(藤井)	1
第2章 調査の方法	(川口)	5
第1節 調査区割と図面割		5
第2節 基準点と水準点の設置		8
第3節 調査の方法		9
第3章 調査の成果		10
第1節 第43次調査(試掘調査)	(川口)	10
1. Aトレンチ		10
2. B-1トレンチ		21
3. B-2トレンチ		26
4. Cトレンチ		33
5. Dトレンチ		35
6. Eトレンチ		40
7. Fトレンチ		43
8. G-1・G-2トレンチ		47
9. Hトレンチ		51
10. まとめ		56
第2節 第51次調査A-1区	(赤松)	59
1. はじめに		59
2. 基本層序		59
3. 2次面遺構と遺物		60
4. 1次面遺構と遺物		111
第3節 第51次調査A-2区	(山崎)	147
1. 基本層序		147
2. 3次面遺構と遺物		147
3. 2次面遺構と遺物		150
4. 1次面遺構と遺物		154

第4節	第51次調査A-3区	(小笠原)	159
	1. 基本層序		161
	2. 3次面遺構と遺物		161
	3. 2次面遺構と遺物		171
	4. 1次面遺構と遺物		174
第5節	第51次調査A-4区	(山崎)	178
	1. 基本層序		178
	2. 1次面遺構と遺物		178
第6節	第78次調査A-5区	(木南)	183
	1. 基本層序		183
	2. 2次面遺構と遺物		183
	3. 1次面遺構と遺物		188
第7節	第78次調査B-8区	(小笠原)	190
	1. 基本層序		190
	2. 3次面遺構と遺物		190
	3. 2次面遺構と遺物		191
	4. 1次面遺構と遺物		196
第4章 結 語			200
第1節	調査区域の遺構の変遷について	(川口)	200
第2節	遺物計測方法および分析結果について	(藤本)	220
第3節	遺構から見た近世伊丹郷町のありかた—まとめにかえて—	(前川)	238
第4節	本調査の意義	(前川)	242
〈表紙図版解説〉			(藤井) 246

## 図 版 目 次

巻頭図版1 天保15年伊丹町分間絵図

巻頭図版2 遺構全体写真

第51次調査A-1区第2次面

第51次調査A-1区第1次面

図版1 第43次調査Aトレンチ 遺構(1)

1. 第6次面全景
2. 第5次面全景
3. 第4次面(南側)全景
4. 第4次面(北側)全景
5. 第3次面(北側)全景
6. 第3次面(南側)全景

図版2 第43次調査A・B-1トレンチ 遺構(2)

1. Aトレンチ第2次面(北側)全景
2. Aトレンチ第2次面(南側)全景
3. Aトレンチ第1次面(南側)全景
4. Aトレンチ第1次面(北側)全景
5. B-1トレンチ第4次面全景
6. B-1トレンチ第3次面全景

図版3 第43次調査B-1・B-2トレンチ 遺構(3)

1. B-1トレンチ第2次面(東側)全景
2. B-1トレンチ第1次面全景
3. B-2トレンチ全景
4. B-2トレンチ第3次面全景
5. B-2トレンチ第2次面全景
6. B-2トレンチ第1次面全景

図版4 第43次調査C・Dトレンチ 遺構(4)

1. Cトレンチ第4次面全景
2. Cトレンチ第3次面全景
3. Cトレンチ第2次面全景
4. Cトレンチ第1次面全景
5. Dトレンチ第3次面全景
6. Dトレンチ第2次面全景
7. Dトレンチ第1次面全景

図版5 第43次調査E・Fトレンチ 遺構(5)

1. Eトレンチ第4次面全景

2. Eトレンチ第3次面全景

3. Eトレンチ第2次面全景

4. Eトレンチ第1次面全景

5. Fトレンチ第2次面全景

6. Fトレンチ第1次面全景

図版6 第43次調査G-1・G-2・Hトレンチ 遺構(6)

1. G-1トレンチ第2次面全景
2. G-1トレンチ第1次面全景
3. G-2トレンチ第2次面全景
4. G-2トレンチ第1次面全景
5. Hトレンチ第2次面全景
6. Hトレンチ第1次面全景

図版7 第43次調査 遺物(1)

Aトレンチ S I03・SK31・SK61・S I01・  
S I03・SK65, B-1トレンチ SP13・SP  
12・SK33・SK13・SK62・SK09, B-2ト  
レンチ 第3次包含層・SK65・SK56

図版8 第43次調査 遺物(2)

B-2トレンチ SK65・SK31・SK12・S I  
01, Cトレンチ SK05・SE02・SE01, Dト  
レンチ SK113・SK114

図版9 第43次調査 遺物(3)

Dトレンチ SK20・SK97・SK91, Eトレンチ  
SD02・SK13・SK30・SK56, FトレンチS  
D01・SK32・SK20・SK25

図版10 第43次調査 遺物(4)

Fトレンチ S I01, G-1トレンチ SD07・  
SK38, G-2トレンチ SD03, Hトレンチ  
SK01・SE01・SD02・SD01・SK12・SK32

図版11 第51次調査A-1区遺構(1)

1. 第51次調査A-1区第2次面全景
2. 第51次調査A-1区第1次面全景

図版12 第51次調査A-1区遺構(2)

1. SX15・16・17
2. SK05・06・07・08・09

3. SK14  
4. SK1265  
5. SK1269  
6. SE13  
7. SE20  
8. SE22
- 图版13 第51次调查A-1区遺構(3)
1. SE21  
2. SI27  
3. SK883  
4. SK1027  
5. SI30  
6. SK665  
7. SK823  
8. SK1107
- 图版14 第51次调查A-1区遺構(4)
1. SK1151  
2. SK1067  
3. SK652  
4. SK670  
5. SK673・674  
6. SK747  
7. SK796  
8. SK923
- 图版15 第51次调查A-1区遺構(5)
1. SK1110  
2. SK1217  
3. SK614  
4. SK1214  
5. SX03  
6. SE06  
7. SI16  
8. SI08
- 图版16 第51次调查A-1区遺構(6)
1. SI10  
2. SI24  
3. SI26・SK593
4. SK593  
5. SK604  
6. SK605  
7. SK606  
8. SK282
- 图版17 第51次调查A-1区遺構(7)
1. SK213  
2. SK226  
3. SK230  
4. SK288  
5. SK422  
6. SK428  
7. SK465  
8. SK499
- 图版18 第51次调查A-1区遺構(8)
1. SK537  
2. SK581  
3. SK598  
4. SK383  
5. SK556  
6. SD33  
7. SD35  
8. SD45
- 图版19 第51次调查A-1区遺物(1)
- SF01・SK13・SK14・SK1264・SK1265・  
SK1269・SE13・SE20
- 图版20 第51次调查A-1区遺物(2)
- SE20・SE22
- 图版21 第51次调查A-1区遺物(3)
- SE22・SE16
- 图版22 第51次调查A-1区遺物(4)
- SE16・SE19・SE21
- 图版23 第51次调查A-1区遺物(5)
- SE21・SI27・SK883・SK871
- 图版24 第51次调查A-1区遺物(6)
- SK1027・SI30・SK1056・SK1262・SK949・  
SK665・SK680・SK725・SK733・SK823

- 図版25 第51回調査A-1区遺物(7)  
S K916 · S K922 · S K1107 · S K1151 · S K705 · S K1067
- 図版26 第51次調査A-1区遺物(8)  
S K644 · S K652 · S K670 · S K673 · S K674 · S K744
- 図版27 第51次調査A-1区遺物(9)  
S K447 · S K777 · S K780 · S K796 · S K923 · S K1035 · S K1087
- 図版28 第51次調査A-1区遺物(10)  
S K1110 · S K1171
- 図版29 第51次調査A-1区遺物(11)  
S K117 · S K1179 · S K1217 · S K614
- 図版30 第51次調査A-1区遺物(12)  
S K614 · S K1214 · S D11 · S X03
- 図版31 第51次調査A-1区遺物(13)  
S X03 · S E06 · S E12 · S K613 · S I16 · S I05
- 図版32 第51次調査A-1区遺物(14)  
S I08 · S I10 · S I19 · S I24 · S I26 · S K605 · S K593 · S K604 · S K606 · S K229 · S K271 · S K329
- 図版33 第51次調査A-1区遺物(15)  
S K329 · S K282 · S K334 · S X350 · S K528 · S D30 · S K611 · S K213 · S K226
- 図版34 第51次調査A-1区遺物(16)  
S K230 · S K231 · S K288 · S K356 · S K422 · S K428 · S K465
- 図版35 第51次調査A-1区遺物(17)  
S K499 · S K537 · S K598 · S K581 · S K594 · S K479 · S K237 · S K285
- 図版36 第51次調査A-1区遺物(18)  
S K285 · S K383 · S K556 · S D33 · S D35 · S D45
- 図版37 第51次調査A-2区遺構(1)  
1. 第3次面全景  
2. 第2次面全景  
3. 第1次面全景
4. S K129  
5. S K145
- 図版38 第51次調査A-2区遺構(2)  
1. S K188  
2. S K191  
3. S K192  
4. S K97  
5. S K104 · S D04  
6. S D05  
7. S K81  
8. S D06  
9. S K78
- 図版39 第51次調査A-2区遺物(1)  
S K128 · S K129 · S K145 · S K188 · S K192 · S K191
- 図版40 第51次調査A-2区遺物(2)  
S K191 · S D104 · S K88 · S K97 · S D05 · S D04 · S D06
- 図版41 第51次調査A-2区遺物(3)  
S D06 · S E01 · S K82 · S K81 · S K78
- 図版42 第51次調査A-3区遺構(1)  
1. 第3次面全景  
2. 第2次面全景  
3. 第1次面全景  
4. S K159  
5. S K175
- 図版43 第51次調査A-3区遺構(2)  
1. S K180  
2. S K146  
3. S K156  
4. S K184  
5. S K126  
6. S K111  
7. S K114  
8. S K117
- 図版44 第51次調査A-3区遺構(3)  
1. S P94 · S P93 · S P92 · S P91  
2. S P91

3. SP92  
 4. SP93  
 5. SP94  
 6. SK120  
 7. SK05  
 8. SK55
- 図版45 第51次調査A-3区遺物(1)  
 SE04
- 図版46 第51次調査A-3区遺物(2)  
 SK159・SK175・SK146・SK180・SK185
- 図版47 第51次調査A-3区遺物(3)  
 SK180・SK146・SK156・SK157・SK184・  
 SK126・SK111
- 図版48 第51次調査A-3区遺物(4)  
 SK114・SK117・SK120・SP94・SK52・  
 SK55
- 図版49 第51次調査A-3区遺物(5)  
 SK05・SK49
- 図版50 第51次調査A-4区遺構(1)  
 1. 全景  
 2. SK1320  
 3. SK1332
- 図版51 第51次調査A-4区遺物(1)  
 SK1313・SK1353・SK1320・SK1332・  
 SK1311
- 図版52 第78次調査A-5区遺構(1)  
 1. 第3次面全景  
 2. 第2次面全景
3. 第1次面全景
- 図版53 第78次調査A-5区遺構(2)  
 1. SI05・06  
 2. SK66  
 3. SK51  
 4. SK52  
 5. SK105  
 6. SK99  
 7. SK57  
 8. SD04
- 図版54 第78次調査A-4区遺物(1)  
 SI05・SK66・SK36・SK51・SK52・SK105・  
 SK99・SK57・SD04・SK31
- 図版55 第78次調査B-8区遺構(1)  
 1. 第78次調査B-8区第3次面全景  
 2. 第78次調査B-8区第2次面全景
- 図版56 第78次調査B-8区遺構(2)  
 1. 第1次面全景  
 2. SD04  
 3. SK67  
 4. SK43  
 5. SK01
- 図版57 第78次調査B-8区遺物(1)  
 SD04・SK120・SK67・SK88・SK43
- 図版58 第78次調査B-8区遺物(2)  
 SK43・SK45・SK01
- 図版59 第78次調査B-8区遺物(3)  
 SK01



## 図・表目次

### (調査の経過)

第1表 伊丹郷町火災年表 .....	3
第1図 伊丹郷町古絵図 .....	4

### (調査の方法)

第2図 5m方眼割図 .....	5
第3図 1/20測量図面割図 .....	5
第4図 岡城跡・伊丹郷町調査区割図 .....	6
第5図 岡城跡・伊丹郷町図面割図 .....	7
第6図 国土座標基準点・水準点網図 .....	8
第2表 国土座標基準点・水準点成果 .....	9

### (第43次調査)

第7図 第43次調査地点位置図 .....	10
第8図 Aトレンチ遺構全体図(1) .....	11・12
第9図 Aトレンチ遺構全体図(2) .....	13・14
第10図 Aトレンチ遺構全体図(3) .....	15・16
第11図 Aトレンチ東壁土層図 .....	17・18
第12図 AトレンチS I03遺構図 .....	19
第13図 AトレンチS I01遺構図 .....	19
第14図 AトレンチS I03(1)・SK61(2)・ SK31(3)・S I01(4・5)出土遺物...	20
第15図 AトレンチS I03出土遺物 .....	20
第16図 B-1トレンチ遺構全体図 .....	21・22
第17図 B-1トレンチ南壁土層図 .....	23
第18図 B-1トレンチSP12遺構図 .....	24
第19図 B-1トレンチSP13(1)・SP12 (2・3)・SK33(4)・SK13(5)・ SK62(6・7)・SK09(8)出土遺物...	24
第20図 B-2トレンチ西壁土層図 .....	26
第21図 B-2トレンチ遺構全体図 .....	27・28
第22図 B-2トレンチSK65遺構図 .....	29
第23図 B-2トレンチ第3次面包含層(1)・ SK56(2)・SK65(3~9)出土遺物...	30
第24図 B-2トレンチS I01遺構図 .....	31

第25図 B-2トレンチSK31(1)・SK12 (2)・S I01(3・4)出土遺物 .....	32
第26図 Cトレンチ遺構全体図 .....	33
第27図 Cトレンチ北壁土層図 .....	34
第28図 CトレンチSE01遺構図 .....	35
第29図 CトレンチSE02遺構図 .....	35
第30図 CトレンチSK05(1)・SE02(2)・ SE01(3)出土遺物(1) .....	35
第31図 CトレンチSE01出土遺物(2) .....	36
第32図 Dトレンチ遺構全体図 .....	37
第33図 Dトレンチ北壁土層図 .....	39
第34図 DトレンチSK91遺構図 .....	40
第35図 DトレンチSK113(1・2)・SK114 (3~6)・SK20(7)・SK97(8)・ SK91(9)出土遺物(1) .....	40
第36図 DトレンチSK20出土遺物(2) (S=1/2) .....	40
第37図 Eトレンチ遺構全体図 .....	41
第38図 Eトレンチ北壁土層図 .....	42
第39図 EトレンチSD02(1・2)・SK13 (3)・SK30(4)出土遺物 .....	43
第40図 EトレンチSK56出土遺物 .....	43
第41図 Fトレンチ遺構全体図 .....	44
第42図 Fトレンチ東壁土層図 .....	45
第43図 FトレンチS I01遺構図 .....	46
第44図 FトレンチSD01出土遺物(1) .....	46
第45図 FトレンチSD01出土遺物(2) .....	46
第46図 FトレンチSK32(1)・SK20(2)・ S I01(3・4)出土遺物 .....	47
第47図 G-1トレンチ遺構全体図 .....	48
第48図 G-1トレンチ北壁土層図 .....	48
第49図 G-1トレンチSK38遺構図 .....	49
第50図 G-1トレンチSD07遺構図...	49
第51図 G-1トレンチSD07(1)・SK38 (2)出土遺物 .....	49

第52図	G-2 トレンチ遺構全体図	49	第85図	SE22遺構図	73
第53図	G-2 トレンチ北壁土層図	50	第86図	SE22出土遺物(1)	74
第54図	G-2 トレンチSD03出土遺物	50	第87図	SE22出土遺物(2)	75
第55図	H トレンチ遺構全体図	51-52	第88図	SE22出土遺物(3)	75
第56図	H トレンチ北壁土層図	53	第89図	SE22出土遺物(4)(S=1/2)	75
第57図	H トレンチSE01遺構図	54	第90図	SE16遺構図	76
第58図	H トレンチSD01・02遺構図	54	第91図	SE16出土遺物(1)	77
第59図	H トレンチSK01(1)・SD01(2)・ SK12(3・5)・SE01(4)・SD02 (6)出土遺物	55	第92図	SE16出土遺物(2)	78
			第93図	SE16出土遺物(3)	78
			第94図	SE19遺構図	79
			第95図	SE19出土遺物	79
			第96図	SE21遺構図	80
			第97図	SE21出土遺物(1)	81
			第98図	SE21出土遺物(2)	82
			第99図	SE21出土遺物(3)	82
			第100図	SE21出土遺物(4)	83
			第101図	SI27遺構図	83
			第102図	SI27出土遺物	83
			第103図	SK883遺構図	83
			第104図	SK883出土遺物(1)	84
			第105図	SK883出土遺物(2)(S=1/2)	84
			第106図	SK1261(883の上の桶)遺構図	84
			第107図	SK871遺構図	84
			第108図	SK871出土遺物	84
			第109図	SK1027遺構図	85
			第110図	SK1027出土遺物	85
			第111図	SI30遺構図	85
			第112図	SI30出土遺物	86
			第113図	SK1056遺構図	86
			第114図	SK1056出土遺物	86
			第115図	SK1262遺構図	86
			第116図	SK1262出土遺物	86
			第117図	SK949遺構図	87
			第118図	SK949出土遺物	87
			第119図	SK665遺構図	87
			第120図	SK665出土遺物	87
			第121図	SK680遺構図	88
			第122図	SK680出土遺物	88

(第51次面調査A-1区)

第60図	調査地点位置図	57-58
第61図	元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町 絵図(点線A-1区域)	59
第62図	西壁土層図	61-62
第63図	SB14遺構図	63
第64図	SB15遺構図	63
第65図	SB16遺構図	63
第66図	SF01遺構図	64
第67図	SF01出土遺物	65
第68図	SX15・16・17遺構図	65
第69図	SX05・06・07・08・09遺構図	66
第70図	SX10・11・12・13遺構図	66
第71図	SX13出土遺物	66
第72図	SX14遺構図	67
第73図	SX14出土遺物	68
第74図	SK1264遺構図	68
第75図	SK1264出土遺物	68
第76図	SK1265遺構図	69
第77図	SK1265出土遺物	69
第78図	SK1269遺構図	69
第79図	SK1269出土遺物	69
第80図	SE13遺構図	70
第81図	SE13出土遺物	70
第82図	SE20遺構図	71
第83図	SE20出土遺物(1)	72
第84図	SE20出土遺物(2)(S=1/2)	72

第123图	S K 725 遺構図	88	第160图	S K 780 遺構図	100
第124图	S K 725 出土遺物	88	第161图	S K 780 出土遺物	100
第125图	S K 733 遺構図	89	第162图	S K 796 遺構図	100
第126图	S K 733 出土遺物	89	第163图	S K 796 出土遺物 (1)	100
第127图	S K 823 遺構図	90	第164图	S K 796 出土遺物 (2) (S=1/2)	100
第128图	S K 823 出土遺物	90	第165图	S K 923 遺構図	101
第129图	S K 916 遺構図	90	第166图	S K 923 出土遺物	101
第130图	S K 916 出土遺物 (1)	90	第167图	S K 1035 遺構図	102
第131图	S K 916 出土遺物 (2)	90	第168图	S K 1035 出土遺物	102
第132图	S K 922 遺構図	91	第169图	S K 1087 遺構図	102
第133图	S K 922 出土遺物	91	第170图	S K 1087 出土遺物	102
第134图	S K 1107 遺構図	91	第171图	S K 1110 遺構図	102
第135图	S K 1107 出土遺物 (1)	91	第172图	S K 1110 出土遺物	103
第136图	S K 1107 出土遺物 (2)	91	第173图	S K 1171 遺構図	104
第137图	S K 1151 遺構図	91	第174图	S K 1171 出土遺物 (1)	105
第138图	S K 1151 出土遺物	92	第175图	S K 1171 出土遺物 (2)	106
第139图	S K 705 遺構図	92	第176图	S K 1171 出土遺物 (3) (S=1/2)	106
第140图	S K 705 出土遺物	93	第177图	S K 1179 遺構図	107
第141图	S K 1067 遺構図	93	第178图	S K 1179 出土遺物	108
第142图	S K 1067 出土遺物	94	第179图	S K 1217 遺構図	109
第143图	S K 644 遺構図	94	第180图	S K 1217 出土遺物	109
第144图	S K 644 出土遺物	94	第181图	S K 614 遺構図	109
第145图	S K 652 遺構図	95	第182图	S K 614 出土遺物 (1)	110
第146图	S K 652 出土遺物	95	第183图	S K 614 出土遺物 (2)	111
第147图	S K 670 遺構図	95	第184图	S K 614 出土遺物 (3)	112
第148图	S K 670 出土遺物 (1)	95	第185图	S K 614 出土遺物 (4) (S=1/2)	112
第149图	S K 670 出土遺物 (2)	96	第186图	S K 1214 遺構図	112
第150图	S K 670 出土遺物 (3) (S=1/2)	96	第187图	S K 1214 出土遺物	112
第151图	S K 673 · 674 遺構図	97	第188图	S D 11 遺構図	112
第152图	S K 673 (1~3) · S K 674 (4~8) 出土遺物 (1)	98	第189图	S D 11 出土遺物	112
第153图	S K 674 出土遺物 (2) (S=1/2)	98	第190图	S B 01 遺構図	113
第154图	S K 744 遺構図	98	第191图	S B 02 遺構図	114
第155图	S K 744 出土遺物	98	第192图	S B 03 遺構図	114
第156图	S K 747 遺構図	98	第193图	S B 04 遺構図	115
第157图	S K 747 出土遺物	99	第194图	S B 05 遺構図	115
第158图	S K 777 遺構図	99	第195图	S B 06 遺構図	116
第159图	S K 777 出土遺物	100	第196图	S B 07 遺構図	116
			第197图	S B 08 遺構図	116

第198図	S B09遺構図	116	第232図	S K282出土遺物	128
第199図	S B10遺構図	117	第233図	S K334遺構図	129
第200図	S X03遺構図	118	第234図	S K334出土遺物	129
第201図	S X03出土遺物	118	第235図	S K350遺構図	130
第202図	S E06遺構図	119	第236図	S K350出土遺物	130
第203図	S E06出土遺物(1)	120	第237図	S K528・S D30遺構図	130
第204図	S E06出土遺物(2)	121	第238図	S K528(1)・S D30(2~4) 出土遺物(1)	131
第205図	S E12遺構図	121	第239図	S D30出土遺物(2)	131
第206図	S E12出土遺物	121	第240図	S D30出土遺物(3)(S=1/2)	131
第207図	S K613遺構図	121	第241図	S K611遺構図	131
第208図	S I16遺構図	121	第242図	S K611出土遺物	132
第209図	S K613(1~3)・S I16(4~6) 出土遺物	122	第243図	S K213遺構図	132
第210図	S I05遺構図	122	第244図	S K213出土遺物	132
第211図	S I05出土遺物	122	第245図	S K226遺構図	132
第212図	S I08遺構図	123	第246図	S K226出土遺物	132
第213図	S I08出土遺物	123	第247図	S K231・230遺構図	133
第214図	S I10遺構図	123	第248図	S K230(1)・S K231(2~6) 出土遺物	133
第215図	S I10出土遺物	124	第249図	S K288遺構図	134
第216図	S I19遺構図	124	第250図	S K288出土遺物	134
第217図	S I19出土遺物	124	第251図	S K356遺構図	134
第218図	S I24遺構図	125	第252図	S K356出土遺物	134
第219図	S I24出土遺物	125	第253図	S K422遺構図	134
第220図	S I26・S K593・S K604・S K605 遺構図	125	第254図	S K422出土遺物(1)	134
第221図	S I26(1)・S K605(2・3)・ S K593(4~7)・S K604(8・9) 出土遺物(1)	126	第255図	S K422出土遺物(2)(S=1/2)	134
第222図	S K604出土遺物(2)	126	第256図	S K428遺構図	134
第223図	S K606遺構図	127	第257図	S K428出土遺物	135
第224図	S K606出土遺物	127	第258図	S K465遺構図	135
第225図	S K229遺構図	127	第259図	S K465出土遺物(1)	136
第226図	S K229出土遺物	127	第260図	S K465出土遺物(2)	136
第227図	S K271遺構図	127	第261図	S K499遺構図	137
第228図	S K271出土遺物	127	第262図	S K499出土遺物(1)	137
第229図	S K329遺構図	128	第263図	S K499出土遺物(2)	137
第230図	S K329出土遺物	128	第264図	S K537遺構図	137
第231図	S K282遺構図	128	第265図	S K537出土遺物	137
			第266図	S K581遺構図	138
			第267図	S K598遺構図	138

第268区	S K 598 (1・2)・S K 581 (3~6)	出土遺物	138
第269区	S K 479遺構区		139
第270区	S K 594遺構区		139
第271区	S K 594 (1・2)・S K 479 (3)	出土遺物	139
第272区	S K 237遺構区		139
第273区	S K 237出土遺物 (1)		140
第274区	S K 237出土遺物 (2)		140
第275区	S K 237出土遺物 (3) (S=1/2)		140
第276区	S K 285遺構区		140
第277区	S K 285出土遺物		141
第278区	S K 383遺構区		141
第279区	S K 383出土遺物		141
第280区	S K 556遺構区		141
第281区	S K 556出土遺物		141
第282区	S D 33遺構区		142
第283区	S D 33出土遺物		143
第284区	S D 35遺構区		144
第285区	S D 35出土遺物 (1)		145
第286区	S D 35出土遺物 (2) (S=1/2)		145
第287区	S D 45遺構区		145
第288区	S D 45出土遺物 (1)		146
第289区	S D 45出土遺物 (2)		146
<b>(第51次調査A-2区)</b>			
第290区	西壁土層区		147
第291区	S K 128遺構区		148
第292区	S K 128出土遺物		148
第293区	S K 129遺構区		149
第294区	S K 129出土遺物		149
第295区	S K 145遺構区		149
第296区	S K 145出土遺物		150
第297区	S K 188遺構区		150
第298区	S K 188出土遺物		150
第299区	S K 192遺構区		151
第300区	S K 192出土遺物		151
第301区	S K 104遺構区		151

第302区	S K 104出土遺物	151	
第303区	S K 88遺構区	151	
第304区	S K 88出土遺物	151	
第305区	S K 97遺構区	152	
第306区	S K 97出土遺物	152	
第307区	S D 05遺構区	153	
第308区	S D 05出土遺物	153	
第309区	S D 04遺構区	154	
第310区	S D 04出土遺物	154	
第311区	S D 06遺構区	155	
第312区	S D 06出土遺物	156	
第313区	S B 11遺構区	157	
第314区	S E 01遺構区	157	
第315区	S E 01出土遺物	157	
第316区	S K 81遺構区	157	
第317区	S K 82遺構区	157	
第318区	S K 82 (1)・S K 81 (2~4)	出土遺物	158
第319区	S K 78遺構区	158	
第320区	S K 78出土遺物	158	

**(第51次調査A-3区)**

第321区	西壁土層区	159・160
第322区	S E 04遺構区	161
第323区	S E 04出土遺物 (1)	162
第324区	S E 04出土遺物 (2)	163
第325区	S E 04出土遺物 (3)	164
第326区	S E 04出土遺物 (4)	164
第327区	S K 159遺構区	165
第328区	S K 159出土遺物 (1)	165
第329区	S K 159出土遺物 (2)	165
第330区	S K 175遺構区	165
第331区	S K 175出土遺物 (1)	165
第332区	S K 175出土遺物 (2)	166
第333区	S K 180遺構区	166
第334区	S K 146遺構区	166
第335区	S K 185遺構区	166

第336図	S K146 (1・4~7・11)・S K180 (2・9・10)・S K185 (3・8)出土遺物 (1) .....	167	第369図	S K1313出土遺物 .....	179
第337図	S K146出土遺物 (2) .....	168	第370図	S K1353遺構図 .....	179
第338図	S K146出土遺物 (3) (S=1/2) .....	168	第371図	S K1353出土遺物 .....	180
第339図	S K156遺構図 .....	168	第372図	S K1320遺構図 .....	180
第340図	S K156出土遺物 .....	168	第373図	S K1320出土遺物 .....	180
第341図	S K157遺構図 .....	169	第374図	S K1332遺構図 .....	181
第342図	S K157出土遺物 .....	169	第375図	S K1332出土遺物 (1) .....	181
第343図	S K184遺構図 .....	169	第376図	S K1332出土遺物 (2) (S=1/2) .....	181
第344図	S K184出土遺物 .....	170	第377図	S K1311遺構図 .....	181
第345図	S K126遺構図 .....	171	第378図	S K1311出土遺物 .....	182
第346図	S K126出土遺物 .....	171	<b>(第78次調査A-5区)</b>		
第347図	S K111遺構図 .....	171	第379図	西壁土層図 .....	183
第348図	S K111出土遺物 .....	171	第380図	S B17遺構図 .....	184
第349図	S K114遺構図 .....	171	第381図	S B18遺構図 .....	184
第350図	S K114出土遺物 (1) .....	171	第382図	S I 05・06遺構図 .....	185
第351図	S K114出土遺物 (2) .....	172	第383図	S I 05出土遺物 .....	185
第352図	S K117遺構図 .....	172	第384図	S K66遺構図 .....	185
第353図	S K117出土遺物 .....	172	第385図	S K66出土遺物 .....	185
第354図	S K120遺構図 .....	173	第386図	S K36遺構図 .....	185
第355図	S K120出土遺物 .....	173	第387図	S K36出土遺物 .....	186
第356図	S P 94・93・92・91遺構図 .....	173	第388図	S K51遺構図 .....	186
第357図	S P 94出土遺物 .....	173	第389図	S K51出土遺物 .....	186
第358図	S B12遺構図 .....	174	第390図	S K52遺構図 .....	187
第359図	S B13遺構図 .....	174	第391図	S K52出土遺物 .....	187
第360図	S K52遺構図 .....	174	第392図	S K105遺構図 .....	187
第361図	S K52出土遺物 .....	174	第393図	S K105出土遺物 .....	187
第362図	S K05遺構図 .....	175	第394図	S K99遺構図 .....	187
第363図	S K55遺構図 .....	175	第395図	S K99出土遺物 .....	187
第364図	S K55 (1・2)・S K05 (3) 出土遺物 .....	175	第396図	S K57遺構図 .....	188
第365図	S K49遺構図 .....	175	第397図	S K57出土遺物 .....	188
第366図	S K49出土遺物 .....	176	第398図	S D04遺構図 .....	188
<b>(第51次調査A-4区)</b>			第399図	S D04出土遺物 .....	188
第367図	南壁土層図 .....	178	第400図	S B19遺構図 .....	188
第368図	S K1313遺構図 .....	178	第401図	S B20遺構図 .....	189
			第402図	S K31遺構図 .....	189
			第403図	S K31出土遺物 .....	189

(第78次調査B-8区)

第404図	南壁土層図	190
第405図	西壁土層図	191
第406図	S D04遺構図	192
第407図	S D04出土遺物	192
第408図	S K120遺構図	192
第409図	S K120出土遺物	192
第410図	S K67遺構図	193
第411図	S K67出土遺物(1)	193
第412図	S K67出土遺物(2)(S=1/2)	193
第413図	S K88遺構図	193
第414図	S K88出土遺物	193
第415図	S K43遺構図	194
第416図	S K43出土遺物	195
第417図	S K45遺構図	195
第418図	S K45出土遺物	196
第419図	S K01遺構図	197
第420図	S K01出土遺物(1)	198
第421図	S K01出土遺物(2)	199

第422図	S K01出土遺物(3)	199
第423図	S K01出土遺物(4)	199

(続編)

第424図	第51次調査A-1区遺構変遷図(1)	202
第425図	第51次調査A-1区遺構変遷図(2)	203
第426図	第51次調査A-2区遺構変遷図	204
第427図	第51次調査A-3区遺構変遷図	205
第428図	第51次調査A-4区遺構変遷図	206
第429図	第78次調査A-5区遺構変遷図	206
第430図	第78次調査B-8区遺構変遷図	207
第3表	主要遺構年代表	208
第4表	遺構変遷図掲載の遺構一覧	214-219
第431図	産地別・用途別構成比グラフ(1)-(2)	225
第432図	伊予郷遺物計測基礎データ(1)-00	227-237
第433図	第51次調査A-1区屋敷割概念図	239
第434図	第51次調査A-2区屋敷割概念図	240
第435図	第51次調査A-3区屋敷割概念図	240
第436図	第78次調査A-5区屋敷割概念図	241
第437図	職業別屋敷地規模散布図	242

## 付 図

- 付図1 第51次調査A-1区2次面遺構全体図
- 付図2 第51次調査A-1区1次面遺構全体図
- 付図3 第51次調査A-2区遺構全体図
- 付図4 第51次調査A-3区遺構全体図
- 付図5 第51次調査A-4区遺構全体図
- 付図6 第78次調査A-5区遺構全体図
- 付図7 第78次調査B-8区遺構全体図

## 調査参加者名簿

### ■外業の部

大手前女子大学	惣田 早苗 山口 薫	高比良 恵	竹安 智美	橋本 和美	松本有加子 (20期生)
	磯辺 敦子	大保奈津子	川嶋由紀子	後藤 直美	庄司 啓子
	菅井 京子	武田 和代	坪田 晴子	西田 明子	西村 美紀 (21期生)
	萩野由加里	二川ひとみ	盛山 牧美		
	安藤 周子	石崎 恭子	石田 幸子	井上富士子	駒居 昌美 (22期生)
	石田 有紀	石永 光	浦部 綾子	片桐 千夏	古賀 慎子 (23期生)
	酒井 亮子	鯨島 直美	竹村 三葉	田中 稔子	
大阪教育大学	片木 靖典	佐々木 六	中川 久志	藤田 宏樹	山下 照雄
大阪商業大学	松田 研				
大阪産業大学	山口 裕				
大阪学院大学	伊藤 秀樹				
大阪電気通信大学	高塚 正也				

### ■内業の部

大手前女子大学	石神 由貴	入谷安紀子	勝田さつき	川上 啓子	倉本 千春 (25期生)
	内田 知絵	小出 匡子	清水 淑	村上 美子	渡邊 晴香 (26期生)
	木村 祥子	高木 愛子	田中万紀子	玉松 圭代	津田 理恵 (27期生)
	湖 知恵				
	裏川 代恵	岡野 淳子	田崎 智子	多留ゆう子	中山 明子 (28期生)
	間 千加子	平原 優子	松岡 晶子		



## 第1章 調査の経過

平成7年1月17日の未明、大地を揺るがした阪神・淡路大地震は、伊丹市域にも大きな傷跡と災害をもたらした。日ごろ伊丹市とその周辺に住み、伊丹の地にかかわりのある者にとって、交通の動脈であった阪急電車伊丹駅の高架が電車を乗せたまま崩れ落ち、市内では多くの木造建物が倒壊した。

伊丹郷町の氏神であり、宮ノ前商店街・宮ノ前地区などの呼称のおこりである猪名野神社の社殿も損傷し、先年、考古学実習の作業で学生達と共に調査記録を作成した、総数97基に及ぶ境内の石灯笼は、ほとんどすべてが倒壊し、痛ましい姿を見せている。

この猪名野神社は、伊丹台地の支脈の北端に位置し、有岡城の時代にはここに「岸の砦」が築かれ、同時に築かれた土塁がのこっていることから、境内は有岡城跡の一部として国の史跡に指定されている。南面する社殿の前から参道を通って境内を出ると、道がまっすぐに南へ延びている。その左右に店舗が並び、アーケードの張られた町並は、「宮ノ前商店街」として繁栄して来た。

伊丹市によって企画され、現在も工事が継続して進められている「宮ノ前地区市街地再開発事業」は、伊丹郷町の中央を通り抜ける果道以北、宮ノ前商店街を中心として左右にひろがる市街地16,000㎡を対象とし、既設の家屋を撤去し、果道の路線変更と拡幅を含め、旧商店街の西側にアイフォニック・ホール（音楽堂）、東側に高層共同住宅を建設する事業である。

この区域は、歴史的に見ると伊丹郷町の中枢を占め、各時期の「伊丹郷町絵図」に描かれた地割と町並が現在にも踏襲され、有岡城の惣構にふくまれた商工業者の集中する町から、廃城後に伊丹郷町に発展して行った経過をたどることのできる重要な場所であることは言を俟たない。

伊丹市当局においても、このことは十分認識され、文化財行政が後手に回ったJ伊丹駅前市街地再開発に伴う調査で遭遇した帳をふむことなく、市街地再開発事務所と市教育委員会が協議を重ねられ、計画区域内における既設建物の撤去、発掘調査の実施、工事の施工について詳細なプランが作成された。その上に立って、市教育委員会から発掘調査の具体的方法を調査側に示すという方策がとられた。市街地再開発と埋蔵文化財の発掘調査という、相克の狭間の中で、スムーズな調査の運営を計られた関係の方がたのご理解とご努力に敬意を表しておきたい。

私共、大手前女子大学の調査チームは、先に北本町における「三井パークマンション建設に伴う調査」(「有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ」と、「J」R駅前市街地再開発に伴う調査(「有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ」)を、伊丹市の委託により実施した。これにつづき、今回報告書にまとめた「宮ノ前地区市街地再開発事業に伴う発掘調査」については、まず昭和61年12月に、対象区域の試掘調査の委託を受けた。

この試掘調査は、市教育委員会の指示に従って、幅2mのトレンチを対象区域内の空地に設定することとし、2次に分けて実施した。1期は昭和62年3月9日から3月31日までを充て、A・C・F・G—1・G—2の5カ所、つづいて2期は昭和62年4月1日より6月2日までB—1・B—2・D・E・Hの5カ所について、それぞれトレンチを設定した。これが第43次調査で、面積は1期・2期共230㎡、計460㎡である。

上記試掘調査の成果にもとづいて、再開発事務所と市教育委員会の間で協議が重ねられ、再開発区域全体を対象とする発掘調査計画が立案されたが、発掘調査の実施については、対象区域を分割し、東西に通じる果道以北のうち、宮ノ前商店街の西側にA・B、東側にC・Dの4地区を設定し、これまでの経過をふまえて、次のように調査を地区別に分担することになった。

対象区域	調査担当
県道敷地	兵庫県埋蔵文化財調査事務所
A・B区	大手前女子学園有岡城跡調査委員会
C・D区	宮ノ前地区埋蔵文化財調査団

現場における発掘調査は、本調査を開始したのが昭和62年9月であったが、以後平成4年度に至るまで、延べ6カ年にわたって一連の調査に従事してきた。本来この事業は5カ年計画で進められてきたのであるが、当初の予想に反して、事業計画実施区域内における既設家屋の立退きが、種々の事情のために大幅に延引したことがその要因である。従って、本学が市当局から委託を受ける調査対象区域も、初年度においては比較的広い面積であったが、年度によっては狭少な区域である場合も多く、調査を実施するに当たって困難な事態に出くわしたこともあった。各年度における調査対象は例言で記述している。

現場における調査期間中、伊丹市教育委員会社会教育課文化係の関係諸氏には、随時、指導・助言を得たが、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課におかれても、担当係官の来臨があり、懇切な指導を得た。

ところで、「宮ノ前地区市街地再開発事業に伴う発掘調査」の資料および出土遺物の総整理作業については、平成5年度から6カ年継続事業として実施することとし、改めて伊丹市の委託を受け、逐年、所要経費の支出を得て実施している。6カ年に及ぶ調査資料と出土遺物は膨大な量に上り、そのすべてを取り上げることは不可能に近いが、現場における遺構の記録と、出土遺物については、各時期における資料として価値の高いものを厳選することとした。発掘調査の報告書は年次、地区を分けて全3冊の刊行を予定している。本書はその第1冊目に当たるものであり、収録したのは次の各調査の資料である。

次数	調査期間	対象面積
第43次調査(試掘)	自昭和62年3月9日 至 " 6月2日	460㎡
第51次調査	A-1区	224㎡
	A-2区	
	A-3区	846㎡
	A-4区	78㎡
第78次調査	A-5区	420㎡
	B-8区	126㎡

なお、各次における調査担当者は次の通りである。

次数	主任調査員	調査員	事務員
第43次調査	川口 宏海	細川 佳子** 山上 真子***	
第51次調査 A-1・2・3・4区	前川 要 (調) 濱田 幸司*	角田 あゆみ	谷田 久美子
第78次調査 A-5区・B-8区	前川 要	伊藤 裕子 小笠原 典子	平井 千保

\*現在、姫路川市教育委員会助手 \*\*現在、伊丹市教育委員会嘱託 \*\*\*現在、尼崎市教育委員会嘱託  
調査員・事務員は大手前女子大学史学科卒業生

報告書の作成に至るまでの作業は、現場の調査以来これに従事して来た前川 要（富山大学人文学部助教）・川口宏海（大手前栄養文化学院助教授）の企画と指導により作業グループを編成した。多忙な校務のかたわら、作業を推進し、原稿の作成に当たられた労苦に対し、まず深甚の感謝を捧げておきたい。さらにその下において、実際の作業に当たった藤本史子（大阪市立大学大学院在学中）、小笠原典子・赤松和佳・木南アツ子・山崎晴世・川上啓子ら、卒業以後ずっとこの仕事に取り組み、また一切の事務を担当している平井千保の諸君のチーム・ワークの賜物である。

現場における発掘調査から整理作業に至るまで、参加した学生は多数であり、その名前は別項に掲げた。調査の遂行に当たっては実に多くの方がたの指導・助言とご協力を得たが、ここに改めて謝意を表する次第である。

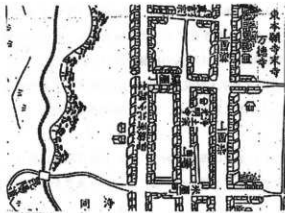
ふり返ってみると、有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査にたずさわることになったのは、昭和60年（1985）であったから、今年、平成7年（1995）でちょうど11年目を迎えた。先に述べたように、これまで担当した調査区域全体の資料調査を終え、あと2冊の報告書を刊行して、すべての事業を完了するのは、平成10年3月末の予定であるから、当初から通算すると、足かけ14年という長い歳月を費すことになる。

この間、発掘調査から資料整理に至るまで、作業に参加した学生の数は相当数に上り、わが大手前女子大学の史学科にとっては、身近なところで、発掘調査の技術と方法を習得することのできる実習の場を得ることができるといふ意味において好運であったといふことができる。また、考古学界の動向として、近世考古学の実践と関心の高まる気運の中において、とくに都市遺跡の発掘調査を手がけた先駆的役割について、識者からの評価を得ているが、これを推進して来た者の責務として、単に報告書の刊行にとどまらず、さまざまの形で、成果を世に問う必要を痛感し、その方法を模索し、実践して行きたいと思う昨今である。関係各位のご理解とご指導をたまわりたい。

（藤井直正）

第1表 伊丹郷町火災年表

年 代	主 な 出 来 事
元禄元年	1688 町の中心部にある井筒町から出火して、160軒を焼く。
元禄十二年	1699 北西隅の天王町から出火して、寺院6ヶ寺・酒家16軒のほか多くの民家を焼く。
元禄十五年	1702 西側の中少路村から北端の北之口町へかけて439軒が焼ける。大火災の直後に「伊丹定火消方」が置かれる。
正徳二年	1712 吹屋の飛び火で、北東の饅頭町で火災。
享保十四年	1729 北西の北少路村西裏から出火して80軒を焼く。
宝暦元年	1751 北少路村で火災、13軒焼失。
明和二年	1765 北少路村で火災、6軒焼失。
明和三年	1766 北西の戎町で火災、6軒焼失。
文化九年	1812 2月に下中少路村で火災、3軒焼ける。12月に北中少路村で火災、5軒焼ける。
文化十年	1813 西北端の扇子町で火災、4軒焼失。



寛文九年(1669年)伊丹郷町絵図



延宝五年(1677年)伊丹郷町地味委細絵図



元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町絵図



寛政八年(1796年)伊丹郷見図



天保十五年(1844年)伊丹郷町分間絵図

第1図 伊丹郷町古絵図

## 第2章 調査方法

### 第1節 調査区割と図面割

#### 1. 調査区割

有岡城跡・伊丹郷町は、南北約1.7km、東西約0.8kmを測る広大な都市遺跡である。本書の調査までに、東側のJR伊丹駅付近の主郭部を中心として、すでに42次の調査が行われている。また、以後も大規模再開発を行うことが確実であったため、遺跡の範囲全体にわたる総合的な調査区割の設定が必要であった。そこで、昭和61年のJR伊丹駅付近の第23次調査を開始する際に、以下の方法で調査区割を設定することにした。その後の調査は、本書調査を含めてすべてこれにしたがっている。

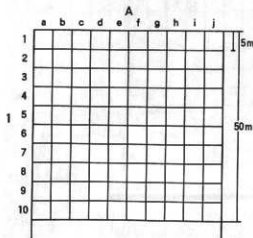
まず区割の基軸線は、後述する図面割とスムーズに一致させ、なおかつ活用しやすいものとするため、国土座標を用いることにした。また、その基点は、伊丹市で作成されている1/500の道路台帳のうち、遺跡範囲の北西部にかかる図面の北西端 ( $X = -134,400\text{m}$ ,  $Y = +99,800\text{m}$ ) に設定した。

現地調査では、5m方眼グリッドを基本とし、これを最小単位とした。また、これと図面割との整合性の良い50m方眼の大区画を上位の区割とし、北西の基点から東西横列をA・B・C-X、南北縦列を1・2・3~36とし、A1、B2などと呼称することにした(第4図)。さらに、そのなかの最小単位の5mグリッドをそれぞれの50m大区画の北西隅から東西横列をa・b・c-j、南北縦列を1・2・3~10とし、a1、b2などと呼称することにした(第2図)。したがって、最終的に各5mグリッドは、A1-a1、B2-b2と呼称することにした。

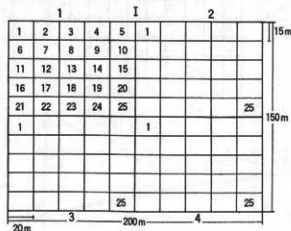
#### 2. 図面割

調査は緊急性を伴っており、後述する航空測量による平面図作成を必要としたため、調査区割とは別に図面割を設定することにした。

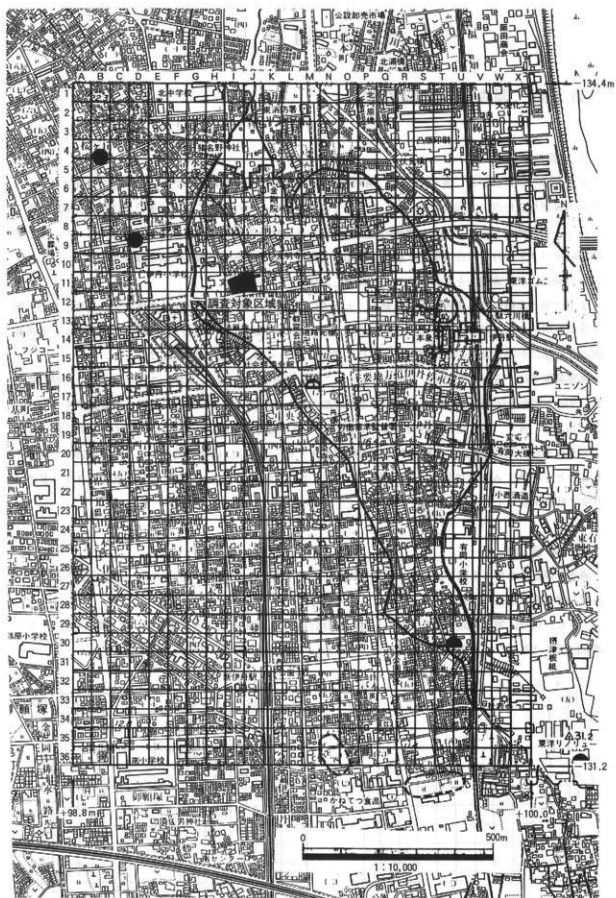
これも、調査区割と基点を同じくし、1/500の道路台帳を大区画としてそのまま用いた(第5図)。ただ、調査区割とは異なり、地図一般の呼称方法にしたがって一枚毎に番号を与え、北西隅よりア・イ・ウ…と呼



第2図 5m方眼割図



第3図 1/20測量図面割図



第4图 有岡城跡・伊丹町調査区割图



第5図 有岡城跡・伊丹町区画制図

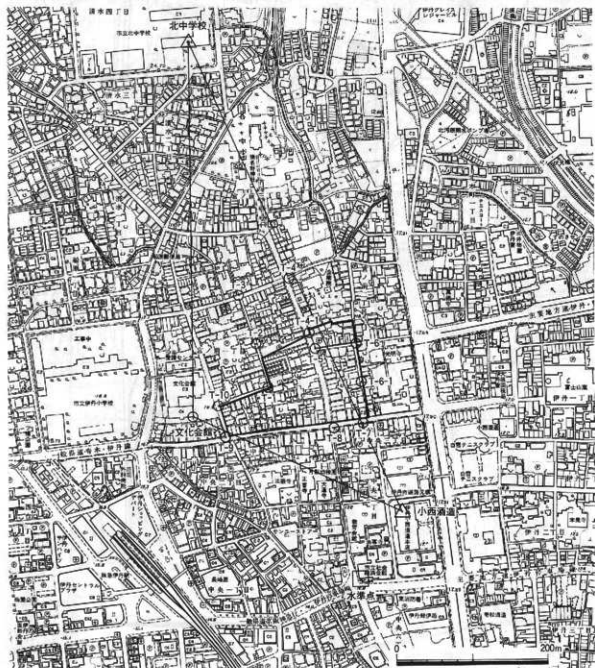
称することとした。

さらに、広域の遺構のつながりを見るため、下位に1/250、1/100の図面を作成することを前提としてそれぞれを4分割し、1/250はⅠ～Ⅳ、1/100は1～4と呼称することにした。また、最小単位は1/20図面とし、1/100図面を25等分して、北西隅より1～25と呼称することにした（第3図）。したがって、最終的に各1/20図面はア・Ⅰ-1・1、イ・Ⅱ-1・25などの番号で呼称することにした。

## 第2節 基準点と水準点の設置

官ノ前再開発地区の発掘調査は、広範囲かつ長期にわたるため、調査対象区域全域をカバーし、常時活用できる国土座標ポイントの設置が不可欠と考えた。

基準点は（株）写測エンジニアリングに委託し、以下の方法で取り付けを行った。まず、小西酒造屋上の



第6図 国土座標基準点・水準点網図



ポイントから北中学校のポイントを望み、文化会館屋上に新たなポイントを設置した。次に、調査対象区域を囲む道路上のT-1を設置し、順にT-2・3・4・・・と開口トラバースを巡らせた。その後、旧市立社会経済会館前の水準点No14の最新の水準値、昭和53年のT、P=16,640mを用いてT-8まで引き、のち順に各ポイントに水準値を与えた。水準値はJR駅前地区と同様に大阪湾沿岸であることを考慮し、O、P(大阪湾中等潮位)換算(T、P+1.3m)した。それぞれの成果は第2表のとおりである。

各調査区には、最寄りのポイントから国土座標を引き、前述した区割りにしたがった5m方眼杭を打ち、調査に用いた。

### 第3節 調査の方法

#### 1. 現地調査の方法

調査にあたっては、時間的制約から最上層の近代までの層を機械によって掘削し、以下は人力による遺構掘削を行った。

平面図作成にあたっては、狭い調査区は1/20手書き図面と1/40平板測量を行い、広い調査区は航空測量会社に委託してアドバルーンおよびクレーンによる航空測量を行った。断面図は1/20の手書き図面を作成した。また、これとともに35mm小型、6×7中型、5×7大型カメラにより、随時写真撮影を行った。全体写真撮影には、固定ローリングタワー5～6段を1～2基設置して行った。

#### 2. 整理作業の方法

今回報告分の出土遺物はコンテナ箱にして約700箱という膨大な量にのぼった。したがって、整理作業は2箇年計画とし、平成5年4月より土器洗浄から始め、ネーミング、換合、復元、遺物実測、平成6年度は遺物図トレース、遺構図トレース、遺構・遺物図レイアウト、遺物写真撮影、原稿執筆等の順に進めた。遺物実測は1/1スケールの図を基本とした。また、写真撮影は6×7中型、5×7大型カメラを用いた。報告対象は、遺構の重要性、特に調査地の土地利用の変遷をとらえるうえで重要な建物、井戸、竈、便所等と各時期の遺物の器種構成がよくわかるものを中心として選定した。

No	点名	X	Y	標高	距離	方向角
	文化会館	-134939, 330	99175, 886	34, 640		
	小西酒造	-135065, 238	99453, 330	0, 000	304, 677	114° 24' 33"
	北中学校	-134444, 879	99172, 559	0, 000	680, 939	335° 38' 56"
	T-1	-134899, 205	99278, 046	19, 414	466, 411	166° 55' 43"
	T-2	-134847, 204	99259, 923	19, 582	56, 069	340° 47' 09"
	T-3	-134779, 767	99237, 587	19, 902	71, 040	341° 40' 28"
	T-4	-134757, 403	99300, 450	19, 320	66, 723	70° 25' 00"
	T-4-1	-134814, 657	99322, 332	19, 577	61, 293	159° 05' 01"
	T-5	-134851, 651	99336, 471	19, 446	39, 604	159° 05' 00"
	T-6	-134842, 586	99389, 634	19, 205	53, 930	80° 19' 24"
	T-6-1	-134892, 843	99398, 923	19, 280	51, 108	169° 31' 42"
	T-7	-134946, 807	99408, 897	19, 080	54, 878	169° 31' 42"
	T-8	-134954, 304	99360, 813	19, 023	48, 665	261° 08' 17"
	T-9	-134966, 417	99219, 608	19, 093	141, 724	265° 05' 49"
	T-10	-134925, 924	99211, 028	19, 291	41, 392	348° 02' 12"

第2表 国土座標基準点・水準点成果

## 第3章 調査の成果

### 第1節 第43次調査（試掘調査）

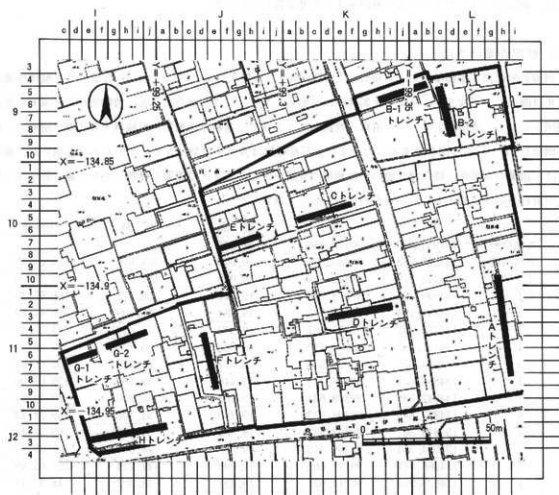
#### 1. Aトレンチ

再開発対象区域の東南部に、南北方向に2m×40.5mの規模で設定したトレンチである。この街区は江戸時代には南側（トレンチ設定区域）が「米屋町」、北側が「柳町」と呼ばれていた。伝聞ではあるが、文禄年間（1592～96）には成立していたとされる町のなかに含まれ、郷町内でも初期に成立した中心区域の一部である。寛文9年（1699）成立の伊丹郷町絵図（伊丹市博物館蔵）には、町並みが整った姿で描かれている。

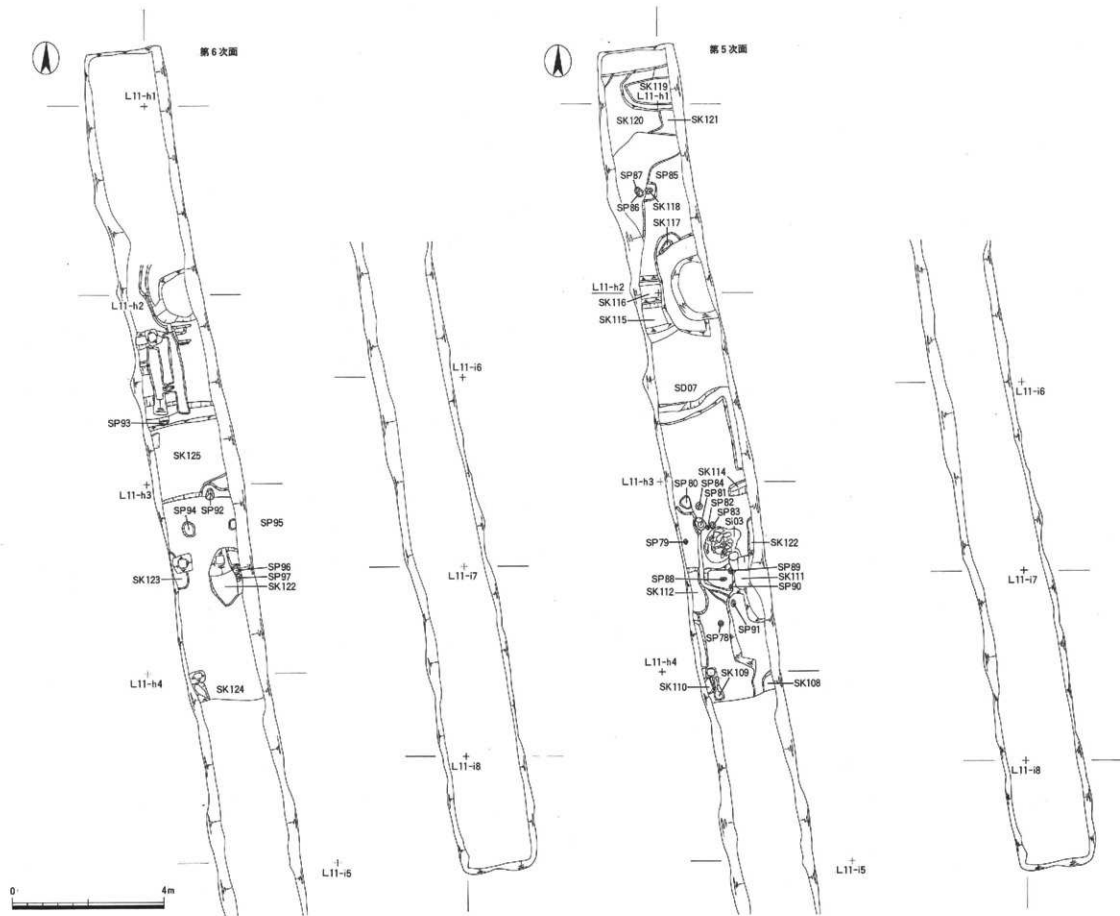
トレンチは街区の裏庭部分にあっていたため、層序は複雑なものになっている（第11図）。ここでは、5つの生活面を確認した。

第1次面 GL-0.15m。明治～大正時代。（第11図～第3層、第14層、第91層、第103層、第126層等の上面）

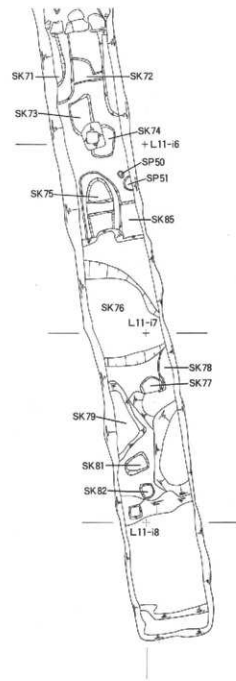
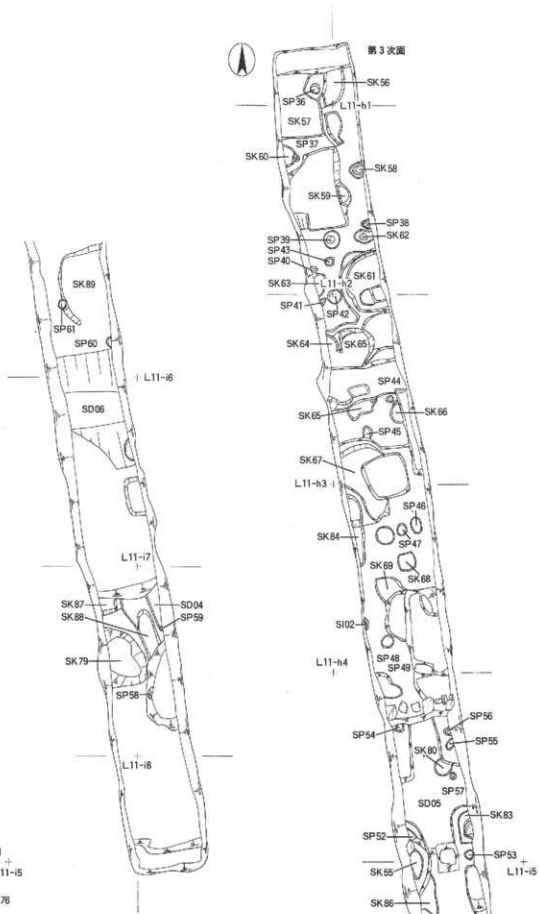
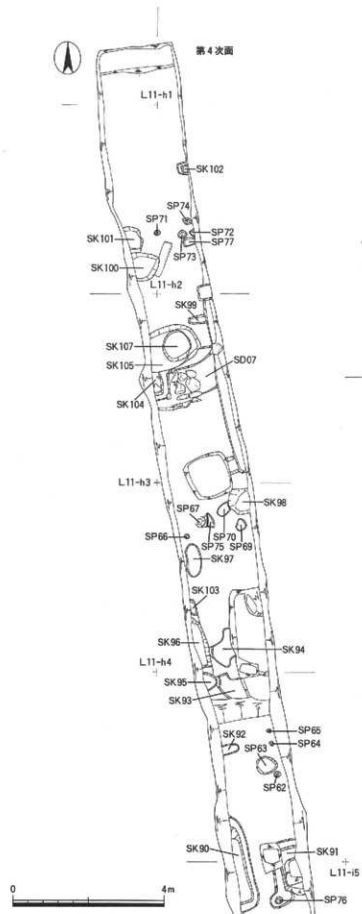
第2次面 GL-0.20m。19世紀前半～明治時代。（同図～第4層、第15層、第92層、第127層等の上面）



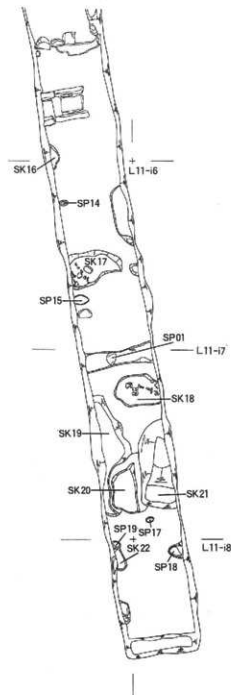
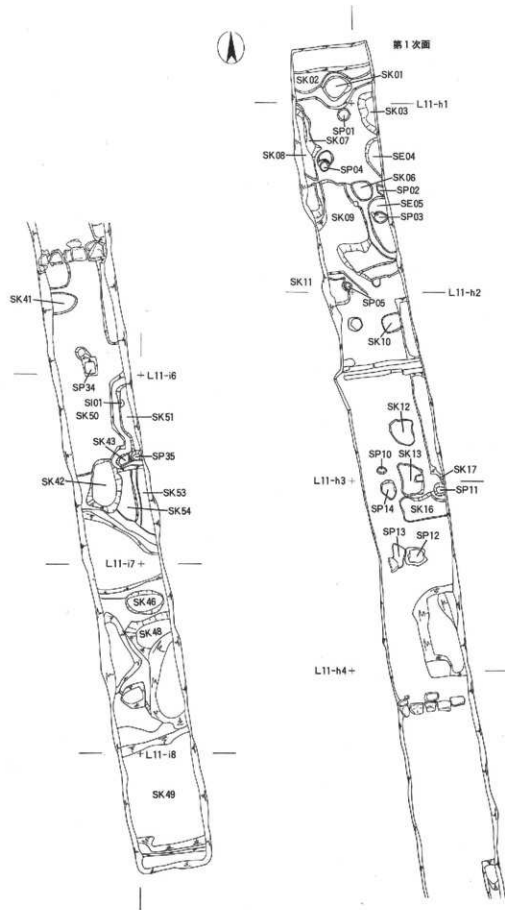
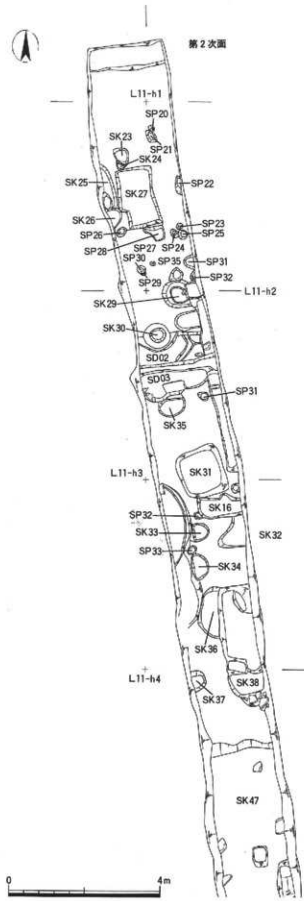
第7図 第43次調査地点位置図（太枠 再開発対象地域）



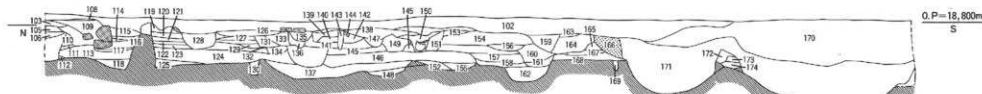
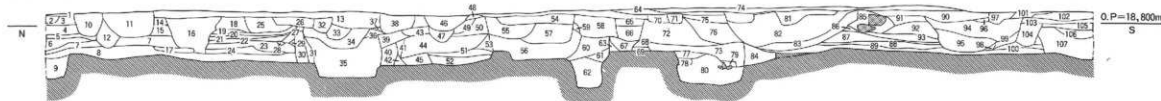
第8図 Aトレンチ遺構全体図(1)



第9図 Aトレンヂ遺構全体図(2)



第10図 Aトレンチ遺構全体図(3)



1. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6
2. 黄褐色砂質土層 2・5 Y7/8
3. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/8
4. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/8(1-3cmの礫を含む)
5. 明黄褐色砂質土層10 Y R6/8(1-5cmの礫多量を含む)
6. オリーブ褐色砂質土層 5 Y5/6(1-5cmの礫多量を含む)
7. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
8. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/3
9. 明黄褐色砂質土層 5 Y5/8(1-3cmの礫多量を含む)
10. 黄褐色砂質土層 5 Y6/8(1-2cmの礫多量を含む)
11. 礫混
12. オリーブ砂質土層 5 Y5/6
13. 明黄褐色砂質土層 5 Y7/8
14. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3
15. 暗褐色砂質土層10 Y R4/6
16. 礫混
17. 暗褐色砂質土層10 Y R4/4
18. 暗褐色砂質土層10 Y R3/3
19. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/3(2-5cmの礫多量を含む)
20. 暗褐色砂質土層10 Y R4/4(1-2cmの礫多量を含む)
21. 黄褐色砂質土層10 Y R5/6(2-15cmの礫を含む)
22. 暗褐色砂質土層10 Y R2/4(1-2cmの礫多量を含む)
23. 暗褐色砂質土層10 Y R4/6
24. 暗褐色砂質土層10 Y R4/4
25. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3(炭化物多量を含む)
26. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
27. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
28. 暗褐色砂質土層10 Y R4/4(2-3cmの礫を含む)
29. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6(炭化物若干含む)
30. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
31. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/3
32. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y3/2
33. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/4(炭物、炭化物若干含む)
34. 黄褐色砂質土層 2・5 Y4/3(3-5cmの礫多量を含む)
35. 灰オリーブ褐色粘質土層 5 Y5/2
36. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
37. オリーブ褐色粘質土層10 Y R4/3(炭物、4-5cmの礫を含む)
38. オリーブ褐色粘質土層 5 Y5/4
39. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2
40. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
41. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
42. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3
43. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2
44. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2(3-5cmの礫多量を含む)
45. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2
46. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2(1-10cmの礫多量を含む)
47. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2
48. 灰オリーブ粘質土層 2・5 Y4/2
49. 暗灰黄色粘質土層10 Y R4/2
50. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4(1-2cmの礫多量を含む)
51. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3
52. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6(1-7cmの礫多量を含む)
53. 暗褐色粘質土層 2・5 Y3/3
54. 暗黄褐色砂質土層 2・5 Y5/2
55. 淡黄褐色粘質土層 2・5 Y7/4
56. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
57. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3(炭物を含む)
58. オリーブ褐色粘質土層10 Y R4/4
59. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3(炭化物を含む)
60. 暗褐色粘質土層10 Y R4/6(1-5cmの礫多量を含む)
61. 暗褐色粘質土層10 Y R4/6
62. 灰黄褐色粘質土層10 Y R4/2(炭物を含む)
63. 暗灰黄色粘質土層10 Y R4/3
64. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
65. 黄褐色粘質土層10 Y R5/6(2-15cmの礫を含む)
66. 暗灰黄色粘質土層10 Y R6/2
67. 暗褐色粘質土層10 Y R4/6
68. 明黄褐色粘質土層10 Y R5/8
69. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
70. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y6/1
71. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
72. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6(1-2cmの礫多量を含む)
73. 暗灰黄色粘質土層10 Y R4/3
74. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
75. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y6/3
76. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6(炭物を含む)
77. 暗褐色粘質土層10 Y R4/6
78. 黄褐色粘質土層10 Y R5/6
79. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2
80. 暗褐色土層10 Y R3/4(炭化物多量を含む)
81. 暗灰黄色粘質土層10 Y R5/2
82. 黒色粘土層 2・5 Y2/1
83. オリーブ粘質土層 2・5 Y4/4
84. 暗褐色粘質土層10 Y R4/6(炭化物多量を含む)
85. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
86. 灰黄褐色粘質土層10 Y R5/2(2cmの礫多量を含む)
87. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
88. 灰黄色粘質土層 2・5 Y7/2
89. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
90. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4(1-3cmの礫多量を含む)
91. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
92. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3(1-3cmの礫多量を含む)
93. 灰黄褐色粘質土層10 Y R5/2(1-2cmの礫多量を含む)
94. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6(炭化物多量を含む)
95. 暗褐色粘質土層10 Y R4/4(2cmの礫多量を含む)
96. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8
97. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4(1-3cmの礫多量を含む)
98. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y6/4
99. 暗灰黄色粘質土層10 Y R5/3(1cmの礫多量を含む)
100. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6(1-2cmの礫多量を含む)
101. 暗灰黄色粘質土層10 Y R6/4(1-3cmの礫多量を含む)
102. 暗褐色粘質土層 2・5 Y R4/6
103. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6(1-3cmの礫多量を含む)
104. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6(2-3cmの礫多量を含む)
105. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6(炭化物若干含む)
106. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4(2-5cmの礫多量を含む)
107. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
108. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R6/8
109. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4(1-2cmの礫多量を含む)
110. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
111. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6(1-2cmの礫多量を含む)
112. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R4/6
113. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
114. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
115. 黄褐色粘質土層10 Y R5/6
116. 暗灰黄色粘質土層10 Y R5/4(2-5cmの礫多量を含む)
117. 黄褐色粘質土層 7・5 Y5/6(1-2cmの礫多量を含む)
118. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
119. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/3
120. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y6/3(堅地層)
121. 淡黄色粘質土層 2・5 Y7/4
122. 灰黄色粘質土層 2・5 Y6/2
123. 灰白色粘質土層 2・5 Y7/1(堅地層)
124. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
125. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
126. 灰オリーブ褐色粘質土層 5 Y3/3
127. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y6/4(堅地層)
128. オリーブ褐色粘質土層 5 G 6/1
129. 灰黄色粘質土層 2・5 Y6/2
130. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
131. オリーブ褐色粘質土層 5 Y5/4
132. オリーブ褐色粘質土層 5 Y6/4(堅地層)
133. 暗灰黄色粘質土層10 Y R5/3
134. 灰オリーブ褐色粘質土層 5 Y6/2
135. 灰黄褐色粘質土層10 Y R4/2
136. 暗褐色粘質土層10 Y R4/4
137. 黄褐色粘質土層10 Y R4/6
138. 灰褐色粘質土層 5 Y5/1
139. オリーブ褐色粘質土層 5 Y6/4
140. 礫混
141. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4(5cmの礫多量を含む)
142. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
143. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/4
144. 灰黄褐色粘質土層 2・5 Y4/1
145. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/3
146. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
147. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6(1-2cmの礫多量を含む)
148. 黄褐色粘質土層10 Y R5/8
149. 暗黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
150. 灰オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y5/4(1-2cmの礫多量を含む)
151. 灰オリーブ褐色粘質土層 5 Y5/2
152. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/4
153. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/4
154. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6(1-2cmの礫多量を含む)
155. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
156. 暗オリーブ褐色粘質土層 5 Y4/4
157. 暗褐色粘質土層10 Y R4/4(1-2cmの礫多量を含む)
158. 暗褐色粘質土層10 Y R3/4(1-2cmの礫多量を含む)
159. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3(炭物を含む)
160. 暗褐色粘質土層10 Y R3/4(1-3cmの礫多量を含む)
161. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
162. 暗褐色粘質土層 5 Y3/8
163. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
164. 黄褐色粘質土層 2・5 Y4/6
165. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
166. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3(炭化物、粘土多量を含む)
167. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
168. 暗灰黄色粘質土層10 Y R5/4
169. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
170. 礫混
171. 礫混
172. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
173. 暗灰黄色粘質土層10 Y R5/4
174. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6

第11圖 A トレンチ東端土層図(網-密石など、網-粗 焼土層)

第3次面 GL-0.45m。18世紀前半～19世紀前半。(同図-第5層、第7層、第20層、第122層等の上面)

第4次面 GL-0.65m。17世紀後半～18世紀前半。(同図-第8層、第24層、第51層、第88層、第124層、第146層等の上面)

第5次面 GL-0.80m。16世紀末～17世紀後半。(同図-地山上面)

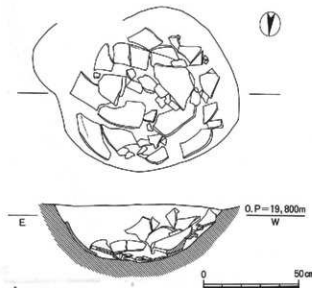
(第6次面 GL-0.80m。16世紀末～17世紀後半。(同図-地山上面))

トレンチは街区の裏庭部分であったため、各面とも遺構の大半は土壌であった。このうち、第6次面(第8図)は地山面であるが、上層の遺構が重複しており、第5次面で掘削できなかった遺構である。遺構は土壌(SK)4、ピット(SP)6を検出した。いずれも出土遺物は少量で、17世紀代の遺物が主である。

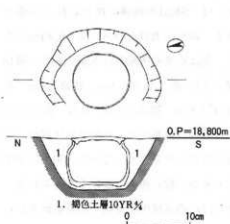
第5次面(第8図)も地山面である。溝(SD)1、土壌(SK)15、埋甕(SI)1、ピット(SP)14を検出した。いずれも17世紀代の遺物を少量含んでいる。このうち、SI03(第12図)は、丹波焼甕を埋設したもので、便槽の可能性が高い。掘形の直径0.9m、深さ0.31mを測る。出土した丹波焼甕(第15図)は口径(推)56.2cm、器高84.7cmを測る。口縁部は直線的に伸び、外面にヨコナデによる一条の凹線を施す。底部外面は未調整。内外面共無釉で暗赤色を呈する。17世紀代の製品である。相伴遺物に第14図-1土師質土器皿がある。口径6.1cm、器高1.5cmを測る。比較的厚手で口縁部は内外面共ヨコナデ調整、底部外面は指圧調整である。口縁部には、灯芯痕がみられる。南側は第4次面で地山面まで到達しているが、重複が激しく上層で掘削できなかった遺構を検出した。

第4次面(第9図)では、溝(SD)3、土壌(SK)20、ピット(SP)19を検出した。南半分は、最上層が擾乱されていたため、この面が地山面となる。SD07・06は、共に東西方向の土層割りに平行して伸びているが、屋敷地を表すものかどうかは、この調査では判断できなかった。しかし、このうちSD07は第2次面のSD02と同じ場所に営まれており、その可能性が高い。幅1.05m、深さ0.37m、検出長2mを測る。この溝には、上層からの切り込み遺構と考えられる根石が一群となって検出された。出土遺物は、17世紀後半のものを中心とするが、図化するに至らない。他の遺構の出土遺物は、17世紀後半～18世紀前半のものであり、この面は当該期に属するものと考えられる。

第3次面(第9図)では、溝(SD)1、土壌(SK)32、埋甕(SI)1、ピット(SP)21を検出した。北側のSK61は、井戸である。東半分は調査区外である。規模は、直径1.54m、深さ0.9m以上である。



第12図 AトレンチSI03遺構図

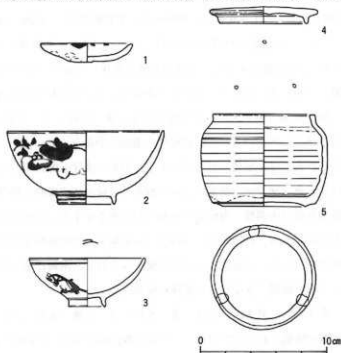


第13図 AトレンチSI01遺構図

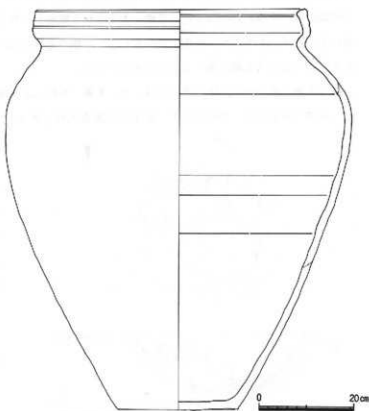
遺物は多いが、主に18世紀前半から後半にかけての時期のものである。第14図-2は、その代表的なもので肥前磁器染付碗である。口径12.3cm、器高5.8cmを測る。体部外面に梅花文を描く。見込みには、蛇ノ目輪ハギが見られる。SK65からは、図版七の金銅製かんざしが出土している。全長14.3cmを測る。18世紀代の遺物が相伴している。SK76は検出長2.84m、深さ0.91mの大規模な土墳である。埋土は多量の焼土・炭化物を含んでおり、火災後の焼土処理土壌と考えられる。出土遺物は図化できるものがなかったが、18世紀前半のものである。従って、この時期に火災があったことが知られる。文献史料に見える元禄年間の3度の大火が享保14年(1729)の大火のいずれかに相当するものであろう(第1表参照)。

第2次面(第10図)では、溝(SD)2、土壌(SK)29、埋甕(SI)1、ビット(SP)16を検出した。この面も裏庭に位置しているため土壌が主たる遺構である。このうちSD02は、前述した第4次面のSD07直上に位置する溝である。幅0.9m、深さ0.49m、検出長2mを測る。遺物は少量で時期を限定するには至らない。SK31は、調査区北側に位置する方形の土壌である。一辺1.35m、深さ0.4mである。出土遺物は明治時代のものを中心とする。第14図-3は、色絵小碗である。体部外面には馬ほかの文様を描く。輪郭線は黒色で描き、赤・青色で彩色する。子供用か。SI01(第13図)は、SK51の西隅に埋められた小壺である。掘形の直径0.18m、深さ0.84cmである。壺は京焼系灰釉蓋付き壺である(第14図-5)。蓋は口径6.8cm、器高1.4cm、身は口径8cm、器高7.4cmである。蓋の下面及び身の口縁部内面・底部外面は露胎。内部には砂が八分程入っていた。用途は不明であるが、胎衣壺の可能性も考えられる。そのほかの遺構出土遺物も19世紀前半から明治時代にかけてのもので、この面は当該期の遺構面である。

第1次面(第10図)では建物(SB)1、溝(SD)1、土壌(SK)21、ビット(SP)

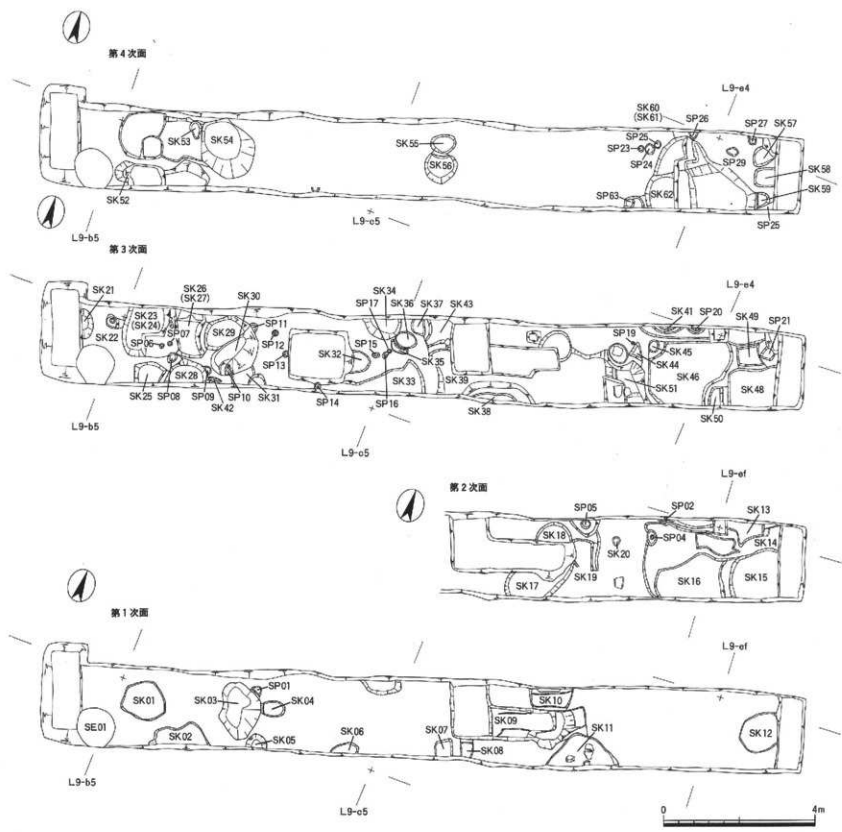


第14図 AトレンチS I 03 (1)・SK61 (2)・SK31(3)・SI01(4・5)出土遺物



第15図 AトレンチS I 03出土遺物





第16図 B-1トレンチ遺構全体図

19を検出した。S B01は石積基礎をもつ蔵である。検出長6.2m、高さ(残)0.21mを測る。近代の遺構である。S K15は、漆喰状のもので造られた池である。検出長4.38m、深さ0.24mを測る。これも近代に入る遺構である。この他、19世紀代の遺物を含む遺構がみられる。このように、この面は近代を中心としている。

以上、このトレンチの概要を述べた。前述のようにこの地域は町の成立が古いと考えられていたが、これを表付けるように17世紀前半にさかのぼる遺構・遺物が検出された。また、地山面まで0.8~1mと深く、生活面も5面上り、トレンチの中ではもっとも複雑な様相を呈するものであった。



第17図 B-1 トレンチ南壁土層図(網-密 石など、網-粗 焼土層)

## 2. B-1トレンチ

再開発対象区域の東北部に設定したトレンチである。ここは、江戸時代には北少路村の範囲に属している。トレンチは基本的に西側が道路に面した宅地、東側は裏庭部分にあたることとなるが、後述するように裏庭に建物が建てられたりするため、複雑な様相を呈している。ここでは、4つの生活面を確認した。地山面までの深さは、0.64mを測り、Aトレンチよりも浅い。層序は以下ようになる。

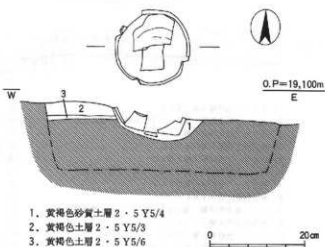
第1次面 GL-0.08m。19世紀前半～近代。(第17図-第77層、第50層、第1層等の上面)

第2次面 GL-0.27m。18世紀後半～19世紀前半。(同図-第45層、第12層等の上面)

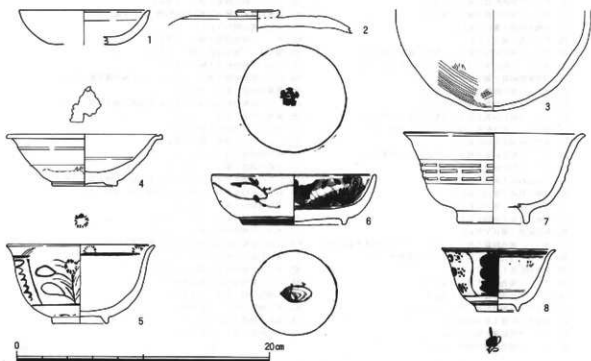
第3次面 GL-0.44m。17世紀前半～18世紀後半。東側では第4次面と同一面(同図-第80層、第69層、第53層等の上面)

第4次面 GL-0.64m。7世紀前半～中頃・8世紀、16世紀末～17世紀前半。(同図-地山上面)

第4次面(地山面)のうち、西側は第3次面ですでに検出していた面であるが、遺構の重複が激しく、掘削しきれず残ったものを図化している。ここでは西側で7世紀末～8世紀代の須臾器、土師器を伴うピットSP12・13を検出した。SP12(第18図)は、楕形の直径0.19m、深さ0.07mを測る。土師器甕を埋納し、須臾器杯蓋を蓋とした土器埋納土壌である。近年各地からこのような土壌の報告がなされるようになり、そのいくつかは内部に銭貨や筆、墨などが納められていることから、胎衣壺と断定されている。しかし、内容物のないものについては、胎衣壺以外の用途も考えられる。



第18図 B-1トレンチSP12遺構図



第19図 B-1トレンチSP13(1)・SP12(2・3)・SK33(4)・SK13(5)・SK62(6・7)・SK09(8)出土遺物

これも内容物は認められず、何らかの祭祀に伴うものであろうか用途は不明である。第19図-2はSP12出土の須恵器蓋である。ロクロ成形で天井部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整である。つまみは偏平でハリツケされている。口縁端部を欠いており時期を明言できないが、中村 浩福年(中村1981年)のⅣ型式に相当する。同図-3は土師器甕底部。内面は摩耗のため調整不明、外面はハケ調整の後ナデ調整。SP13は直径0.39m、深さ0.06mを測る。第19図-1は須恵器坏身である。口縁部及び内面底部は回転ナデ調整、外面底部は回転ヘラケズリ調整。中村福年のⅢ型式1~2段階に相当する。このほか、SK52からは16世紀末の瀬戸・美濃焼鉄軸皿が出土した。一方、SK62はこの面で検出した遺構であるが、本来第2次面に属する遺構である。検出長2.9m、幅1.86m、深さ1.2mを測る。この遺構は後の周辺の調査で2連の焼窯室を持つ酒造用大型甕の炊口であることが判明した。遺物は豊富で、その中から時期を代表する遺物を第19図-6・7にあげた。6は肥前磁器染付皿である。口径12.8cm、器高5cmを測る。内面に菊花文、見込みにはコンニャク印判により五弁菊花を描く。高台内には渦福の銘歌を記す。大橋康二編年(大橋1988年)のⅣ期18世紀前半~後半を生産年代とするものである。7は三田青磁碗である。口径(推)14.1cm、器高7.2cmを測る。体部外面には算木文が陽刻される。底部は底から二次的に穿孔され、植木鉢に転用されている。三田青磁は1789年頃開窯されたと伝えられるが、いまだ詳細な編年は確立していない。伊丹野町遺跡では、19世紀前半に増加する。したがって、この遺構は19世紀前半を下限とするものと考えられる。このように、一部に上面の遺構が残っているが、他は7世紀前半~中頃・8世紀、16世紀末~17世紀前半の遺構である。

第3次面では、17世紀前半の土壌SK33が注目される。規模は検出長1.7m、深さ0.35mを測る。埋土から第19図-4の唐津焼灰軸滑縁皿が出土した。口径(推)12.2cm、器高4.1cmを測る。見込みには砂目跡が残る。さらに、東側では焼土を含む土壌SK27・28が検出され、出土遺物から18世紀前半頃に火災があったことが知られる。このほかSK29・46からは18世紀後半の遺物が出土している。したがって、この面は17世紀前半~18世紀後半の遺構面である。

第2次面は、第1次面で西側の土層が攪乱されていたため、トレンチ掘削時にやや深く掘削しており、西側と合わすために東側のみ掘削した面である。SK13・14・15・16・20は整地層を遺構と見誤って掘削したもので、この整地層およびSK20上面の礎石からトレンチ西側に建物が存在していたことがわかる。このうちSK13・15からは18世紀末~19世紀初頭の遺物が出土しており、建物の上限がわかる。第19図-5は、SK13から出土した瀬戸・美濃焼陶胎染付端反碗である。鉄絵で体部外面に草花文を描く。このほかSK18からは18世紀後半の遺物が出土している。この面は、以上のことから18世紀後半~19世紀前半頃と考えられる。

第1次面では、西端から中程までは建物があったためか土壌は少ない。SK02・03からは、18世紀後半の遺物が出土した。東側は前述のように西側より浅く掘削したため、19世紀前半から明治時代以降の遺構が検出された。SK10は、19世紀前半から明治時代の遺物が出土した土壌である。SK09は、防空壕である。平面形はL字形をし東側に地山を削り出した階段を二段設けている。全長3.53m、検出幅1.43mを測る。出土遺物には、幕末・明治から第2次大戦頃までの遺物が含まれる。第19図-8の瀬戸・美濃焼染付端反碗は、出土した遺物のうちの代表的なものである。幕末から明治時代前半頃のもの。このように、この面は西側は18世紀後半以降の面、東側は19世紀前半~近代の面である。

このように、ここでは第4次面で予想もしなかった7世紀前半~中頃・8世紀の遺構を検出したことが大きな成果である。また、16世紀末~17世紀前半の遺構を明確にとらえることができたのも成果といえよう。

### 3. B-2トレンチ

B-1トレンチの東側に南北方向に設定したもので、基本的にはB-1トレンチと同じ様相を示す。ここは、江戸時代には「柳町」の区域に含まれる。生活面は5面であるが、第4次面は土層観察によって判明したもので、調査はこれを飛ばして4面を検出した。基本層序は、以下の通りである。

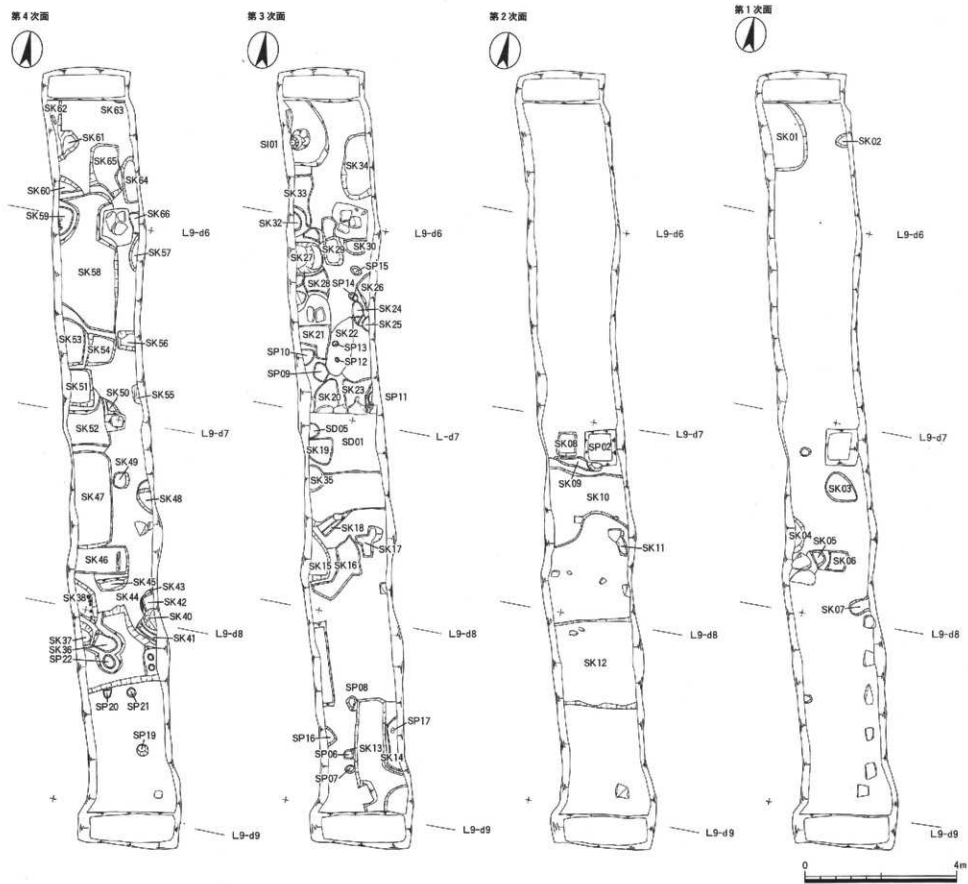
第1次面 G L-0.19m, 19世紀前半~近代。(第20図-第12層、第64層、第97層等の上面)

第2次面 G L-0.24m, 19世紀初頭~19世紀前半。(同図-第81層等の上面)

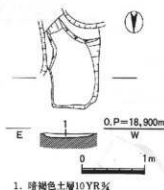
第3次面 G L-0.40m, 18世紀前半~19世紀初頭。(同図-第5層、第25層、第82層等の上面)



第20図 B-2トレンチ西壁土層図



第21図 B-2トレンチ遺構全体図



第22図 B-2トレンチSK65遺構図

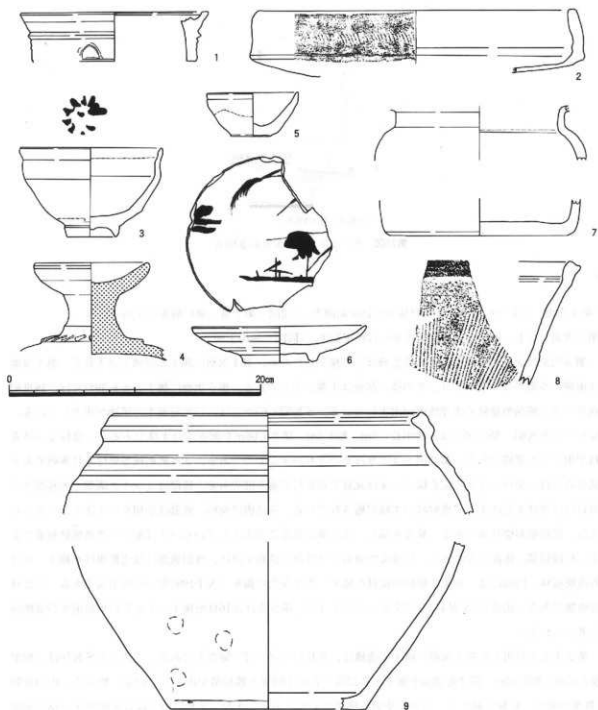
(第4次面 GL-0.51m, 17世紀後半～18世紀前半。(同図-第7層、第83層等の上面))

第5次面 GL-0.69m, 16世紀後半～17世紀前半。(同図-地山上面)

第5次面は前述のように第4次面を飛ばして検出したため、第4次面に属する遺構も含まれる。第5次面は南側に少量のピットがあり、その他の部分は土壌が中心である。第5次面に属するSK39からは、16世紀後半～末の備前焼播鉢や唐津焼碗が出土している。SK52・65からは、17世紀前半の遺物が出土している。なかでもSK65(第22図)は、検出長1.5m、幅0.8m、深さ0.06mを測る浅い土壌であるが、良好な一括資料が出土した遺構である。第23図-3～9はそのうちの主なものである。3は肥前磁器染付天目茶碗である。見込みには、染付により花文を描く。4は瓦質土器瓦灯の蓋上部である。皿部はヨコナゲ調整。天井部との境目には棒状工具によって放射状の文様が施されている。5は唐津焼杯。底部は糸切りのままとになっている。6は、肥前磁器染付皿である。鷲文を描く。同じ皿が合計3点出土している。7は瀬戸・美濃焼鉄釉壺である。口縁端部、体部ともに欠く。口縁部内面および外面に鉄釉を掛け、外面底部には化粧掛けを施す。8は丹波焼播鉢。内面には、6条1単位の播目を施す。大平茂氏の編年(大平1992年)のⅢ型式である。9は丹波焼壺である。褐色7.5YR4/3を呈する。このように、第5次面は16世紀後半～末から17世紀前半の遺構面と考えられる。

第5次面で検出した第4次面に属する遺構は、SK51・56・57・58などである。このうちSK56は、検出長0.45m、幅0.53m、深さ0.26mを測る。第23図-2の土師質土器焙烙が出土している。難波洋三氏の分類(難波1992年)C類に属する。17世紀中頃～後半のものである。また、SK57からは17世紀後半～18世紀前半の遺物が出土している。このように、遺構面としてとらえることができなかったが、第4次面は17世紀後半～18世紀前半の遺構面である。

第3次面では、中央部に東西方向の石垣SX01が検出された。これは土地区画を示すものと考えられる。これより南側は、礎石SS09が存在し、粘質土層の土間面が広がることから主屋建物が建っていたと思われる。SX01より北側は土壌が多く検出され、当初はオープン・スペースであったことがわかる。これらの土壌のうち、SK31からは18世紀前半の遺物が出土した。第25図-1は、そのうちの1点で、肥前磁器染付碗である。口径9.6cm、器高5.1cmを測る。体部外面には、コンニャク印判により菊花文を描く。その後、土壌を切って礎石の根石S12・13が設けられ、建物が建てられたことがわかる。北端のSI01は、第1次面のSK01の遺構下部であり、第1次面で記述する。このほか、SK29からは18世紀後半～19世紀初頭の遺物が



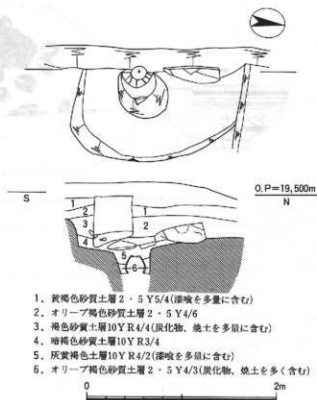
第23図 B-2トレンチ第3次面包含層(1)・SK56(2)・SK65(3~9)出土遺物

出土している。したがって、この遺構面は18世紀前半~19世紀初頭の面である。

第2次面は、北側を第1次面掘削時にやや深く掘削したため、北側に遺構面を合わせるため南側のみ掘削して検出した面である。しかし、検出した土壌SK12は、第1次面の建物の下の整地層であることがわかり、本来の遺構面でないことが判明した。ここからは、第25図-2の肥前磁器染付碗が出土した。外面体部には梅花文・笹文を描く。見込みは蛇ノ目糺ハギし、中央に呉須で「一」と描く。

第1次面では南側に礎石列S S02~06があり、この部分に建物が存在したことがわかる。南側の道路を入口とする建物である。北端のSK01・S I 01(第24図)は、丹波焼甕を倒立させて埋めた水琴窟である。第25図-4の甕は口径25.8cm、器高30.1cmを測り、底部には直径2.4cmの穿孔がみられる。外面には化粧土を





1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4(漆喰を多量に含む)
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
3. 褐色砂質土層 10 Y R4/4(炭化物、焼土を多量に含む)
4. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/4
5. 灰黄褐色土層 10 Y R4/2(漆喰を多量に含む)
6. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3(炭化物、焼土を多く含む)

第24図 B-2トレンチS101遺構図

掛け、灰釉を流し掛ける。口縁部上面から内面にかけては、灰釉を掛ける。遺物の推定生産年代は榑崎彰一氏の編年(榑崎1977年)によれば18世紀後半となるが、伝世後転用されたものと考えられる。相伴した第25図-3は、肥前磁器牡丹文棧花皿。この北側部分は、水琴窟が設けられていることから裏庭であろう。このように、この面は19世紀前半から近代にかけての遺構面と考えられる。

このほか、第3次面検出時の包含層より第23図-1の須恵器円面碗が出土している。口径(推) 14.9cm。脚部外面には横方向の透かしがみられ、馬蹄形に裝飾のハリツケ痕が残る。B-1トレンチの7・8世紀の遺構に関連する遺物と考えられる。

以上B-2トレンチについて略述したが、ここでの成果としては16世紀後半～17世紀前半の遺構がはっきりととらえられたことが成果としてあげられる。

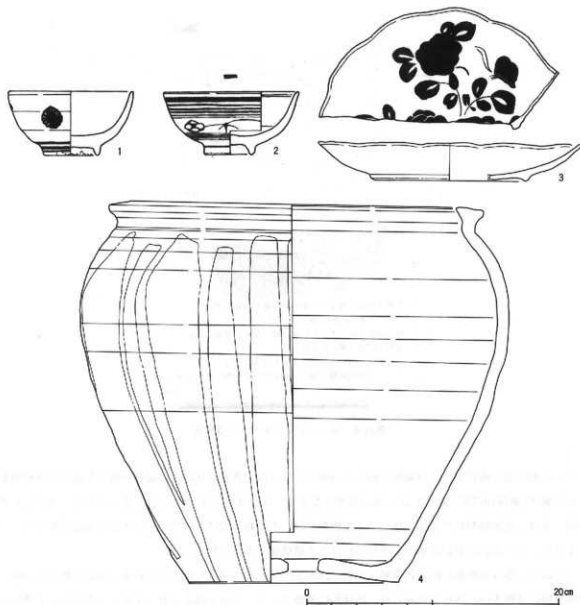
#### 4. Cトレンチ

対象区域の中央部で、猪名野神社に続く参道宮ノ前商店街通りの西側に設定したトレンチである。ここは、旧北少路村に属する。層序は、東側は家屋下となるためか水平堆積層となっているが、西側は多くの土壌が切り合っており、遺構面がはっきりしない。さらに、上部および西側は、既存建物解体時の擾乱がひどい。東側を基準にすると、4つの生活面を確認した。ただ調査時間の都合上、第4次面は上面の第3次面遺構を掘残しして調査しており、一枚の全体図にまとめ書きしている。

第1次面 GL-0.35m。18世紀後半～近代。(第27図-第47層の上面)

第2次面 GL-0.52m。18世紀中頃～後半。(同図-第53層の上面)

第3次面 GL-0.85m。17世紀後半～18世紀前半。(同図-第73層の上面)



第25図 B-2トレンチSK31(1)・SK12(2)・S101(3・4)出土遺物

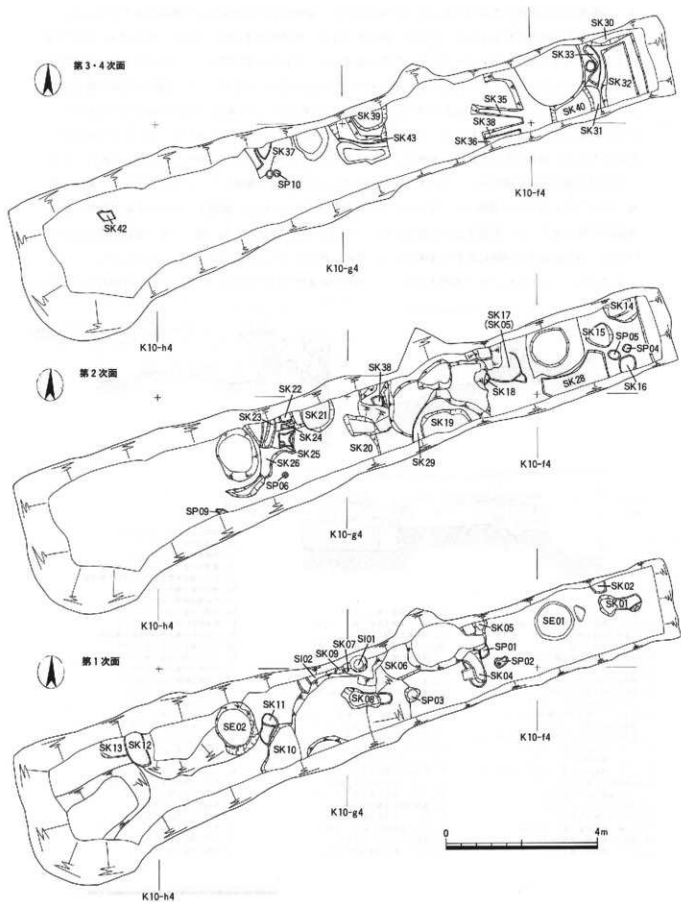
第4次面 GL-0.97m, 17世紀前半~17世紀後半。(地山上面)

第4次面ではSK35から17世紀後半の遺物が出土した。

第3次面は、土地利用のようすが判然としない。ここでは、焼土を含む土壌SK30がみられる。出土遺物は18世紀前半を下限とするものが中心で、このころに火災があったことがわかる。この火災面は、さきのトレンチでも一様にみられ、文献にみえる火災記事との照合によって絶対年代を与えることができる可能性がある。SK32・36・38は18世紀後半の遺物が出土し、第2次面に属する遺構である。

第2次面は東側は土間面がみられ、第1次面と様相は変わらない。SK27からは18世紀前半~中頃、SK18・21からは18世紀後半の遺物が出土しており、18世紀中頃から後半にかけての遺構面と考えられる。

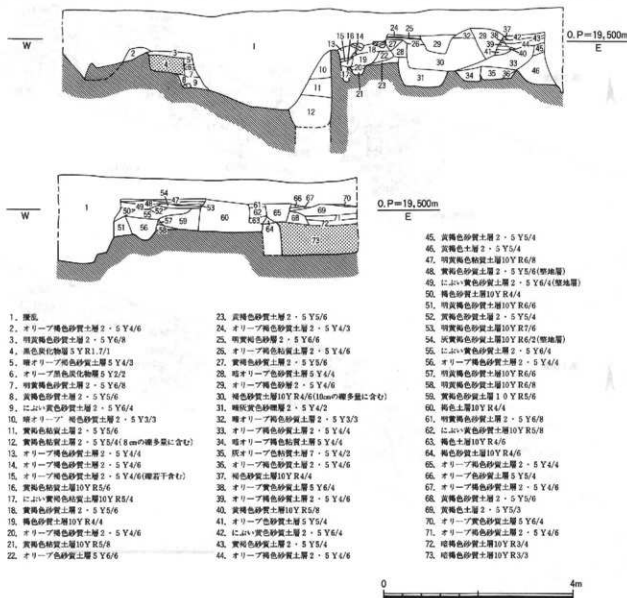
第1次面は東側が建物の土間面、西側は土壌が多く裏庭と考えられる。この面では異なった構造の井戸が2基検出された。SE01(第28図)は、上部は花崗岩の砥石を井桁に組んでそのうえに井戸枡瓦を4段積み、下部は素掘りの井戸である。掘形は方形で一辺1.5m、井戸の直径は1m、深さは2.8mまで確認したがさらに下がる。第30図-3は、SE01出土肥前磁器染付広東型碗蓋である。天井部外面に草花文を描く。18世紀



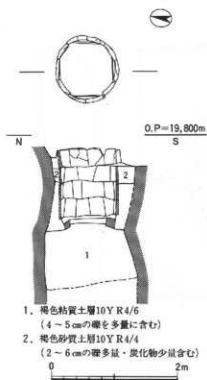
第29図 Cトレンチ遺構全体図

東～19世紀前半に廃絶した井戸であることが確認できる。掘形からは18世紀後半の遺物が出土しているが、これがただちに築造年代を示しているかは、断定できない。第31図は井戸枠瓦である。幅31.2cm、高さ26.4cmを測る。外面は楔型の滑り止めのための除刻が施される。SE02(第29図)は、上部が灰オリブ色粘土に平・丸瓦片を層を成して埋め込んだ井筒構造を持ち、下部は素掘りの井戸である。掘形は円形で直径1.35m、井戸の直径0.97m、深さ1.6m以上を測る。内部からは第30図-2の萩焼ビラ掛け陶器小碗が出土している。内面には、藁灰釉を施軸する。このように、出土遺物からはこの2基の井戸はいずれも19世紀前半に廃絶したことが判明するが、構造の差異から考えてSE02の方が築造が古い可能性がある。SK05は、トレンチ中程で検出した土層である。これは、上部擾乱のため第1次面で掘削したが、本来第2次面に属する遺構であることが土層から判明した(第27図-第55・56層)。埋土からは、第30図-1の大橋欄干Ⅳ期の肥前磁器染付碗が出土した。体部外面には菊文を描く。このように、擾乱により一部に下層の遺構が顔を出しているが、18世紀後半～19世紀前半の遺構が主で、それ以後近代までの遺構が同一面でもたらえられた。

このように、このトレンチでは擾乱がひどくて十分な成果が上げられなかったが、17世紀以降近代までの

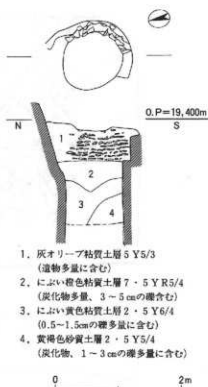


第27図 Cトレンチ北壁土層図(網-密 石など、網-粗 焼土層)



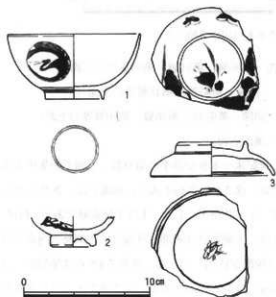
第28図 CトレンチSE01遺構図

1. 褐色粘質土層10YR4/6  
(4~5cmの礫を多量に含む)
2. 褐色砂質土層10YR4/4  
(2~6cmの礫多量・炭化物少量含む)



1. 灰オリーブ粘質土層5 Y5/3  
(遺物多量に含む)
2. におい褐色粘質土層7・5 YR5/4  
(炭化物多量、3~5cmの礫含む)
3. におい黄色粘質土層2・5 Y6/4  
(0.5~1.5cmの礫多量に含む)
4. 黄褐色砂質土層2・5 Y6/4  
(炭化物、1~3cmの礫多量に含む)

第29図 CトレンチSE02遺構図

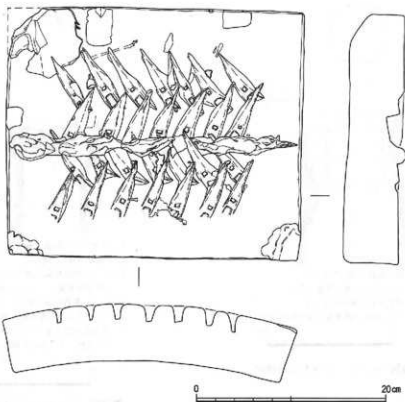


第30図 CトレンチSK05 (1)・SE02 (2)・  
SE01 (3) 出土遺物 (1)

遺構面が確認されただけで4面存在することが判明した。

## 5. Dトレンチ

Cトレンチの南側約30m地点に、東西に設定したトレンチである。こども旧北少路村に属する。ここでも上部に攪乱がみられ、層序の全容は把握できない。しかし、調査した遺構面は3面であるが、土層の観察から第1次面と第3次面の間に火災を受けた面(第2次面)が存在し、この面の遺構は第3次面で同時に検出した。このように、ここでも4つの生活面を確認した。



第31図 CトレンチSE01出土遺物(2)

第1次面 GL-0.17m. 19世紀前半～近代。(第33図-第66層、第51層、第50層等の上面)

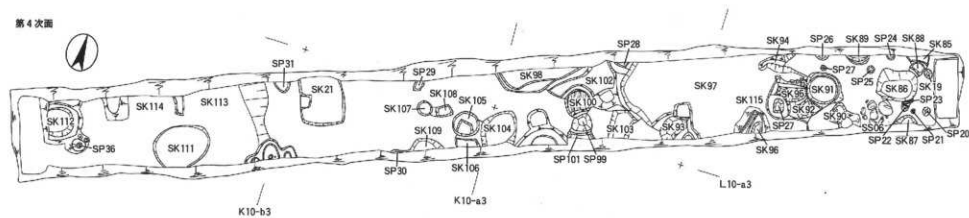
(第2次面 GL-0.23m. 18世紀後半～19世紀前半。(同図-第67層、第48層等の上面))

第3次面 GL-0.38m. 18世紀中頃～18世紀後半。(同図-第63層、第36層、第70層等の上面)

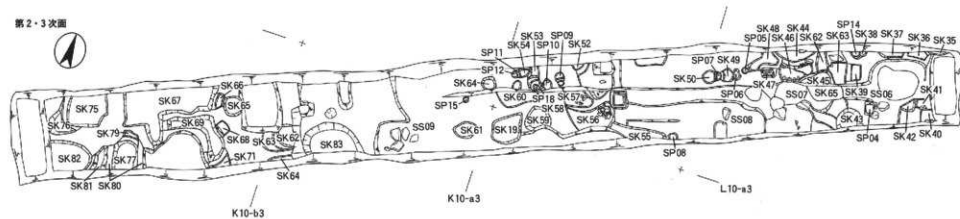
第4次面 GL-0.97m. 7世紀後半～18世紀中頃。(地山上面)

このうち、4次面では、B-1トレンチに続いて7世紀末～8世紀前半の須恵器、土師器が集中する箇所がみられた。これにSK113・114と土壌番号をつけたが、深さが0.25mと浅く、肩部もはっきりしないことから、包含層の可能性が高い。SK113からは、第35図-1・2が出土した。1は土師器鍋である。口径(推)30.5cmを測る。器面は荒れて調整は観察できない。2は、土師器高杯残部。外面はナデ調整、内面にはしほり目が見られる。このほか土師器甕体部、須恵器杯口縁部が伴出している。SK114からは第35図-3～6が出土した。3は須恵器杯身。完形である。口径13.5cm、器高3.5cmを測る。マキアゲ・ミズビキ成形で、高台はハリツケ。外面底部は粘土紐痕が残り、のち回転ナデ調整、他は回転ナデ調整を施す。中村編年Ⅲ型式3段階に相当するが、胎土はやや粗く陶色の製品ではない。4は須恵器杯蓋。次の5とセットで使用されたものである。これも口縁部の一部を欠くがほぼ完形。口径11.5cm、器高3cmを測る。天井部外面は中央部が回転ヘラケズリで、のち宝珠つまみをハリツケする。Ⅲ型式2段階に相当する。5は須恵器杯身。これもほぼ完形である。口径10.5cm、器高3.9cm。口縁部は回転ナデ調整、底部外面は未調整。おなじくⅢ型式2段階に相当する。6は須恵器長頸壺。頸部内面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整。外面頸部中程に一条の沈線を施す。このように完形の遺物が含まれることから、単なる廃棄と考えるには躊躇するが、遺物の性格は判然としない。このほか、東側では17世紀後半～18世紀中頃の遺物を含むSK96、大量の焼土を伴う土壌SK97、木桶を埋めたSK91・100がある。SK97は第3次面に属する遺構であるが、他の遺構と重

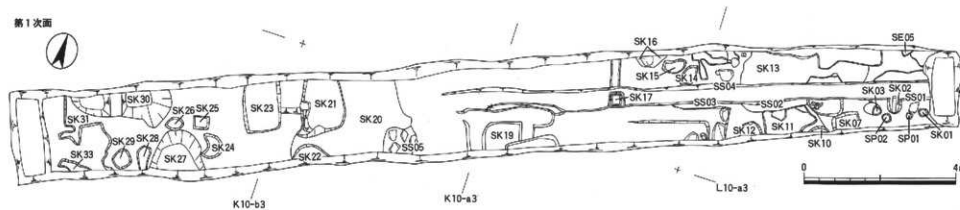
第4次面



第2・3次面



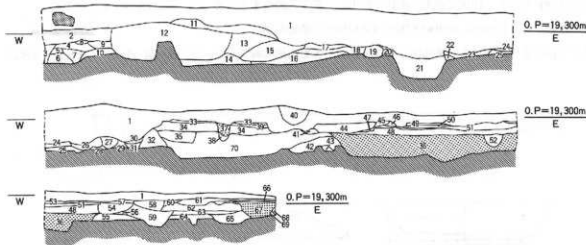
第1次面



第32図 Dトレンチ遺構全体図

復していたため第4次面で掘削したものである。18世紀代の遺物を含んでいる。図版九にあげた骨製かんざしが出土している。全長(残)14.5cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。表面には黒漆により文様の下地となる唐草文様が描かれる。SK91(第34図)は第2次面に属する遺構であるが、やはり重複のため検出できなかった遺構である。第35図-8の肥前磁器染付皿が出土している。SK100とともに便槽と考えられる遺構である。このように、この面では7世紀後半と17世紀後半~18世紀中頃の遺構が検出されたが、18世紀に下がる遺構は重複のため上面で掘削できなかったものが大半であり、本来17世紀代の遺構面と考えられる。

第3次面は前述のように、面としてとらえられなかった第2次面の遺構も含む。トレンチ東端から1/3は土間面がみられ、宮ノ前商店街通りに面した建物があったことがわかる。西側は土塙が中心で、裏庭となっ



1. 掘削
2. 黒褐色砂質土層10Y R5/8(2cmの礫を含む)
3. 褐色砂質土層10Y R4/4
4. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4(炭化物含む)
5. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3
6. 明褐色砂質土層7・5Y R5/6
7. 褐色砂質土層10Y R4/4(炭化物若干含む)
8. 土いり黄褐色粘質土層10Y R3/3(炭化物多量を含む)
9. 黒褐色砂質土層2・5Y6/8(2~3cmの礫多量を含む)
10. 明褐色砂質土層2・5Y6/8(2~3cmの礫多量を含む)
11. 土いり黄褐色粘質土層10Y R5/3(炭化物多量を含む)
12. 瓦葺の層
13. 灰オリーブ色砂質土層5Y6/2(2~5cmの礫多量を含む)
14. 明褐色砂質土層7・5Y R5/6
15. 雑草
16. 明褐色粘質土層7・5Y R5/8
17. 黄褐色砂質土層2・5Y0/4
18. 明褐色粘質土層10Y R6/8
19. 雑草
20. 明褐色粘質土層10Y R7/6
21. 土いり黄褐色粘質土層2・5Y6/4(炭化物・遺物多量を含む)
22. 明褐色砂質土層7・5Y R5/8
23. 黒褐色砂質土層2・5Y3/1(炭化物多量を含む)
24. 明褐色粘質土層10Y R6/8
25. 褐色砂質土層10Y R4/6
26. 土いり黄褐色砂質土層2・5Y6/4
27. 褐色砂質土層7・5Y R4/6
28. 明褐色粘質土層2・5Y6/8
29. 土いり黄褐色粘質土層2・5Y6/4
30. 黄褐色砂質土層2・5Y0/4
31. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4(遺物含む)
32. 暗褐色粘質土層10Y R3/4(2~3cmの礫多量を含む)
33. 黒褐色砂質土層2・5Y3/4
34. 褐色砂質土層10Y R4/4
35. 土いり黄褐色粘質土層10Y R5/3
36. 黒褐色砂質土層10Y R3/2(炭化物・礫多量を含む)
37. 暗褐色粘質土層10Y R3/4(炭化物・礫多量を含む)
38. 黄褐色砂質土層2・5Y5/6
39. 灰オリーブ色粘質土層5Y6/2
40. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
41. 黒褐色粘質土層10Y R5/8
42. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
43. 暗オリーブ色粘質土層5Y4/4
44. 黄褐色粘質土層2・5Y5/4(2~4cmの礫多量を含む)
45. 明褐色粘質土層2・5Y6/8
46. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
47. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
48. 褐色砂質土層10Y R4/4(炭化物多量を含む)
49. 黄褐色粘質土層2・5Y5/3(1~2cmの礫多量を含む)
50. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
51. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6(炭化物・3cmの礫多量を含む)
52. 暗オリーブ色粘質土層5Y4/3(炭化物多量を含む)
53. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
54. 暗褐色粘質土層2・5Y4/2(2~4cmの礫多量を含む)
55. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
56. 明褐色粘質土層10Y R6/8
57. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
58. 黄褐色粘質土層2・5Y5/4(炭化物・3cmの礫多量を含む)
59. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3(炭化物・2~5cmの礫多量を含む)
60. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3(炭化物多量を含む)
61. 土いり黄褐色粘質土層2・5Y6/4
62. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
63. 黒褐色粘質土層2・5Y3/2(炭化物多量を含む)
64. 土いり黄褐色粘質土層2・5Y6/4(炭化物若干含む)
65. 暗褐色粘質土層10Y R3/9(2~3cmの礫多量を含む)
66. 暗褐色粘質土層2・5Y4/6
67. 暗褐色粘質土層10Y R4/6
68. 暗褐色粘質土層2・5Y3/2
69. 黄褐色粘質土層2・5Y5/6
70. 黒褐色粘質土層10Y R3/2

第33図 Dトレンチ北壁土層図(網-密 石など、網-粗 焼土層)

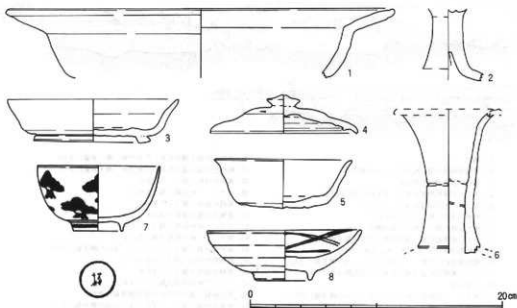


ていたと考えられる。SK56・65・82から18世紀前半～中頃の遺物、SK43・46・66からは18世紀後半の遺物が出土した。また、SK73からは19世紀初頭、SP03からは19世紀代の遺物が出土し、土層観察の結果18世紀中頃～18世紀後半が第3次面、18世紀後半～19世紀前半が第2次面の遺構と考えられる。第2次面では、前述のように火災の痕跡も確認している。

第1次面は、東側では礎石SS01～04や土間の存在から第3次面と同様に建物が存在していたことがわかる。この部分は視乱のため一部第3次面の遺構も検出した。18世紀後半の遺物を含むSK08・11がそれである。SK12は18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土し、第1次面本来の遺構である。西側でもSK20から18世紀中頃～19世紀初頭の遺物が出土しており、第3次面の遺構が混じる。第35図～7はSK20出土肥前磁器碗である。外



1. 暗オリーブ褐色砂質土層  
2・5 Y3/3 (炭化物多量を含む)  
2. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2  
3. 黒褐色砂質土層 7・5 YR3/2  
4. 褐色砂質土層 7・5 YR4/4



第35図 DトレンチSK113(1・2)・SK114(3～6)・SK20(7)・SK97(8)・SK91(9)出土遺物(1)

面体部にコンニャク印判による松葉文を施文する。また、第36図の「寛永通宝」が共伴している。西端は土間面がみられ、裏に建物が建っていたことがわかる。この土間面を切って近代の遺構がみられる。SK21・23・27・30がそれである。したがって、この建物は近代以前の19世紀前半～中頃のものである。

このトレンチでは、以上のように7世紀後半の遺構がかなり広範囲にわたることが判明した。また、第2次面および第3次面で焼土処理土壌が検出され、2度にわたって火災が起こったことが判明した。



第36図 DトレンチSK20  
出土遺物(2)(S=1/2)

## 6. Eトレンチ

再開発対象区域の北西に設定したトレンチである。ここも旧北少路村に属するが、宮ノ前商店街通りからは裏手になる。ここでも上部は視乱され、東側では西側の下層が第1次面で検出された。生活面は、4面確

認められた。

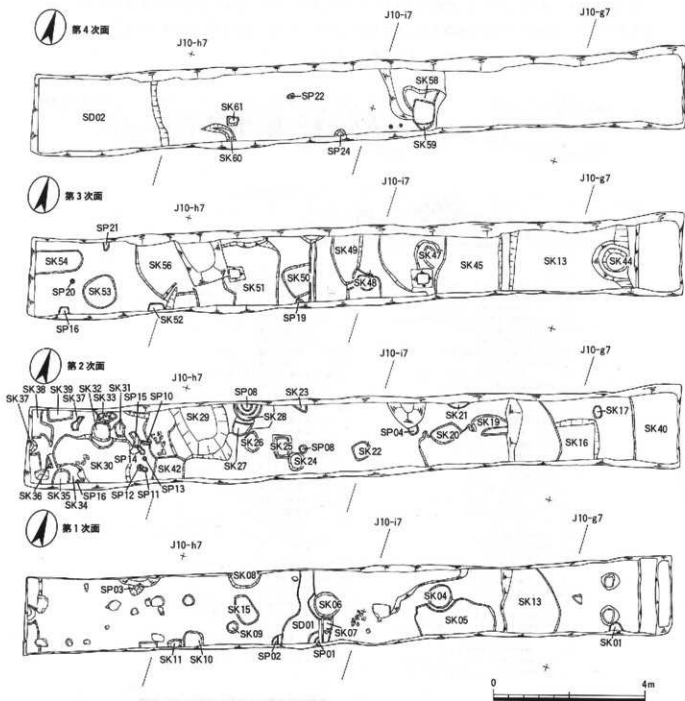
第1次面 GL-0.16m, 19世紀前半～近代。(第38図～第13層、第24層、第64層等の上面)

第2次面 GL-0.19m, 18世紀後半～19世紀初頭。(同図～第15層、第25層、第60層等の上面)

第3次面 GL-0.39m, 17世紀中頃～18世紀後半。(同図～第26層、第51層等の上面)

第4次面 GL-0.54m, 16世紀後半～17世紀前半。(地山上面)

第4次面では、西端で16世紀後半にさかのぼる溝SD02を検出した。溝は南北方向に延びており、検出幅2.47m、深さ0.4mを測る。埋土から第39図-1・2が出土した。1は土師質土器皿である。口径(推)8cm、器高1.6cmを測る。底部中央がわずかに突出する。2は瀬戸・美濃焼鉄釉天目茶碗。外面下半は化粧拵

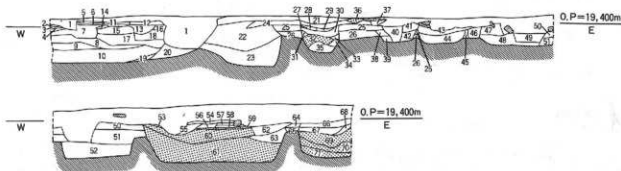


第37図 Eトレンチ遺構全体図

けする。

第3次面では、西端のSK56から第40図にあげた丹波焼甕が出土した。1・2ともに同型式の甕である。2は口径(推)36.5cm、器高28.7cmを測る。内面にはハケによる塗土が施される。17世紀中頃の遺物である。東端では、大規模な焼土処理土壌SK13を検出した。検出幅3.11m、深さ0.78mを測る。これは、土層観察から第2次面の遺構と判断される。堀土から第39図-3に上げた京焼風陶器色絵碗ほか多数の遺物が出土した。3は、口径(推)12.6cm、器高5cm。内面には鉄絵で山水文を描き、赤・緑色で山水を付け加える。色絵部分は、後補の可能性もある。高台内には「柴」の印がみられる。他の遺物は18世紀前半～後半のもので、18世紀後半の火災痕と考えられる。このようにこの面では、17世紀中頃～18世紀後半の遺構面である。

第2次面でも土壌が中心である。西側では焼土処理土壌SK30、東側でも焼土処理土壌SK40を検出した。SK30からは、第39図-4の肥前磁器染付広東型碗等が出土している。4は外面に芭蕉葉文を描く。したがって18世紀末～19世紀前半に火災があったものと考えられる。



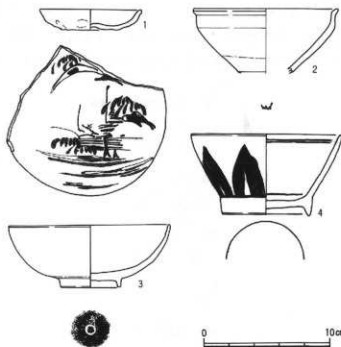
- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 埋込<br/>2. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3<br/>3. にがい黄褐色粘質土層2・5Y6/4<br/>4. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6<br/>5. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8(炭化物多量に含む)<br/>6. 明黄褐色粘質土層2・5Y6/6<br/>7. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6<br/>8. 褐色粘質土層10Y R4/4(炭化物、焼土を含む)<br/>9. 黄褐色粘質土層10Y R5/6<br/>10. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4<br/>11. 明黄褐色粘質土層2・5Y6/8<br/>12. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4<br/>13. 暗オリーブ褐色2・5Y3/3<br/>14. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6<br/>15. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4(炭化物若干含む)<br/>16. 黄褐色粘質土層2・5Y3/3<br/>17. にがい黄褐色粘質土層10Y R5/3<br/>18. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4<br/>19. 褐色粘質土層7・5Y4/6<br/>20. にがい黄褐色粘質土層2・5Y6/4<br/>21. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3<br/>22. にがい黄褐色粘質土層2・5Y6/4<br/>23. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3<br/>24. 黄褐色粘質土層10Y R5/8<br/>25. 褐色粘質土層10Y R3/3<br/>26. 褐色粘質土層10Y R4/4(炭化物若干含む)<br/>27. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4<br/>28. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6<br/>29. 黄褐色粘質土層2・5Y6/6<br/>30. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4<br/>31. 褐色粘質土層10Y R4/4<br/>32. 褐色粘質土層2・5Y3/2(炭化物多量に含む)<br/>33. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4<br/>34. にがい黄褐色粘質土層10Y R5/4<br/>35. 黄褐色粘質土層10Y R5/8(3～5cmの埋込多量に含む)<br/>36. 黄褐色粘質土層10Y R3/1(炭化物多量に含む)</p> | <p>37. 黄褐色粘質土層10Y R4/2<br/>38. にがい黄褐色粘質土層10Y R5/1<br/>39. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3(炭化物、焼土若干含む)<br/>40. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4<br/>41. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3<br/>42. にがい黄褐色粘質土層10Y R5/3<br/>43. 褐色粘質土層10Y R4/6<br/>44. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4<br/>45. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3<br/>46. 褐色粘質土層10Y R4/6(炭化物若干含む)<br/>47. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4<br/>48. にがい黄褐色粘質土層10Y R4/3(3～5cmの埋込多量に含む)<br/>49. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3<br/>50. 褐色粘質土層10Y R4/4(焼土若干含む)<br/>51. にがい黄褐色粘質土層10Y R4/3<br/>52. 褐色粘質土層10Y R4/6<br/>53. 褐色粘質土層10Y R4/6(炭化物若干含む)<br/>54. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6(4cmの埋込若干含む)<br/>55. 暗オリーブ褐色粘質土層5Y4/2<br/>56. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6<br/>57. 褐色粘質土層7・5Y4/6<br/>58. にがい黄褐色粘質土層10Y R5/4<br/>59. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3(焼土若干含む)<br/>60. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3(焼土・炭化物若干含む)<br/>61. 褐色炭化層2・5Y2/1<br/>62. 暗褐色粘質土層10Y R3/4<br/>63. 褐色粘質土層10Y R4/4(3cmの埋込若干含む)<br/>64. 黄褐色粘質土層2・5Y3/3<br/>65. 褐色粘質土層7・5Y R4/4<br/>66. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3(焼土若干含む)<br/>67. にがい黄褐色粘質土層10Y R5/4(遺物含む)<br/>68. 褐色粘質土層10Y R4/4<br/>69. 黄褐色炭化物層10Y R2/2(焼土含む)<br/>70. 褐色炭化物層10Y R3/2(焼土若干含む)<br/>71. 黄褐色粘質土層2・5Y3/3(炭化物多量に含む)</p> |
|--|--|



第38図 Eトレンチ北壁土層図(網-密 石など、網-粗 焼土層)

第1次面では、礎石S S01-09の存在から建物がトレンチ全面に建っていたことがわかる。また、SK05からは19世紀前半の遺物が出土した。このように、この面は19世紀前半以降近代にかけての面である。

このトレンチでは、以上のように第2次面で、火災痕が認められた。これは、出土遺物にわずかな年代の差があるが、トレンチでは同一時期のものかどうかは判断が下せなかった。また、16世紀後半の溝S D02を検出したことが、このトレンチでの成果である。



第39図 EトレンチS D02 (1・2)・SK13(3)・SK30(4)出土遺物

## 7. Fトレンチ

対象地区の西側に設定したトレンチである。ここは江戸時代の昆陽口村にあたる。

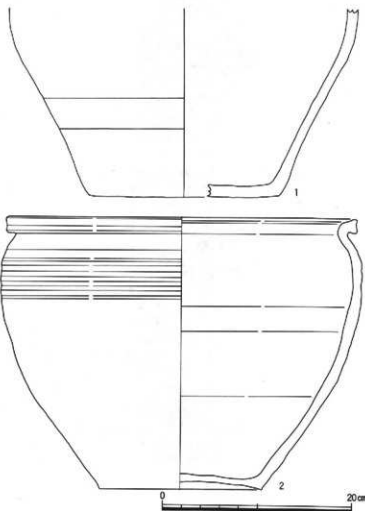
ここは比較的残りが良い。調査した生活面は2面であるが、そのうえにもう一面あることが土層から判明し、合計3つの生活面を確認した。したがって、第1次面の遺構は、第2次面で同時にとらえている。また、第3次面の茶釜をなす第5層、第29層は堆積層であるが、トレンチの範囲では遺物を含まず、いちおう地山と考えた。

(第1次面 GL-0.17m, 18世紀後半～近代。(第42図-第10層、第22層、第66層等の上面))

第2次面 GL-0.21m, 18世紀前半～18世紀後半。(同図-第16層等の上面)

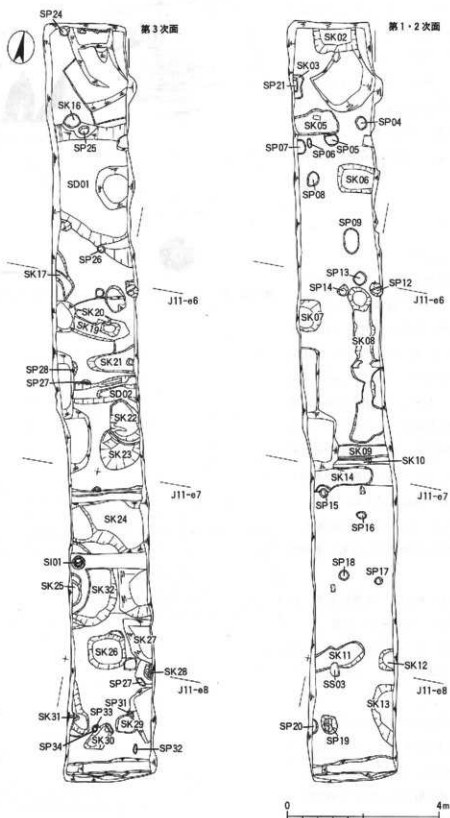
第3次面 GL-0.40m, 16世紀中頃～17世紀前半。(同図-第5層、第29層等の上面)

ここでも第3次面で16世紀中頃～17世紀前半の溝S D01を検出した。東西に延びており、最大幅3.8m、深さ0.55mを測る。埋土中程には焼土層がみられた(第42図-第23層)。第44図、第45図はS D01出土遺物である。第44図-1は唐津焼皿。内面に

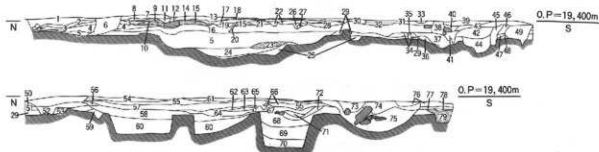


第40図 EトレンチS K56出土遺物

灰釉を掛け、見込みには胎土目がみられる。2は、瀬戸・美濃焼鉄釉天目茶碗。外面体部下半は化粧掛けする。3は丹波焼摺鉢。一本引きの摺目で、長谷川真氏の編年（長谷川1988年）のIA1類に属する。第45図は平瓦である。全長26.7cm、後端幅21.4cmを測る。JR駅前地区第23次調査で大量に出土した平瓦と同一種



第41図 Fトレンチ遺構全体図



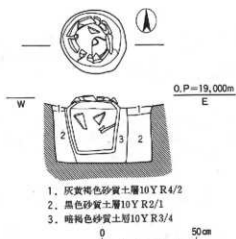
- |  |   |  |
|--|---|--|
| <p>1. 褐色粘質土層10Y R/6<br/>         2. 赤褐色砂質土層 5 Y R/3<br/>         3. 灰褐色粘質土層10Y R/4(粘土少量含む)<br/>         4. 赤褐色砂質土層10Y R/5/6<br/>         5. 黄褐色砂質土層10Y R/5/6<br/>         6. 礫土<br/>         7. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y/6<br/>         8. 黒色土層 2・5 Y/1<br/>         9. 褐色土層10Y R/4<br/>         10. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y/3(粘土少量含む)<br/>         11. 褐色砂質土層 7・5 Y R/4<br/>         12. 赤褐色砂質土層 5 Y R/4<br/>         13. 黒色土層10Y R/2<br/>         14. 褐色砂質土層10Y R/6<br/>         15. 暗褐色粘質土層10Y R/3(粘土少量・炭化物多量を含む)<br/>         16. 褐色砂質土層10Y R/6<br/>         17. 原褐色砂質土層10Y R/3/2(燧地層)<br/>         18. 黄褐色粘質土層 2・5 Y/5/4<br/>         19. 黄褐色砂質土層 5 Y/6<br/>         20. オリーブ褐色土層 2・5 Y/3<br/>         21. 黄褐色粘質土層10Y R/6/9<br/>         22. 黒褐色砂質土層10Y R/3/2<br/>         23. 暗褐色粘質土層 2・5 Y/3/6<br/>         24. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y/4<br/>         25. 黄褐色砂質土層10Y R/6/9<br/>         26. 褐色砂質土層10Y R/4<br/>         27. 暗褐色粘質土層 7・5 Y/3/6</p> | <p>28. 赤褐色粘質土層10Y R/3<br/>         29. 黄褐色砂質土層10Y R/5/6<br/>         30. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y/4/6<br/>         31. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y/4/4<br/>         32. 黄褐色粘質土層 2・5 Y/3/2<br/>         33. 暗褐色粘質土層 2・5 Y/6/6<br/>         34. 褐色砂質土層10Y R/4<br/>         35. 赤褐色粘質土層10Y R/5/4<br/>         36. 赤褐色粘質土層 7・5 Y R/5/4<br/>         37. 赤褐色粘質土層10Y R/5/3<br/>         38. 礫土<br/>         39. 黄褐色砂質土層 2・5 Y/6(3cm程の礫多量を含む)<br/>         40. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y/4/4<br/>         41. 暗褐色粘質土層10Y R/3/4<br/>         42. 褐色砂質土層10Y R/4/3<br/>         43. 黄褐色粘質土層 2・5 Y/5/4(3cm程の礫多量を含む)<br/>         44. 赤褐色粘質土層10Y R/3/3<br/>         45. 褐色砂質土層10Y R/4/6(2cm程の礫を含む)<br/>         46. 暗褐色粘質土層 5 Y R/3/4<br/>         47. 赤褐色粘質土層10Y R/5/3<br/>         48. 黄褐色粘質土層10Y R/3/6<br/>         49. 赤褐色粘質土層10Y R/4/3<br/>         50. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R/3/3<br/>         51. 褐色砂質土層10Y R/4/4<br/>         52. 黄褐色粘質土層10Y R/5/6<br/>         53. 赤褐色粘質土層10Y R/4/3<br/>         54. 黄褐色粘質土層10Y R/5/6</p> | <p>55. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y/4/3<br/>         56. 褐色砂質土層10Y R/4/4(炭化物少量含む)<br/>         57. 赤褐色粘質土層10Y R/5/3(燧地層)<br/>         58. 赤褐色粘質土層10Y R/4/3<br/>         59. 褐色砂質土層10Y R/4/6<br/>         60. 黄褐色粘質土層 7・5 Y R/2/2<br/>         61. 暗褐色粘質土層 5 Y/5/6(遺物多量を含む)<br/>         62. 赤褐色粘質土層 7・5 Y R/3/1<br/>         63. 褐色砂質土層 7・5 Y R/4/6<br/>         64. 赤褐色粘質土層10Y R/4/2(燧地層)<br/>         65. 褐色砂質土層10Y R/4/6<br/>         66. 赤褐色粘質土層 7・5 Y R/5/4<br/>         67. 黄褐色粘質土層 2・5 Y R/6/6<br/>         68. 暗褐色粘質土層 2・5 Y R/6/6<br/>         69. 黄褐色粘質土層 2・5 Y/5/6<br/>         70. 暗褐色粘質土層 2・5 Y/6/6(3cmの礫を含む)<br/>         71. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y/4/2<br/>         72. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y/4/4<br/>         73. 暗褐色粘質土層10Y R/3/3(3cmの礫多量を含む)<br/>         74. 褐色粘質土層10Y R/6/3(3cmの礫多量を含む)<br/>         75. 暗褐色粘質土層 2・5 Y/4/2<br/>         76. 赤褐色粘質土層 2・5 Y/4/2<br/>         77. 赤褐色粘質土層10Y R/5/4<br/>         78. 赤褐色粘質土層10Y R/5/4(3cmの礫多量を含む)<br/>         79. 黒色土層10Y R/1/2/1<br/>         79. 黄褐色粘質土層10Y R/5/8(粘土層多量を含む)</p> |
|--|---|--|

第42図 Fトレンチ東壁土層図(網・密 石など、網・粗 焼土層)

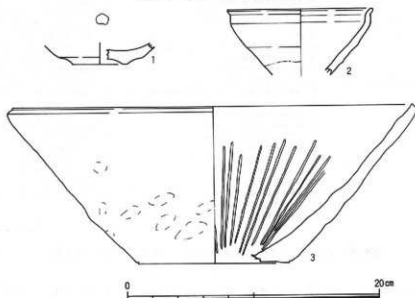
で、有阿城時代のものである。このほかの土壌は、第2次面の土間直下に営まれたものである。SK24・32は焼土処理土壌で、17世紀末～18世紀前半の遺物を含む。第46図-1は、SK32出土肥前磁器皿である。高台は露胎で、見込みには蛇ノ目軸ハギがみられる。このほかSK20からは、18世紀後半の遺物が出土している。同図-2は、SK20出土肥前磁器青磁染付筒型碗である。SI01も土間直下に設けられた遺構で、土師質土器火清釜を埋めた陶衣釜である。釜は川口編年(川口1989年)のII-1型式(論文のII-4・5型式は、後にII-1・2型式と改称:筆者注)に属し、18世紀後半のものである。釜の天井部外面はハナレ砂痕が残し、周縁には一条の沈線を巡らせる。つまみは偏平でハリツケする。釜は口径18.5cm、器高27cm。外面はヨコナデ調整。口縁部の立ち上がりは低い。これには、内容物は伴っていない。SK25からは、図版九にあげた鉄製小刀が出土している。全長11cm、幅2cm、厚さ0.5cmを測る。共存遺物は少なく明確な時期は決まれないが、18世紀後半の遺構を切っており、それ以降の時期と推定できる。

第1・2次面では全面に土間があり、礎石SS02・03などがみられる。したがって、第2次面は建物が建っていたことがわかるが、これが一棟であったかどうかはわからない。第2次面に属する遺構には、18世紀後半～末のSK02・05・07・11がある。第1次面から残った遺構としては、SK13(大正・昭和)とSK10(近代)がある。

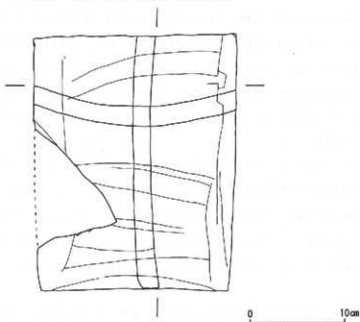
このように、ここでは16世紀中頃～17世紀前半の遺構が営まれて以降、17世紀後半まで明確な遺構はない。土層図の第16層褐色砂質土層は畑の耕作土と考えられ、その後一時耕作地となっていたようである。17世紀



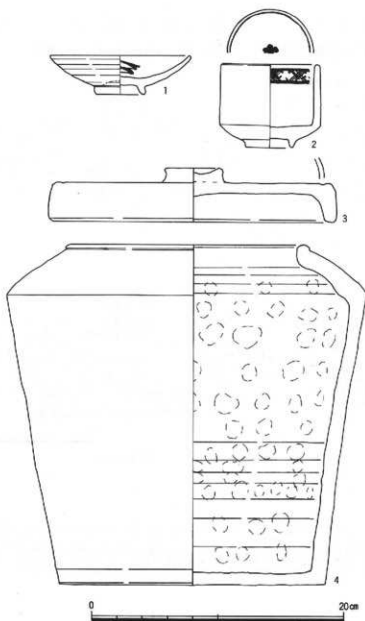
第43図 FトレンチS I 01遺構図



第44図 FトレンチSD01出土遺物(1)



第45図 FトレンチSD01出土遺物(2)



第46図 FトレンチSK32 (1)・SK20 (2)・S I 01 (3・4) 出土遺物

後半以降遺構が認められ、18世紀前半のうちに火災があったことが判明した。

## 8. G-1、G-2トレンチ

調査対象区域の西北端に設定したトレンチで、両トレンチとも似通っており、まとめて記述する。ここでも調査した遺構面は2面であるが、土層観察の結果、1面目の上に第1次生活面があり、1面目ではこの第1次生活面の遺構も同時に検出することとなった。したがって、合わせて3つの生活面を確認した。

(第1次面 GL-0.20m, 18世紀後半～近代。(G-1トレンチ第48図-第3層、第9層、第22層等の上面。

G-2トレンチ第53図-第3層、第19層、第41層等の上面))

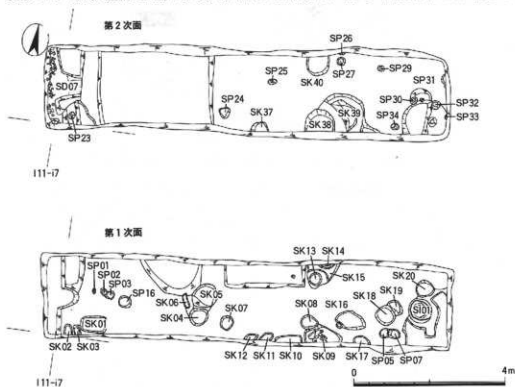
第2次面 GL-0.28m, 18世紀前半～18世紀後半。(G-1トレンチ第48図-第6層、第10層、第20層等の上面。G-2トレンチ第53図-第35層、第42層等の上面)

第3次面 GL-0.48m, 16世紀中頃～17世紀後半。(G-1トレンチ、G-2トレンチとも地山上面)

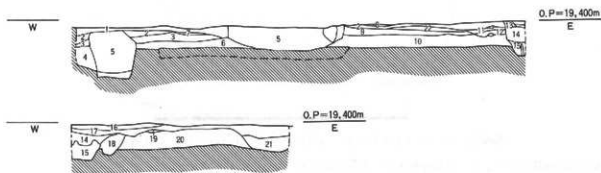
このトレンチは、両方とも様相を同じくしている。G-1トレンチ第3次面では、地山面から切り込まれた



南北に延びる溝SD07が目される。この溝は幅0.5m以上、深さ0.4mを測る。にぶい黄褐色粘質土を埋土とし、一見して江戸時代の遺構と区別できる。溝底には5cm程度の小石が多く堆積し、これに混じって第51



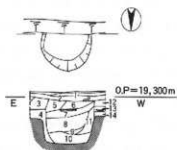
第47図 G-1トレンチ遺構全体図



- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 褐色砂質土層10Y R4/4</li> <li>2. 黄褐色砂質土層10Y R5/6 (2cmの礫多量に含む)</li> <li>3. 褐色粘質土層7・5 Y R4/4 (3cmの礫多量に含む)</li> <li>4. にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/8</li> <li>5. 攪乱</li> <li>6. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6</li> <li>7. 黄褐色粘質土層10Y R5/6</li> <li>8. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4</li> <li>9. 褐色粘質土層10Y R4/6</li> <li>10. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/5</li> <li>11. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>12. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6</li> <li>13. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6</li> <li>14. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6 (1-3cmの礫多量に含む)</li> <li>15. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6</li> <li>16. 黄褐色粘質土層10Y R5/6</li> <li>17. にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3</li> <li>18. 暗灰黄色粘質土層2・5 Y4/2</li> <li>19. 黒色粘土層2・5 Y2/1</li> <li>20. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6</li> <li>21. 攪乱</li> <li>22. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8</li> </ol> |
|--|--|



第48図 G-1トレンチ北壁土層図



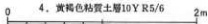
1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
2. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (炭化物を多量に含む)
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
4. 明黄褐色粘質土層 10 Y5/6
5. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 (炭化物や中量を含む)
6. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
7. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (異物と 2・3 含む)
8. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (遺物をやや多量に含む)
9. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 (3m 位の礫をやや多量に含む)
10. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (炭化物を多量に含む)



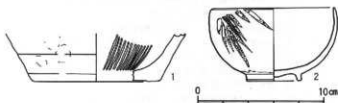
第49図 G-1 トレンチ SK38 遺構図



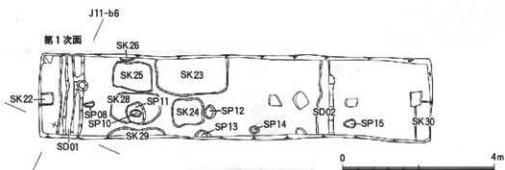
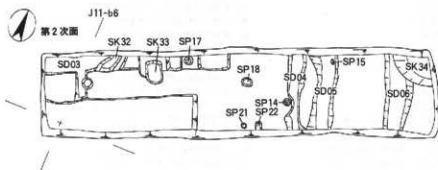
1. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
2. 明黄褐色粘質土層 10 Y R6/8
3. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
4. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6



第50図 G-1 トレンチ SD07 遺構図



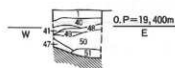
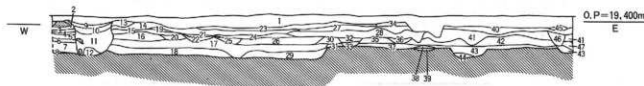
第51図 G-1 トレンチ SD07 (1)・SK38(2) 出土遺物



第52図 G-2 トレンチ遺構全体図

図-1の備前焼鉢が出土した。掘目は底部から放射状に施され、16世紀中頃～後半のものである。したがって、この溝は有岡城期の遺構で、JR駅前で見られたように現行道路の東側に沿って設けられたものと考えられる。このほかS P27からは17世紀後半の遺物が出土した。S K38 (第49図)・40は上層で掘削しきれなかった遺構であり、第2次面に属する。18世紀後半の遺物が出土した。第51図-2はS K38出土京焼系陶器色絵碗である。外面体部に赤(図の斜線部)、緑(図の網点部)で笹文を描く。G-2トレンチ第3次面では、東西溝S D03から17世紀後半の遺物が出土している。第54図がそれで、京焼風陶器碗である。体部外面に鉄絵で山水文を描く。しかし、両トレンチとも建物の存在を示す遺構は存在しない。S D04・05・06などは耕作に関連する溝と考えられる。

G-1トレンチ第1・2次面ではS K18・20が第2次面に属し、18世紀代の遺物が出土している。S K21



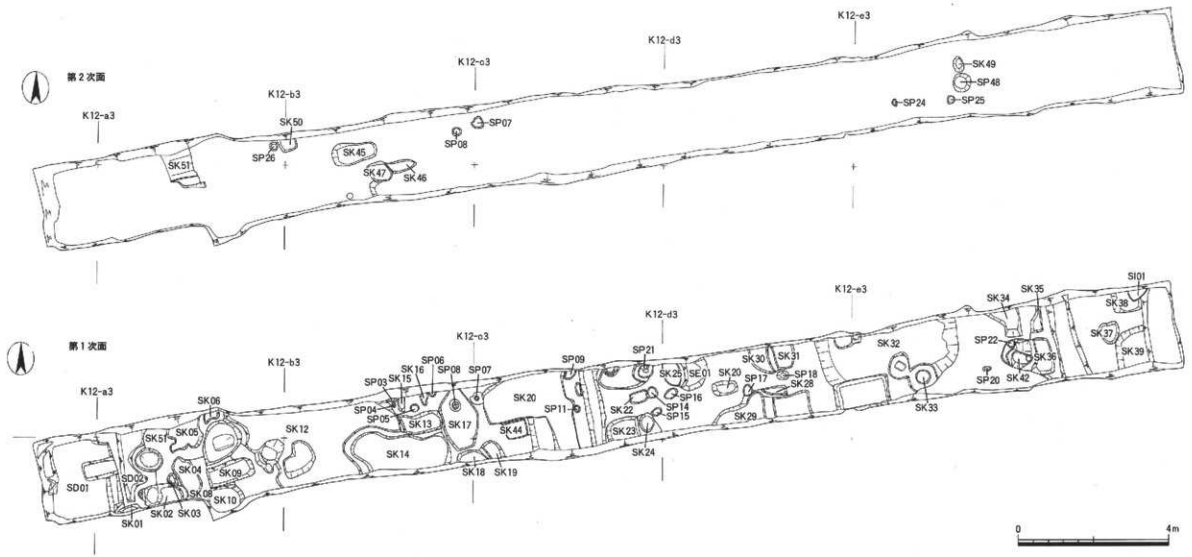
1. 黄褐色砂質土層10Y R5/6(1~10cmの礫多量を含む)
2. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6(2~5cmの礫多量を含む)
3. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8
4. ぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
5. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
6. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y5/6
7. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/8
8. ぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4
9. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8
10. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4(炭化物若干含む)
11. オリーブ色砂質土層5 Y5/6(2~5cmの礫多量を含む)
12. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/6
13. ぶい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4
14. ぶい黄褐色砂質土層10Y R6/4
15. ぶい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4(2~10cmの礫含む)
16. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
17. 浅黄褐色砂質土層2/5 Y7/4(5~10cmの礫多量を含む)
18. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6(5cmの礫多量を含む)
19. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4
20. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/6(1~3cmの礫多量を含む)
21. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3
22. ぶい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4
23. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8
24. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6

25. ぶい黄褐色砂質土層2・5 Y6/3
26. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8(5cmの礫多量を含む)
27. 暗灰黄褐色砂質土層2・5 Y5/2
28. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3(遺物含む)
29. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6(5cmの礫多量を含む)
30. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6(炭化物若干含む)
31. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
32. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
33. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6
34. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6(遺物、3~10cmの礫含む)
35. ぶい黄褐色砂質土層10Y R6/4
36. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
37. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4
38. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
39. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
40. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
41. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
42. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4
43. オリーブ褐色土層2・5 Y4/4
44. ぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
45. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
46. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3
47. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/8
48. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/6
49. 明黄褐色砂質土層2・5 Y7/6
50. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/6(炭化物若干含む)
51. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6

第53図 G-2トレンチ北壁土層図



第54図 G-2トレンチ S D03出土遺物



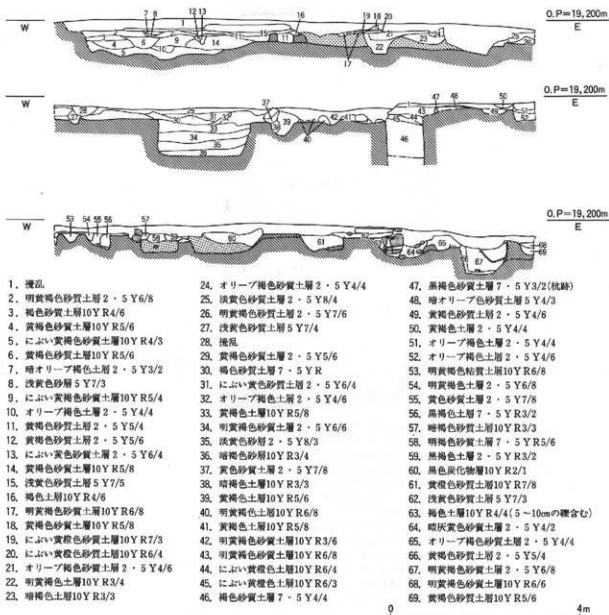
第55図 Hトレンチ遺構全体図

は18世紀末から19世紀初頭の遺物が出土し、第1次面に属する。G-2トレンチ第1・2次面では、SD01が18世紀後半で第2次面、SK30が18世紀後半～19世紀初頭の遺物を含み第1次面に属する。第2次面は土間層が確認できないが、第1次面には土間層がみられ、ここで土間が敷かれるのは18世紀後半以降と考えられる。

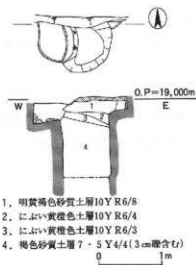
このように、このトレンチで注目すべき点は、G-1トレンチの第3次面で有岡城時代の溝SD07を検出したことである。町の中心地から西に離れたこの地点で16世紀代の遺構が検出されることは、興味深い。また、その後人家が建つのはFトレンチ同様17世紀後半以降である。

## 9. Hトレンチ

調査対象区域西南端の昆陽口通りに面した地点である。ここは、旧昆陽口村に属する。このトレンチは地

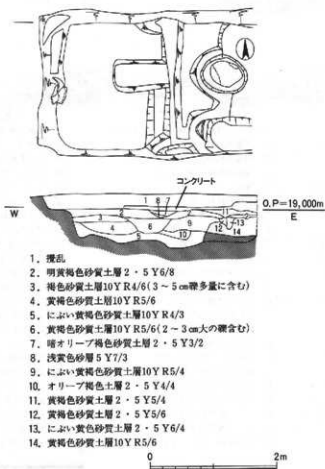


第56図 Hトレンチ北壁土層図 (網-密 石など、網-粗 焼土層)



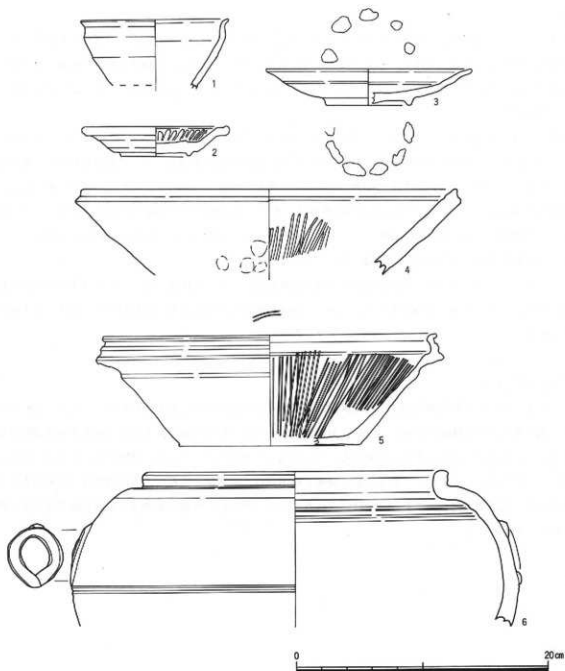
1. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8
2. におい黄褐色土層10Y R6/4
3. におい黄褐色土層10Y R6/3
4. 褐色砂質土層 7・5 Y4/4(3cm礫含む)

第57図 HトレンチSE01遺構図



1. 礎石
2. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8
3. 褐色砂質土層10Y R4/6(3~5cm礫多量に含む)
4. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
5. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3
6. 黄褐色砂質土層10Y R5/6(2~3cm大の礫含む)
7. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/2
8. 浅黄色砂層 5 Y7/3
9. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4
10. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4
11. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
12. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
13. におい黄褐色砂質土層 2・5 Y6/4
14. 黄褐色砂質土層10Y R5/6

第58図 HトレンチSD01・02遺構図



第59図 HトレンチSK01(1)・SD01(2)・SK12(3・5)・SE01(4)・SD02(6)出土遺物

山までが浅く、GL-0.18m程度であった。その間に、東側では1面、西側では地山面を含めて2面の生活面が確認された。

第1次面 GL-0.08m, 18世紀後半～近代。(第56図～第21層、第48層等の上面)

第2次面 GL-0.18m, 16世紀中頃～17世紀前半。(同図-地山上面)

第2次面では、G-1トレンチで検出した16世紀中頃～後半の溝の続きのSD02(第58図)が検出された。これは、ここではのちに同じ場所にSD01が設けられ、これと重複している。遺物はSD02から第59図-6の備前焼水屋甕が出土している。肩部には不遊環がハリツケされる。SD01からは、同図-2の瀬戸・美濃焼灰軸折縁皿が出土している。高台はケズリグシで、見込み中央は露胎。このほか、唐津焼も出土しており、16世紀末に再掘削されて17世紀初頭まで存続したものと考えられる。SK01は、この溝の上面から切り込まれた土壌である。出土遺物には、本来SD02に属すると考えられる同図-1の瀬戸・美濃焼鉄釉天目茶碗が

出土した。中央部に位置する井戸SE01からは、同図-4の丹波焼播鉢（大平編年Ⅱ型式）が出土した。17世紀前半の井戸である。東側では、焼土処理土壌SK32がある。ここからは18世紀前半の遺物が出土した。図版十一-13の金銅製キセルが共存している。全長5.5cm、火皿の直径1.6cmを測る。これらは、第2次面に属する遺構である。

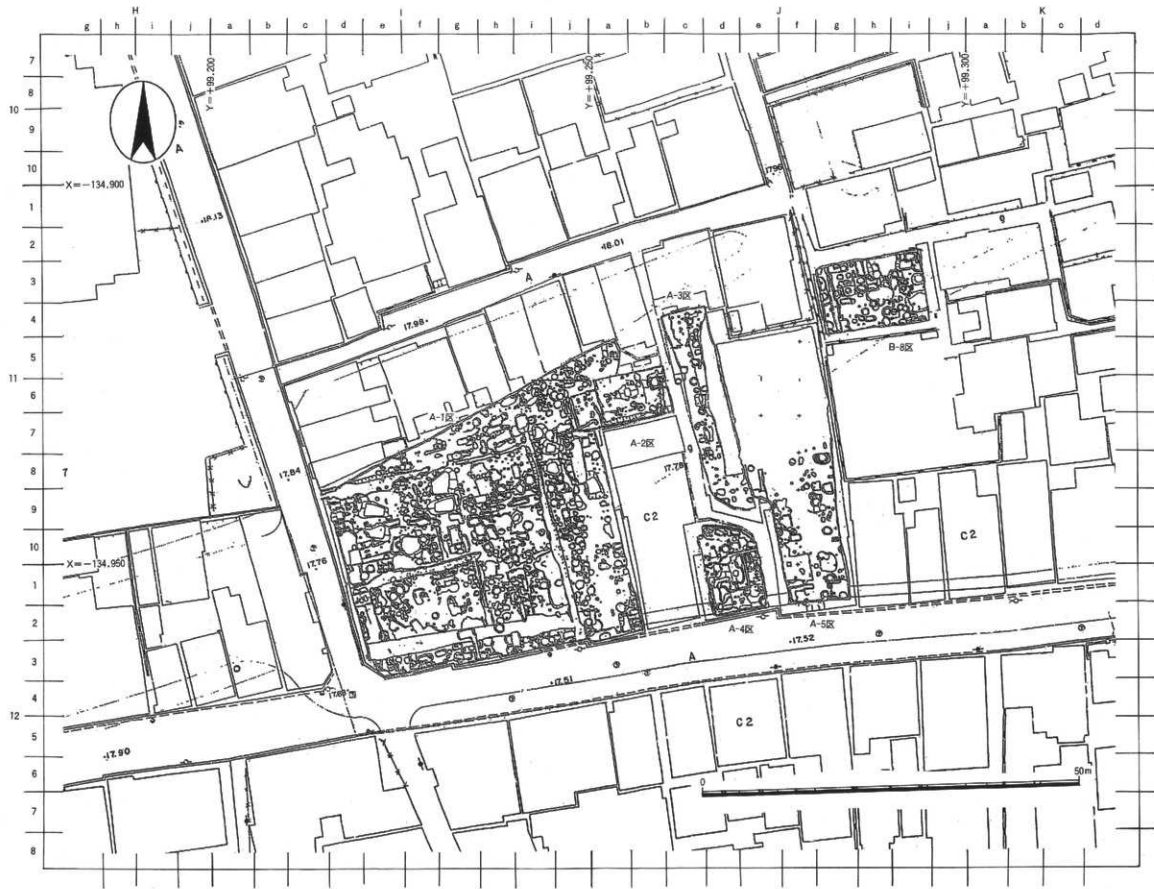
第1次面に属するものとしては、SK28・36（18世紀後半）、SK20・29（大正・昭和）などがある。また、SK12もこの面の焼土処理土壌である。埋土から18世紀中頃の第58図-5の丹波焼播鉢（大平編年Ⅵ型式）が出土している。これとともに同図-3にあげた朝鮮王朝期の白磁皿が出土した。口径（推）16cm、器高3.9cmを測る。見込みおよび高台には砂目痕がみられる。16世紀後半の遺物であるが、伝世したのであろう。また図版十一-12にあげた金銅製キセルも共存遺物である。全長6.6cm、火皿の直径1.6cmを測る。このほか、18世紀後半から19世紀前半の遺物が共存している。

このように、Hトレンチでは16世紀後半の溝や17世紀前半の井戸を確認したが、やはり建物は検出されず、G・Fトレンチと共通する様相をしめす。また、18世紀前半と18世紀後半～19世紀前半の2度の火災痕跡がみられた。

## 10. まとめ

このように、宮ノ前再開発地区では全区域で16世紀～19世紀の遺構が濃密に存在する。また、それらは1～5面の重複した遺構面を形成しており、有岡城期から近世伊丹郷町期に至る都市の構造や発達過程が克明にとらえられる点で学術上重要な意義をもっていることが判明した。さらに、対象区域の中央部のBおよびDトレンチでは、7・8世紀に遡る遺構・遺物も検出され、全区域で各面ごとの発掘調査が必要であると判断された。試掘調査終了後、その旨を伊丹市教育委員会に報告し、当再開発地区の事前全面発掘調査が開始されることとなった。





第60图 调查地点位置图

## 第2節 第51次調査A-1区

### 1. はじめに

有岡城跡・伊丹郷町の遺構・遺物は、基本的に中世の在城期と近世の伊丹郷町の2時期に大別できる。

JR伊丹駅南ノ前地区の発掘調査報告書では、これを細分し、

- I期 伊丹城期
- II期 荒木村重の有岡城及び池田之助(元助)の伊丹城期
- III期 伊丹郷町期

とした。そして、伊丹郷町期をIII期とした。さらに、小画期をA, B, Cで設定した。

今回はI~II期の時期区分は継承し、伊丹郷町期を遺構変遷の年代観を基準にIII-1~3期に細分した。

(第4章 結語第1節 遺構の変遷について参照)

III-1期 (16世紀後半~16世紀末期・16世紀末期~17世紀前半)

III-2期 (17世紀後半~18世紀後半・17世紀後半~18世紀中頃・18世紀中頃~18世紀後半)

III-3期 (18世紀後半~19世紀初頭・19世紀前半以降)

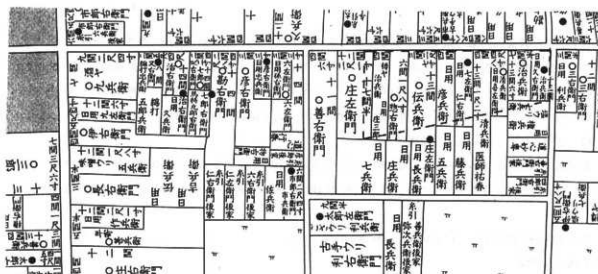
と細分する。以下、この時期区分に従って記述する。

また、下層の古い時代の検出面から記述していくが、上面の遺構を上面で検出しきれず、下面で、検出する場合もあるが、その場合は、2時期に存続する遺構であることを明示することとする。

A-1区は、延宝五年(1677年)伊丹郷町地味委細絵図(第1図)に「小屋口村」(昆陽口村)とあり、天保十五年(1844年)伊丹郷町分間絵図(第1図)では、さらに明確に昆陽口村にあたるのがわかる。

調査区の範囲を元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町絵図(第61図)に記入された間口間数を手冊かりに推定すると、調査区南辺は同図下(南)の「昆陽道」と同図左(西)の南北道との交点を基点として、左下(南西)隅の屋敷主治兵衛。借家人日用(日やとい)の久右衛門宅から、「昆陽道」沿いの右(東)側本百姓の庄右衛門の西側一部までが相当することがわかる。

### 2. 基本層序



第61図 元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町絵図(点線A-1区域)

全体的に遺構状況が良く、大きく見て二面が残っていた。現地表面から約20cmの表土（第62図第22層）を取り除くと、1次面を検出した。さらに約30cm下より2次面遺構面を検出した。

### 3. 2次面の遺構と遺物

#### 建物遺構

建物遺構は、大半が礎石建物であり、最近まで存続した明治以降の建物の礎石を抜き取られているためか、遺存状況が必ずしも良くない。そうした中でかなり復元的に建物を推定していかざるを得ない。いずれの地区においても、面ごとの調査を実施しているが、建物の礎石の一部には、上面か下面か明瞭に判断がつかないものがいくつかみられる。そうした点を念頭に置きながら、以下に解説を加える。

礎石の並びのみでは、妻入りか平入りか判然としないものも多い。但し、推定の間口方向のみは可能な限り記した。なお、間数は、有岡城・伊丹郷町遺跡D-2区で検出した礎石上の墨をもとに、京間1間=1.97mを採用して換算している。

#### SB14

第63図SB14は、南北約7m（3.5間）、東西3.9m（2間）を測る。比較的礎石の残存が良く、南側の東西通りを西より見ると、4m、3m、2m、1.95mを測る。東側の南北通りを北から見ると、3.95m、3mを測る。北側の通りと中央の通りの西側の礎石は掘形の中に3個の石が配石されており、酒蔵の礎石と想定される。他の建物と様相が異なる。中央通りの東から二つ目と三つ目及び四つ目は、1次面で検出されており2次面から1次面へ連続していた可能性が高い。間口は、西側と想定される。

#### SB15

第64図SB15は、礎石の残存状況が悪く、推測の域を出せないが、東西4.9m以上（2.5間以上）、南北11.8m以上（6間以上）を測ると推定される。掘形に3つの石を配石する技術を使用しており、酒蔵の可能性がある。間口は南側と想定される。

#### SB16

第65図SB16は、残存状況が悪く詳細は不明である。南北通りが、13.9m以上（2.5間以上）、南北11.8m以上（7間以上）を測る。東西いずれに建物が建つか不明である。南より2つの礎石は1次面で検出されており、1次面のものである可能性もある。間口は、南側と想定される。

#### SF01

SF01は、調査区西端を南北に延びる堀である（第66図）。幅（検出長）13m、深さ0.45mを測る。この堀は、東側の肩は検出できたが、南北・西側は調査区外に延びると考えられ、現行道路に沿っている。有岡城時代の遺構と考えられ、廃城時に埋められたと考えられる。また、出土遺物や土層断面から、17世紀前半に掘りかえされたと思われる。18世紀後半に建物がたてられる際に、西側へ移動・縮小したと考えられる。

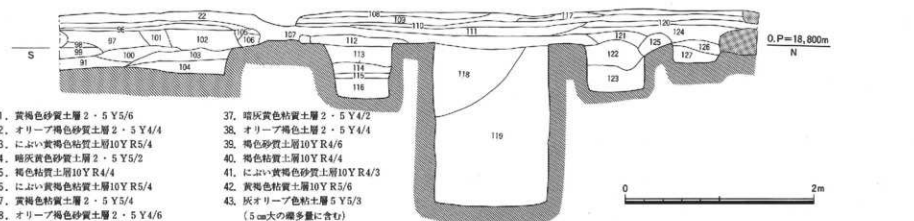
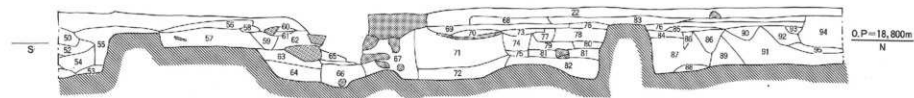
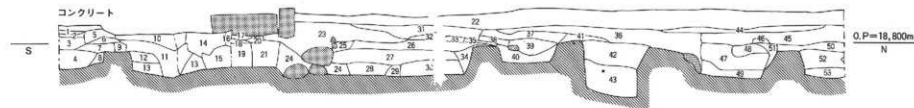
Ⅲ-1期-Ⅲ-2期に属する遺構である。

第67図は、丹波焼摺鉢である。口径(推)36.5cmを測る。注ぎ口を有する。外面体部には、ユビオサエ痕がみられる。摺目は、4本1単位のクシ目である。長谷川 真氏の編年（長谷川1988年）ⅡA2型式と考えられる。

出土遺物から概観すると17世紀前半-18世紀後半である。

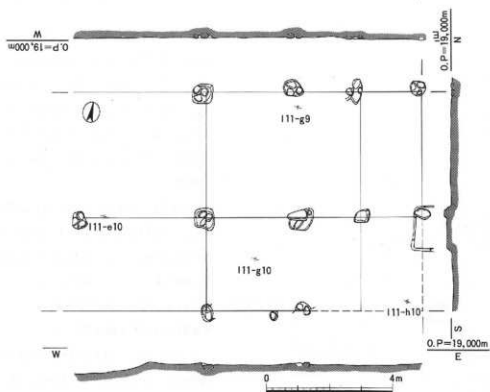
#### SX15・SX16

SX15・SX16は、調査区西壁中央付近に位置する（第68図）。SX15・16は、半地下式の竈である。SX

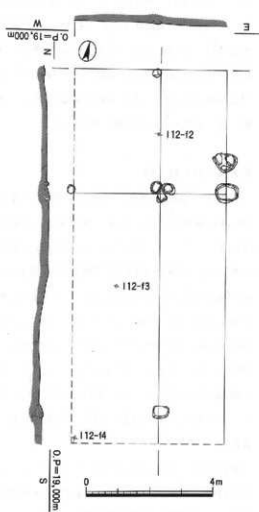


- |  |                                       |                                   |                          |
|--|---------------------------------------|-----------------------------------|--------------------------|
| 1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6                    | 37. 増成黄色粘質土層 2・5 Y4/2                 | 73. におい黄色粘質土層10Y R5/4             | 101. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/4   |
| 2. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/4                 | 38. オリープ褐色土層 2・5 Y4/4                 | 74. におい黄色粘土層 2・5 Y6/4             | 102. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 |
| 3. におい黄褐色粘土層10Y R5/4                   | 39. 褐色砂質土層10Y R4/6                    | 75. 褐色粘質土層10Y R5/4                | 103. におい黄褐色砂質土層10Y R5/3  |
| 4. 増成黄色砂質土層 2・5 Y5/2                   | 40. 褐色粘質土層10Y R4/4                    | 76. 黄褐色粘質土層10Y R5/8               | 104. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4  |
| 5. 褐色粘質土層10Y R4/4                      | 41. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3                | 77. におい黄褐色粘土層10Y R5/4             | 105. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4    |
| 6. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4                  | 42. 黄褐色粘質土層10Y R5/6                   | 78. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4(遺物含む)      | 106. 黒褐色粘質土層10Y R3/1     |
| 7. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4                    | 43. 灰オリープ色粘土層 5 Y5/3<br>(5cm大の礫多量に含む) | 79. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3            | 107. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 |
| 8. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6                 | 44. 黒褐色砂質土層10Y R3/2                   | 80. 黄褐色土層10Y R5/6                 | 108. におい褐色粘質土層10Y R5/4   |
| 9. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6                    | 45. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8                  | 81. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4            | 109. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8  |
| 10. 褐色粘質土層10Y R4/4                     | 46. 黒色砂質土層10Y R2/1                    | 82. におい黄褐色粘質土層10Y R3/3            | 110. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/3  |
| 11. 褐色砂質土層 7・5 Y R4/4                  | 47. 黄褐色粘質土層10Y R5/8                   | 83. 明黄褐色粘質土層10Y R7/6              | 111. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6   |
| 12. 褐色粘質土層10Y R3/4                     | 48. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3                | 84. 褐色粘質土層10Y R3/4                | 112. 黄褐色砂質土層10Y R2/6     |
| 13. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4                | 49. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y5/4               | 85. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4           | 113. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 |
| 14. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4                 | 50. 増成黄色砂質土層 2・5 Y4/2                 | 86. 黒色砂質土層 7・5 Y R2/1             | 114. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8    |
| 15. におい黄褐色砂質土層10Y R5/3                 | 51. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/4               | 87. 褐色粘質土層10Y R4/6(1~3cmの礫を含む)    | 115. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6   |
| 16. 黒褐色砂質土層10Y R2/2                    | 52. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6               | 88. 褐色粘質土層10Y R5/4                | 116. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4  |
| 17. 黄褐色砂質土層10Y R5/8                    | 53. 増成黄色粘質土層 7・5 Y R3/4               | 89. 褐色砂質土層10Y R4/4                | 117. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 |
| 18. 増成黄色粘質土層10Y R3/3                   | 54. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4(遺物含む)         | 90. 増成黄色粘質土層10Y R3/4              | 118. 増成黄色粘質土層 2・5 Y4/6   |
| 19. 褐色粘質土層10Y R4/4                     | 55. オリープ褐色土層 2・5 Y4/4                 | 91. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4            | 119. 暗オリープ褐色 2・5 Y3/3    |
| 20. オリープ褐色土層 2・5 Y4/4                  | 56. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4               | 92. 増成黄色粘質土層 2・5 Y4/2             | (炭化物、遺物、1~10cmの礫多量に含む)   |
| 21. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6                | 57. 黄褐色粘質土層10Y R5/8                   | 93. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8             | 120. 暗オリープ色砂質土層 5 Y4/3   |
| 22. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/3<br>(遺物、礫多量に含む) | 58. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4               | 94. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/4             | 121. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 |
| 23. 褐色土層10Y R4/4                       | 59. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3                  | 95. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3           | 122. 明黄褐色粘質土層10Y R3/8    |
| 24. におい黄褐色土層10Y R5/4                   | 60. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8                  | 96. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4(炭化物多量に含む) | 123. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6    |
| 25. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6                | 61. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6               | 97. 灰オリープ色粘質土層 5 Y4/2             | 124. 暗オリープ色砂質土層 5 Y4/2   |
| 26. 黄褐色粘質土層10Y R5/6                    | 62. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2                  | 98. におい黄褐色粘質土層10Y R6/4            | 125. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 |
| 27. 褐色粘質土層10Y R4/4                     | 63. 黒褐色砂質土層10Y R3/1(5cm大の礫多量に含む)      | 99. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6(5cmの礫多量に含む)  | 126. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4    |
| 28. 黄褐色砂質土層10Y R5/6                    | 64. 増成黄色粘質土層 2・5 Y4/2                 | 100. 褐色粘質土層10Y R4/6               | 127. 暗オリープ色粘質土層 7・5 Y4/3 |
| 29. 褐色粘質土層10Y R4/4(1cm大の礫若干含む)         | 65. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3                |                                   |                          |
| 30. 増成黄色粘質土層10Y R3/4                   | 66. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3                  |                                   |                          |
| 31. 暗オリープ褐色粘質土層 2・5 Y3/3               | 67. 暗オリープ褐色砂質土層 2・5 Y3/3              |                                   |                          |
| 32. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6                | 68. におい黄色粘質土層 2・5 Y6/4                |                                   |                          |
| 33. 暗オリープ褐色粘質土層 2・5 Y3/3               | 69. 黄褐色土層10Y R5/6                     |                                   |                          |
| 34. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3                 | 70. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6               |                                   |                          |
| 35. 黒褐色土層 2・5 Y3/1                     | 71. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3(炭化物、遺物含む)      |                                   |                          |
| 36. 暗オリープ褐色砂質土層 2・5 Y3/3               | 72. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4               |                                   |                          |

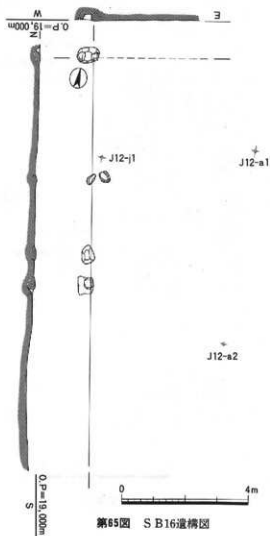
第62図 西陸土層図



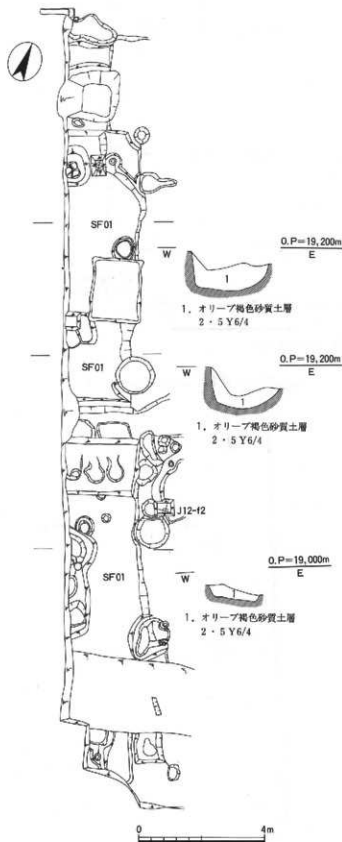
第63図 SB14遺構図



第64図 SB15遺構図



第65図 SB16遺構図



第69図 SF01遺構図

15は、長さ0.9m、幅0.5cmを測る。その西側SX16は、長さ1m、幅約0.5cmを測る。SX15・16は、セットで使用していたと考えられる。さらに、自然石や瓦片を壁の補強材として使用している。また、SB01の西北部にあたり、関連するものと考えられる。Ⅲ-2期に属する。

#### SX17

SX17は、SX15・16の西側に位置する(第68図)。平面形は円形を呈す。直径0.31cm、深さ0.05mを測る。この遺構は、SX15・16の2基の電の隣に、小さい電が設けられていたと考えられる。Ⅲ-2期に属する。

#### SX05・06・07・08・09

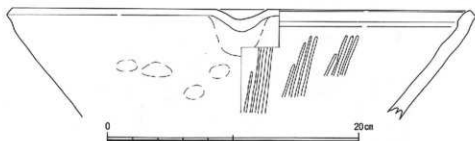
SX05~09は、調査区中程の北側に位置する(第69図)。SX05は、直径0.9m、深さ0.15mを測る。SX06は、直径0.15m、深さ0.15mを測る。SX07は、直径0.1m、深さ0.35mを測る。SX08は、直径0.115m、深さ0.4mを測る。SX09は、直径0.12m、深さ0.25mを測る。それぞれ検出時は、別々の遺構として検出したが、同じ遺構である。5連の半地下式電である。北側には、東西3.5mの灰原を検出した。

#### SX10・11・12・13

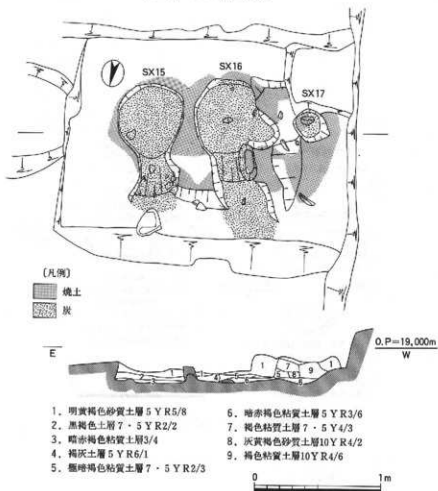
SX10~13は、調査区の中央に位置する(第70図)。電の遺構と考えられる。SX10は、平面形は円形を呈し、直径0.65m、深さ0.4mを測る。SX11は、平面形は不整形円形を呈し、全長0.5m、幅0.35m、深さ0.2mを測る。SX12は、検出長0.55m、幅0.45m、深さ0.3mを測る。SX13は、平面形は円形を呈し、直径0.5mを測る。切り合いから考えて、2時期あったと思われる。1時期はSX11・13、2時期はSX10・12である。それぞれ、Ⅲ-3期に属する遺構である。

#### SX13

第71図1・2は、肥前磁器である。1は、筒型染付碗である。口径6.5cm、器高5.1cmを測る。見込みに、コンニャク印判の五弁花がみられる。



第67図 SF01出土遺物



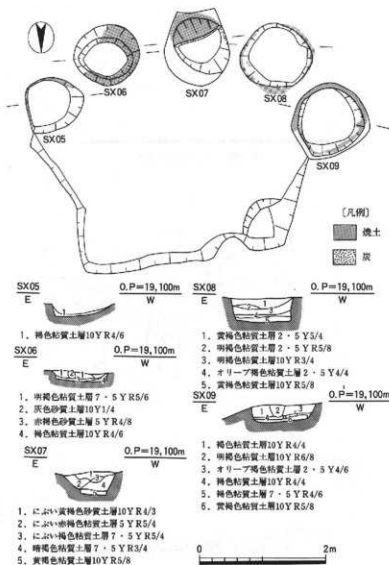
第68図 SX15・16・17遺構図

外面には花文模様を描く。2は、赤絵香炉である。足が一足残る。外面体部に鳥羽状の模様を描く。底面底部は無釉である。1・2ともに、大橋康二氏の編年（大橋1989）V期に属する。

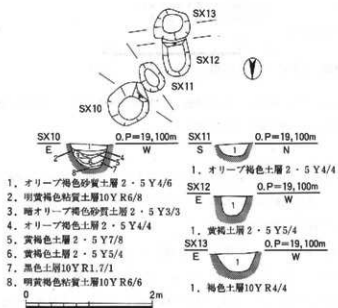
#### SX14

SX14は、調査区の中央やや西側に位置する（第72図）。平面形は長方形を呈する。2基の燃焼室を設ける半地下式電である。燃焼室を構築するにあたり、黄褐色粘質土を壁材として使用している。この遺構はⅢ-3期に属し、時期から考えると、SB02と関係が深いと思われる。

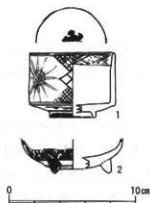
第73図-1・2は、京焼系陶器である。1は、碗である。口径8.5cm、器高5cm、高台径3.5cmを測る。外面底部は露胎。その他は、灰釉が掛けられている。2は、急須落し蓋である。口径6cm、器高2cm、底径3cmを測る。下面は露胎。上面には灰釉が掛けられている。3・4は、型押し成形のミニチュア土製品である。3は、「麩」の字を呈する土面子である。4は、饅頭を形取った土製品である。



第69図 SX05・06・07・08・09遺構図

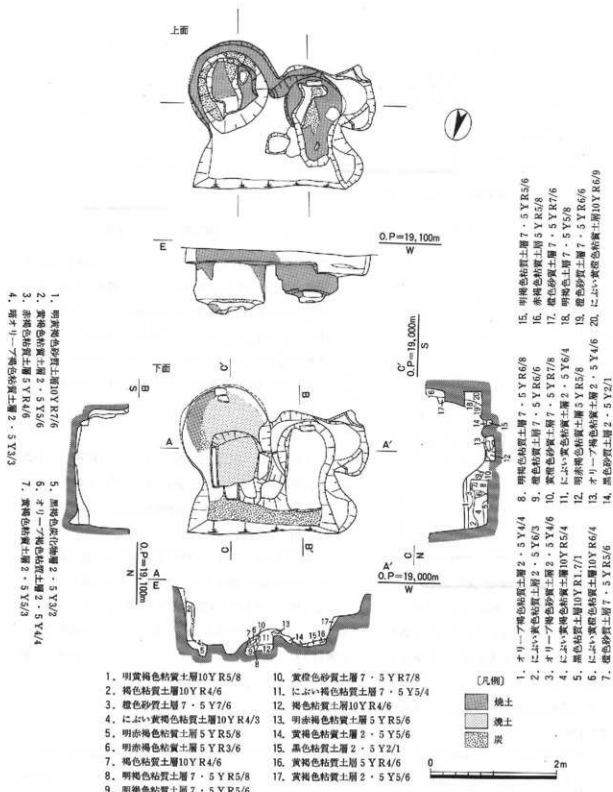


第70図 SX10・11・12・13遺構図



第71図 SX13出土遺物





第72図 SX14遺構図

出土遺物から概観すると19世紀前半～中頃と考えられる。

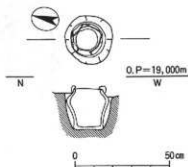
S K1264

S K1264は、調査区中程の西側に位置する(第74図)。平面形は円形を呈し、直径0.26m、深さ0.19mを測る。遺構内から火消し壺が検出したことから、胎衣壺遺構と考えられる。この遺構は、III-3期の遺構である。

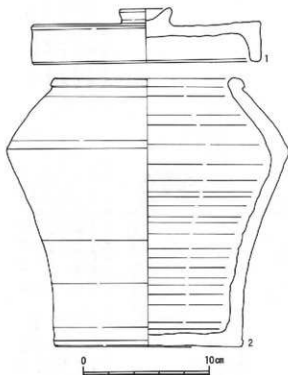
第75図-1・2は、土師質土器火消し壺と蓋である。1は、口径17cm器高4.5cm、つまみ径4cmを測る。天



第73図 SX14出土遺物



第74図 SK1264遺構図



第75図 SK1264出土遺物

井部外面は、周縁及びつまみ部がヨコナデ調整、他は未調整で板目痕が残る。内面はヨコナデ調整である。2は、口径14cm、器高20cmを測る。粘土紐マキアケ外型成形である。その後、外面はヨコナデ調整。内面にもヨコナデ調整を施すが、底部まで及んでいない。胞衣壺と考えられる。川口宏海氏の編年（川口1991）II-2型式と考えられる。よって、19世紀前半と考えられる。

#### SK1265

SK1265は、調査区西側に位置する（第76図）。平面形は円形を呈し、直径0.35m、深さ0.17mを測る。

SK1264と同様で、胞衣壺遺構と考えられる。この遺構は、III-3期に属する。

第77図-1・2は、土師質土器火消壺と蓋である。1は、口径15cm、器高4cm、つまみ径4cmを測る。粘土円盤を作り、それに口縁部となる粘土紐をハリツケしている。

その後、内外面ともにヨコナデ調整している。2は、底径14cmを測る。粘土紐マキアケ外型成形である。外面は、ヨコナデ調整を施し、内面は、ヨコナデ調整されているが底部まで及んでいない。川口宏海氏の編年II-4型式に属する。

出土遺物から概観すると18世紀後半と考えられる。

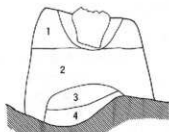
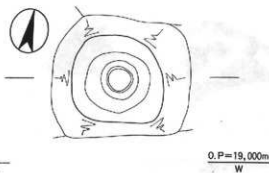
#### SK1269

SK1269は、西壁沿い中央に位置する（第78図）。平面形は円形を呈し、直径0.25m、深さ0.2mを測る。この遺構もSK1264・1265と同様に、胞衣壺遺構と考えられる。更に、SB06の間口付近に当たり、SB06は、北側が通り底ではなかつたと思われる。III-3期である。

第79図-1・2は、土師質土器火消壺と蓋である。1は、口径14cm、器高3.5cm、つまみ径3.5cmを測る。2は、口径11.5cm、器高16cmを測る。SK1265と同じタイプで、川口宏海氏の編年II-2型式である。19世紀前半である。

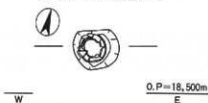
#### SE13

SE13は、調査区中程の東側に位置する（第80図）。平面形は円形を呈し、直径0.9m、深さ4.70m以上を測る。茶搦りの井戸である。この遺構は、III-1期に属する。



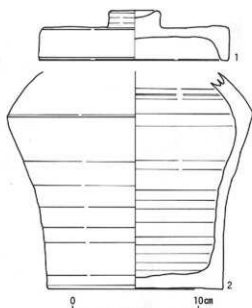
1. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6  
(遺物、0.1～3cmの層を多く含む)
2. 暗褐色粘質土層 10 Y R3/3  
(遺物、0.1～4cmの層を多く含む)
3. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
4. 灰黄褐色砂質土層 10 Y R5/2  
(0.5～1cmの層を多く含む)

第76図 SK1265遺構図

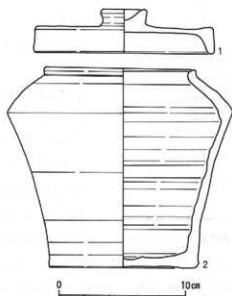


1. 暗赤褐色灰層 5 Y R3/2
2. 上記黄褐色粘質土層 10 Y R5/3
3. 褐色粘質土層 10 Y R4/6
4. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/8
5. 明黄褐色粘質土層 7・5 Y R5/8

第78図 SK1269遺構図

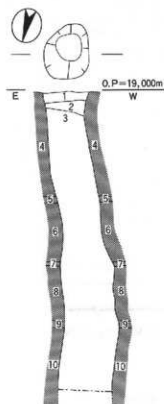


第77図 SK1265出土遺物



第79図 SK1269出土遺物

第81図一は、中国明代末期の漳州窯系青花皿である。高台径12.5cmを測る。高台内は露胎で、一部透明釉が掛かる。壺付部に、ハナレ砂痕がみられる。2・3は、肥前磁器である。2は、染付皿である。口径(推)16.6cmを測る。内面体部に草花文を描く。3は、青磁皿である。高台径5cmを測る。高台及び高台内は、無釉である。高台内に墨書がみられる。また、見込みに、蛇ノ目軸ハギを呈す。大橋康二氏の編年4期に属する。4は、唐津焼系碗である。口径5.5cm測る。内面には鉄釉を掛け、その上にわら灰釉を施している。外面体部には、わら灰釉を掛けている。5は、唐津焼系皿である。高台径4.5cmを測る。内外面ともに灰釉が掛けられている。見込みに、砂目がみられ、高台壺付にも砂目痕を残す。6は、丹波焼鉢である。口径14cm、器高5.5cmを測る。伊丹郷町では、17世紀後半の遺構からよく出土する。鉢として使用されていること



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
2. におい黄褐色砂質土層 10 Y R7/3  
(0.5-1cmの層多量を含む)
3. 褐色砂質土層 10 Y R4/4
4. 明黄褐色砂質土層 10 Y R6/8
5. 灰色砂質土・5 Y7/8
6. 黄褐色砂質層 2・5 Y5/6  
(3cm大の礫を多く含む)
7. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8  
(3cm大の礫を多く含む)
8. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8  
(8cm大の礫を多く含む)
9. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4  
(8cm大の礫を多く含む)
10. 黄褐色砂層 2・5 Y5/6

第80図 SE13遺構図

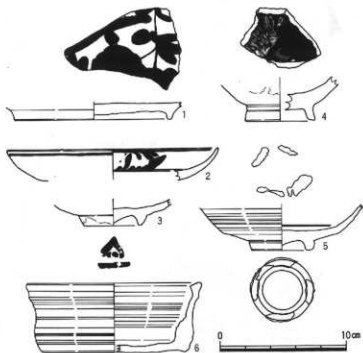
が、多い。

出土遺物から概観すると17世紀前半～17世紀中頃と考えられる。

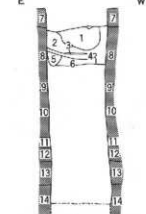
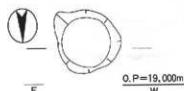
**SE20**

SE20は、調査区西壁沿い中央に位置する(第82図)。平面形は円形を呈し、直径1m、深さ3m以上を測る。遺物を多量に出土した。素掘りの井戸である。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第83図-1は、肥前磁器染付碗である。高台径2.5cmを測る。2は、唐津焼刷毛目文筒型碗である。口径10.8cm、器高7.5cm、高台径5cmを測る。外面体部には、刷毛目文様以外に、コンニャク印判により花文が描かれている。3は、京焼風陶器碗である。高台径4.5cmを測る。見込みに、鉄釉で山水文が描かれている。また、目痕もみられる。4は、唐津焼系陶器碗である。口径12.5cm、器高5cm、高台径5.5cmを測る。灰釉を掛け、見込みには蛇目釉ハギを施す。底部から高台内まで露出である。5・6は、土師質土器皿である。5は、口径7.5cm、器高1.7cmを測る。内面は、底部から口縁部方向にナデ調整を施し、外面は指頭圧調整を施している。口縁部には灯芯痕が残る。胎土は、におい褐色7.5 Y R6/3を呈する。6は、口径14cm、器高2.8cmを測る。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内外面は指頭圧調整を施している。胎土は、白色気味で浅黄褐色7.5 Y R8/3を呈し、白色砂粒を多く含む。7は、伊賀・信楽焼土瓶である。口径12.5cm、器高14cmを測る。底部は無釉。また、トビカンナによって、模様が施されており、外面底部に煤が付着している。8、丹波焼鉄釉徳利である。口径3.5cm、器高25cmを測る。外面体部に、白色釉で『吉川』と書かれている。外面底部は、無釉でハナレ砂痕がみられる。9は、堺焼鉛鉢である。口径21cm、器高7.5cmを測る。小型のタイプで、見込みにおける描目は、8単位の描目を重ねている。内面の描目は密に施され、また、全体に赤色の付着物がみられるが、成分はわからない。外面の調整は、回転ヘラズリが底部際から口縁部外縁帯直下まで施されている。白神典之氏の分類(白神1988)Ⅲ類に属すると考えられる。10は、柿



第81図 SE13出土遺物



1. ぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4 (遺物を含む)
2. 褐色粘質土層10Y R4/4
3. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
4. 明褐色粘質土層7・5 Y R5/8
5. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
6. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3
7. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
8. 明黄褐色砂礫層 (5-10cmの角礫多く含む)
9. オリーブ褐色砂礫層2・5 Y4/4 (2-4cmの円礫多く含む)
10. 明黄褐色砂礫層2・5 Y6/6 (5-10cmの角礫多く含む)
11. 黄色礫層2・5 Y8/6 (5-10cmの円礫多く含む)
12. 淡黄色砂礫層2・5 Y8/4 (10cm大の円礫多く含む)
13. 淡黄色礫層2・5 Y7/4 (3-5cmの円礫多く含む)
14. 黄色砂礫層2・5 Y8/8 (10cm大の角礫多く含む)

第82図 S E 20構造図

ぶい黄褐色を呈し、口縁部と底部その境が内湾するタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整である。外面口縁部には耳が施され、外面全体に煤が付着している。難波洋三氏の分類(難波1992) E類に属する。13は、口径28.5cmを測る。胎土は10Y R5/6黄褐色を呈し、これも12と同じタイプである。外面には煤が付着している。

第87図-1は、花崗岩製組合せ五輪塔空風輪部である。高さ21.6cm、最大径15cmを測る。2は、瓦質土器火鉢である。口径15cm、器高11.5cm、高台径12.5cmを測る。外面体部に、ヘラ描きの蓮花文が刻まれている。体部と底部は分割成形し、ハリツケ後、ヨコナデ調整している。

第88図1~3は、屋瓦である。1は、三ツ巴文軒丸瓦である。2は、均整唐草文軒平瓦である。3は、丸瓦である。幅12.8cm、玉縁部長4cmを測る。凹面には布目痕が残る。

第89図1~5は、背文無の「寛永通寶」ある。直径は、1は2.2cm、2・5は2.1cm、3・4は2.3cmを測る。厚さはそれぞれ0.1cmである。

輪陶器花瓶である。底径7.5cmを測る。底部外面に糸切り痕が残り、内外面共全面に釉が掛けられている。

第84図は、背文無の「寛永通寶」である。直径2.2cm、厚さ0.1cmを測る。出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀後半と考えられる。

#### S E 22

S E 22は、調査区中央に位置する(第85図)。平面形は円形を呈す。直径0.85m、深さ4.5m以上を測る。

素掘りの井戸で、Ⅲ-2期に属する遺構である。

第86図-1・2は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径9.8cm、器高5.3cm、高台径3.5cmを測る。外面体部の草花文は、コンニャク印判による。2は、陶器染付鉢である。口径21.5cm、器高7cm、高台径7.5cmを測る。見込みに蛇ノ目輪ハギを施す。釉ハギ部にハナレ砂がみられる。また、高台畳付に砂が付着していることから、焼成時に、直に積重ていたことがわかる。内面体部には草花文が描かれている。3は、土師質土器皿である。口径8cm、器高1.5cmを測る。内面はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。

4・5は、唐津焼鉢である。4は、三島手鉢である。口径(推)28.5cmを測る。5は、刷毛目鉢である。口径(推)21cmを測る。6は、瀬戸・美濃焼角皿である。口径12.5cm、器高2.5cm、高台径9cmを測る。高台は無釉である。灰釉を掛け、口縁部表面四隅に、緑色釉を施している。7は、唐津焼糸青緑釉查である。内外面とも青緑釉が掛けられている。8~10は、丹波焼である。8は、鉄釉壺である。口径18cmを測る。外面及び口縁部には、鉄釉が掛けられている。内面体部は無釉である。9は、播鉢である。口径32cm、器高11.5cmを測る。播目は8本のクシ目描きである。大平 茂氏の編年(大平1992年) VI型式である。10は、播鉢である。口径(推)40cmを測る。播目は12本のクシ目描きである。外面は2条のクシによる沈線が施され、17世紀前半代の備前焼播鉢に似ている。11は、鉢である。口径10.2cm、器高6cmを測る。12・13は、土師質土器焙烙である。12は、口径33cmを測る。胎土は10Y R7/4に



第83図 SE20出土遺物(1)

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀後半と考えられる。

#### SE16

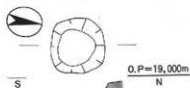
SE16は、北壁沿い中央に位置する(第90図)。平面形は半円形(検出形)を呈し、直径約0.95m、深さ5.5mを測る。素掘りの井戸で、Ⅲ-2期に属する遺構である。



第84図 SE20  
出土遺物(2)(S=1/2)

第91図1・2は、肥前磁器である。1は、染付大鉢である。口径27cm、器高11.7cm、高台径10cmを測る。波佐見系である。外面に鼓文と桜文、見込みは、桜文が描かれている。高台内には、渦橋文がみられる。2は、二重網目染付碗である。口径10cm、器高5cm、高台径4cmを測る。見込みに菊花文、高台内には鉾歌がみられる。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。3は、肥前系二彩釉陶器皿である。高台径4.3cmを測る。高台は無釉である。体部内外面に緑色釉を掛け、外面には黄褐色釉が施されている。4は、瀬戸・美濃焼獅子人形である。灰釉を全体に掛け、所々に鉄釉を施している。5は、粘板岩碗である。高鳴碗であると考えられる。

第92図-1は、鉄釉土瓶である。口径11.5cm、器高13.7cmを測る。産地は不明である。底部に煤が付着している。2・3は、土師質土器焙烙である。2は、口径32cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。口縁部内外面はヨコナテ調整、内面底部はナデ調整を施す。また、外面口縁部下部から底部にハナレ砂がみられる。内外面底部に煤が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。3は、口径35.5cmを測る。口縁



第85図 S E22遺構図

1. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
2. 褐色粘質土層10Y R4/4  
(3cm次の層を多く含む)
3. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
4. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
5. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
6. 明黄褐色砂礫層2・5 Y7/6  
(5-10cmの層を多く含む)
7. におい褐色粘層10Y R5/4
8. におい黄褐色砂礫層10Y R7/4  
(5-10cmの層を多く含む)
9. 明黄褐色粘層10Y R6/6
10. におい黄褐色砂礫層10Y R5/4  
(5-10cmの層を多く含む)
11. 褐色粘層10Y R4/4  
(2-3cmの層を多く含む)
12. 明黄褐色土層10Y R6/8

部と底部が突出するタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、外面底部は未調整である。難波洋三氏の分類G類に属する。外面底部に煤が付着している。4は、標焼摺鉢である。口径36cm、器高12.5cmを測る。やや粗い胎土を用い、赤褐色2.5Y R4/8を呈す。体部内面の摺目は密で、外面の調整は、底部際から口縁部外縁帯直下まで、回転ヘラケズが施されている。白神典之氏の分類II類に属する。

第93図は、丹波焼甕である。口径48cmを測る。口縁部上面には、4条の沈線を、内外面に塗土を施している。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃～19世紀前半と考えられる。

#### S E19

S E19は、調査区西壁側中央に位置する(第94図)。平面形は円形を呈し、直径1.2m、深さ4.2m以上を測る。素掘りの井戸で、III-2期に属する遺構である。また、東北側にS E20があり、2ヵ所共にほぼ同時期と考えられ、間口に近いので商業用の井戸ではないかと考えられる。

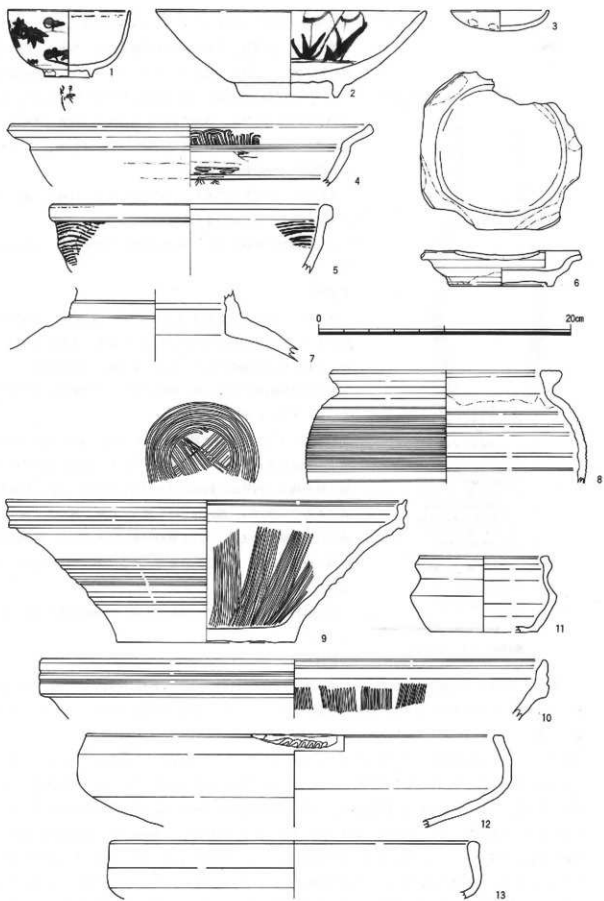
第95図-1は、土師質土器皿である。口径6.6cm、器高9cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ調整がみられ、底部には右回転糸切り痕が残る。内外面口縁部に煤が付着している。2は、丹波焼鉢である。口径21cm、器高10.5cmを測る。内面口縁部には塗土が施され、体部から底部にかけて緑釉が掛けられている。外面にも緑釉が掛けられていたと思われるが、火災があったのか溶けている。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃～18世紀後半と考えられる。

#### S E21

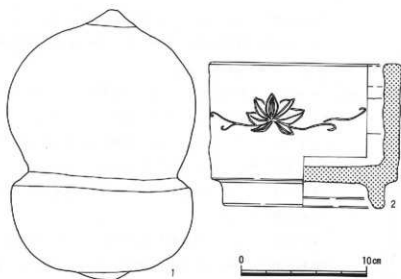
S E21は、調査区西壁側中央に位置する(第96図)。平面形は円形を呈し、直径(検出長)1.45m、深さ4.6m以上を測る。素掘りの井戸である。多量の遺物が出土した。また、S B01の北側に位置し、S X15-17の竈と同様に、S B01と関係する遺構と考えられる。III-3期に属する。

第97図-1は、中国製青花芙蓉手皿である。口径26.7cm、器高4cm、高台径9cmを測る。内面には、鹿文と草花文が描かれている。高台内には朱墨書がみられる。高台畳付は露胎である。2・3は、肥前磁器である。2は、染付蓋である。口径9.8cm、器高2.8cm、つまみ径4cmを測る。内面に成り物(稻)が描かれている。外面には「戸々唱豊年」文がみられる。3は、染付猪口である。口径8.5cm、器高6.5cm、底径6cmを測る。外面に草花文が描かれている。見込みの五弁花文は、コンニャク印判による。4は、伊賀・信楽焼灯明受皿である。口径11cm、器高2.5cmを測る。内面に灰釉が施されている。5・7は、土人形である。5は、女子立像。型合わせ成形で、空気孔がある。7は、天神様像。型合わせ成形である。8 Y R7/4II吹色を呈す。6は、型合わせによる土炊楽である。直径4.1cmを測る。上面に花文を施す。8は、土師質土器焙烙である。

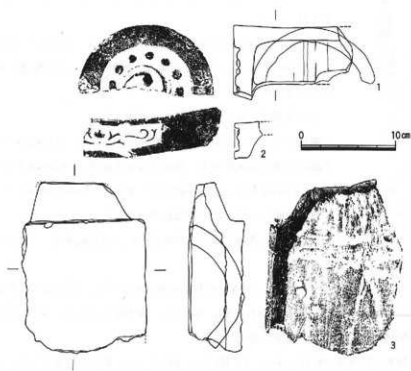


第86圖 SE22出土遺物(1)

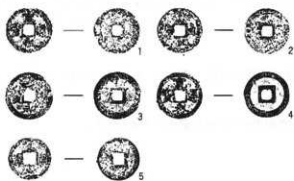




第87圖 S E22出土遺物 (2)



第88圖 S E22出土遺物 (3)



第89圖 S E22出土遺物 (4) (S=1/2)



第99図 SE16遺構図

1. 黄褐色織層10Y R/6  
(2cm次の縞を多く含む)
2. 明黄褐色砂質土層10Y R7/6
3. 明褐色織層10Y R3/3  
(1cm次の縞を多く含む)
4. 濃い黄褐色織層10Y R2/2  
(2cm次の縞を多く含む)
5. 浅黄褐色砂質土層10Y R8/4
6. 黒褐色織層2・5 Y3/1  
(5cm次の縞を多く含む)
7. 浅黄褐色砂質土層7・5 Y R8/4

口径33cm、器高6cmを測る。7.5Y R8/4浅黄褐色を呈す。口縁部内外面は、ヨコナデ調整、外面底部は未調整である。外面底部には煤が付着している。難波洋三氏の分類G類に属する。

第98図は、土師質土器風炉である。粘土紐による型造り分割成形である。胴部・脚部・底部は、それぞれ別に成形しハリツケる。その後、外面を回転台による、ナデ調整を施している。脚部外面に巴文の透かしがみられる。外面には赤彩を施す。外面口縁部に煤が付着している。

第99図は、三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当部の直径14cm、左巻三ッ巴文で、連珠数12個を数える。

第100図-1・2は、丹波焼鉄軸甕である。1は、口径31cmを測る。外面は鉄軸を掛け、内面は薄く鉄軸が施されている。2は、1と同じタイプである。内面底部に、白色付着物がみられる。

出土遺物から概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

#### S 127

S 127は、調査区北壁付近東側に位置する(第101図)。掘形は楕円形を呈し、長径0.75m、深さ0.5mを測る。掘形より、丹波焼甕が出土し作りかえられた可能性がある。

この遺構は、Ⅲ-2期に属する遺構である。

第102図-1・2は、丹波焼甕である。1は、口径40.5cmを測る。口縁部上面に4線の沈線を施す。外面は鉄軸を掛け、内面は塗土を塗っている。2は、口径46cmを測る。内外面に塗土を塗り、外面口縁部から自然釉を掛けている。内面には白色の付着物がみられる。

出土遺物を概観すると、17世紀中頃～18世紀前半と考えられる。

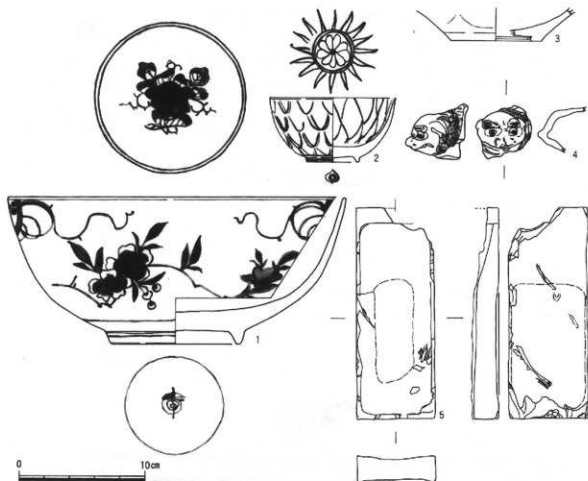
#### SK 883

SK 883は、調査区中程の南側に位置する(第103図)。平面形は不整楕円形を呈し、全長1.3m、幅1.1m、深さ0.6mを測る。この遺構は、Ⅲ-2・3期に属する遺構である。

第104図-1は、伊賀・信楽焼灯明皿である。口径6.7cm、器高1.5cmを測る。内面は灰釉を掛け、外面は無釉である。目跡が3ヶ所残る。口縁部外面に煤が付着している。2・3は、肥前磁器である。2は、染付角皿である。口径8.5cm、器高2.5cmを測る。高台畳付は露胎、高台内には「□□書屋」の銘がみられる。3は、広東型染付碗である。口径14cm、器高6cm、高台径8cmを測る。高台内は無釉である。大橋康二氏の編年V期に属する。

第105図-1～4は、背文無の「寛永通寶」である。1・4は直径2.2cm、2・3は直径2.4cm、厚さはそれぞれ0.1cmを測る。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃～19世紀前半と考えられる。



第91図 SE16出土遺物(1)

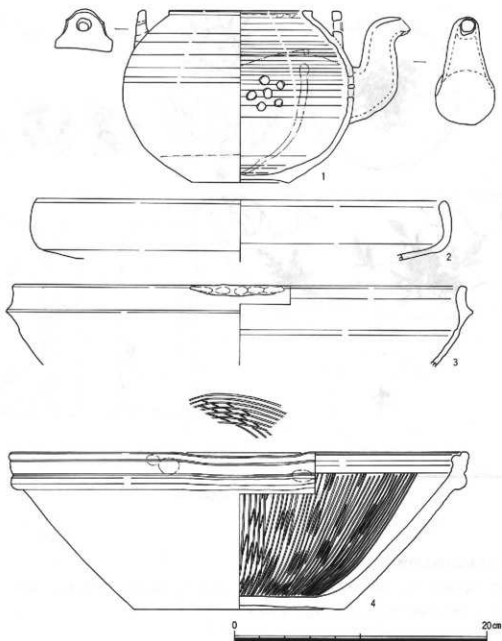
**SK1261 (SK883の上の桶)**

SK1261 (第106図) は、平面形は不整楕円形を呈し、全長1.3m、幅1.1m、深さ0.45mを測る。SK883の上にあたり、桶が2回作りかえられていることがわかった。

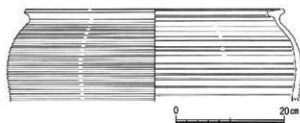
**SK871**

SK871は、SK883の東側に位置する (第107図)。平面形は円形を呈し、直径0.53m、深さ0.34mを測る。埋桶遺構で、底部しか検出できなかった。Ⅲ-2・3期に属する遺構である。

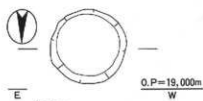
第108図-1・3は、肥前磁器である。1は、染付碗である。高台径4.9cmを測る。見込みに幾文が描かれている。3は、染付鉢である。口径(推)18cmを測る。焼継ぎ痕がみられる。2は、銅製煙管の吸口である。吸口長7.2cm、吸口部に直径1.1cmの穿孔を有する。小泉 弘氏の編年 (小泉1983) V期に属する。よって18世紀中頃～19世紀前半と考えられる。



第92图 SE16出土遗物(2)



第93图 SE16出土遗物(3)

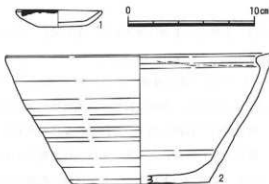


1. 灰黄褐色粘質土層10Y R4/2
2. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
3. 明黄褐色砂質土・5 Y7/8  
(5~10cmの層多く含む)
4. オリーブ黄緑層2・5 Y4/4  
(2~4cmの層多く含む)
5. 明黄褐色砂層2・5 Y6/6  
(5~10cmの層多く含む)
6. 黄緑層2・5 Y8/6  
(5~10cmの層多く含む)
7. 淡黄褐色砂層2・5 Y8/4  
(10cm大の層多く含む)
8. 淡黄褐色層2・5 Y7/4  
(3~5cmの層多く含む)
9. 黄褐色砂層2・5 Y8/6  
(10cm大の層多く含む)

第94図 SE19遺構図

S K1056は、調査区北壁側中央に位置する(第113図)。平面形は不整形で、検出長0.75m、深さ0.07mを測る。この遺構は、Ⅲ-1期に属する遺構である。

第114図-1は、染付鉢である。中国製芙蓉手皿か?口径(推)22cmを測る。火災に遭ったのか、釉が溶けて白ぼっくなっている。2は、土師質土器焙烙である。口径(推)28cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。調整は未調整である。難波洋三氏の分類D類に属する。また、外面に煤が付着している。17世紀後半の時期と考えられる。



第95図 SE19出土遺物

#### S K1027

S K1027は、調査区北壁沿い中央に位置する(第109図)。掘形は楕円形を呈し、長径1.6m、深さ1.05mを測る。埋桶遺構で、桶の側板だけで底部は検出できなかった。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第110図は、肥前磁器染付猪口である。口径7cm、器高4.5cm、高台径3.7cmを測る。外面は松竹梅文が描かれている。高台内には銘がみられる。大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。よって、18世紀末~19世紀初頭と考えられる。

#### S I 30

S I 30は、調査区西壁沿いや南側に位置する(第111図)。掘形は不整形を呈し、全長2.05m、幅1.9m、深さ0.85mを測る。S B 01の屋敷地内位置し、屋敷内に便所があったことが考えられる。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第112図は、丹波焼甕である。底径18.8cmを測る。内外面に塗土を施す。

出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。

#### S K1056

S K 1262

S K 1262は、南壁沿い中央に位置する（第115図）。平面形は不整形で、検出長2m、深さ0.4mを測る。

第116図-1・2は、唐津焼碗である。1は、胎土目の碗である。高台径4cmを測る。内面は緑釉、外面は極暗赤褐色を掛けている。高台畳付に目跡を残す。2は、内面は白色釉を掛け、外面にも一部白色釉がみられる。3・4は、丹波焼である。3は、播鉢である。播目が一本びきで、外面体部に指頭圧痕がみられる。胎土は5 Y R 6/8橙色を呈す。4は、壺である。口径6cm、器高8.1cm、底径6cmを測る。内外面に塗土を施す。体部内面に鉄分が付着している。

出土遺物から概観すると、17世紀前半と考えられる。Ⅲ-1期に属する。

S K 949

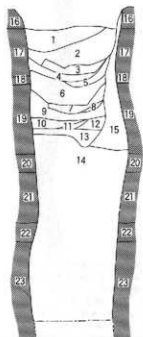
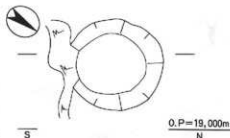
S K 949は、調査区西壁沿い南側に位置する（第117図）。平面形は不整形で、検出長1.5m、深さ0.3mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第118図-1・2は、土師質土器である。1は、皿である。口径10.5cm、器高（推）2.2cmを測る。内外面口縁部はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。2は、焙烙である。口径28.5cmを測る。胎土は7.5 Y R 6/6にふい橙色を呈す。口縁部内外面はヨコナデ調整、その他は、未調整である。難波洋三氏の分類E類に属する。外面底部に煤が付着している。3は、唐津焼鉢である。高台径10cmを測る。外面は、鉄釉が掛けられ、一部白色釉がみられる。内面は、白色釉が全体的に掛けられ、黒色釉と緑釉で模様を描かれている。見込みには、ハナレ砂痕を残す。高台は無軸である。17世紀末～18世紀中頃の時期と考えられる。

S K 665

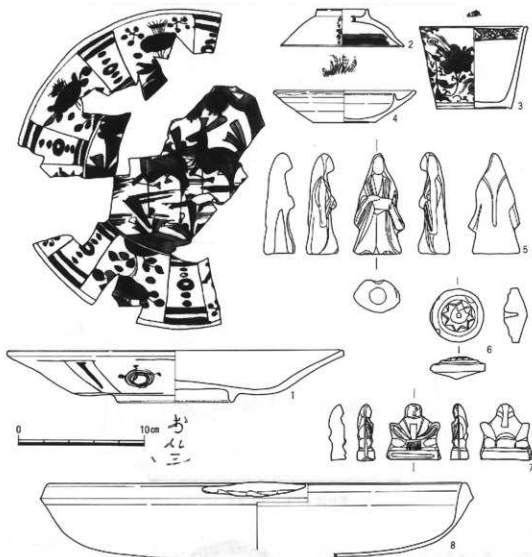
S K 665は、調査区東壁沿い中央に位置する（第119図）。平面形は円形を呈し、直径0.82m、深さ0.2mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第120図-1は、肥前磁器染付碗である。高台径4.3cmを測る。見込みは蛇ノ目軸ハギで、その上に砂が付着している。高台畳付に砂が付着している。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。2は、丹波焼植木鉢である。高台径17.5cmを測る。高台は無軸である。18世紀中頃～18世紀後半と考えられる。



1. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4 (遺物を含む)
2. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (遺物を含む)
4. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
5. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6
6. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/8
7. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
8. 黄色粘質土層 2・5 Y 8/8
9. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
10. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8
11. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/6
12. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
13. 濃い黄褐色粘質土層 10 Y R 6/4 (遺物を含む)
14. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
15. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/2
16. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/8
17. 黄色砂層 2・5 Y 7/8
18. 褐色黄色砂層 2・5 Y 3/2
19. 黄色砂層 2・5 Y 8/6 (3cm大の礫を多く含む)
20. 明黄褐色砂層 2・5 Y 7/6 (3～5cmの礫を多く含む)
21. 黄褐色砂層 2・5 Y 3/3 (1～3cmの礫を多く含む)
22. 明黄褐色砂層 2・5 Y 6/8 (5～10cmの礫を多く含む)
23. 明黄褐色砂層 2・5 Y 7/6 (5cm大の礫を多く含む)

第98図 SE21遺構図



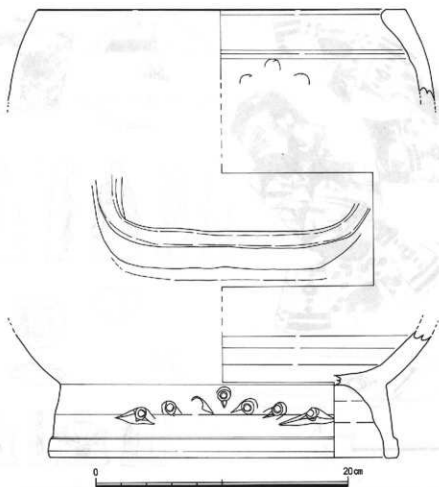
第97図 SE21出土遺物(1)

S K 680

S K 680は、東壁側やや中央に位置する(第121図)。平面形は円形を呈し、直径1.15m、深さ0.35mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第122図-1は、肥前磁器染付碗である。口径10cm、器高5.5cm、高台径3.5cmを測る。外面体部に草花文が描かれている。2は、京焼系陶器鉢である。高台径8cmを測る。内外面に灰釉が掛けられている。見込みは、蛇ノ目稚ハギを施し、高台は無釉である。3は、鉄釉陶器花瓶である。底径7.5cmを測る。底部は無釉。上部から黒色・瑠璃色釉が掛けられている。4・5は、土師質土器皿である。4は、口径7.5cm、器高1.3cmを測る。胎土は10Y R7/4にふい黄橙色を呈す。口縁部内外面はヨコナア調整、内面底部はナア調整、外面は指頭圧調整を施している。5は、口径(推)9cmを測る。口縁部内面はヨコナア調整、底部内面はナア調整、外面には指頭圧痕を残す。口縁部内外面に煤が付着している。6は、土人形の布袋である。左手に肩と福袋をもっている。合わせ型による成形である。合わせ目は、ヘラケズリ調整を施している。底部に直径3.5cmの空気孔を有する。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃~18世紀後半と考えられる。



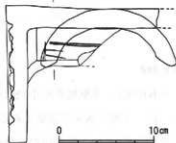
第98図 SE21出土遺物(2)

S K 725

S K 725は、調査区東登付近くの北側に位置する(第123図)。平面形は不整形で、横出長1.35mを測る。

この遺構は、Ⅲ-2期に属する遺構である。

第124図-1~3は、肥前磁器である。1は、染付蓋である。口径9.9cm、器高2.7cm、つまみ径3.6cmを測る。内面に五弁花がみられる。外面には草花文が描かれている。2は、染付筒型碗である。口径6.5cmを測る。外面は網目文、内面には葉平文が描かれている。3は、染付皿である。口径13cm、器高3.3cm、高台径9cmを測る。内面体部に松竹梅文が描かれている。1~3は、大橋康二氏の福年Ⅳ期に属する。4・5は、土師質土器皿である。4は、口径6.5cm、器高1.5cmを測る。口縁部に向かってナア調整し、外面には指頭圧調整を施す。外面口縁部に煤が付着している。5は、口径6.5cm、器高1.5cmを測る。内面はヨコナア調整、外面体部にもヨコナア調整がみられる。

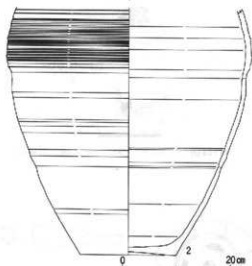
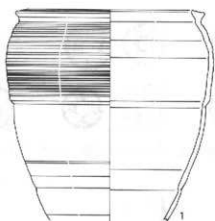


第99図 SE21出土遺物(3)

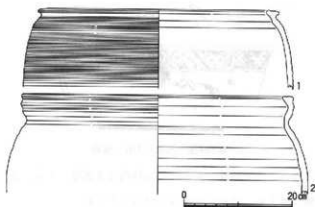
4は、口径6.5cm、器高1.5cmを測る。口縁部に向かってナア調整し、外面には指頭圧調整を施す。外面口縁部に煤が付着している。5は、口径6.5cm、器高1.5cmを測る。内面はヨコナア調整、外面体部にもヨコナア調整がみられる。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃~18世紀後半と考えられる。





第100図 SE 21出土遺物 (4)



第102図 SI 27出土遺物

S K 733

S K 733は、調査区東北部に位置する (第125図)。平面形は不整形で、検出長0.6mを測る。III - 3期に属する遺構である。

第126図-1・2は、肥前磁器染付碗である。1は、高台径5.5cmを測る。外面体部には草花文を、見込みには五弁花文が描かれている。高台内には「大明年製」の銘がみられる。2は、口径 (推) 12.5cmを測る。外面体部に成り物文が描かれている。口縁部には口鏝が施されている。1・2は、大橋康二氏の編年IV期に属する。3は、土師質土器焙烙である。口径29.5cm、器高 (推) 5.3cmを測る。口縁部と底部とが直立する



1. 濃い黄褐色砂質土層 2・5 Y6/3 (遺物を含む)
2. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y4/2 (遺物を含む)
3. 暗黄褐色砂質土層 2・5 Y4/2 (遺物を含む)
4. 黄褐色粘質土層 10 YR5/8

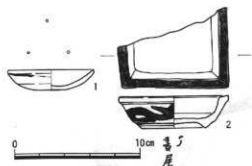


第101図 SI 27遺構図



1. 暗黄褐色砂質土層 2・5 Y5/2

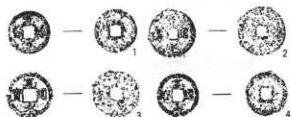
第103図 S K 883遺構図



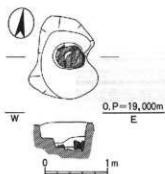
第104図 S K 883出土遺物 (1)



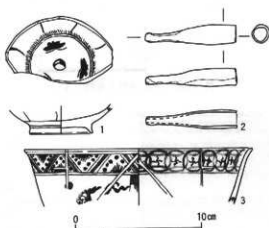
第107図 S K 871遺構図



第105図 S K 883出土遺物 (2) (S=1/2)



第106図 S K 1261 (883の上の桶) 遺構図



第108図 S K 871出土遺物

タイプである。体部内外面はヨコナデ調整、底部内面はヨコナデ調整である。底部外面は未調整である。また、口縁部を面取りしている。難波洋三氏の分類E類に属する。外面体部に煤が付着している。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃～18世紀後半と考えられる。

#### S K 823

S K 823は、南壁沿いの東側に位置する (第127図)。平面形は長方形を呈し、長辺1.45m、短辺0.9mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第128図は、刷毛目唐津焼碗である。高台径4.2cmを測る。刷毛目模様は全体にみられる。高台畳付は窯胎である。



1. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/2

第109図 S K 1027遺構図



第110図 S K 1027出土遺物

#### S K 916

S K 916は、南壁中央部に位置する(第129図)。平面形は不整形で、全長3m、深さ0.15mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第130図-1は、献上唐津手焼碗である。高台径4cmを測る。高台畳付は露胎。2は、土師質土器火消壺の蓋である。口径22.8cm、器高2.5cmを測る。粘土円盤の上に、粘土組を輪積みで接合し、その後、体部内外面をヨコナデ調整を施している。また、体部と上部の境目を面取りが施され、上部にはハナレ砂が付着している。3は、丹波焼鉢である。口径17.5cm、器高12cmを測る。外面体部に白色釉で波線が描かれている。また、体部は凸凹している。

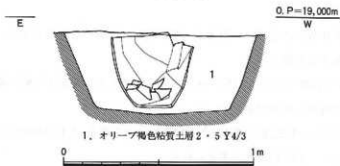
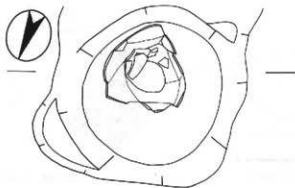
第131図は、均整唐草文軒棧瓦である。瓦当部の幅4.5cm、模様区幅3.2cmを測る。

出土遺物を概観すると、18世紀前半~18世紀後半と考えられる。

#### S K 922

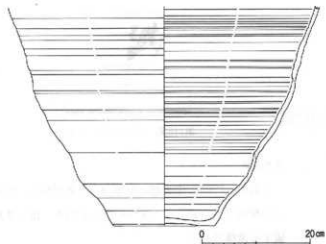
S K 922は、南壁中央部に位置する(第132図)。平面形は不整形で、検出長1.2m、深さ0.23mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第133図は、肥前磁器染付仏飯具である。口径7.5cm、器高5cm、高台径4cmを測る。外面口縁部に柳文が描かれている。大橋康二氏の福年Ⅳ期に属する。従って18世紀前半~18世紀後半と考えられる。

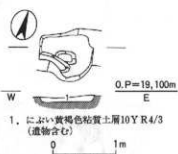


1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3

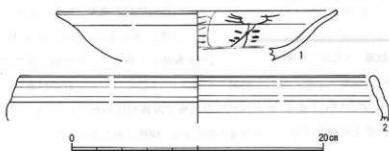
第111図 S I 30遺構図



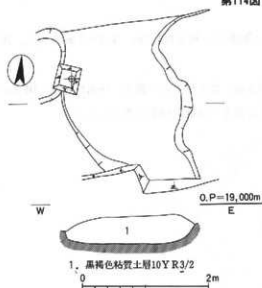
第112図 S I 30出土遺物



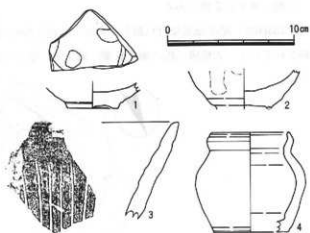
第113図 S K1056遺構図



第114図 S K1056出土遺物



第115図 S K1262遺構図



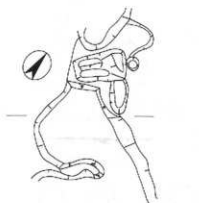
第116図 S K1262出土遺物

S K1107

S K1107は、調査区中程の西北部に位置する（第134図）。平面形は円形を呈し、直径0.84m、深さ0.45mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第135図は、土師質土器皿である。口径9.5cm、器高2cmを測る。外面は指頭圧調整、内面はナデ調整が施されている。口縁部内外面に煤が付着している。

第136図は、丸瓦である。全長25.6cm、幅14cm、玉縁部長4cmを測る。丸瓦部凹面には、印板調整痕がみられる。出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。

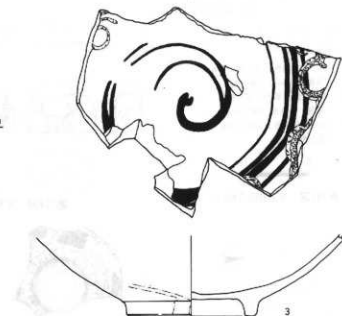
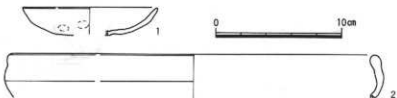


SW 0.P=19,000m NE

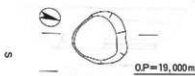
- 
1. 褐色粘質土層 7・5 YR4/4
  2. 褐色粘質土層 10Y R4/6  
(炭化物多く含む)
  3. 黄褐色粘質土層 10Y R7/8
  4. 褐色粘質土層 10Y R4/6
  5. 褐色粘質土層 10Y R4/4  
(2 cm程度の礫含む)
  6. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6  
(2 cm程度の礫を含む)

0 2m

第117図 SK949遺構図



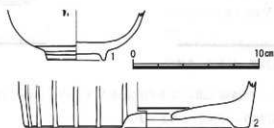
第118図 SK949出土遺物



1. 暗褐色砂質土層 10Y R3/3  
(10cm程度の礫含む)
2. 黄色砂質土層 2・5 Y8/8
3. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8
4. 明褐色砂質土層 7・5 Y5/8
5. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6

0 1m

第119図 SK665遺構図

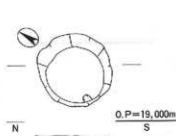


第120図 SK665出土遺物

### SK1151

SK1151は、SK1107の西南部に位置する(第137図)。平面形は長方形を呈し、長辺2.35m、短辺0.75を測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

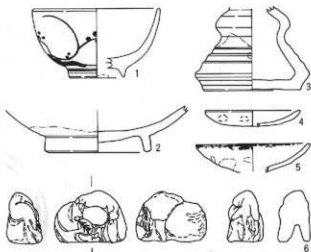
第138図-1・2は、土師質土器皿である。1は、口径7.5cm、器高1.3cmを測る。外面は指頭圧調整、内面はナデ調整を施している。2は、口径8cm、器高1.5cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ調整、外面底部は指頭圧調整、内面底部は一定方向にナデ調整がみられる。口縁部には煤が付着している。1・2は、口縁部が内湾するタイプである。3は、大黒天の土人形である。型合わせ成形で、空孔を有する。3は、丹波焼甕である。口径34cmを測る。口縁部内外面から外面体部に鉄掛けられている。内面体部には塗土が施され



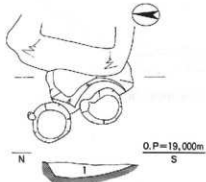
1. オリーブ褐色砂質土層 5 Y 6/3  
(遺物、4 cm位の礫含む)
2. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6  
(遺物、4 cm位の礫含む)
3. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8  
(炭化物含む)



第121図 S K 680遺構図



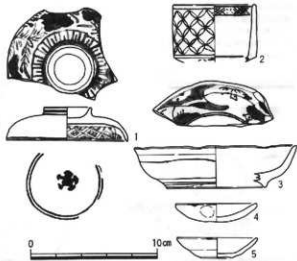
第122図 S K 680出土遺物



1. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/8



第123図 S K 725遺構図



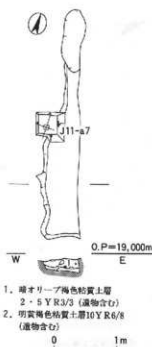
第124図 S K 725出土遺物

ている。また、口縁部上部に3本の沈線を呈す。内面体部に白色の付着物がみられる。出土遺物から概観すると、18世紀中頃～18後半と考えられる。

#### S K 705

S K 705は、東壁側中央部に位置する(第139図)。平面形は不整楕円形を呈し、長径2.06m、幅1.1m、深さ0.45mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第140図-1は、京焼系陶器筒型碗である。高台径4cmを測る。高台内に「九花や」の銘がみられる。2は、肥前磁器染付碗である。口径10cm、器高5cm、高台径4cmを測る。内外面に菊花文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。3は、土師質土器焼塩壺である。口径6cm、器高7cmを測る。型づくり成形。外面はナデ調整を施している。また、口縁部に蓋受け段がみられる。体部内外面に煤が付着している。4は、鉄胎陶器植木鉢である。底径9.3cmを測る。産地は不明である。焼成後に、底の穿孔を作られたと考えられる。6・7・8は、土人形である。6は、祠の中の天神である。前後型合せ成形で、合せ目をへう削りしている。また、底部に空孔を有する。7は、女性像である。前後型合せ成形で、合せ目をへう削りしている。火災で焼けたのか、煤が付着している。底部に空孔を有する。8は、男子像である。6・7と同じ成形であ



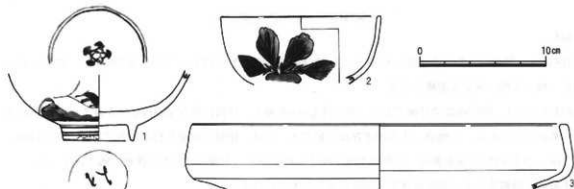
1. 母オーブ褐色胎土層
2. S Y R 3/3 (遺物含む)
2. 房黄褐色胎土層10 Y R 6/8 (遺物含む)

第125図 SK 733遺構図

する遺構である。

第142図-1-3は、肥前磁器染付碗である。1は、口径13.5cm、器高6cm、高台径5.2cmを測る。見込み蛇ノ目軸ハギを呈し、高台畳付は露胎である。見込みに五弁花がみられる。2は、口径11.5cm、器高6.3cm、高台径4.3cmを測る。外面は矢羽根文が描かれ、内面口縁部には葉平文が描かれている。また、見込みに五弁花がみられる。3は、口径10cm、器高5.3cm、高台径3.6cmを測る。外面に梵字文が描かれている。高台畳付は露胎である。1-3は、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。4は、京焼系陶器碗である。口径9.5cmを測る。口縁部は外へ張り出し、やや波状になっている。外面体部から見込みまで、灰釉が掛けられている。5は、土師質土器皿である。口径10.5cm、器高2.2cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整が施し、外面底部は指頭圧調整がみられる。内面に煤が付着している。6は、鉄胎陶器土瓶である。口径9.5cmを測る。外面は丁寧に鉄釉が掛けられ、その上に緑色釉を掛けている。内面は、口縁部と体部の境目は無釉である。産地は不明である。7は、土師質土器火消壺である。口径26cmを測る。粘紐マキアケ外型成形で、口縁部だけ別に成形されハリツケている。その後、外面体部をヨコナデ調整を施している。また、形態は、体部と肩部との境目が明瞭で、口縁部は丸くて小さい。川口宏海氏の編年Ⅱ-1型式に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃-19世紀前半と考えられる。



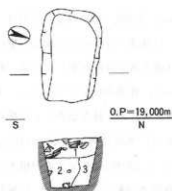
第126図 SK 733出土遺物

る。服装から考えて、7の女子像と対で使われていたと考えられる。5は、土師質土器焙烙である。口径20cm、器高5.3cmを測る。成形は、口縁部と底部が内弯するタイプである。口縁部と体部の内外面は丁寧にヨコナデ調整し、外面底部は未調整。外面全体に煤が付着している。難波洋三氏の分類には属さず、口径が20cmと、普通の焙烙より小さい。また、口径に対して、器高がやや高いと考えられる。鉢を焙烙として使用していたのではないかと考えられる。9は、堺焼播磨鉢である。口径34.6cm、器高13.6cmを測る。粗い胎土を用い、7.5 Y R 7/6を呈する。粗末だが、高台らしきものがみられる。体部外面の回転ヘラケズリは、口縁部直下まで施されている。描目は10本単位である。しかし、底部まで描目は及んでいない。白神典之氏の分類Ⅱ類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃-19世紀初頭と考えられる。

#### SK 1067

SK 1067は、北壁側の中央部に位置する(第141図)。平面形は不整長方形を呈し、全長1.85m、幅0.9m、深さ0.27mを測る。Ⅲ-3期に属



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4  
(10cm大の礫、炭化物少量、遺物多く含む)
2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6  
(8cm程の礫含む)
3. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8

0 1m

第127図 SK823遺構図



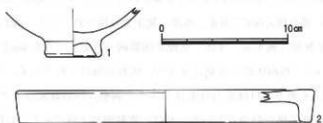
第128図 SK823出土遺物



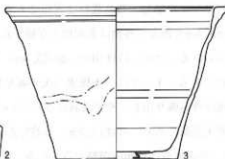
0 2m

1. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/4  
(4cm程の礫、炭化物多く含む)
2. 明黄褐色粘質土層 10 Y R6/8

第129図 SK916遺構図



第130図 SK916出土遺物 (1)



第131図 SK916出土遺物 (2)

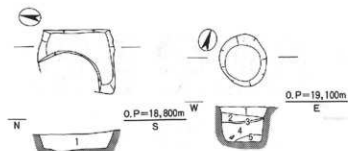
#### S K 644

S K 644は、調査区北側の中央部に位置する (第143図)。平面形は円形を呈し、直径0.75m、深さ0.45mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第144図-1は、肥前磁器染付碗である。高台径3.9cmを測る。外面は唐草文模様を描かれている。高台内には、銘款がみられる。大橋康二氏の福年N期に属する。2は、伊賀・信楽焼行平の蓋である。口径14cm、器高3cm、つまみ径3.7cmを測る。灰燼が全体に掛けられている。上面には10本の沈線が施されている。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。





1. 上より黄褐色粘質土層10Y R4/3

2. 黄褐色砂質土層10Y R5/6

3. 明褐色砂質土層7・5 Y R5/6

4. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6

(遺物含む)

5. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4

0 1m

第132図 S K 922遺構図



0 10cm

第133図 S K 922出土遺物



0 1m

第134図 S K 1107遺構図

### S K 652

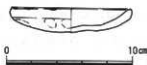
S K 652は、S K 644の北西部に位置する(第145図)。平面形は不整形で、全長0.9m、深さ0.7mを測る。この遺構は、Ⅲ-3期に属する遺構である。

第146図-1は、陶器蓋である。口径8cm、器高2.2cmを測る。孔が有る。蓋と身とが接する縁に、塗り土が施されている。産地は不明である。2は、陶器植木鉢である。口径16.5cm、器高11.4cmを測る。穿孔は焼成前に施されている。産地は不明である。18世紀後半~19世紀前半の遺構と考えられる。

### S K 670

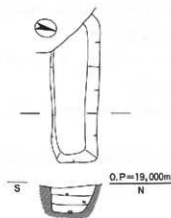
S K 670は、東壁沿いのやや中央に位置する(第147図)。平面形は不整形長方形を呈し、全長1.5m、幅0.95m、深さ0.2mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第148図-1は、受けのない柿軸灯明皿である。口径6cm、器高1cmを測る。2は、瓦質土器鉢である。口径23.5cmを測る。植木鉢ではないかと思われる。3は、土師質土器焙烙である。口径(推)39.5cmを測る。口縁部と底部の境目が突き出るタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整、外面底部は未調整である。全



0 10cm

第135図 S K 1107出土遺物(1)



1. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6

(2cm程の礫含む)

2. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6

(5cm程の礫多く含む)

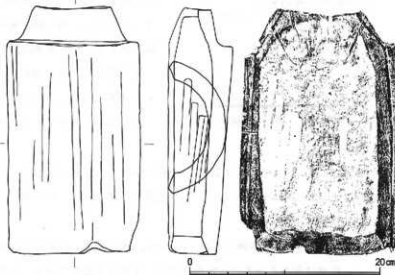
3. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4

(3cm程の礫含む)

0.P=19,000m

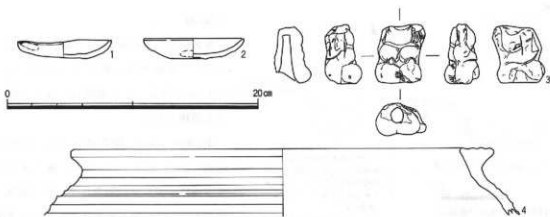
0 1m

第137図 S K 1151遺構図

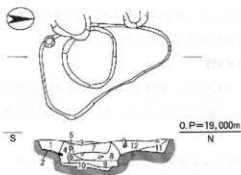


0 20cm

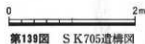
第136図 S K 1107出土遺物(2)



第138図 SK1151出土遺物



1. 黄褐色土層 2・5 Y5/6
2. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y3/4
4. 褐色土層 10 Y R4/4
5. 赤褐色土層 7・5 Y R5/8
6. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
7. 暗オリープ褐色土層 2・5 Y3/3
8. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6  
(2-8 cmの層多く含む)
9. 暗褐色粘質土層 10 Y R3/4
10. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
11. 緑褐色土層 10 Y R3/3
12. 褐色砂質土層 10 Y R4/6  
(1.5-5 cmの層多く含む)



第139図 SK705遺構図

S K 673

S K 673は、調査区北東部に位置する(第151図)。平面形は長方形を呈し、長辺6.35m、短辺2.1mを測る。この遺構は、遺物が多量に出土した。出土遺物の年代観から、防空壕ではないかと考えられる。この遺構はⅢ-3期に属する遺構である。

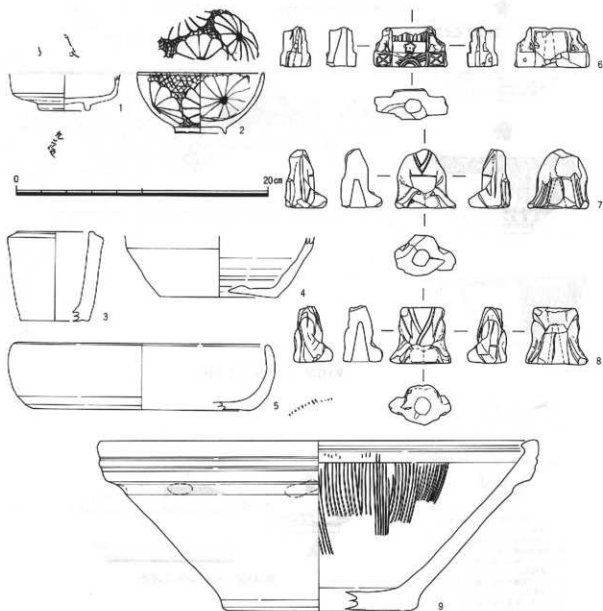
第152図-1は、灰釉陶器碗である。高台径3.5cmを測る。高台部には塗土を施し、見込みには白色釉を掛けている。産地は関西系と考えられる。2は、土師質土器皿である。口径9cm、器高2cmを測る。口縁部は内湾するタイプで、胎土は10 Y R8/3浅黄橙色を呈す。外面は指頭圧調整、口縁部はヨコナゲ調整、内面は一定方向にナゲ調整している。3は、肥前磁器色絵壺である。高台径5.7cmを測る。一部に金色が施されている。図にあげた遺物は、18世紀後半頃のものであるが、他に19世紀末-20世紀初頭のもので多く含まれており、古い遺物は遺構埋戻し時に混入したものと考えられる。

体的に煤が付着している。難波洋三氏の分類G類に属する。4は、土師質土器風炉である。口径23.3cm、器高22.5cm、底径24cmを測る。脚部・焚口部は別に作成され、胴部につけられている。脚部外面に巴文の透かしがみられる。また、外面に赤彩を施している。内面には煤が付着している。S E 21出土の風炉と同じタイプである。

第149図-1は、明石焼播鉢である。口径36cm、器高12.6cmを測る。2.5 Y R4/6赤褐色を呈す。回転ヘラケズリが、外面は底部際から口縁部外縁帯の直下まで施している。内面の播目は、12本単位で底部内面まで及んでいる。見込みの播目は、7本単位で外側から中心に向かって施されている。白神典之氏の分類Ⅱ類に属する。2は、灰釉陶器鉢である。口径35cm、器高11.5cmを測る。面は全体に灰釉が施されているが、外面は底部まで及んでいない。焼成時に突重していたのか、見込みと底部に目跡が残っている。産地は伊賀・信楽焼系か?

第150図は、「寛水通寶」である。直径2.2cm、厚さ0.1cmを測る。新寛水通寶で、背文はみられない。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃-19世紀初頭と考えられる。

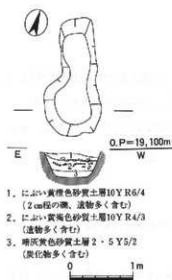


第140図 SK705出土遺物

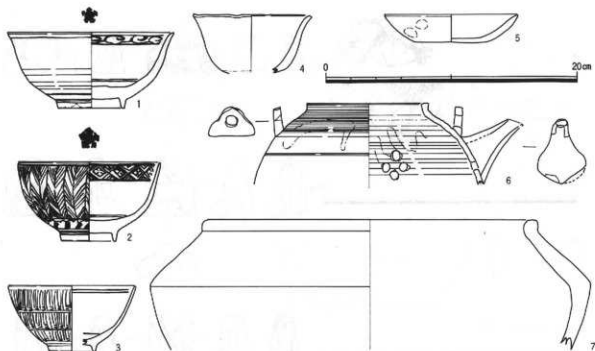
SK674

SK674(第151図)は、平面形は正方形を呈し、一辺1.25m、深さ0.45mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

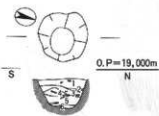
第152図-4~6は、肥前磁器である。4は、染付碗である。口径9.1cm、器高4.8cm、高台径3.5cmを測る。高台畳付は露胎である。5は、染付猪口である。口径6.3cm、器高2.9cm、高台径2.7cmを測る。外面に草花文を描き、見込みにも草花文がみられる。高台内には銘歌がみられる。6は、染付蓋である。口径9.5cm、器高3.1cm、つまみ径4cmを測る。表に草花文、見込みにも草花文がみられる。4・5は、大橋康二氏の福年V期、6はIV期にそれぞれ属する。7は、土師質土器焙烙である。口径27.5cmを測る。口縁部と底部の境目がはっきりするタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整が施されている。難波洋三氏の分類G類に



第141図 SK1067遺構図



第142図 SK1067出土遺物



1. 上・白・黄褐色粘質土層2・5 Y 6/4  
〔遺物含む〕
2. 黄褐色粘質土層2・5 Y 4/1
3. 黄褐色粘質土層2・5 Y 5/6
4. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y 4/6  
〔遺物含む〕
5. 上・白・黄褐色粘質土層10 Y R 4/3  
〔遺物含む〕
6. 黄褐色粘質土層10 Y R 6/8



第144図 SK644出土遺物



第143図 SK644遺構図

属する。また、外面に煤が付着している。8は、丹波焼甕である。口径28cmを測る。内面体部から口縁部上部まで、黒色釉が掛けられている。外面は、口縁部外縁部よりしたに鉄釉が掛けられ、更に、黒色釉が施されている。

第153図1～3は、「寛永通寶」である。直径は、1は2.1cm、2は2.1cm、3は2.3cmを測り、厚さは、それぞれ0.1cmである。また、それぞれ背文はみられない。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

#### SK744

SK744は、調査区北東部に位置する（第154図）。平面形は円形を呈し、直径0.9m、深さ0.06mを測る。

Ⅲ-3期に属する遺構である。

第155図-1は、肥前磁器染付碗である。口径9.5cm、器高5cm、高台径3.7cmを測る。草花文の「くらわんか手」の碗である。高台内には銘款がみられる。高台皿付は露胎である。2～5は、土師質土器皿である。

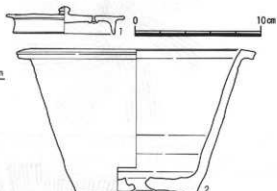


O.P=19,000m

1. 黄褐色粘質土層10 Y R5/5 (遺物含む)
2. にじみ・黄色粘質土層10 Y R5/4 (2cm程の厚さ(含む))
3. 褐色粘質土層10 Y R4/4
4. オリーブ褐色粘質土層2・S Y4/5
5. にじみ・黄色砂質土層2・S Y3/3
6. 暗褐色砂質土層10 Y R3/2

0 2m

第145図 S K652遺構図



第146図 S K652出土遺物



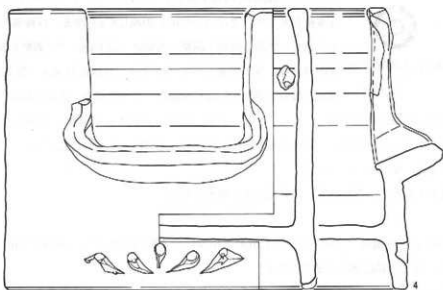
O.P=19,000m



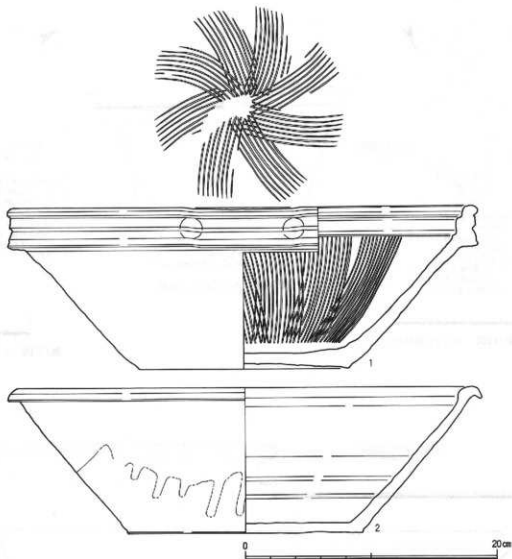
1. 明灰褐色砂質土層2・S Y6/8
2. オリーブ褐色砂質土層2・S Y4/5
3. にじみ・黄色砂質土層2・S Y6/3 (遺物、12cm程の礫含む)
4. 淡黄色砂質土層S Y6/3
5. 明灰褐色砂質土層10 Y R4/8
6. オリーブ褐色砂質土層S Y3/2 (遺物含む)

0 1m

第147図 S K670遺構図



第148図 S K670出土遺物(1)



第149図 SK670出土遺物(2)



第150図 SK670出土遺物(3)  
(S=1/2)

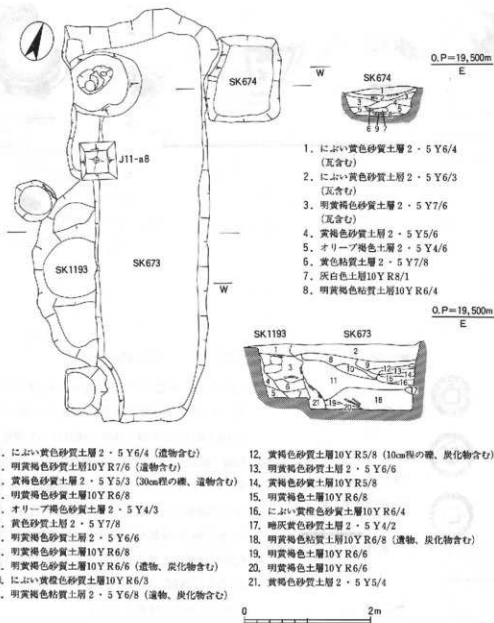
いずれも口縁部が、内弯するタイプである。2・4・5の胎土は、10Y R8/3 浅黄橙色を呈す。2は、口径10cm、器高1.8cmを測る。口縁部内外面はヨコナエ調整、外面は指頭圧調整、内面は一定方向にナエ調整を施している。外面口縁部に煤が付着している。4は、口縁部11.6cm、器高2.5cmを測る。外面は指頭圧調整、内面口縁部はヨコナエ調整、内面底部はナエ調整を施している。口縁部内外面に煤が付着している。5は、口径11.8cm、器高2.5cmを測る。外面には指頭圧調整が施されている。3は、口径11.5cm、器高2cmを測る。胎土は7.5Y R7/4にふい橙色を呈す。調整は、2と同じである。口縁部に煤が付着している。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

#### SK747

SK747は、SK744の西南部に位置する(第154図)。平面形は不整形円形を呈し、全長0.95m、幅0.75m、深さ0.3mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第155図-1は、肥前磁器赤絵小杯である。高台径3cmを測る。高台畳付は露胎である。2は、土師質土器鉢である。口径(推)23cmを測る。胎土は2.5Y8/4淡黄色を呈す。ロクロ成形で、口縁部・体部内外面は、



1. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4 (遺物含む)
2. 明黄褐色砂質土層 10Y R7/6 (遺物含む)
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 (30cm程の礫、遺物含む)
4. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8
5. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
6. 黄色砂質土層 2・5 Y7/8
7. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6
8. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8
9. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/6 (遺物、炭化物含む)
10. におい黄褐色砂質土層 10Y R6/3
11. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8 (遺物、炭化物含む)
12. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8 (10cm程の礫、炭化物含む)
13. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6
14. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8
15. 明黄褐色土層 10Y R6/8
16. におい黄褐色砂質土層 10Y R6/4
17. 暗灰褐色砂質土層 2・5 Y4/2
18. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 (遺物、炭化物含む)
19. 明黄褐色土層 10Y R6/6
20. 明黄褐色土層 10Y R6/6
21. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4

第151図 SK 673・674遺構図

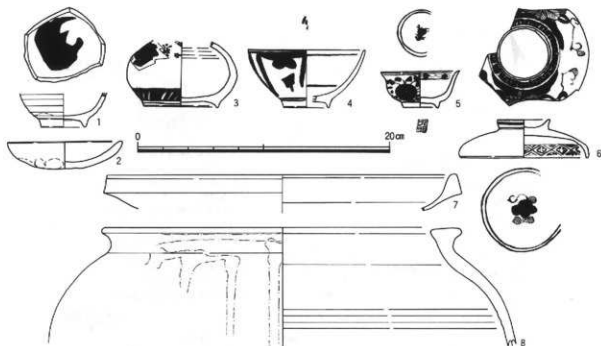
ナデ調整が施されている。3は、鉄胎陶器植木鉢である。口径(推)28cmを測る。外面は鉄軸が掛けられ、型作りの花形がハリ付けられている。内面は、体部途中迄鉄軸が掛けられている。口縁部上部を、指頭圧で波状に施されている。産地は不明である。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

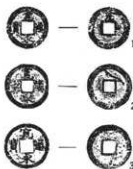
#### SK 777

SK 777は、調査区北東部に位置する(第158図)。平面形は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.15mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

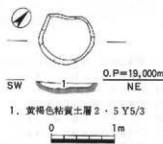
第159図-1は、軟黄緑釉陶器鉢である。口径18cm、器高5.5cm、高台径8.3cmを測る。全体に緑釉を掛けているが、緑釉が劣化し銀色に変化している。産地は不明である。2は、伊賀・信楽焼灰釉蓋である。口径13cm、器高4.3cm、つまみ径3.5cmを測る。口縁部とつまみ内は無釉である。3は、伊賀・信楽焼土瓶である。口径17.5cm、器高11cm、底径7cmを測る。外面は、口縁部から体部にかけて灰釉が掛けられている。また、内面は全面に灰釉が掛け



第152図 SK673 (1~3)・SK674 (4~8) 出土遺物 (1)



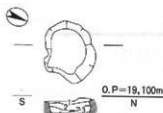
第153図 SK674出土遺物 (S=1/2)



第154図 SK744遺構図

られている。底部には脚が二足みられ、煤が付着している。4は、常滑焼土瓶である。口径9.2cm、器高10cm、底径8.5cmを測る。注ぎ口と体部の境目にハケ調整痕を残す。体部上部に、スタンプ印で模様を描かれている。外面底部に煤が付着している。5は、丹波焼壺である。口径10cm、器高10.4cmを測る。外面体部は黒色釉を全体に掛け、その後、口縁部から白灰色の自然釉を施している。内面口縁部にも黒色釉がみられる。その他は無釉である。内面口縁部に段があり、蓋を伴う物と考えられる。内面には鉄分が付着している。

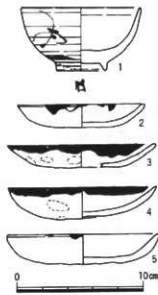
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。



SK780

SK780は、北壁沿い東側に位置する(第160図)。平面形は不整形を呈し、長径1.55m、深さ0.34mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第161図一1は、京焼風陶器である。高台径5cmを測る。高台内に円印がみえ、その下に「中村」の印銘がみられる。2は、ミニチュア土製品の描鉢である。口径5cm、器高2.8cmを測る。塗土を掛け、摺目は4本を呈す。3は、銅製煙管の吸口である。吸口長6cm、



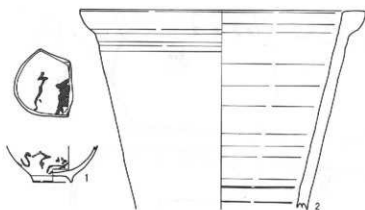
第155図 SK744出土遺物

第156図 SK747遺構図

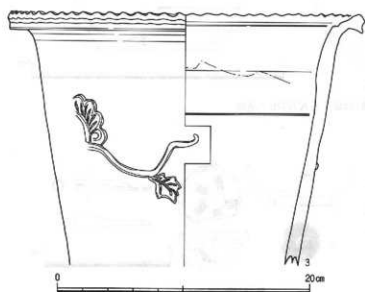
1. におい黄色砂質土層 2・S Y6/4
2. オリーブ褐色土層 2・S Y4/4 (1cm程の硬さ含む)
3. 緑褐色土層10Y R3/3 (遺物含む)
4. 黒褐色砂質土層10Y R3/2 (遺物、4cmの硬さ含む)

吸口部に直径1cmの穿孔を有する。小泉 弘氏の編年Ⅲ期に属する。ここでは図には載せていないが、19世紀初頭の遺物も検出した。よって、17世紀末～19世紀初頭と考えられる。





第158図 SK 777遺構図



第157図 SK 747出土遺物

### SK 796

SK 796は、調査区北東部に位置する(第162図)。平面形は不整形を呈し、全長0.56m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。III-3期に属する遺構である。

第163図-1・2は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径11cm、器高6.4cm、高台径5.6cmを測る。広東型碗である。外面に山水文を描いている。見込みには五弁花がみられる。高台畳付は露胎である。2は、染付皿である。高台径7.5cmを測る。内面体部には宝文、見込みには五弁花がみられる。高台畳付に砂が付着している。大

橋康二氏の編年V期に属する。

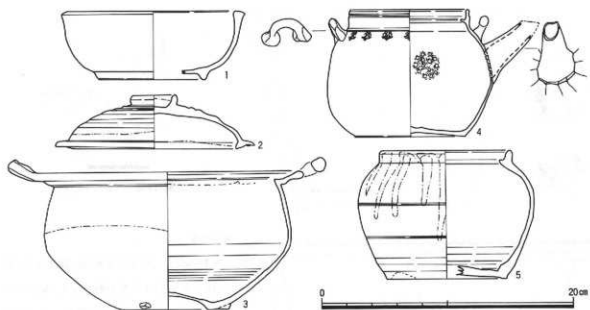
第164図-1・2は、背文の無い「寛永通寶」である。直径は、1・2ともに2.3cmを測る。厚さは、それぞれ0.1cmである。よって、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

### SK 923

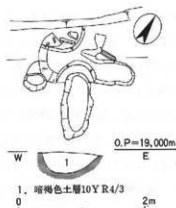
SK 923は、南壁沿い中央部に位置する(第165図)。平面形は不整形で、全長1.3m、深さ0.8mを測る。III-3期に属する遺構である。

第166図-1は、肥前磁器染付蓋である。口径10.2cm、器高2.5cm、つまみ径5.5cmを測る。広東型の蓋と考えられる。表面は福寿字文、つまみ内は「寿」銘がみられ、表面には草花文が描かれている。大橋康二氏の編年V期に属する。2は、鉄釉陶器蓋である。口径8.5cm、器高2.8cmを測る。表面にはトビカンナで模様を施し、その上に鉄釉を掛けている。内面は無釉である。3は、土師質土器焙烙である。口径30cm、器高5cmを測る。7.5YR7/3にふい橙色を呈し、口縁部と底部が直立するタイプである。口縁部内外面にヨコナデ調整を施している。外面口縁部には耳がみられ、ハリツケした後、口縁部上部を平にするためにヘラケズリを施している。口縁部上面から耳につながる穿孔を有する。難波洋三氏の分類では、E類にちかいタイプである。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。



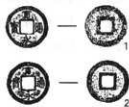
第159図 SK777出土遺物



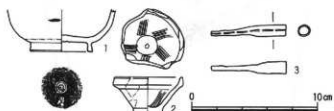
第160図 SK780遺構図



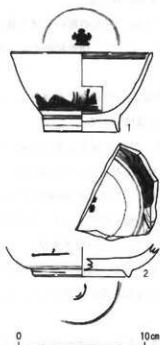
第162図 SK796遺構図



第164図 SK796出土遺物(2)(S=1/2)



第161図 SK780出土遺物



第163図 SK796出土遺物(1)



0.P=19,500m  
W



1. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
2. 黒褐色粘質土層10 Y R2/3
3. 細かい黄褐色粘質土層10 Y R5/4
4. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
5. 暗褐色粘質土層2・5 Y6/6
6. 褐色粘質土層10 Y R4/4
7. 暗褐色粘質土層7・5 Y R5/8
8. 暗褐色粘質土層10 Y R3/4  
(炭化物多量を含む)
9. 細かい黄褐色土層10 Y R5/2  
(炭化物多量、遺物含む)
10. 黒褐色粘質土層2・5 Y5/2
11. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6

0 2m

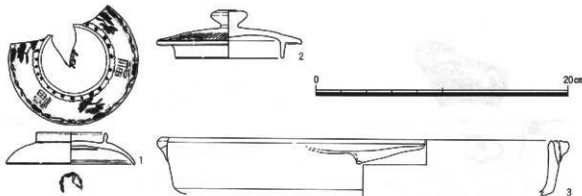
第165図 SK923遺構図

SK1110は、調査区中程の北西部に位置する(第171図)。平面形は不整形で、全長3.05m、幅1.15m、深さ0.35mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第172図-1は、肥前磁器染付皿である。口径11.8cm、器高9.8cm、高台径6.5cmを測る。内面底部は無釉である。高台台付には沈線が一本施されている。外面体部に山水文が描かれている。また、見込みには朱書があり、焼継ぎ痕もみられる。大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。2は、丹波焼甕である。口径22cm、器高27cmを測る。外面は鉄釉が掛けられ、その上に4カ所に黒色釉を掛けている。底部には目跡がみられる。3は、明石焼播鉢である。口径44.4cm、器高16.5cmを測る。底部には高台風のものが見られる。外面の調整は、底部から口縁部外縁帯まで回転ヘラケズリが施されている。播目は密に施し、見込みにおける播目は、7本単位で中心から外へ放射状に施されている。また、口縁部外面には、指頭圧痕が2ヶ所みられる。白神典之氏の種類Ⅱ型に属する。よって、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

#### SK1171

SK1171は、西壁沿い北側に位置する(第173図)。平面形は長方形を呈し、長辺1.9m以上、短辺1.6mを



第166図 SK923出土物

#### SK1035

SK1035は、調査区中程の北側に位置する(第167図)。平面形は不整形円形を呈し、全長1.8m、幅1.5m、深さ0.3mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

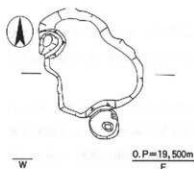
第168図-1は、肥前磁器染付皿である。高台径3.5cmを測る。蛇ノ目釉ハギがみられる。大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。2は、土師質土器皿である。口径10.5cm、器高2cmを測る。外面は指頭圧調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整が施されている。口縁部には煤が付着している。18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

#### SK1087

SK1087は、調査区北側の中央部に位置する(第169図)。平面形は不整形長方形を呈し、全長1.65m、幅0.45m、深さ0.15mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第170図は、中国製芙蓉手皿である。口径16cm、器高4cm、高台径8.5cmを測る。高台内には放射状削痕がみられる。竹花文が描かれている。

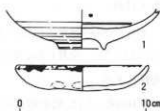
#### SK1110



1. オリーブ黒色粘質土層 5Y3/2



第167図 SK1035遺構図



第168図 SK1035出土遺物

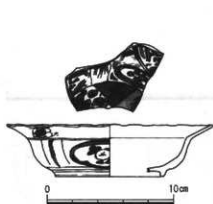


1. 黒褐色粘質土層 10YR3/3

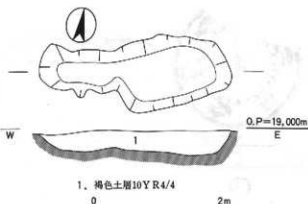
第169図 SK1087遺構図

中央には砂目が見られる。また、内面体部にみえる2, 5Y R3/3暗赤褐色の付着物は、照壁が落ちて付着したものである。外面体部には、「赤壁賦」が描かれ、見込みには「永楽年製」の銘が見られる。また、焼継ぎ痕もみられる。産地は中国製ではないか？ 3は、中国製芙蓉手皿である。口径25, 5cm、器高5, 1cm、高台径9, 8cmを測る。高台内に放射状削痕が見られる。高台皿付は無軸である。表面には鹿文が描かれている。4は、三田青磁角皿である。口縁部（長辺）17, 5cm、高台（長辺）11, 5cmを測る。体部は型押しによって作られている。高台皿付は無軸である。

第175図-1・2は、柿種灯明皿である。1は、口径8cm、器高1, 3cmを測る。2は、口径7cm、器高0, 9cmを測る。受けを持つタイプである。1・2ともに、外面底部に煤が付着している。3は、土師質土器羽釜である。口縁部は、内面にやや傾くタイプである。型作りで体部・縁と順に成形し、別に型作りした口縁部を接合している。体部外面・縁下面にハナレ砂が見られる。口縁部・内面体部・縁下部にヨコナデ調整が施されている。体部外面に煤が、内面には内容物が付着している。4～7は、土師質土器である。4は、ミニチュア土製品の十能である。胎土は5Y R6/6を呈し、型つくり成形である。5は、火鉢である。口径29, 8cmを測る。外面は回転ナデ調整し、一本の帯をハリツケて、指頭圧で凸凹に施している。内外面全体に煤が付着している。6は、火消壺の蓋である。口径20, 5cm、器高2, 7cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ調整、



第170図 SK1087出土遺物

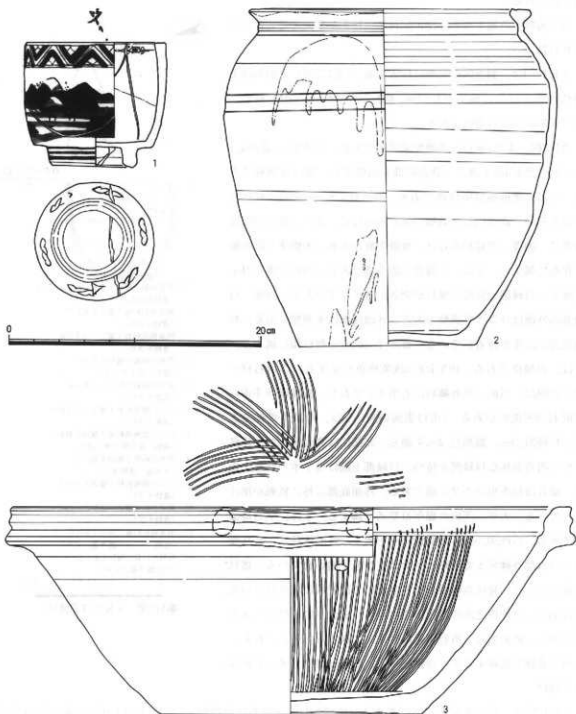


1. 褐色土層 10YR4/4

第171図 SK1110遺構図

測る。18世紀後半～19世紀前半の遺物が多量に出土した遺構である。III-3期に属する。

第174図-1は、肥前磁器染付皿である。口径12, 5cm、器高4cm、高台径6cmを測る。内面は、見込みに獅子文、体部に牡丹文・鳳文、口縁部に獅子文が描かれている。外面には、海浜文が描かれている。また、高台内には、朱所で「イタミ中屋」の銘がみられ、焼継ぎ痕もみられる。2は、染付鉢である。口径40, 3cm、器高9, 4cmを測る。高台には放射状削痕がみられ、



第172図 S K1110出土遺物

外面体部と上部との境を面取りしている。外面天井部にはハナレ砂がみられる。また、内面には煤が付着している。7は、火消壺である。口径17.2cmを測る。粘土紐マキアゲ外型成形である。口縁部と体部は別々に成形され、成形後ハリツケている。内外面にヨコナデ調整を施している。川口宏海氏の編年2-1型式に属する。8は、丹波焼厘鉢である。口径11cm、器高5cm、底径11.5cmを測る。底部にはハナレ砂痕が若干みられる。9は、信楽焼甕である。口径42.5cmを測る。胎土は2.5Y8/4淡黄色を呈す。外面は鉄釉を掛け、黒色釉を所々に施している。

第176図は、「寛永通寶」である。直径5.2cm、厚さ0.1cmを測る。裏面には青海波文がみられ、新寛永四文

銭と思われる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

#### SK1179

SK1179は、調査区中央部に位置する。(第177図) 平面形は不整楕円形を呈し、検出長1.75m、幅1.5m、深さ0.55mを測る。

Ⅲ-3期に属する遺構である。

第178図-1は、瀬戸・美濃焼染付碗である。口径9cm、器高4.8cm、高台径3.4cmを測る。高台底部を面取りし、畳付は無釉である。2は、肥前磁器染付鉢である。高台径7.8cmを測る。見込みに五弁花が、高台内には溝摺の銘がみられる。また、高台内には朱書で「加茂」の銘がみられ、焼継ぎ痕がある。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。3は、土師質土器焙烙である。口径(推)31cmを測る。口縁部と底部の境目が突き出るタイプである。内面・口縁部内外面はヨコナデ調整である。外面底部は未調整である。外面底部には煤が付着している。難波洋三氏の分類G類に属する。4は、石製硯である。10YR8/3浅黄橙色を呈する。この石材を用いた硯は、以前、伊丹郷町にも出土しており、愛媛県伊予市の虎間石の可能性ある。(川口宏海1992) 5は、丹波焼播鉢である。口径31.5cm、器高12.4cmを測る。底部には高台を持ち、体部にやや内弯気味な口縁部を持つ。口縁部上部には2本の沈線を施す。播目は15本単位のクシ播である。外面底部以外に鉄釉が掛けられている。大平 茂氏の編年Ⅱ型式に属する。6は、明石焼播鉢である。口径36.5cm、器高12.5cmを測る。外面体部は、底部際から口縁部外縁帯まで回転ヘラケズリが軽く施されている。播目は密にみられ、見込みの播目は8本単位で放射状に施されている。口縁部は、白神典之氏の分類Ⅲ類にみられるように、外へ大きく張り出し、断面形は三角形に近いタイプに属すると考えられる。

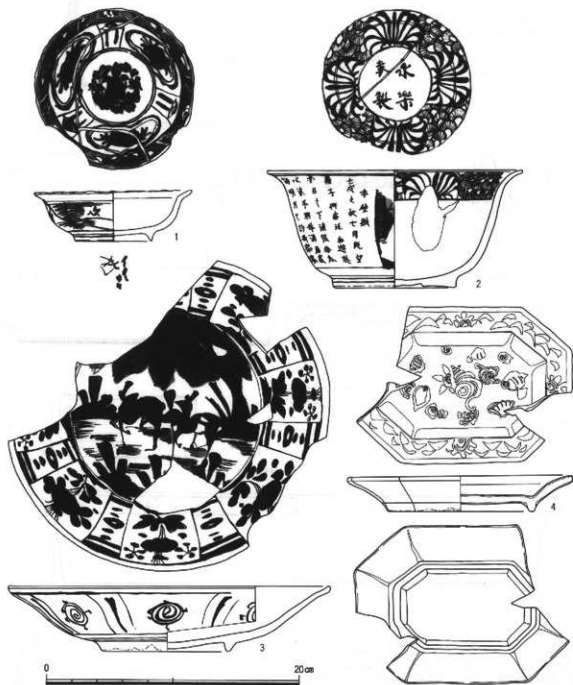
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

#### SK1217

SK1217は、調査区東南部に位置する(第179図)。平面形は楕円形を呈し、長径1.05m、幅0.9mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第180図は、土師質土器火鉢である。高台径15cmを測る。粘土紐成形で、体部と底部を分割成形し、ハリツケている。外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整・指頭圧調整を施している。一部指頭圧痕を残す。高台内体部はヨコナデ調整、底部は未調整である。口縁部内面には煤が付着している。また、底部中央には直径5cm穿孔がみられる。その他に、図には載せていないが、18世紀後半～19世紀前半の遺物がみられる。よって、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。



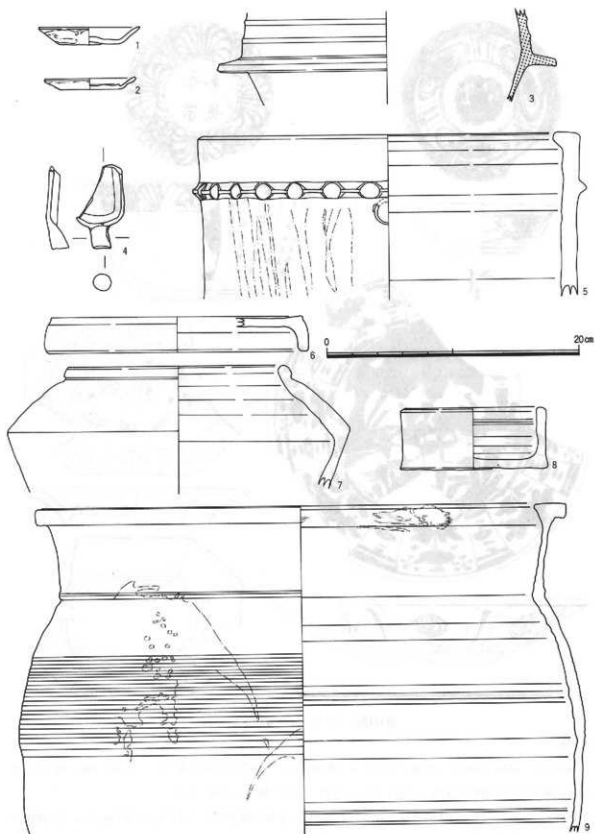


第174図 S K1171出土遺物(1)

S K614

S K614は、調査区南壁沿い東側に位置する(第181図)。平面形は長方形を呈し、長辺2.45m、短辺1.2mを測る。幕末～明治時代の遺物が多量に出土したⅢ-3期に属する遺構である。

第182図-1～7・11は、肥前磁器である。1は、広東型染付碗である。口径12cm、器高6.5cm、高台径6.2cmを測る。外面体部に竹文がみえ、見込みには水鳥文がみられる。2は、赤絵碗である。口径12.3cm、器高6.2cm、高台径4.6cmを測る。内外面ともに赤玉環塔文が描かれており、見込みには「舟」銘がみられる。また、焼継ぎ痕もみられる。3は、白磁紅皿である。口径4.5cm、器高1.5cm、高台径1.3cmを測る。型押し成形で、外面は露胎である。4は、染付小壺である。口径6.5cm、器高5.5cm、高台径3cmを測る。高台部に受けがみられるので、蓋を持つと考えられる。外面体部に草花文が描かれている。また、焼継ぎ痕もみられる。

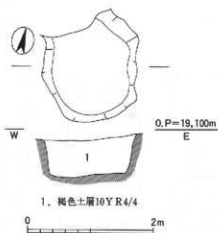


第175圖 SK1171出土遺物(2)



第176圖 SK1171出土遺物(3)  
(S=1/2)

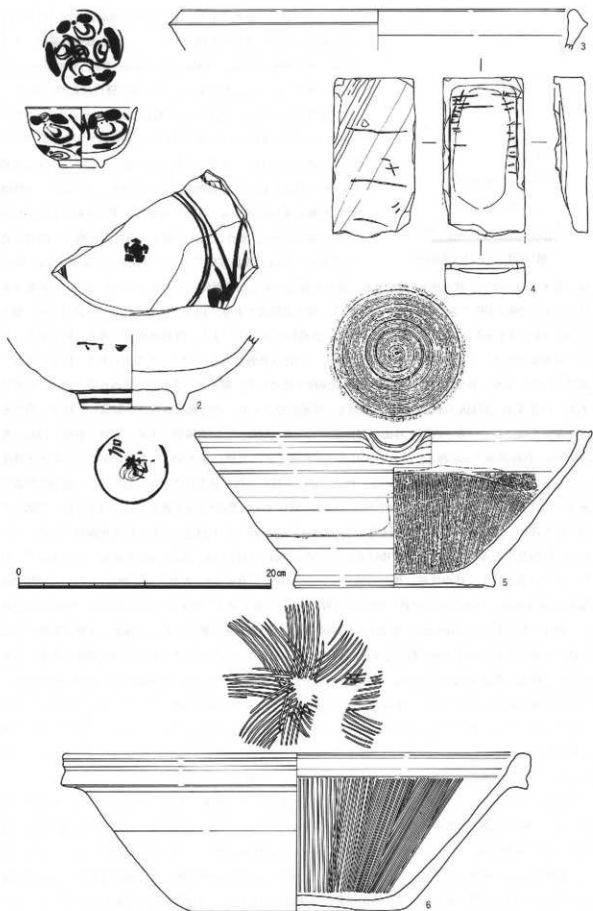




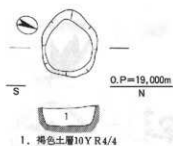
第177図 SK1179遺構図0

5は、染付御神酒徳利である。口径2.4cm、器高11.2cm、高台径4.1cmを測る。外面に唐草文が描かれている。高台畳付は露胎である。6は、染付小杯である。口径6.5cm、器高6.5cm、高台径3.5cmを測る。剣先つなぎ文が描かれている。高台畳付は露胎である。7は、染付猪口である。口径6.3cm、器高3cm、高台径2.5cmを測る。内面に草花文が描かれている。11は、青磁香呂である。口径12.5cm、器高5cmを測る。底部に3足の脚を施している。内面は無釉で、蛇ノ目状に白色の附着物が附着している。1-6は、大橋康二氏の福年V期に属する。8は、萩焼ヒラ掛け茶碗である。口径7cm、器高4.7cm、高台径3cmを測る。内面に施釉し、高台は露胎である。9は、陶器茶碗である。口径6cm、器高5.7cm、胎土は、粗末で荒っぽい。高台径3.5cmを測る。高台は露胎である。外面体部から見込みにかけて、白色釉を架けている。産地は不明である。10・19・22・23は、京焼系陶器である。10は、茶碗である。口径11.5cm、器高4.5cm、高台径3cmを測る。内面は灰釉、外面には藻掛けを呈す。また、外面体部に「通急」銘がある。19は、灰釉蓋である。口径2.5cm、器高1.3cmを測る。内面は無釉である。22は、小水注である。灰釉が全体に掛けられているが、高台は露胎である。上面の模様は型押しで、菊文と「本山」の銘みれる。23は、急須である。口径5cm、器高8.7cm、底径5cmを測る。灰釉が掛けられ、白色釉と鉄釉で「御福」を描き、白色釉で「寿」を描かれている。内面と外面底部は無釉である。12は、三田青磁皿である。口径(長径)17cm、器高5.4cm、高台径30.5cmを測る。うわぐすりが、垂れ落ちて高台部に溜まり、拭き取らないでそのまま焼成している。窯道具片が付着している。外面には、型押しで柄が施されている。13・14は、柿釉灯明皿である。13は、口径11.5cm、器高1.2cmを測る。14は、口径9cm、器高1.5cmを測る。13・14ともに、底部に糸切り痕を残す。13の外面底部に煤が付着している。15-18・20・21・24は、伊賀・信楽焼陶器である。15-18は、灯明皿である。内面に灰釉が掛けられている。15は、口径9cm、器高1.5cmを測る。見込みにクシ目と3足ハマ底を残す。外面底部に煤が付着している。16は、口径6.5cm、器高1cmを測る。17は、口径6.5cm、器高1.2cmを測る。外面に煤が付着している。18は、受けのあるタイプである。口径11.5cm、器高2.2cmを測る。20は、蓋である。口径8.5cm、器高1.3cmを測る。上面には灰釉が掛けられ、口縁部・下面は無釉である。21は、餌鉢である。口径8cm、器高5.3cm、高台径4.5cmを測る。灰釉が掛けられ、高台は露胎である。内面体部に、鉄釉で横線が描かれている。24は、片口行平である。口径15.3cm、器高8.2cm、底径7cmを測る。口縁部と外面底部は無釉である。外面は塗土を塗り、トピカンナで模様を施している。取手と握手には鉄釉が掛けられている。また、握手は型作りである。内面底部には、灰釉が掛けられている。さらに、外面底部に墨書がみられる。25は、ミニチュア土製品片口鉢である。口径5cm、器高2cm、高台径1.5cmを測る。鉄釉が掛けられ、外面底部は無釉である。高台内に「マモ」の墨書がみられる。

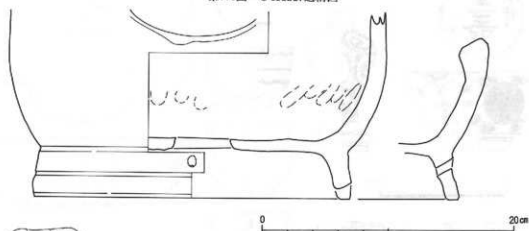
第183図-1~3は、ミニチュア土製品である。1は狛犬、2は御輿である。それぞれ型合わせ成形である。3は、粘土紐巻上げ成形である。4・6は、丹波焼である。4は、口径15cm、器高9.6cm、底径7.5cmを測る。6は、鉄釉徳利である。口径4cm、器高28.5cm、底径12cmを測る。5は、明石焼鉢である。口径33.5cm、器高12.5cm、底径15.2cmを測る。外面調整は、回転ヘラケズリが底部際から口縁部外縁までの直下まで施されている。11本単位の摺目を施す。外面体部には墨書がみられる。白神典之氏分類II型に属する。6は、丹波焼徳利である。口径3.9cm、器高28.5cm、底径12cmを測る。内面口縁部から外面体部にかけて鉄釉が掛け



第178圖 SK1179出土遺物



第179図 SK1217遺構図



第180図 SK1217出土遺物

られている。7は、土師質土器火消壺である。口径19.5cmを測る。成形・調整は、SK1171の第157図-7と同ヒタイプである。川口宏海氏のII-2型式に属する。

第184図1・2は、屋瓦である。1は、左巻三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当部の直径14.5cm、連珠数12個を数える。2は、均整唐草文軒棧瓦である。瓦当部幅28cm、全長26.7cmを測る。

第185図は、「寛永通寶」である。背文はみられない。

出土遺物を概観すると、19世紀初頭～後半と考えられる。

#### SK1214

SK1214は、調査区北西部に位置する(第186図)。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.4m、深さ0.14mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

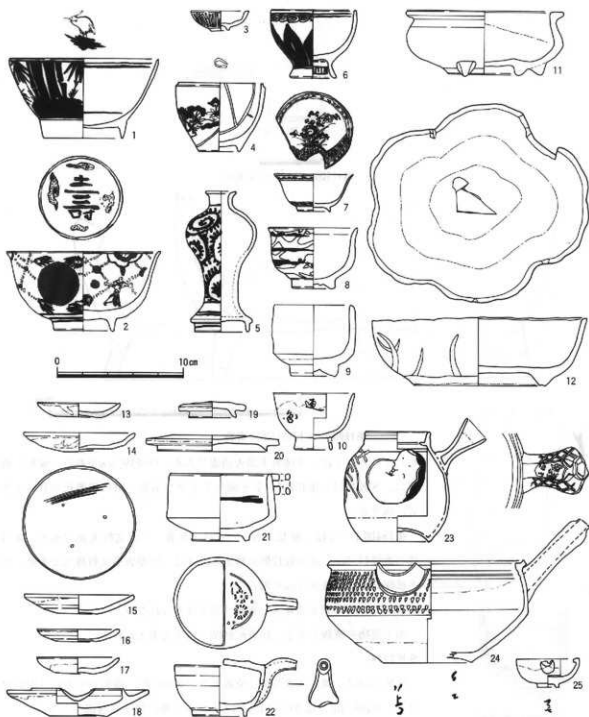
第187図は、丹波焼植木鉢である。内外面に鉄釉が掛けられている。外面の模様はハリツケられている。底部には脚が二足みられる。内外面底部に重ね焼底がみられる。

出土遺物を概観すると、19世紀後半と考えられる。



1. 明瓦彩色砂質土層10Y R6/8
2. 暗褐色砂質土層10Y R3/4  
(遺物多(含む))
3. 濃い黄褐色砂質土層10Y R6/4
4. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
5. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
6. 黄褐色砂質土層2・5 Y4/6
7. オリーブ褐色土層2・5 Y4/6
8. 濃い黄褐色土層10Y R5/4  
(遺物、炭化物、4cm位の硬さ含む)
9. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3  
(5cm以上の硬さ含む)
10. 明瓦彩色砂質土層2・5 Y6/8
11. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4  
(遺物含む)
12. 明褐色砂質土層10Y R3/3  
(遺物、炭化物、10cm位の硬さ含む)

第181図 SK614遺構図

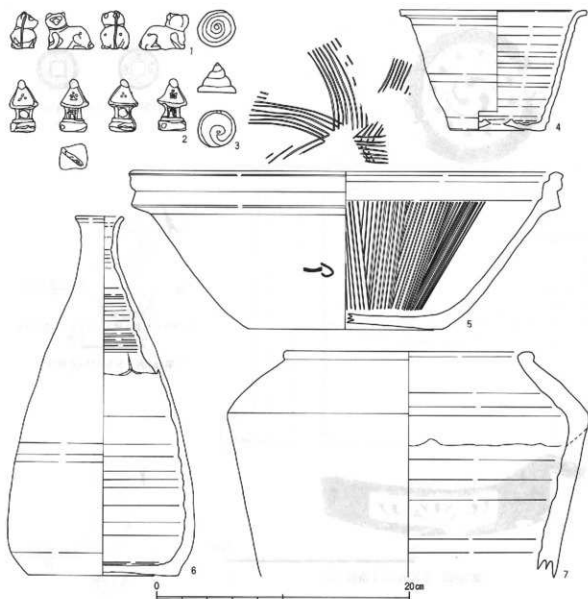


第182図 SK614出土遺物(1)

SD11

SD11は、調査区東南部に位置する(第188図)。長さ1.45m、幅0.6m、深さ0.25mを測る。溝として検出したが、土壕ではないかと考えられる。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第189図は、献上唐津手碗である。口径9cm、器高7.5cm、高台径4.5cmを測る。共伴する遺物の中には、18世紀前半~18世紀中頃のものが多くこの頃に営まれた遺構と考えられる。



第183図 SK614出土遺物(2)

#### 4. 1次面の遺構と遺物

##### SB01

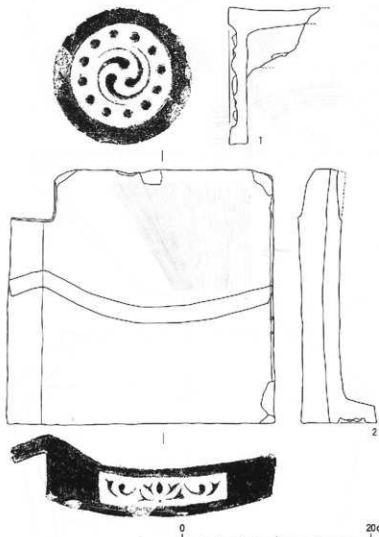
第190図はSB01は、東西約7.88m(4間)、南北約8.87m(4.5間)を測り、北側に約1.8m(1間)×約2.95m(1.5間)の張り出しを持つ。西側2間半は土間(ウチニワ)である可能性が高い。道路側に半間分の縁の張り出しをもつ可能性がある。南側が間口の可能性がある。Ⅲ-3期に属する。

##### SB02

第191図はSB02は、東西約4.93m(2.5間)、南北約9.87m以上(5間)を測る。西側通りの礎石の残りが良くなく、かなり推定復元となっている。西側1.5間分は土間である可能性がある。間口は南側である。SB01の北側通りとこの建物の北通りを比較すると、真っ直ぐに通らないため別の棟であると考えられる。

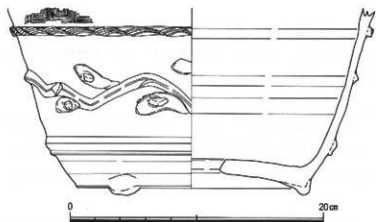
##### SB03

第192図SB03は、東西推定約4.9m(2.5間か)、南北約8m以上(4間以上)を測る。西通りの礎石の残りが悪いいため東西は、推定の域を出せない。



第144図 SK614出土遺物(3)

0 20cm

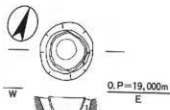


第147図 SK1214出土遺物

0 20cm

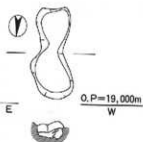


第145図 SK614出土遺物(4)  
(S=1/2)



1. 黄灰色粘質土層 2・5 Y4/1 (遺物含む)

第146図 SK1214遺構図



1. 明褐色粘質土層 7・5 YR5/6  
2. 黒褐色粘質土層 7・5 YR1/3  
(3cm程の層含む)

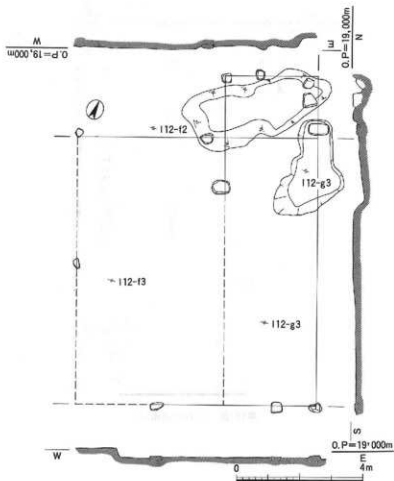
0 1m

第148図 SD11遺構図



第149図 SD11出土遺物

0 10cm



第198図 S B01遺構図

#### S B04

第193図S B04は、東西約4.5m（2間か）、南北約13.9m（7間以上）を測る。東通り礎石は、石組み溝SD34の西側の肩を利用している。Ⅲ-3期に属する遺構である。

#### S B05

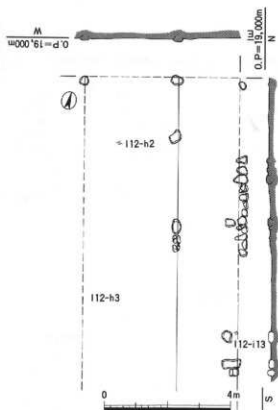
第194図S B05は、東西約2.05m（1間）、南北約3.95m程度（2間）を測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

#### S B06・07

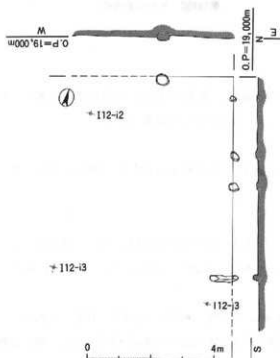
礎石の残存状況のみから見れば、S B06(第195図)はS B07と同一の建物とするには無理がある。そう考えた場合、南北約3.05m（1.5間）、東西12.55m以上（約6間以上）の細長い建物になる。事実報告としては、別個に記述する。

S B07（第196図）は、南北約3.98m（2間）、東西12.7m以上（6間）を測る。

しかし、2次面の酒蔵との関連性、つまり1次面への継続性を考えれば、礎石建物S B06は07と同一建物の可能性もある。そう考えた場合、東西12.7m以上（約6間以上）、南北約9.85m（約5間）を測る建物となる。その場合、南側1間は、ウチニハとなる。間口は西側となる。S B06・S B07はⅢ-3期に属する遺構である。

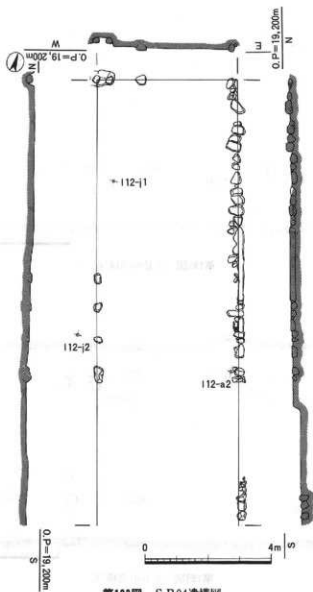


第191図 S B02透視図

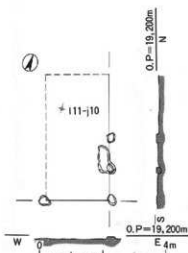


第192図 S B03透視図

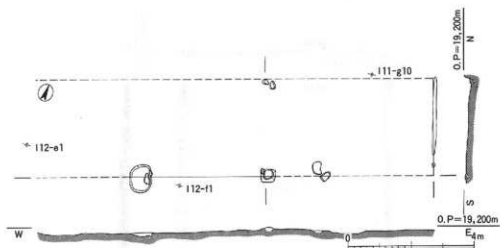




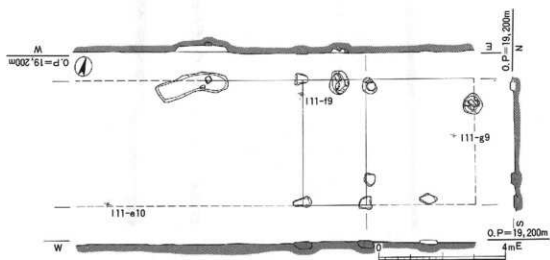
第193図 SB04遺構図



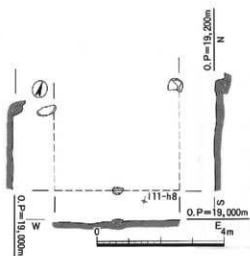
第194図 SB05遺構図



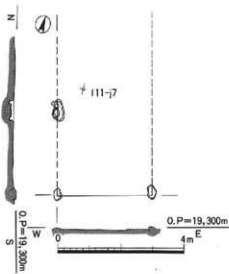
第195図 SB06遺構図



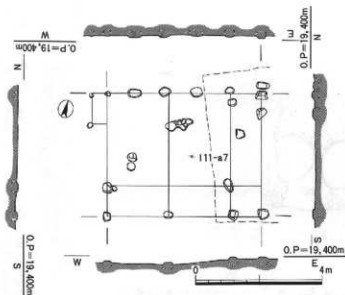
第196図 SB07遺構図



第197図 SB08遺構図



第198図 SB09遺構図



第199図 SB10遺構図

#### SB08・09

いずれも建物復元が困難であるが、抜き取り穴などを利用して、敢えて行くと、SB08（第197図）が東西約4m（2間）、南北約3.4m以上（1間以上）を測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。09（第198図）が東西約2.98m（1.5間）、南北4.8m以上（2間以上）を測る。

#### SB10

東西の通りが一致するため礎石建物SB11と同一様の可能性も若干あるが、地山が段をなして、高低差が存在するためここでは別棟と考えておく。東半分は、A-3区調査区内にまたがる。（第199図）

東西約4.95m（2.5間）、南北約3.9m（2間）を測る。北東隅に0.98m×0.5mの張り出しを持つ。比較的礎石の残存状況が良く、南通りで見れば、西より約1.95m、2m、1mを測り、東側通りで見れば、南より約0.98m、0.289mを測る。

#### SX03

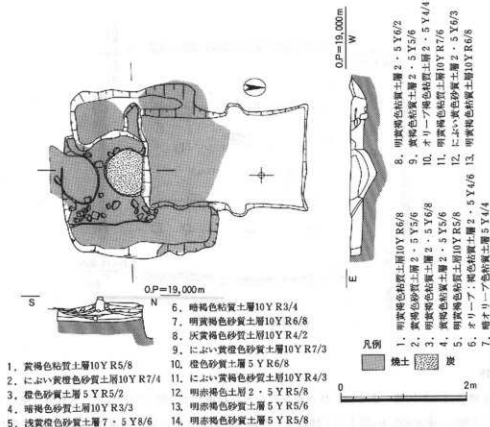
SX03は、調査区中央部に位置する（第200図）。焼窯室NO. 1は、検出長0.75m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。焼窯室NO. 2は、検出長0.75m、深さ0.2mを測る。上面の遺構によってつぶされているため、遺構全形をつかめなかった。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第201図-1～4は、肥前磁器である。1・2は、碗の蓋である。1は、内外面に成り物文が描かれている。2は、口径9.7cm、器高2.5cmを測る。外面には、山水文。内面には、草花文がそれぞれ描かれている。3・4は、皿である。3は、松竹梅文。4は、唐草文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。5は、京焼系灰釉器碗である。口径9.2cm、器高5cm、高台径3.2cmを測る。高台は無釉である。6は、伊賀・信楽系鉄釉土瓶である。口径6.8cm、器高10.2cmを測る。外面底部以外は、鉄釉を掛けている。また、外面底部に煤が付着している。7は、土人形の般若の面である。

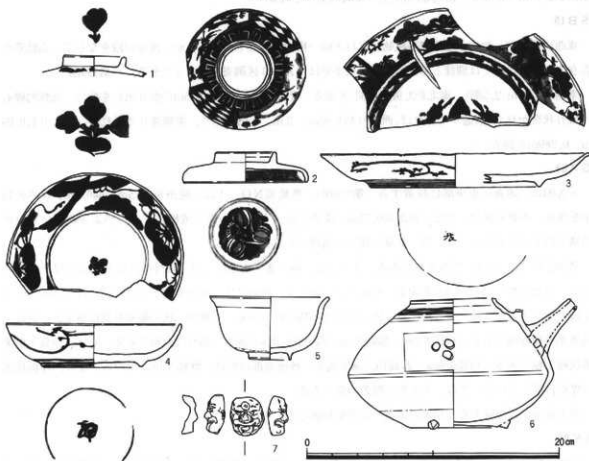
出土遺物から概観すると18世紀中頃～19世紀初頭と考えられる。

#### SE06

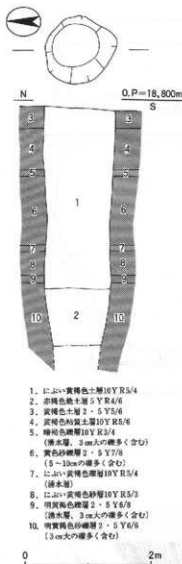
第202図SE06は、調査区東壁沿い南側に位置する。平面形は円形を呈し、直径0.1m、深さ3.75m以上を



第200図 SX03遺構図



第201図 SX03出土遺物



1. におい黄褐色土層10Y R5/4
2. 赤褐色粘土層5 Y R4/6
3. 黄褐色土層2・5 Y5/6
4. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
5. 緑褐色砂層10Y R3/4  
(清水層、3cm大の礫多く含む)
6. 黄褐色砂層2・5 Y7/8  
(5〜13cmの礫多く含む)
7. におい黄褐色砂層10Y R5/4  
(清水層)
8. におい黄褐色砂層10Y R5/3
9. 明黄褐色砂層2・5 Y6/8  
(清水層、3cm大の礫多く含む)
10. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/8  
(3cm大の礫多く含む)

第202図 SE06遺構図

### S K 613

S K 613は、調査区中程の西側に位置する（第207図）。平面形は不整形を呈し、全長1.1m、幅0.85m、深さ0.4mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第209図-1は、肥前磁器染付蓋である。口径9cm、器高2.8cmを測る。松文が描かれている。2は、京焼系御神酒徳利。高台から上には、青色顔料が塗られている。高台内には、「上口火入又」の墨書がある。3は、丹波焼鉢である。外面には、鉄釉が掛けている。また、外面口縁部には二線の波線を施す。

出土遺物から概観すると18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

### S I 16

S I 16は、調査区中央部に位置する（第208図）。掘形の平面形は円形を呈し、直径1.25m、深さ0.6mを測る。甕は、大谷焼で上部を欠くが後述するS I 05などと同じ器形のものと考えられる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第209図-4・5は、土師質土器である。4は、皿である。口径10.2cm、器高（推）2.5cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部には指頭瓦調整がみられる。5は、焙烙である。口

測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第203図-1は、肥前磁器染付碗である。口径10.5cm、器高5.5cm、高台径5.5cmを測る。外面は、草花文を施す。2は、常滑焼皿である。型押し整形を呈す。3は、陶器鉢である。口径26.5cm、器高7.5cmを測る。産地は不明である。4は、鉄釉陶器甕である。口径29cm、器高18.5cmを測る。二足の足と一耳がみられる。外面体部から内面口縁部まで、鉄釉が掛けられている。また、底部には、穴が2ヶ所開けられていることから、植木鉢として使用していたか？5は、土師質土器焙烙である。口径（推）40.5cmを測る。口縁部は低く、断面が三角形をなすタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整、外面底部は未調整である。外面口縁部に、耳が1ヶ所みられる。難波洋三氏の分類G類に属する。内外面には煤が付着している。6は、堺焼播鉢である。口径40.7cm、器高14.5cmを測る。播目は密に施し、底部際から口縁部外縁部の直下まで回転ヘラケズリを施している。白神典之氏の分類II類に属する。

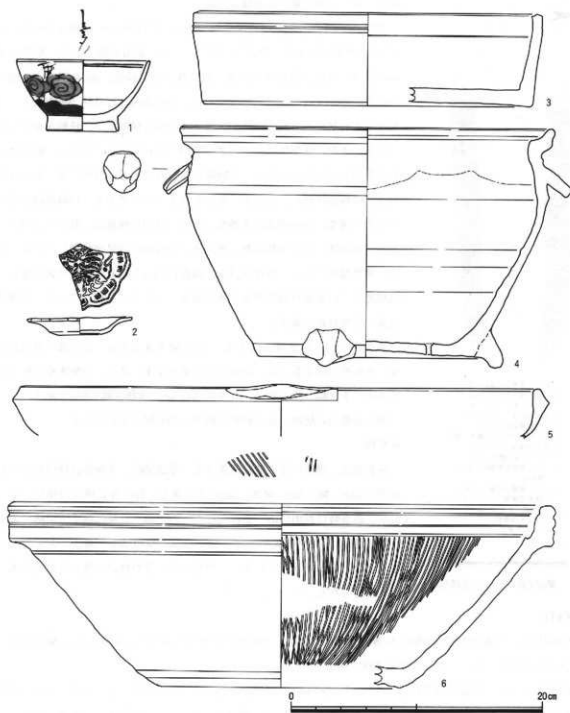
第204図-1・2は、屋瓦である。1は、軒丸瓦である。瓦当部の直径15.5cm、連珠数13個を数える。左巻三ツ巴文を呈す。2は、均整唐草文軒平瓦である。上弦幅（推）24cm、瓦当部高4.3cm、文様区幅3.8cmを測る。

出土遺物から概観すると18世紀後半～19世紀と考えられる。

### S E 12

S E 12は、調査区中央部に位置する（第205図）。平面形は楕円形を呈し、長径1.55m、幅1.3m、深さ1.6m以上を測る。井戸枠瓦積みの井戸であったが、調査時に長雨にあい崩れてしまった。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第206図は、井戸枠瓦である。全長27cm、幅30.5cmを測る。矢先のようなタタキ目を二列入れている。この井戸が、井戸枠瓦を巻いた型式であったと考えられる。



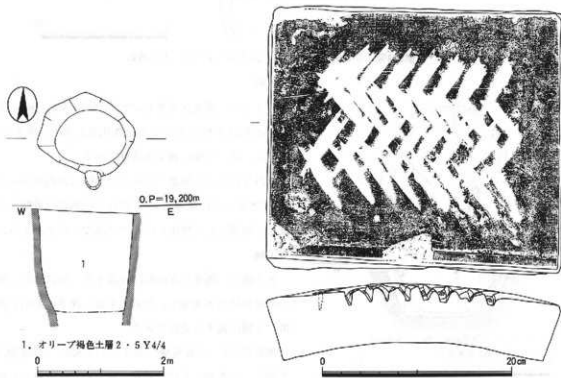
第203図 SE06出土遺物(1)

径27cm、器高(推)4cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。口縁部の上部をへらで面取りしている。外面には煤が付着している。6は、肥前磁器染付碗である。口径10.2cm、器高6cm、高台径4cm測る。「くらわんか手」の碗である。外面には草花文が描かれている。大橋康二氏の播年Ⅳ期に属する。

出土遺物から概観すると18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

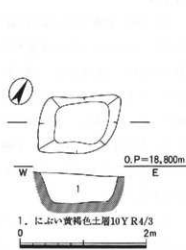


第204図 SE06出土遺物(2)

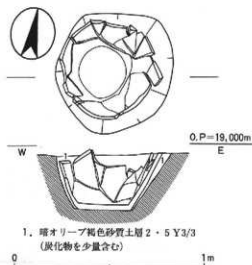


第205図 SE12遺構図

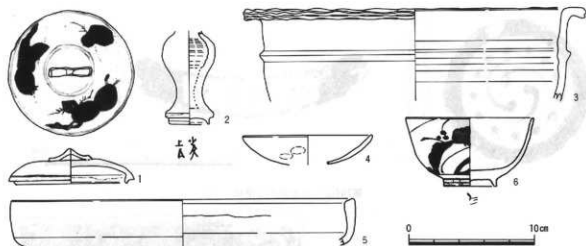
第206図 SE12出土遺物



第207図 SK613遺構図



第208図 SI16遺構図



第209図 SK613 (1-3)・SI16 (4-6) 出土遺物

S I 05

S I 05は、調査区北東部に位置する(第210図)。掘形の平面形は不整形円形を呈し、検出長1.35m、深さ0.5mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第211図は、大谷焼壺である。口径66cm、器高38.5cmを測る。内外面ともに無釉である。内面に白色の付着物がみられる。便壺として使用したのではないかと考えられる。

S I 08

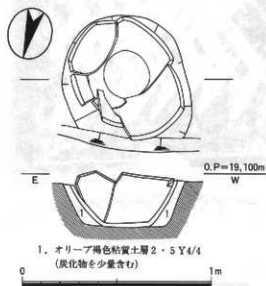
S I 08は、調査区北西部に位置する(第212図)。掘形の平面形は円形を呈し、直径2.45m、深さ0.35mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第213図は、大谷焼壺である。口径62cm、器高39.2cmを測る。内外面ともに、鉄釉を横方向にハケ塗りをする。外面底部には、ハナレ砂痕みられる。

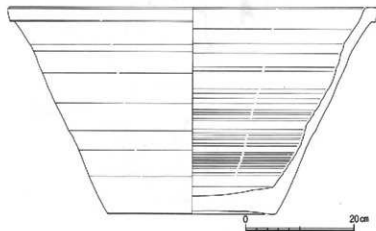
S I 10

S I 10は、調査区中央部に位置する(第214図)。掘形の平面形は不整形方形を呈し、長辺0.63m、短辺0.48m、深さ0.3mを測る。S I 10の北側には、S I 11・12を検出した。年代観は、S I 10の方がやや古く、作り変えられる際に、北側に移動したと考えられる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第215図は、大谷焼壺である。口径55cm、器高39.2cmを測る。内外面ともに、鉄釉を掛けられている。S I 08と同じタイプである。

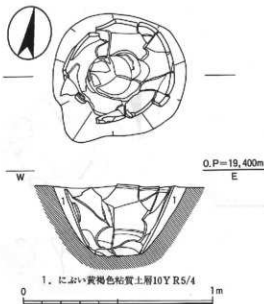


第210図 S I 05遺構図

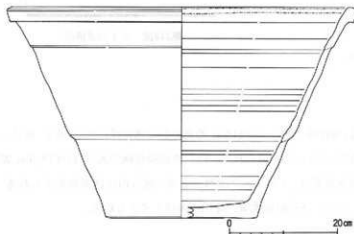


第211図 S I 05出土遺物

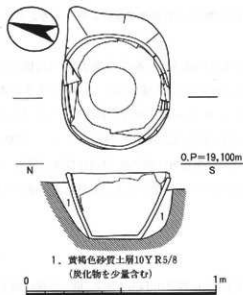




第212図 S I 08遺構図



第213図 S I 08出土遺物



第214図 S I 10遺構図

#### S I 19

第216図 S I 19は、調査区中央部に位置する。平面形は円形を呈し、直径0.55m、深さ0.17mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第217図は、万古采無釉蓋物の蓋である。口径6.2cm、器高2.5cmを測る。外面は布目調整をし、内面には指頭圧調整が見られる。19世紀代頃と考えられる。

#### S I 24

S I 24は、調査区中央部やや南側に位置する(第218図)。平面形は楕円形を呈し、長径0.75m、幅0.65m、深さ0.27mを測る。また、北側に S I 15を検出した。年代観も同時期で、2基一組便壺と考えられ、おそらく小便用と大使用として使い分けられていたと思われる。Ⅲ-3期にぞくする遺構である。

第219図は、大谷焼壺である。口径58cm、器高32cmを測る。内面体部から底部にかけて、鉄釉が塗られている。外面・口縁部は無釉である。外面底部全体に、ハナレ砂痕が見られる。

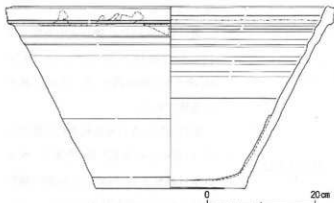
#### S I 28

S I 26は、調査区北側に位置する便壺遺構である(第220図)。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.65m、深さ0.15mを測る。壺は上部を欠くが S I 05などと同じ器形のものであるⅢ-3期に属する遺構である。

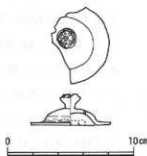
第221図-1は、肥前磁器染付蓋物である。口径6cm、器高2.5cmを測る。19世紀前半頃と考えられる。

#### S K 605

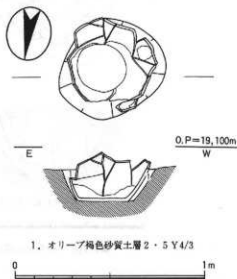
S K 605は、掘形の平面形は不整円形を呈し、検出長0.65m、深さ0.45mを測る(第220図)。Ⅲ-2期に属する遺構である。



第215図 S I 10出土遺物



第217図 S I 19出土遺物



第216図 S I 19遺構図

第221図-2・3は、肥前磁器である。2は、染付皿である。口径14cm、器高3.2cm、高台径7.7cmを測る。見込みには、蛇ノ目輪ハギを呈し、コンニャク印判による五弁花がみられる。3は、青磁染付碗である。口径11.5cm、器高6.5cm、高台径4.5cmを測る。見込みにある五弁花は、コンニャク印判による。高台内には渦福がみられる。2・3は、大橋康二氏の編年IV期に属する。よって、18世紀後半頃の時代の遺構と考えられる。

#### S K 593

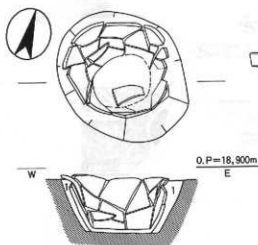
S K 593は、掘形の平面形は不整円形を呈し、検出長0.7m、深さ0.47mを測る(第220図)。便桶遺構である。S K 593に切り合っているS I 26は、便桶を作り替えられる際に、大谷焼便壺変えられたと考えられる。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第221図-4・5は、肥前磁器である。4は、染付蓋である。口径8.8cmを測る。体部表側には、松文が描かれている。5は、色絵碗である。口径14.5cm、器高8cm、高台径8cmを測る。焼継ぎ痕がみられる。火災に遭ったのか釉が溶けている。4・5は、大橋康二氏の編年IV期と考えられる。6は、土師質土器焙烙である。口径35.5cm、器高(推)5.5cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。調整は、口縁部内外面がヨコナア調整、内面底部はナア調整を施し、外面底部は未調整である。難波洋三氏の分類E類に属する。外面には煤が付着している。7は、伊賀・信楽系陶器蓋である。外面には、塗土を施し、白土のいっちゃん掛けによって草花文を描いており、一部緑釉がみられる。

出土遺物から概観すると、18世紀後半と考えられる。

#### S K 604

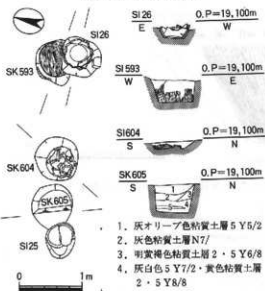
S K 604は便壺遺構で、掘形の平面形は円形を呈し、直径0.7m、深さ0.14mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である(第220図)。



1. 黄褐色粘質土層10Y R5/8  
(2~3cm大の礫多く含む)

0 1m

第218図 S I 24遺構図



第220図 S I 26・S K 593・S K 604・S K 605遺構図

#### S K 229

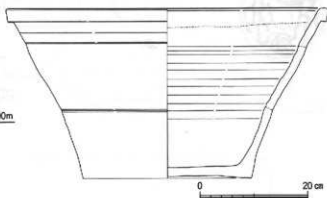
第225図 S K 229は、調査区の東南部に位置する。平面形は不整形円形を呈し、検出長0.52m、深さ0.15mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第226図は、埴野焼緑釉皿である。口径12cm、器高3.5cm、高台径5cmを測る。見込みには、蛇ノ目轆ハギがみられる。17世紀末~18世紀前半の時期と考えられる。

#### S K 271

第227図 S K 271は、調査区東南部に位置する。平面形は不整形で、検出長0.38m、深さ0.4mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第228図は、京焼風陶碗である。見込みに鉄釉で山水文が描かれている。また、高台内中央には、円刻がみら



第219図 S I 24出土遺物

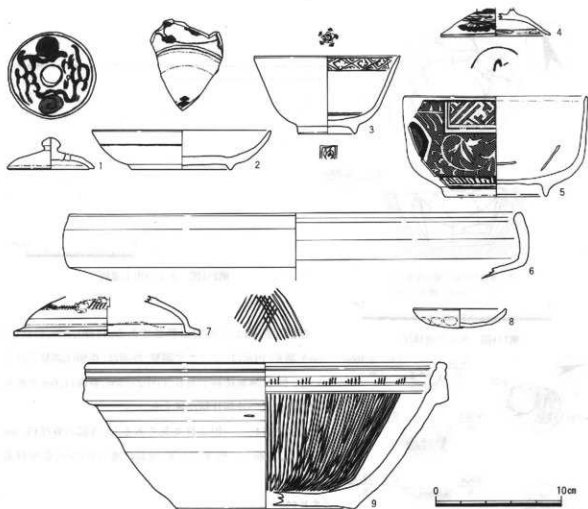
第221図-8は、土師質土器皿である。口径7.5cm、器高1.5cmを測る。内面は、ヨコナゲ調整、外面は、指頭圧調整されている。9は、堺焼播鉢である。口径27.5cm、器高11.6cmを測る。白神典之氏の種類Ⅱ類に属する。

第222図は、三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当部の直径15.5cmを測る。左巻三ッ巴文である。火災に遭ったのか、煤が付着している。

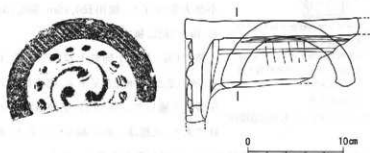
#### S K 606

S K 606は北壁沿い西側に位置する(第223図)。平面形は不整形を呈し、検出長0.75m、幅0.75m、深さ0.48mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第224図-1は、土師質土器皿である。口径(推)7.5cmを測る。灰白色2.5 Y8/2を呈する。内面はナゲ調整、外面は指頭圧調整を施している。2は、肥前磁器蛇ノ目凹型高台の青磁鉢である。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属する。図には載せていないが、他の出土遺物と合わせて概観すると、17世紀後半と考えられる。



第221図 S I 26 (1)・SK605 (2・3)・SK593 (4-7)・SK604 (8・9) 出土遺物 (1)



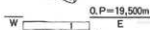
第222図 SK604出土遺物 (2)

れるが、印は押されていない。その他に、図には載せていないが、17世紀後半～18世紀後半頃の遺物が出土していることを考えて、17世紀後半～18世紀後半と考えられる。

#### SK329

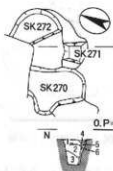
SK329は、調査区中央部に位置する(第229図)。平面形は不整形を呈し、全長3.3m、幅1.65m、深さ1.2mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第230図-1は、土師質土器皿である。口径7.7cm、器高1.2cmを測る。灰白色2.5Y8/2を呈する。内面はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。2は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。高台径4.5cmを測る。高台は削り出し輪高台である。田口昭二氏の編年(田口1985年)によると、登り窯Ⅳ期に属する。3は、肥前敷き染付碗である。

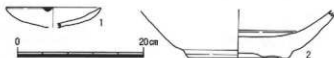


1. 濃い黄褐色土層 2・5 Y6/4 (2cmの礫を多量に含む)
2. 濃い黄褐色粘質土層 10Y R4/3
3. 暗褐色粘質土層 10Y R3/3
4. 暗褐色粘質土層 2・5 Y5/6
5. 濃い黄褐色粘質土層 10Y R6/4
6. 褐色粘質土層 10Y R4/6

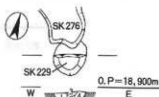
第223図 S K 606遺構図



第227図 S K 271遺構図

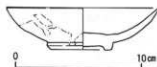


第224図 S K 606出土遺物



1. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/6
2. オリーブ褐色粘質土層 2・3 Y4/4
3. 黄褐色粘質土層 10Y R3/6
4. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8

第225図 S K 229遺構図



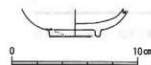
第226図 S K 229出土遺物



1. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/6 (炭化物多量、4cmの礫を含む)
2. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 (炭化物多量を含む)
3. 褐色粘質土層 10Y R4/4
4. 黒褐色粘質土層 10Y R2/2 (炭化物多量を含む)
5. 暗褐色粘質土層 10Y R3/4 (炭化物多量を含む)
6. 灰褐色粘質土層 2・5 Y5/4



第228図 S K 271出土遺物



## S K 282

S K 282は、東壁沿い中央部に位置する(第231図)。平面形は円形を呈し、直径0.8m、深さ0.2mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第232図-1は、土師質土器である。胎土は浅黄褐色10Y R8/3を呈す。調整は、口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整、外面底部に糸切り痕を残す。2は、京焼系陶器碗である。口径11cm、器高4cm、高台径3.8cmを測る。見込みに、呉須と鉄釉で梅花文を描いている。

出土遺物を概観すると、18世紀前半~18世紀後半と考えられる。

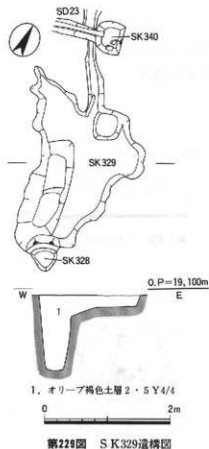
## S K 334

S K 334は、北壁沿い中央部に位置する(第334図)。平面形は不整形を呈し、検出長1.1m、深さ0.05mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

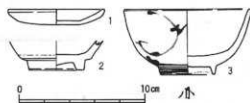
第234図は、塚焼擂鉢である。口径36cm、器高16.5cmを測る。底部に高台を呈す。片口部に指頭圧痕がみられ、また、外面の調整は、底部際から口縁部外縁帯やや下部まで回転ヘラケズリ調整を施している。白神典之氏のカテゴリI類に属する。図には載せていないが、他の出土遺物と概観すると、18後半と考えられる。

## S K 350

S K 350は、調査区中央部に位置する(第235図)。平面形は不整形で、全長1.4m、幅0.75m、深さ0.35mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。



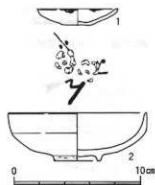
第229図 SK 329遺構図



第230図 SK 329出土遺物



第231図 SK 282遺構図



第232図 SK 282出土遺物

第236図-1・2は、肥前磁器である。1は、蓋である。口径8.8cm、器高3cm、つまみ径3.8cmを測る。外面体部に、格子文が描かれている。2は、二重網目文染付碗である。口径8.8cm、器高5.5cm、高台径3.8cmを測る。1・2は、大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。3は、土師質土器焙烙である。口径27.5cm、器高5.8cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。胎土は10Y R 8/2灰白色を呈し、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整である。また、内外面ともに、煤が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。18世紀中頃～18世紀後半の時代と考えられる。

#### SK 528

SK 528は、北壁沿い中央部に位置する(第237図)。平面形は楕円形を呈し、長径0.98m、幅0.52m、深さ0.27mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

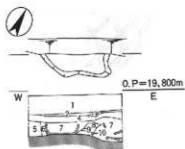
第238図-1は、京焼系陶磁器である。口径9.2cm、器高5cm、高台径3.3cmを測る。高台は無軸で、削出し輪高台である。外面体部に鉄絵がみられる。

#### SD 30

SD 30は、検出長4.85m、幅1.45m、深さ0.27mを測る(第237図)。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第238図-2は、瀬戸、美濃焼染付碗である。3・4は、瓦灯である。3は、土師質土器瓦灯傘である。口径20.8cm、器高21.9cmを測る。体部は、輪積み成形され、別に成形された受け皿部を、その上に嵌込めてある。外面は、ナデ調整の後、ミガキ調整されている。内面は、体部上部にはナデ調整それより下部は指頭圧痕がみられる。4は、瓦灯身部である。(口径18.5cm、器高5.6cmを測る。)底部の円盤の上に、粘土組輪積みで体部を接合する。更に、見込み部に、受け皿部を接合し、外面体部は回転ナデ調整を施し、内面は指頭圧調整がみられる。

第239図は、平瓦である。体部の模様は、鉄櫛によって施されている。



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4  
(2cm以下の厚多量に含む)
2. 黄褐色粘土層 10 Y R 5/4  
(2cm以下の厚多量に含む)
3. オリーブ褐色砂質土層 3・5 Y4/3
4. 黒褐色砂質土層 2・5 Y2/2
5. にじみ黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3
6. 明黄褐色砂質土層 10 Y R 6/8
7. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3  
(10cm以上の厚含む)
8. にじみ黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
9. 緑色粘質土層 7・5 Y R 6/8
10. 緑オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3

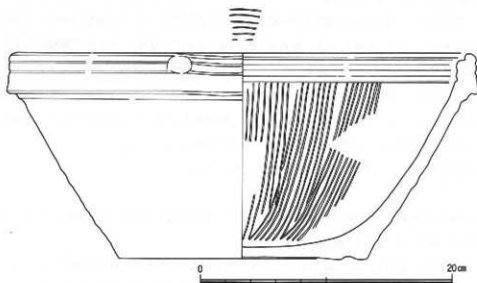


第233図 S K 334遺構図

#### S K 228

S K 226は、東壁沿い中央部に位置する(第245図)。平面形は半円形を呈し、直径0.75m、深さ0.4mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第246図-1は、瀬戸・美濃焼青磁碗である。口径10cm、器高3cm、高台径4.7cmを測る。2は、髹焼摺鉢である。口径(推)41.2cmを測る。摺目は密で、回転ヘラケズリが口縁部外縁帯まで施されている。白神典之氏分類Ⅱ類に属する。よって、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。



第234図 S K 334出土遺物

第240図は、背文無の「寛永通寶」である。直径2cm、厚さ0.1cmを測る。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。

#### S K 611

第241図 S K 611は、調査区中程の西側に位置する。平面形は不整形円形を呈し、全長1.04m、幅0.75m、深さ0.19mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第242図は、髹焼摺鉢である。口径41cm、器高16.3cmを測る。見込みにおける摺目が、中央で交差している。高台を呈し、回転ヘラケズリが、底部際から口縁部外縁帯まで施されている。また、口縁部外面には、自然釉が掛けられている。白神典之氏分類Ⅰ類に属する。

#### S K 213

S K 213は、調査区東南部に位置する(第243図)。平面形は円形を呈し、直径0.95m、深さ0.35mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第244図は、肥前磁器碗である。草花文の「くらわんか手」の碗である。口径9cm、器高5.3cm、高台径3.7cmを測る。大橋康二氏の編年Ⅳ期

に属する。図には載せていないが、19世紀前半の遺物もみられ、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。



1. 黒色灰化粘土層10Y R2/1
2. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6
3. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y5/4
4. 明黄褐色土層2・5 Y7/6

第235図 SK350遺構図

### SK230

SK230は、調査区東南部に位置する(第247図)。平面形は円形を呈し、直径0.6m、深さ0.35mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第248図は、柿輪灯明受皿である。口径6cm、器高1.2cmを測る。外面に煤が付着している。

### SK231

SK231(第247図)の平面形は、不整楕円形を呈し、検出長1.1m、幅0.62m、深さ0.38mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第248図-2・5・6は、土師質土器で

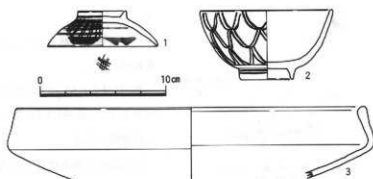
ある。2は、皿である。口径6.5cm、器高1.5cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整を施し、外面底部には左糸切り痕がみられる。5は、火鉢である。高台径(推)16cmを測る。全体にヨコナデ調整がみられ、口縁部内外面と体部と底部際をハケによって面取りをしている。内外面に煤が付着している。6は、焙烙である。口径(推)40.5cmを測る。口縁部と底部の境目が突き出るタイプである。難波洋三氏の分類G類に属する。外面に煤が付着している。3は、肥前磁器染付碗である。外面体部に草花文が描かれており、焼継痕もみられる。4は、丹波焼徳利である。口径6cmを測る。内外面に鉄軸を掛けている。

出土遺物を概観すると、18世紀後半~19世紀初頭と考えられる。

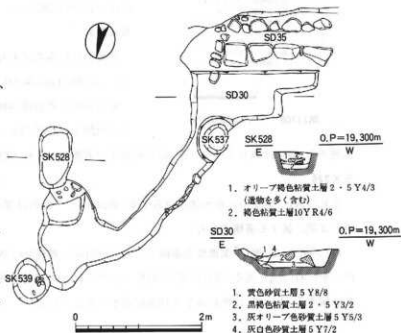
### SK288

SK288は、調査区東側の中央部に位置する(第249図)。平面形は不整長方形を呈し、全長1.35m、幅0.5m、深さ0.75mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第250図-1・2は、肥前磁器染付碗である。1は、高台径4.3cmを測り、焼継ぎ痕がみられる。2は、広東型碗である。口径9.8cm、器高5.9cm、高台径5.2cmを測る。大橋康二氏の編年V期に属する。3は、三田青磁皿である。焼継ぎ痕があり、見込みには型押しによる二匹の鯉がみられ、鉄軸が施されている。4は、

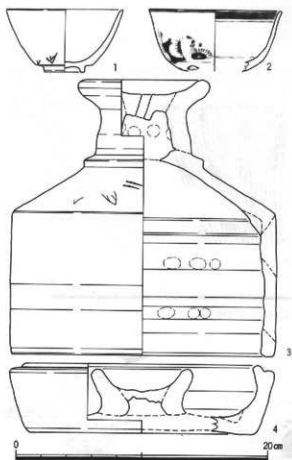


第236図 SK350出土遺物

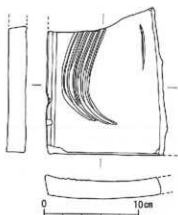


第237図 SK528・SD30遺構図





第238図 SK 528 (1)・SD30 (2~4) 出土遺物 (1)



第239図 SD30出土遺物 (2)



第240図 SD30出土遺物 (3)  
(S=1/2)



第241図 SK 611遺構図

土師質土器焙烙である。口縁部と底部との境目が突出するタイプである。口縁部内外面はヨコナア調整、内面底部はナテ調整、外面底部は未調整である。難波洋三氏の分類G類に属する。外面底部に煤が付着している。

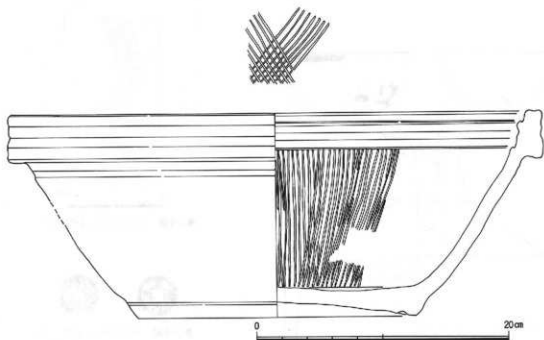
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀と考えられる。

#### SK 356

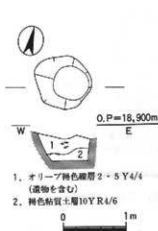
SK 356は、調査区中央部に位置する (第251図)。平面形は不整形で、全長1.2m、幅0.55m、深さ0.45mを測る。III-3期に属する遺構である。

第252図-1は、肥前磁器染付碗である。口径9cm、器高5.9cmを測る。外面体部に竹文が描かれている。大橋康二氏の福年IV期に属する。2は、柿釉灯明受皿である。口径6cm、器高1.4cmを測る。3は、京焼系瑠璃釉土瓶である。内面は無釉である。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀と考えられる。

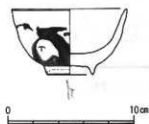


第242図 SK 611出土遺物



1. オリーブ褐色線画 2・5 Y 4/4  
(遺物を含む)
2. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6

第243図 SK 213遺構図

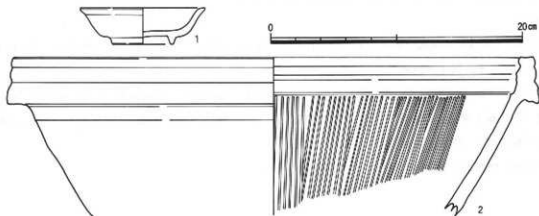


第244図 SK 213出土遺物

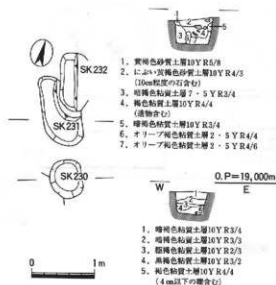


1. 黒褐色砂質土層 7・5 Y R 3/2
2. 褐色粘質土層 7・5 Y R 3/4
3. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6  
(遺物、6cmの石を含む)
4. 暗褐色粘質土層 10 Y R 2/3  
(遺物、木屑を含む)
5. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4

第245図 SK 226遺構図



第246図 SK 226出土遺物



第247図 SK231・230遺構図

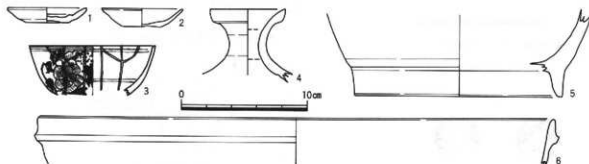
形は不整形長方形を呈し、全長0.85m、幅0.45m、深さ0.45mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第257図は、型紙摺絵磁鉢である。産地は関西系と考えられる。高台径4.5cmを測る。2は、京焼系灰釉合子である。口径7cm、器高4.4cmを測る。外面底部は無釉である。18世紀後半～19世紀と考えられる。

#### SK485

第258図SK465は、調査区北西部に位置する。平面形は不整形長方形を呈し、全長1.75m、幅0.6m、深さ0.85mを測る。18世紀後半～19世紀前半の遺物が、多量に出土した遺構である。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第259図1・2は、肥前系磁器染付鉢である。1は、広東型小鉢である。口径13cm、器高6.5cm、高台径6.5cmを測る。高台は削り出し輪高台である。内面体部に雨竜文、外面体部には火焰宝珠文が描かれている。2は、鉢である。口径21cm、器高6.5cm、高台径8.5cmを測る。内面全体に龍文が描かれている。高台内には、「大明成化年製」銘がみられる。3・4は、柿釉灯明皿である。3は、口径6.5cm、器高1cmを測る。4は、口径11cm、器高2cmを測る。見込みには刻印がみられる。5は、褐釉陶器蓋である。口径8.4cm、器高2cmを測る。内面には、釉が掛けられていない。6は、萩焼陶器ピラ掛け茶碗である。口径7.5cm、器高5cm、高台径3.2cmを測る。7は、伊賀・信楽焼土瓶である。外面体部には、鉄釉で山水文を描き、部分的に緑釉と褐色釉を施す。外面底部に煤が付着している。8は、京焼系陶器徳利である。外面体部に灰釉を掛け、鉄釉で柳文を描いている。外面底部は無釉である。9・10は、瓦質土器である。9は、火鉢である。口径15cm、器高11.5cmを測る。内外面ともに煤が付着している。10は、羽釜である。口径16.5cmを測る。型造り成形で、



第248図 SK230 (1)・SK231 (2~6) 出土遺物

#### SK422

SK422は、調査区南西部に位置する(第253図)。平面形は不整形で、検出長1.85m、幅1.8m、深さ0.3mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第254図-1 肥前磁器染付碗である。口径(推)10.5cmを測る。2は、瀬戸・美濃焼。灰釉緑釉流し除刻流水文水甕である。高台径18cmを測る。

第255図は、「寛永通寶」である。直径2.2cm、厚さ0.1cmを測る。

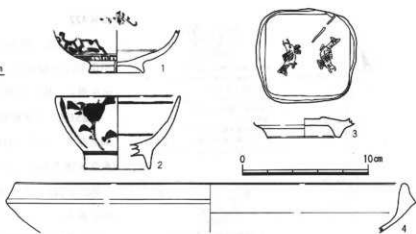
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀と考えられる。

#### SK428

第256図SK428は、調査区西南部に位置する。平面



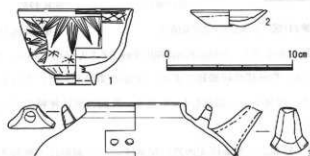
第249圖 S K 288遺構圖



第250圖 S K 288出土遺物



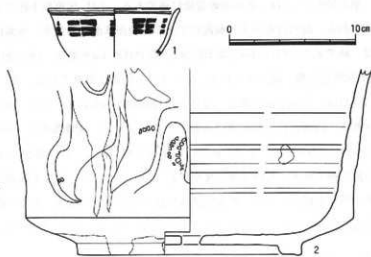
第251圖 S K 356遺構圖



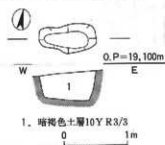
第252圖 S K 356出土遺物



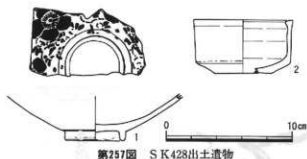
第253圖 S K 422遺構圖



第254圖 S K 422出土遺物 (1)

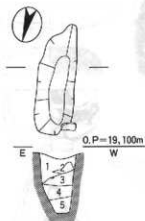


第256圖 S K 428遺構圖



第257図 SK428出土遺物

外面鈔下は未調整で、それ以外はヨコナデ調整を施している。また、外面底部に煤が付着している。11は、陶器壺である。座地は不明である。口径13.5 cm、器高17 cmを測る。外面は白銅釉を塗り、その上から緑釉を掛けている。内面体部から底部にかけて鉄釉を施している。



第258図 SK465遺構図

1. 灰オレンジ色粘質土層 5 Y5/2
2. 灰白色粘土層 5 G Y8/1
3. 淡黄色粘質土層 5 Y7/3
- (5-10m大の礫多量、遺物含む)
4. 灰色粘質土層 7・5 Y5/1
5. 灰色粘質土層 7・5 Y6/1



第260図は、軒平瓦である。瓦当部高4.4 cm、文様区幅2.5 cmを測る。文様区には均整唐草文が施されている。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀代と考えられる。

#### SK499

SK499は、調査区中央部に位置する(第261図)。平面形は不整形で、全長1.6 m、幅0.95 m、深さ0.7 mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第262図-1～2は、肥前磁器である。1は、広東型碗の蓋である。口径9 cm、器高3 cm、つまみ径5 cmを測る。高台内と見込みに水鳥文が描かれている。2は、広東型碗である。口径7.5 cm、器高5.7 cm、高台径6 cmを測る。草花文が外面から内面に描かれている。1・2は、大橋康二氏の編年Ⅴ期に位置する。

第263図は、丸瓦である。全長22.2 cm、幅12.4 cm、玉縁部長3.2 cmを測る。丸瓦部凹面には、甲板調整痕と玉縁部には編痕がみられる。

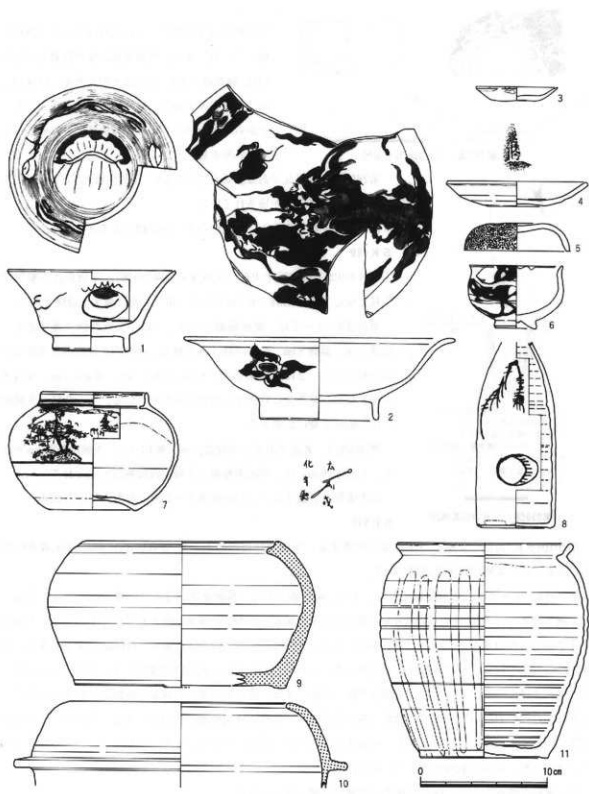
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

#### SK537

第264図SK537は、北壁沿い中央部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.35 m、幅0.27 m、深さ0.22 mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第265図-1・2は、肥前磁器である。1は、染付蓋である。外面全体に草花文が描かれている。2は、龍文碗である。口径10.5 cm、器高5.6 cm、高台径4 cmを測る。内面には龍文が描かれている。1・2は、大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。3は、丹波焼鉢である。口径15 cm、器高5.9 cmを測る。口縁部・底部以外に、鉄釉が掛けられている。外面体部には、火災に遭ったのか、もしくは、火の側で使用していたのかわからないが、釉が溶けている。4・5は、土師質土器である。4は、焙烙である。口縁部と底部が、直立するタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整である。難波洋三氏分類D類に属する。5は、火入れである。外面体部はヨコナデ調整、その後、赤色の顔料を塗っている。内面体部はナデ調整、底部は未調整でハナレ砂が付着している。内面には煤が付着している。

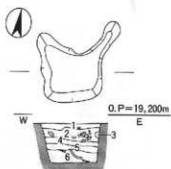
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。



第259图 SK 465出土遗物 (1)



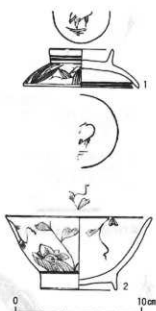
第260图 SK 465出土遗物 (2)



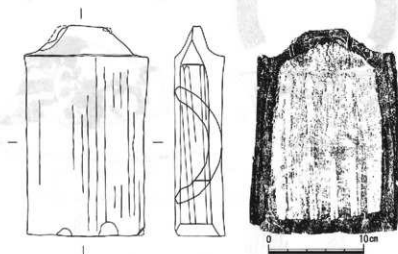
1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/6  
(遺物を含む)
2. オリーブ褐色土層 2・5 Y 4/4  
(遺物、3-5 cmの礫を含む)
3. 明灰褐色粘質土層 10 Y R 4/8
4. におい灰褐色粘質土層 10 Y R 4/3
5. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
6. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y 4/2  
(遺物、30cm以上の礫を含む)

0 2m

第261図 SK499遺構図



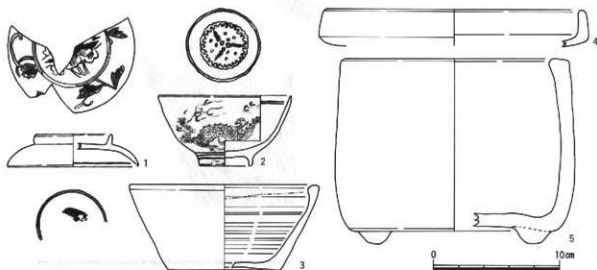
第262図 SK499出土遺物(1)



第263図 SK499出土遺物(2)



第264図 SK537遺構図



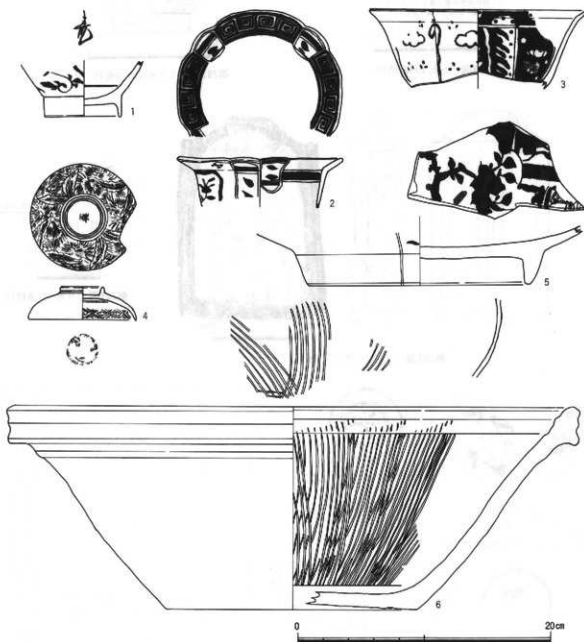
第265図 SK537出土遺物



第266図 SK581遺構図

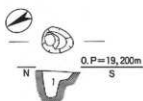


第267図 SK598遺構図



第268図 SK598 (1・2)・SK581 (3～6) 出土遺物

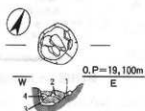




1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4  
(炭化物多量を含む)



第269図 SK479造構図



1. 褐色砂質土層10Y R/4  
2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3  
3. 灰黄褐色粘質土層10Y R/4/2  
4. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2

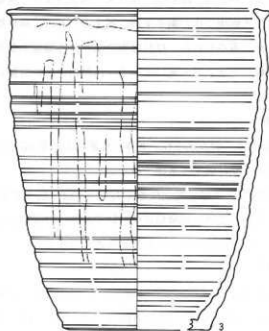
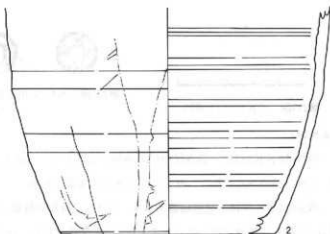
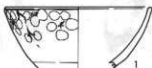


第270図 SK594造構図

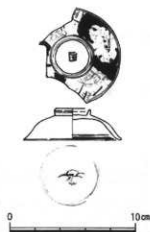


1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4  
2. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6  
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6

第272図 SK237造構図



第271図 SK594 (1・2)・SK479 (3) 出土遺物



第273図 SK237出土遺物(1)

S K 581

第266図S K581は、調査区中程の西側に位置する。平面形は不整形で、全長1.1m、幅0.8mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第268図3~5は、肥前磁器である。3は、八角形染付鉢である。口径(推)17cmを測る。焼継ぎ痕がみられる。4は、染付蓋である。口径8.5cm、器高2.5cm、つまみ径3.3cmを測る。外面体部に、草花文を描いている。5は、染付鉢である。内面は、赤絵具で草花文を描き、また、焼継ぎ痕もみられる。3~5は、大橋康二氏の編年V期に属する。6は、景焼播鉢である。口径43cm、器高16cmを測る。内面口縁部の凸帯が二本みられる。摺目は密に施し、外縁部の張りも大きい。また、底部際から口縁部外縁帯の直下まで、回転ヘラケズリを施している。白神典之氏の分類Ⅱ類に属する。よって、18世紀後半~19世紀初頭と考えられる。

S K 598

S K598は、調査区中程の北側に位置する(第267図)。平面形は円形を呈し、直径0.79m、深さ0.5mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第268図1・2は、肥前磁器である。1は、広東型染付碗である。高台径6cmを測る。見込みに「寿」銘がみられる。2は、折縁輪花染付鉢である。口径13cmを測る。それぞれ、大橋康二氏の編年V期に属する。よって、19世紀前半~19世紀初頭と考えられる。

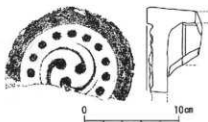
S K 479

S K479は、調査区北西部に位置する(第269図)。平面形は楕円形を呈し、長径0.5m、幅0.4m、深さ0.42mを測る。S B07に伴う礎石遺構の一つである。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第271図-3は、丹波焼突である。口径18.5cm、器高(推)25.5cmを測る。外面体部は、鉄釉を塗り、その後、緑釉を口縁部から掛けている。内面体部は、全体に鉄釉を塗ったその上に、緑釉を塗っている。18世紀後半~19世紀前半と考えられる。

S K 594

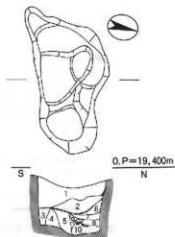
S K594は、調査区北西部に位置する(第270図)。平面形は円形を呈し、直径0.62m、深さ0.22mを測る。S K479と同様で、S B07に伴う礎石遺構である。Ⅲ-3期に属する遺構である。



第274図 SK237出土遺物(2)

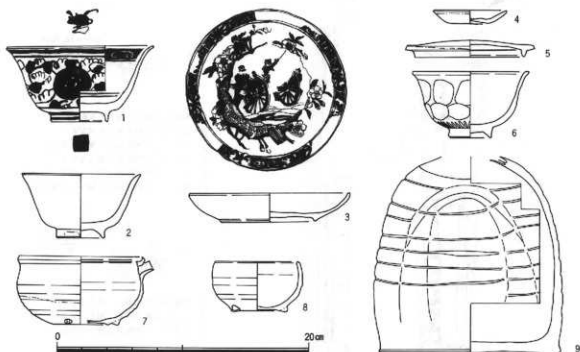


第275図 SK237出土遺物(3)  
(S=1/2)

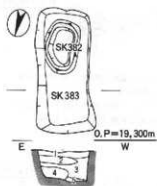


1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
2. 黄褐色砂質土層 2・5 Y3/6
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y3/4
4. 明黄褐色粘質土層 10 Y R6/8
5. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
6. 黄褐色土層 2・5 Y3/6
7. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
8. 明黄褐色砂質土層  
(10m大の礫含む)
9. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
10. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6  
(3~5m大の礫含む)

第276図 SK285遺構図

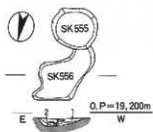


第277図 SK 285出土遺物



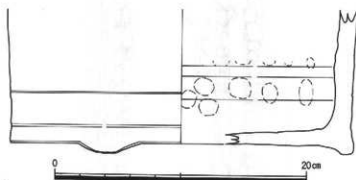
1. 暗黄褐色粘質土層 2・5 Y4/2
2. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/8
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
4. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/6
5. 黄褐色粘質土層10 Y R5/6

第278図 SK 383遺構図

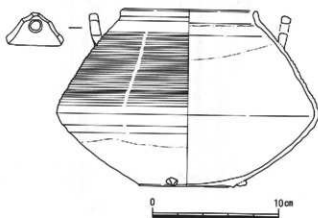


1. 灰色粘質土層 7・5 Y5/1  
(遺物含む)
2. におい黄色粘質土層 2・5 Y6/4

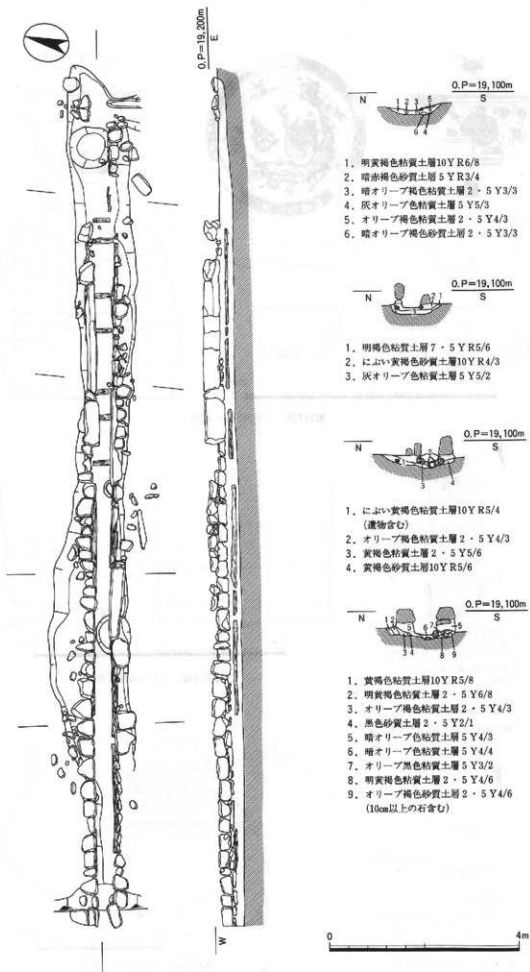
第280図 SK 556遺構図



第279図 SK 383出土遺物



第281図 SK 556出土遺物



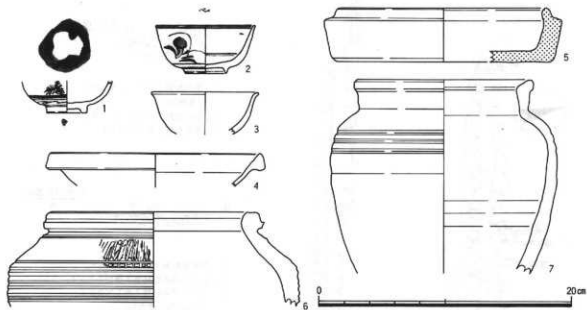
1. 明黄褐色粘質土層10 Y R 6/8
2. 暗赤褐色砂質土層 5 Y R 3/4
3. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
4. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5/3
5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
6. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 3/3

1. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/6
2. によい黄褐色砂質土層10 Y R 4/3
3. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y 5/2

1. によい黄褐色粘質土層10 Y R 5/4  
(遺物含む)
2. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
3. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
4. 黄褐色粘質土層10 Y R 5/6

1. 黄褐色粘質土層10 Y R 5/8
2. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/8
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
4. 黒色砂質土層 2・5 Y 2/1
5. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y 4/3
6. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y 4/4
7. オリーブ黒色粘質土層 5 Y 3/2
8. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
9. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/6  
(10cm以上の石含む)

第282図 S D33遺構図



第283図 S D33出土遺物

第271図-1は、京焼陶磁器碗である。口径11.5cmを測る。内面に白色釉を施されている。外面は白色釉と鉄釉で梅文を描いている。2は、丹波焼甕である。器高18cmを測る。外面体部は鉄釉を掛け、その上に緑釉を施している。

出土遺物を概観すると、19世紀初頭と考えられる。

#### S K 237

S K 237は、調査区東部に位置する(第272図)。平面形は楕円形を呈し、長径0.6m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第273図は、肥前磁器染付蓋である。口径8cm、器高2.5cm、つまみ径2.5cmを測る。大橋康二氏の編年によると、Ⅴ期に属する。

第274図は、左巻三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当部の直径13.5cmを測る。

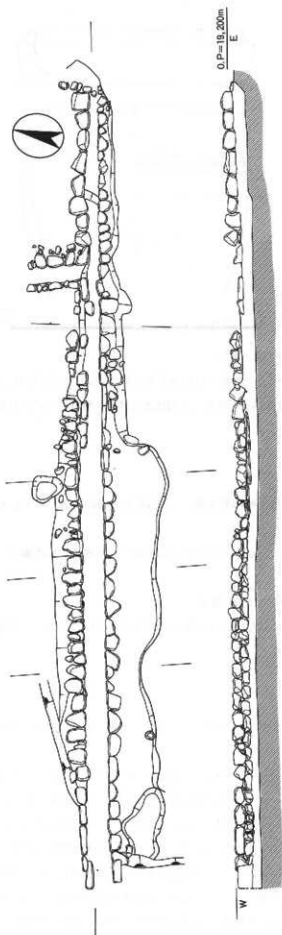
第275図は、背文無の「寛永通寶」である。直径2.2cm、厚さ0.1cmを測る。背文がみられないので、新寛永通寶と考えられる。

出土遺物を概観すると、19世紀前半と考えられる。

#### S K 285

S K 285は、調査区北東部に位置する(第276図)。平面形は不整形で、全長2.4m、幅1.05m、深さ0.75mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第277図-1は、肥前磁器端反り形碗である。口径11.7cm、器高6cm、高台径4.5cmを測る。外面に、唐草文が描かれている。また、高台内には、銘款がみられる。2は、肥前磁器青磁碗である。口径9cm、器高5.2cm、高台径4cmを測る。3は、瀬戸・美濃焼磁器皿である。銅版摺である。「帝国万歳」と描かれている。共範遺物の時期から考えて、日清・日露戦争を記念して作られたと考えられる。4は、柿釉灯明受皿である。口径5.8cm、器高1cmを測る。5・7は、京焼陶磁器である。5は、灰釉蓋物の蓋である。口径8.5cm、器高1.5cmを測る。7は、灰釉行平である。底部には、煤が付着している。6は、産地不明の白磁碗である。外面体部は亀甲状、高台際は花卉状にヘラケズりする。8は、丹波焼お歯黒壺である。内面に鉄分が付着している。9は、丹波焼鉄釉徳利である。体部の片面が大きく凹んでいる。



0.P=19,200m  
E



1. 黒色粘質土層 7・5 YR2/1 (遺物含む)
2. 黄灰色粘質土層 2・5 Y6/1
3. 黒色粘質土層 10 Y R2/1



1. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
2. におい、黄褐色粘質土層 10 Y R5/4
3. オリーブ色粘質土層 5 Y R5/4 (5cm程度の礫含む)
4. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
6. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
7. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2
8. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8
9. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
10. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8



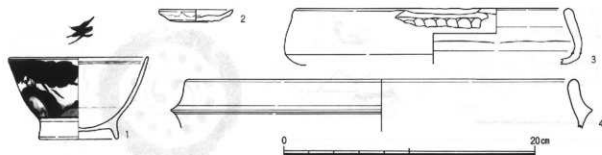
1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
2. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
3. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
4. 褐色粘質土層 10 Y R4/6
5. 黄：褐色砂質土層 10 Y R5/6 (遺物含む)
6. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2



1. 黄褐色粘質土層 10 Y R7/8
2. オリーブ色砂質土層 5 Y6/8
3. オリーブ黒色粘質土層 5 Y3/1
4. 緑灰色砂質土層 10 G Y6/1
5. オリーブ色砂質土層 5 Y6/8
6. 明黄褐色粘質土層 10 Y R6/8



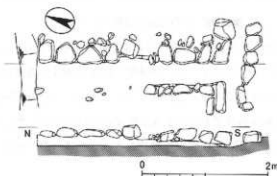
第284図 SD35遺構図



第285図 SD35出土遺物(1)



第286図 SD35出土遺物(2)  
(S=1/2)



第287図 SD45構図

出土遺物から概観すると、19世紀中頃～明治時代と考えられる。

#### SK383

SK383は、調査区中程の北側に位置する(第278図)。平面形は長方形を呈し、長辺1.9m、短辺0.7mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第279図、土師質土器火鉢である。底部の円盤の上に、粘土紐により輪積み成形で体部を接合する。その後、外面体部は、ヨコナデ調整を施している。内面体部は、指頭圧調整を施している。内面には煤が付着している。

#### SK556

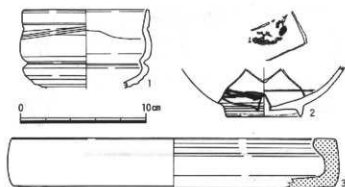
SK556は、北壁沿い中央部に位置する(第280図)。平面形は不整形で全長0.98m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第281図は、伊賀・信楽焼土甕である。口径10.5cm、器高14cmを測る。外面底部と口縁部は露胎である。その他は灰釉を掛けている。19世紀前半の遺構と考えられる。

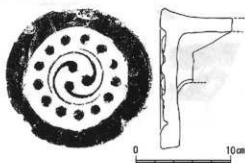
#### SD33

第282図はSD33は、西壁中央部から東西に延びる石組み溝である。検出長18.2m、幅1.5m、深さ0.3mを測る。この様な石組み溝は、宮ノ前地区の調査を通して、屋敷地境に設けられている例が多い。構造はほぼ同様である。幅0.5mの掘形に刷木を並べ、その上に花崗岩石を1、2段重ねタタキで固定している。設置年代もほぼ同時期で、18世紀末～19世紀前半である。また、石組み溝は、他の地区での検出例が少なく、設置年代も異なる。しかし、宮ノ前地区では、18世紀後半～19世紀前半に、大規模な下水設備がおこなわれたと考えられており、伊丹郷町の酒造業生産が活発になる時期と重なることから、それと大きく関係しているのではないかと考えられる。SD33はⅢ-3期に属する遺構である。

第283図-1は、瀬戸・美濃焼染付碗である。高台径3cmを測る。2は、肥前系磁器染付碗である。口径8cm、器高3.8cm、高台径3.2cmを測る。外面体部に、草花文と篆文が描かれている。3は、京焼系陶器碗で



第288図 SD45出土遺物(1)



第289図 SD45出土遺物(2)

ある。口径(推)8.5cmを測る。内外面に灰釉が掛けられている。4は、土師質土器焙烙である。口径(推)16.5cmを測る。小型のタイプで、口縁部と底部の境目が出るタイプである。難波洋三氏の分類G類に属する。5は、瓦質土器である。瓦灯身と考えられる。口径16.5cm、器高5.3cmを測る。外面には煤が付着している。6は、鉄釉陶器甕である。産地は唐津系ではないかと考えられる。口径16.5cmを測る。内外面に鉄釉が掛けられている。7は、鉄釉陶器甕である。産地は不明である。口径14cmを測る。内外面に鉄釉が掛けられている。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃～19世紀後半と考えられる。

#### SD35

SD35は、SD33の北側に位置し東西に延びる石組み溝である(第284図)。検出長17.4m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。SD33と同様に屋敷境の溝である。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第285図-1 肥前磁器広東型碗である。口径10cm、器高6.7cm、高台径6.2cmを測る。松竹梅文を描き、大橋康二氏の編年V期に属する。2は、柿釉灯明皿である。口径5.7cm、器高1cmを測る。3・4は、土師質土器焙烙である。3は、口径21.5cm、器高4.5cmを測る。口縁部と底部が直立しているタイプである。ハリツケによる耳が遺存する。難波洋三氏の分類E類に属する。4は、口径(推)30.5cmを測る。口縁部と底部の境目が出るタイプである。胎土にクサリ礫を含む。

第286図は、「寛永通寶」である。直径4.5cm、厚さ0.1cmを測る。背文に模様はみられない。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀後半と考えられる。

#### SD45

SD45は、北壁よりSD35に接合する石組み溝である(第287図)。検出長3.5m、幅1m、深さ0.15mを測る。SD33と同様に屋敷境の溝である。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第288図-1は、産地不明鉄釉陶器鉢である。口径9.7cmを測る。内外面ともに、灰釉によって化粧掛けを施している。2は、肥前磁器染付碗である。高台径5.7cmを測る。焼継ぎ痕がみられる。大橋康二氏の編年V期に属する。3は、瓦質土器鉢である。口径26cm、器高4cmを測る。

第289図は、左巻三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当部の直径14.8cm、連珠数は13個を数える。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。



### 第3節 第51次調査A-2区

A-2区は、延宝五年(1677年)伊丹郷町地味委細絵図(第1図)に「小屋口村」(昆陽口村)とあり、天保十五年(1844年)伊丹郷町分間絵図(第1図)では、さらに明確に昆陽口村にあたることがわかる。元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町絵図(第1図)によると、本百姓の庄左衛門の屋敷地の北側にほぼ相当することがわかる。

#### 1. 基本層序

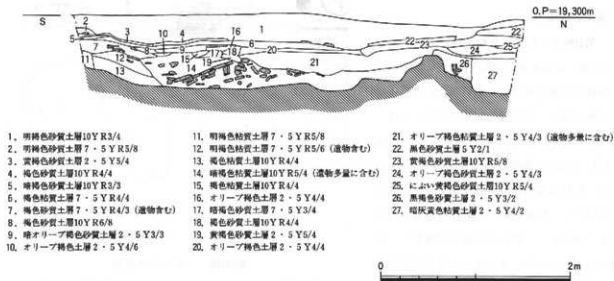
遺構面は発掘区全面で3面検出した。西壁土層断面図(第290図)を観察すると、現地表面より約30cm下(第6層)で1次面を、1次面より約10cm下(第21層)で2次面を、2次面より約10cm~30cm下で3次面を検出した。

#### 2. 3次面の遺構と遺物

##### SK128

SK128は、調査区南側の西端に位置し、西側は調査区外に延びる(第291図)。平面形は方形を呈し、検出長1.66m、幅2.12m、深さ0.32mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第292図-1は、土師質土器皿である。口径(推)11.6cmを測り、浅黄橙色10Y R8/3を呈する。厚さは0.6cmで従来ものものと比べて厚手である。口縁部は直線的に延び、灯芯痕を残す。口縁部内外面は横ナテ調整、底部内外面はナテ調整である。2・3は、肥前磁器である。2は、染付筒型碗である。コンニャク印判の楓葉文と手描きの丸窓文を交互に描く。丸窓文内の文字は「康」か。見込み部分には、コンニャク印判による五弁花文が施される。3は、仏器具である。口径(推)8.4cm、器高5.0cm、脚台径3.8cmを測る。脚底部は輪高台で露胎である。4は、瀬戸・美濃焼陶器の鍍手湯呑碗である。外面に灰釉、内面に鉄釉と掛け分けている。5は、土師質土器である。合わせ型により梅花文を施す。上面には、木軸を差し込む孔が設けられている。6は、砂岩製の砥石である。灰白色7.5Y7/1を呈する。表裏・左右、上部側面に溝状の使用痕を有する。出土遺物から概観すると、18世紀中頃から後半の時期と考えられる。



- |                           |                               |                                 |
|---------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| 1. 明褐色砂質土層10Y R3/4        | 11. 明褐色粘質土層7・5Y R5/8          | 21. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3 (遺物多量を含む) |
| 2. 明褐色砂質土層7・5Y R3/8       | 12. 明褐色粘質土層7・5Y R5/6 (遺物含む)   | 22. 黒色砂質土層5Y2/1                 |
| 3. 黄褐色砂質土層2・5Y3/4         | 13. 褐色粘質土層10Y R4/4            | 23. 黄褐色砂質土層10Y R5/8             |
| 4. 褐色砂質土層10Y R4/4         | 14. 暗褐色粘質土層10Y R5/4 (遺物多量を含む) | 24. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3           |
| 5. 暗褐色砂質土層10Y R3/3        | 15. 褐色粘質土層10Y R4/4            | 25. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4          |
| 6. 褐色粘質土層7・5Y R4/4        | 16. オリーブ褐色土層2・5Y4/4           | 26. 黒褐色砂質土層2・5Y3/2              |
| 7. 褐色砂質土層7・5Y R4/3 (遺物含む) | 17. 暗褐色砂質土層7・5Y3/4            | 27. 暗灰褐色粘質土層2・5Y4/2             |
| 8. 褐色砂質土層10Y R6/8         | 18. 褐色砂質土層10Y R4/4            |                                 |
| 9. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3     | 19. 黄褐色砂質土層2・5Y5/4            |                                 |
| 10. オリーブ褐色土層2・5Y4/6       | 20. オリーブ褐色土層2・5Y4/4           |                                 |

第290図 西壁土層断面図

### SK 129

SK 129は、調査区西側の中程に位置する(第293図)。平面形は、不整楕円形を呈し、掘形の長径1.0m, 短径0.77m, 深さ0.51mを測る。直径0.6mの木桶の底板が遺存していた。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第294図-1は、京焼系碗である。高台径3.0cmを測る。胎土は、灰白色2.5Y8/2を呈する。高台部は露胎である。2は、土師質土器皿である。口径(推)6.4cm, 器高1.1cmを測り、浅黄橙色7.5YR8/4を呈する。口縁部から内面底部にかけて回転ナデ調整、外面底部には糸切り痕を有する。口縁部には灯芯心痕がみられる。3は、丹波焼甕である。口径(推)12.4cmを測り、胎土は、浅黄橙色7.5YR8/4を呈する。内面口縁から外面に鉄釉を施し、口縁部分には重ねて掛けられている。

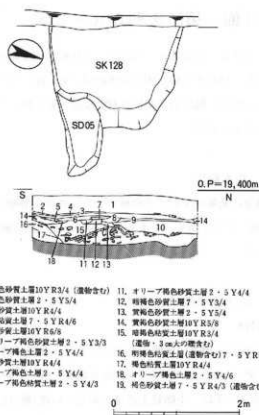
出土遺物から概観すると18世紀後半の時期と考えられる。

### SK 145

SK 145は、調査区北東部に位置し、北側と西側は調査区外に延びる(第295図)。平面形は不整形を呈し、検出長1.2m, 幅0.94m, 深さ0.52mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

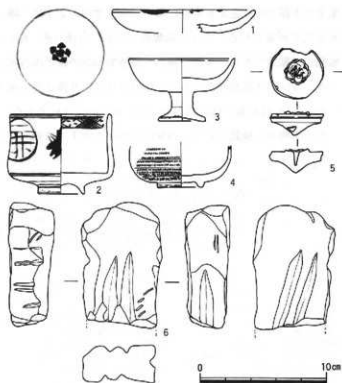
第296図-1は、京焼系碗である。口径7.6cm, 器高4.4cm, 高台径3.5cmを測る。内外面に灰釉を掛け、外面口縁部には具須で文様を施す。高台部は露胎である。2は、肥前磁器青磁染付筒型碗である。口径(推)8.8cm, 器高6.6cm, 高台径4.0cmを測る。見込み部分に五弁花が施され、高台内には、「大明年製」を崩した変形字の銘款がみられる。高台皿付部分は露胎で、砂が付着している。3~5は土師質土器であ

3・4は焙烙である。3は、口縁部が直立し、口縁部と底部との境目がはっきりしているタイプである。口縁部には、2カ所、貼り付けによる耳状の把手が遺存する。4は、口縁部は低く、断面が三角形をなすタイプ

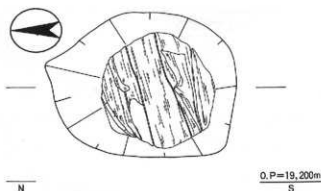


1. 明褐色砂質土層10YR3/4 (遺物含む)
2. 黄褐色砂質土層2・5Y3/4
3. 褐色粘質土層10YR4/4
4. 褐色粘質土層7・5YR4/6
5. 褐色砂質土層10YR6/8
6. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3
7. オリーブ褐色土層2・5Y4/4
8. 褐色砂質土層10YR4/4
9. オリーブ褐色土層2・5Y4/4
10. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
11. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4
12. 暗褐色砂質土層2・5Y3/4
13. 黄褐色砂質土層2・5Y3/4
14. 黄褐色砂質土層10YR3/6
15. 暗褐色粘質土層10YR3/4 (遺物・3cmAの遺物含む)
16. 明褐色粘質土層(遺物含む)7・5YR5/6
17. 褐色粘質土層10YR4/4
18. オリーブ褐色土層2・5Y4/6
19. 褐色砂質土層7・5YR4/3 (遺物含む)

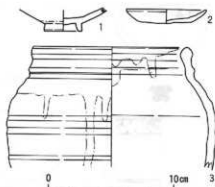
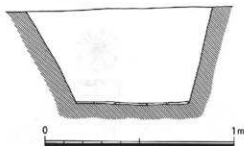
第291図 SK 128遺構図



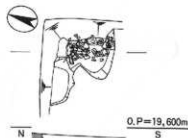
第292図 SK 128出土遺物



第293図 SK129遺構図



第294図 SK129出土遺物



第295図 SK145遺構図



ブである。難波洋三氏の分類によると、3はE類、4はG類に属する。いずれも、口縁部内外面は横ナア調整、内面底部は横ナア調整、底部中央は不定方向のナア調整、外面底部は未調整で雫れ砂がみられる。胎土はクサリ礫を含み、外面に煤を付着する。5は、十能である。全長22.2cm、把手長7.8cm、把手幅3.3cm、把手厚み1.5cmを測る。外型成形で、上面はナア調整、下面は未調整である。胎土はクサリ礫を含む。6・7は、瓦質土器である。6は、瓦盤の傘である。口径(推)17.6cm、器高10.0cmを測る。つまみ部には花文を施し、体部には2カ所ずつ計4カ所、外面からすかし孔を開ける。外面はミガキ調整、内面は未調整で、煤が付着する。7は、火鉢である。口径(推)22.6cm、器高8.2cmを測る。口縁部内外面は、横ナア調整、底部外面はナア調整である。口縁部に未貫通の孔が1カ所あいている。出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭の時期と考えられる。

#### SK188

SK188は、調査区西側の北部に位置する(第297図)。平面形は円形を呈し、直径0.52m、深さ0.18mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

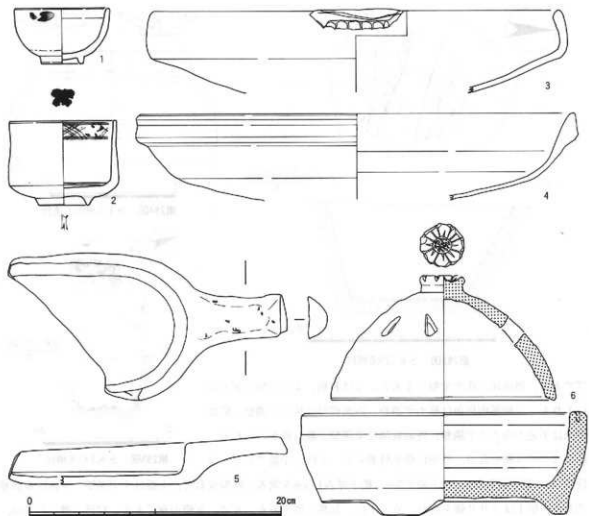
第298図-1は、肥前磁器染付碗である。口径9.6cm、器高5.4cm、高台径3.9cmを測る。外面は、コンニャク印判手法により菊花文が施される。高台畳付部分は露胎である。2は、土師質土器焙烙である。口径(推)25.0cmを測る。口縁部から底部にかけて、丸みをおびて屈曲する。難波洋三氏の分類によると、E類に属する。口縁部内外面は横ナア調整、底部内面は横ナア調整である。胎土にクサリ礫を含み、外面には煤が付着する。

出土遺物から概観すると、18世紀前半の時期と考えられる。

#### SK192

SK192は、調査区中央部より、やや南東よりに位置する(第299図)。平面形は円形を呈し、直径0.9m、深さ0.28mを測る。木桶の痕跡が残る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

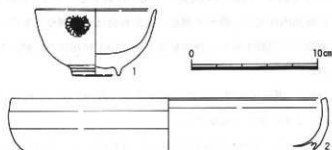
第300図-1は、肥前磁器染付碗である。口径10.0cm、器高5.4cm、高台径4.4cmを測る。唐草文を外面全



第296図 SK145出土遺物



第297図 SK188遺構図



第298図 SK188出土遺物

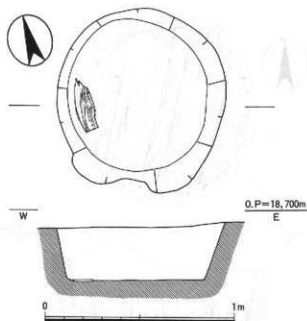
体に挿く。高台内には、「大明年製」を崩した変形字の銘歌がみられる。2は、土師質土器皿である。口径(推)8.8cm、器高1.6cmを測り、にぶい黄橙色10Y R7/3を呈する。口縁部は直線的に延び、内外面共に横ナデ調整、内面底部はナデ調整を施す。外面底部には指頭瓦痕が残る。

出土遺物から概観すると18世紀前半から後半の時期と考えられる。

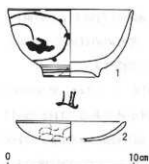
### 3. 2次面の遺構と遺物

#### SK104

SK104は、調査区西側の中程に位置する(第301図)。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.87m、深さ0.24



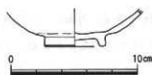
第299図 SK 192遺構図



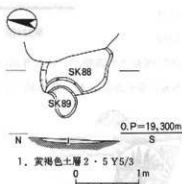
第300図 SK 192出土遺物



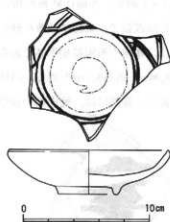
第301図 SK 104遺構図



第302図 SK 104出土遺物



第303図 SK 88遺構図



第304図 SK 88出土遺物

mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第302図は、京焼系灰釉碗である。高台径4.8cmを測る。内外面は施釉され、浅黄色5Y7/4を呈し、高台部は、露胎である。胎土は淡黄色5Y8/3を呈する。

出土遺物全体から概観すると、17世紀後半から18世紀後半の時期と考えられる。

#### SK 88

SK 88は、調査区中央部に位置し、西端をSK 89に、東側を掘乱によって切られる(第303図)。平面形は長方形を呈し、検出長0.64m、幅1.07m、深さ0.07mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第304図は、肥前磁器染付皿である。口径(推)13.0cm、器高3.6cm、高台径4.8cmを測る。内面に松葉文を描く。見込みには、蛇ノ目輪ハギした上に、円形の重ね焼痕がみられる。高台畳付部分は、砂が付着している。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属する。従って、18世紀後半の時期と考えられる。

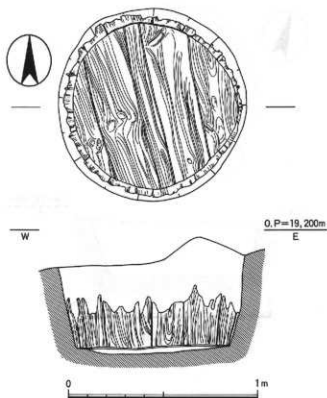
#### SK 97

SK 97は、調査区南東部に位置する。酒樽の下半を切取って地下に埋設し、便槽とした遺構である(第305

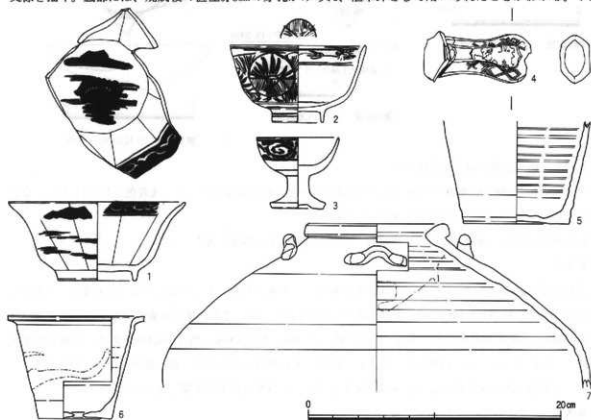
図)。平面形は円形を呈し、直径1.0m、深さ0.48m、底板の直径0.87mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第306図-1~3は、肥前磁器である。1は、染付小鉢である。口径(推)14.2cm、器高6.2cm、高台径6.2cmを測る。外面と見込みに、山水文を描く。2は、染付碗である。口径(推)10.8cm、器高6.2cmを測る。外面と見込みに、草花文を描き、縁文様には、竜文を描く。3は、染付仏飯具である。口径(推)6.6cm、器高5.6cmを測る。外面口縁部に、蜻唐草文を描く。脚底部は輪高台で、露胎である。4は、伊賀・信楽焼系行平の型作りの把手である。上面に、菊花文と葉平文を陽刻し、全体に鉄軸を掛ける。5は、丹波焼徳利である。底径8.4cmを測る。外面は鉄軸が掛かる。内面と底部は露胎で、底部には離れ砂がみられる。6は、産地不明陶器植木鉢である。口径

(推)10.8cm、器高8.2cmを測る。内外面共に回転ナデ調整で、底部外面は未調整である。外面に、白色釉で文様を描く。底部には、焼成後の直径0.8cmの穿孔がみられ、植木鉢として用いられたことがわかる。7は、



第305図 SK97遺構図



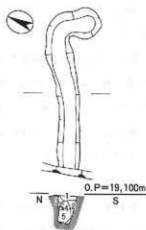
第306図 SK97出土遺物

中国製褐釉四耳壺である。口径10.6cmを測る。口縁端部は溶着による剝離痕がみられる。耳は貼り付けにより、内面に鉄化粧を施し、外面に鉄釉を施す。胎土は緻密で、オリープ褐色2.5Y4/4を呈する。これは、16世紀代の遺物であり、伝世品と考えられる。その他の出土遺物から、18世紀後半から19世紀初頭の時期と考えられる。

#### SD05

SD05は、調査区南西部を東西に延びる溝である(第307図)。西側は、さらに調査区外に延びる。検出長2.6m、幅0.37m、深さ0.45mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

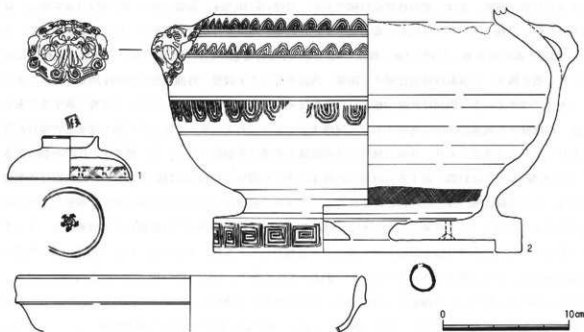
第308図-1は、肥前磁器染付蓋である。口径(推)10.0cm、器高3.4cm、つまみ径4.6cmを測る。内面口縁部に葉平文、見込み部分に五弁花文を描き、つまみ内面には銘款を施す。つまみ端部は露胎である。2は、瀬戸・美濃焼緑釉瓶掛である。肩部には、獅子頭を形取った双耳が付され、底部には、幅の広い台脚を有する。釉薬は、胴部内面および底部内面には錆釉が刷毛塗りされ、外面と内面上部には緑釉が施される。台脚内面は、露胎で、墨書が残る。台脚には孔が2箇所穿たれているが、そのうち1カ所は未貫通である。また、中心にあ



1. 褐色砂質土層10Y R4/6
2. 明褐色粘質土層7.5 Y R5/6
3. 黄褐色粘質土層10Y R5/6 (遺物含む)
4. 灰い黄褐色土層10Y R5/4 (遺物含む)
5. 褐色粘質土層10Y R4/6 (遺物含む)

0 1m

第307図 SD05遺構図



第308図 SD05出土遺物

けられた直径3.0cmの穿孔は故意によるものであり植木鉢などに転用されたものと考えられる。内面に布目痕と重ね焼痕がみられる。3は、土師質土器焙烙である。口径(推)27.6cmを測る。口縁部と底部との境目が突出するタイプである。難波洋三氏の分類によると、G類に属する。口縁部内外面は横ナデ調整、内面底部は横ナデ調整、外面底部は未調整で離れ砂がみられる。胎土にクサリ礫を含み、外面には煤が付着する。

出土遺物から概観すると、18世紀前半から後半の時期と考えられる。

#### SD04

SD04は、調査区南西部を南北に延びる溝である(第309図)。南側は、さらに調査区外に延びる。検出長

2.98m, 幅0.42m, 深さ0.23mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第310図は、肥前磁器青磁染付鉢である。高台径(推)8.4cmを測る。底部は、蛇ノ目凹形高台である。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属する。従って、18世紀後半から19世紀初頭の時期と考えられる。

#### SD06

SD06は、調査区南端を東西に延びる屋敷割りを示す境界溝である。(第311図)。石組の溝で、検出長8.65m, 掘形の幅0.9m, 同深さ0.6mを測る。部分的に胴木を入れて沈下するのを防いでいる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

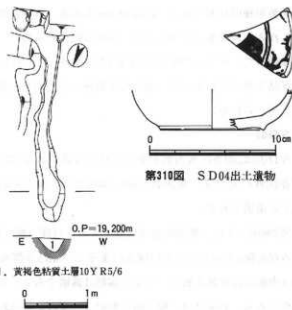
第312図-1は、瀬戸・美濃焼天目茶碗であ

る。口径9.4cm, 器高4.8cm, 高台径4.0cmを測る。体部は緩やかに八の字状に延び、口縁部のくびれは目立たない。高台は削り出し輪高台で露胎である。腰部・高台を残して鉄軸が施され、黒褐色を呈している。見込みに3カ所目跡が残る。2は、肥前磁器染付碗である。口径(推)10.8cm, 器高5.4cm, 高台径4.1cmを測る。見込みは、蛇ノ目軸ハギした上に円形の重ね焼痕がみられる。高台畳付部分は露胎で、砂が付着している。3は、土師質土器皿である。口径7.4cm, 器高1.8cmを測り、浅黄褐色10YR8/3を呈する。口縁部は直線的に延び、灯芯痕を残す。口縁部内外面は横ナア調整、内面底部はナア調整、外面底部は指頭圧調整を施す。4は、ミニチュアの鉢である。内面は鉄軸が掛かり、底部は糸切り痕を有する。5-7は、土師質土器焙烙である。5は、口縁部から底部にかけて丸みをおびて屈曲するタイプである。6・7は、口縁部と底部との境目がはっきりしているタイプであり、外面口縁部と外面底部との境目を面取りしている。難波洋三氏の分類によると、5はE類、6・7はD類に属する。口縁部内外面は横ナア調整、内面底部は横ナア調整、外面底部は未調整である。6の外面底部には、離れ砂がみられる。7の耳状の把手は、貼り付けの後、横ナア調整し、その後、上部から下部に向かって孔を貫通させる。6は、外面底部に、7は、外面と内面底部に煤が付着する。5-7のいずれも、胎土にクサリ礫を含む。8・9は、丹波焼である。8は、壺である。底径(推)14.6cmを測る。内面は無釉で、胎土は灰色5Y6/1を呈する。9は、播鉢である。口径(推)36.8cm, 器高14.5cmを測る。描目は7本のクシ描きで、口縁部がほぼ直立し、外面に回転ナア調整による2本の凹線が形成される。体部外面に指頭圧痕がみられる。大平 茂氏の編年によると、Ⅶ型式に属する。10は、櫻焼播鉢である。口径(推)28.6cm, 器高12.4cmを測る。外面体部の回転ヘラケズリは、口縁部直下まで施される。ロクロは右回転、描目は11本単位である。白神典之氏の編年によると、I型式に属する。11は、二彩手唐津鉢である。高台径(推)13.8cmを測る。内面は、鉄と銅の顔料で文様を描く。外面下半と高台は無釉である。見込みに砂目が残る。出土遺物から概観すると、18世紀前半から18世紀中頃の時期と考えられる。

#### 4. 1次面の遺構と遺物

##### SB11

南北約3.53m(約2間)、東西7.82m(4間)を測る。南側の通りは、屋敷境溝の北側掘形の石組み溝の北



第310図 SD04出土遺物

第311図 SD04遺構図

1. 黄褐色粘質土層10YR5/6



側配石を利用したと考えられる。間口は、東側と想定される。礎石の痕跡は不明であるが北側に延びる可能性がある。Ⅲ-3期に属する遺構である。

#### SE01

SE01は、調査区の北西部に位置する(第314図)。平面形は正方形に近い形状を呈し、一辺1.4mを測る。深さは手掘りで1.14mまで確認した。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第315図は、唐津焼碗である。高台径4.5cmを測る。内外面に灰釉を施し、高台部は露胎である。見込みには、胎土目が3カ所残り、大橋康二氏の編年によるとⅠ期に属する。しかし、これは伝世品と考え、今回の実測図には載せていない、その他の出土遺物から概観して、18世紀中頃から後半の時期と考えられる。

#### SK82

SK82は、調査区南東端に位置し、東側は調査区外に延びる(第317図)。平面形は長方形を呈し、検出長2.68m、幅0.82m、深さ0.31mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第318図-1は、肥前磁器染付碗である。大橋康二氏の編年によるとⅣ期に属し、「くらわんか手」の碗と呼称される。高台畳付部分は露胎で、高台径3.9cmを測る。

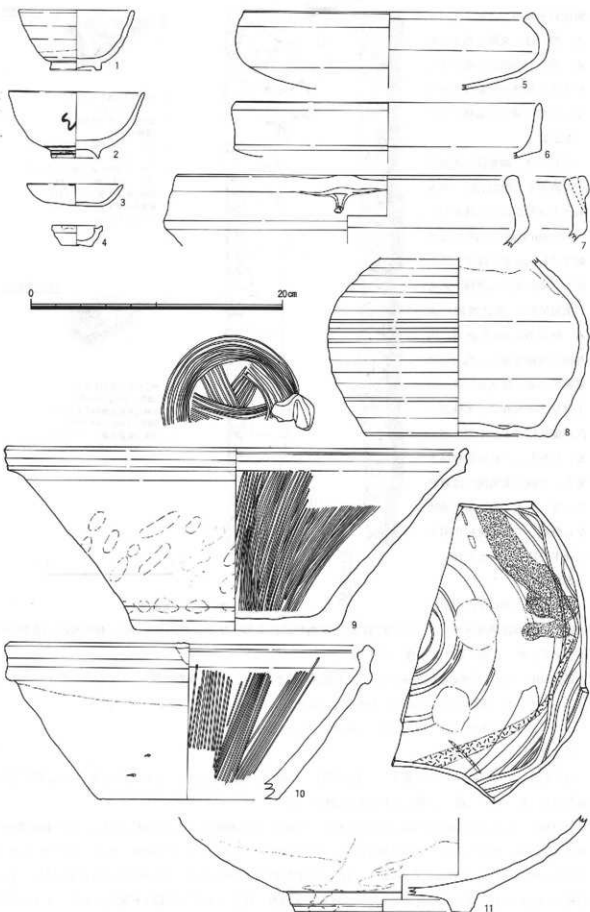
出土遺物から概観すると、18世紀後半の時期と考えられる。

#### SK81

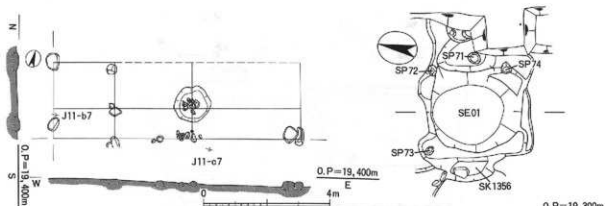
SK81は、調査区南東部に位置する(第316図)。平面形は不整形を呈し、全長1.96m、幅2.06m、深さ0.15mを測る。Ⅲ-2からⅢ-3期まで存続する遺構である。

第318図-2は、肥前磁器染付広東型碗である。大橋康二氏の編年によるとⅤ期に属する。高台径5.2cmを測る。見込みに銘歌を有する。高台畳付部分には砂が付着している。3は、丹波焼鉢である。口径(推)12.8cm、器高6.3cmを測る。口縁部は鉄釉を施し、内面と外面底部にも釉がかかる。胎土は灰色5Y6/1を呈し、4mm程度の白色の小石を含む。外面上半と内面は回転ナア調整、外面の下半と底部は未調整である。4は、産地不明陶器鉢である。口径(推)12.0cm、器高8.8cmを測り、灰白色7.5Y7/1を呈する。内外面共に、回転ナ

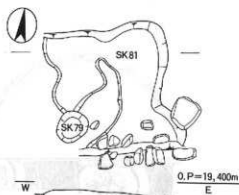




第312圖 S D06出土遺物



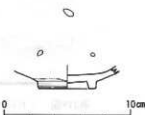
第313図 SB11遺構図



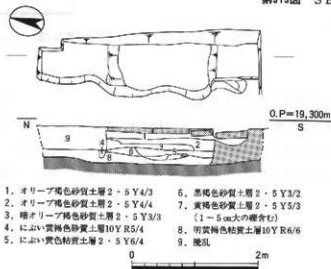
第316図 SK81遺構図



第314図 SE01遺構図



第315図 SE01出土遺物



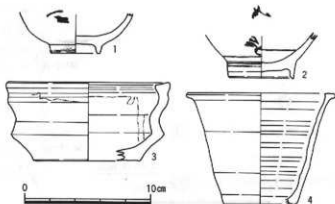
第317図 SK82遺構図

テ調整を施す。

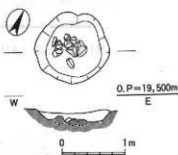
出土遺物から概観すると、17世紀後半から19世紀初頭の時期と考えられる。

#### SK78

SK78は、調査区南側の中程に位置する（第319図）。平面形は円形を呈し、直径1.18m、深さ0.16mを測



第318図 SK82 (1)・SK81 (2~4) 出土遺物



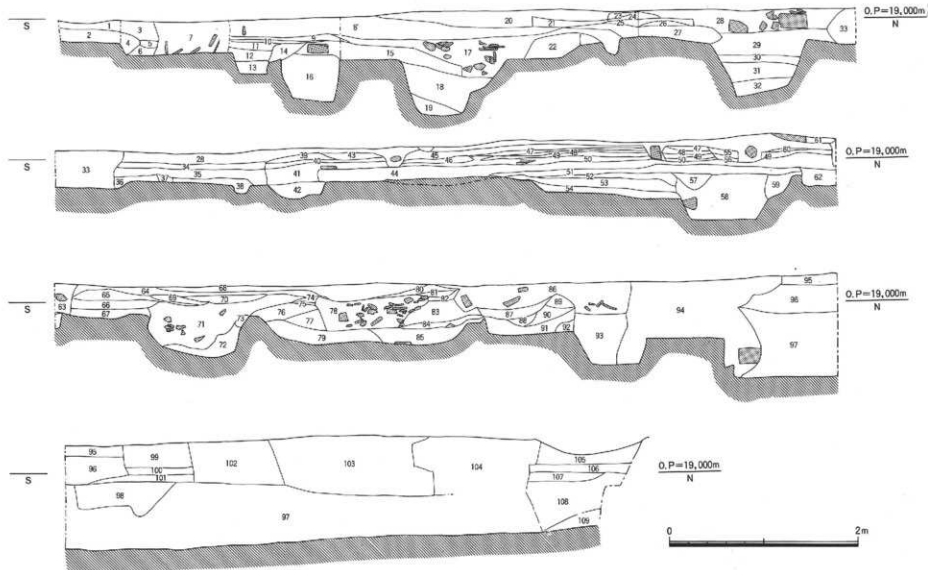
第319図 SK78遺構図



第320図 SK78出土遺物

る。Ⅲ-2期からⅢ-3期まで存続する遺構である。

第320図は、肥前磁器色絵線香立てである。口径16.0cm、器高4.6cmを測る。鳥文や斜格子文、草花文の縁取り、口縁部の帯文様などは赤絵で描く。草花文の花は黄色、葉は緑色で描く。また圈線などに呉須を用いる。内面下半と切り高台内面は露胎で、見込み部分には砂が付着している。18世紀中頃から19世紀後半の時期と考えられる。



- |                                     |                                 |                                    |                                 |
|-------------------------------------|---------------------------------|------------------------------------|---------------------------------|
| 1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3                 | 28. 褐色砂質土層10Y R4/4 (遺物、炭化物含む)   | 55. 暗褐色砂質土層10Y R3/4                | 83. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6          |
| 2. におい黄色土層 2・5 Y6/4                 | 29. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4            | 56. 暗褐色砂質土層10Y R3/3                | 84. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 (炭化物含む)  |
| 3. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4               | 30. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 (炭化物多量に含む) | 57. におい黄色粘質土層10Y R5/4 (1cmの層多量に含む) | 85. 暗オリブ褐色粘質土層 2・5 Y3/6         |
| 4. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4               | 31. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8            | 58. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4             | 86. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3          |
| 5. 黄褐色粘質土層 2・0 S Y5/6               | 32. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4          | 59. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6             | 87. におい黄褐色粘質土層 2・5 Y6/4         |
| 6. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3               | 33. 褐色砂質土層10Y R4/4              | 60. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)  | 88. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3          |
| 7. 黄褐色砂質土層10Y R5/6 (遺物含む)           | 34. 黒色灰層 7・5 Y R2/1             | 61. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4             | 89. 黒色灰層 2・5 Y2/1               |
| 8. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6                | 35. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6          | 62. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3             | 90. 黄褐色砂質土層 2・5 Y4/4            |
| 9. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y7/6                | 36. 黄褐色粘質土層10Y R5/8             | 63. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3             | 91. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4            |
| 10. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2               | 37. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4            | 64. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 (5cmの層含む)   | 92. 褐色粘質土層 7・5 Y R6/8           |
| 11. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3                | 38. 黄褐色土層10Y R5/8               | 65. 黒色灰層10Y R1,7/1                 | 93. 暗褐色粘質土層10Y R3/3             |
| 12. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6              | 39. 黄褐色粘質土層 2・5 Y3/2            | 66. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 (遺物含む)      | 94. 黄褐色粘質土層10Y R5/6(の土含む)       |
| 13. 黄褐色砂層 2・5 Y5/4                  | 40. 黒色土層 7・5 Y R2/1             | 67. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4             | 95. 黄褐色砂質土層10Y R7/8             |
| 14. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4                | 41. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4          | 68. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3             | 96. におい黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6         |
| 15. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8                | 42. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8            | 69. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4               | 97. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6            |
| 16. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4              | 43. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R3/3          | 70. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4               | 97. 暗褐色粘質土層 2・5 Y5/4 (炭化物多量に含む) |
| 17. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3 (ブロック、遺物含む)    | 44. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6            | 71. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 (遺物、炭化物含む)  | 98. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4          |
| 18. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6                | 45. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/4           | 72. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4             | 99. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2           |
| 19. におい黄褐色粘質土層10Y R6/4              | 46. 黒色灰層 7・5 Y R2/1             | 73. 暗オリブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3            | 100. 黒褐色粘質土層10Y R3/3            |
| 20. 褐色砂質土層10Y R4/4                  | 47. 黒色炭化物層 7・5 Y R2/1           | 74. におい黄色粘質土層 2・5 Y6/4             | 101. 黄褐色粘質土層10Y R3/6            |
| 21. 黄色砂質土層 2・5 Y7/8                 | 48. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4          | 75. 黒色灰層 2・5 Y2/1                  | 102. 褐色                         |
| 22. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4              | 49. 黒色灰層 7・5 Y R2/1 (塊土含む)      | 76. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4             | 103. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3         |
| 23. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/5                | 50. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4            | 77. 黄褐色粘質土層10Y R5/6                | 104. 褐色                         |
| 24. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3                | 51. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4          | 78. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3             | 105. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2           |
| 25. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2                | 52. におい黄色粘質土層 2・5 Y6/4          | 79. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8             | 106. 黒灰層10Y R2/1                |
| 26. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4 (1cmの層多量に含む) | 53. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4          | 80. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6             | 107. 暗オリブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3        |
| 27. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8                | 54. 褐色粘質土層10Y R4/6              | 81. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3               | 108. 褐色砂質土層10Y R4/4             |
|                                     |                                 | 82. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3             | 109. 暗褐色粘質土層10Y R3/4            |

第321図 西壁土層図

## 第4節 第51次調査A-3区

A-3区は延宝五年(1677年)伊丹郷町地味委細絵図(第1図)に「小屋口村」(昆陽口村)とあり天保十五年(1844年)伊丹郷町分間絵図(第1図)では、さらに明確に昆陽口村にあたるのがわかる。元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町絵図(第1図)によると、北側を間口とし、日用(日やとい)で生活している七兵衛及び本百姓の庄左衛門の屋敷地の北側の一部にはは相当することがわかる。

### 1. 基本層序

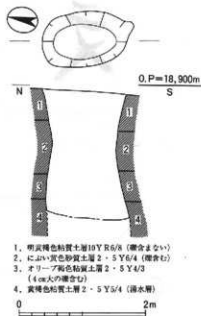
A-3区は、3面の遺構面を確認した。西壁土層断面図(第321図)で観察すると、第1次面は、現地表面から約10~30cm下(第47層)に土間を検出した。2次面は、1次面より約5cm下(第49層)に土間を検出した。3次面は、2次面より約20~50cm下より検出した。地山面は、南側はO.P.=18,700mを測り、北側へ行く程低くO.P.=18,400mまで下がる。

### 2. 3次面の遺構と遺物

#### SE04

SE04は、調査区南端に位置する(第322図)。平面形は、不整形円形を呈し、長径1.48m、深さは2.02mまで確認したが底部に達しなかった。Ⅲ-3期に属する遺構である。

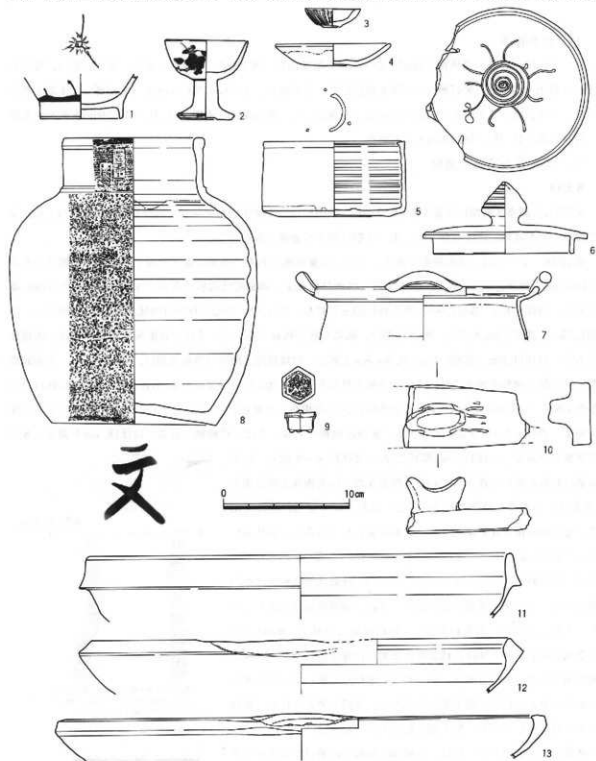
第323図-1~3は、肥前磁器である。1は、広東型碗である。外面に振文を描く。2は、仏飯具である。口径6.6cm、器高6.3cm、底径4.0cmを測る。外面は梅花文、脚底部は露胎である。3は、型押し白磁紅皿である。口径4.4cm、器高1.5cm、高台径1.35cmを測る。4は、受けのない柿釉灯明皿である。口径9.0cm、器高1.75cm、底径3.9cmを測る。外面底部に、糸切り痕が残存する。5~7は、京焼系である。5は、灰釉鉢である。口径11.2cm、器高6.1cm、底径8.8cmを測る。口縁端部上面及び外面底部は、無釉である。外面底部際にヘラ削り調整を施す。見込みに3カ所の目痕と三日月状の目痕が見られる。6は、蓋である。口径11.1cm、器高5.8cm、つまみ径5.6cmを測る。表面にはふい赤褐色5YR4/4を呈し、白土のいっちゃん掛けによる文様を施す。直径0.3cmの空気孔を有する。裏面は無釉である。7は、灰釉鍋である。口径18.4cmを測る。8は、信楽焼壺である。口径11.0cm、器高22.7cm、底径13.0cmを測る。外面体部は長石が溶けて浮きでている。外面頸部には篆書体と楷書体で、「長奥安」の刻印が押印される。長は、長野という地名、奥は奥田性、安は安兵衛か安右衛門という名前を表わしていると、酒井義仁氏にご教示いただいた。また、信楽焼壺は江戸末期には作られているが、明治時代には作られていないらしい。外面底部は輪状に重ねた焼痕及び「文」字の墨書が見られる。9は、柿釉陶器植木鉢のミニチュア製品である。六角形を呈し、外面底部は無釉で、直径0.2cmの空気孔を有する。10は、椀瓦葺の屋根に仕込まれた挿瓦の一種か。実測図で下面にあたる所は、ヘラ磨きで面取りを施していることから表面と考えられる。把手部のある方が、裏面と考えられる。裏面はカキ目を施したのち、把手部を指でナデ、貼り付ける。11~13は、土師質土器焙烙である。11は、口縁部と底部との境目が突出するタイプである。口径(推)33.6cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整、



1. 明灰褐色粘質土層10YR6/8 (磨き少ない)
2. ふい赤褐色粘質土層2・5Y6/4 (磨きむ)
3. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3 (4cm大の溝あり)
4. 灰褐色粘質土層2・5Y5/4 (清水層)

第322図 SE04遺構図

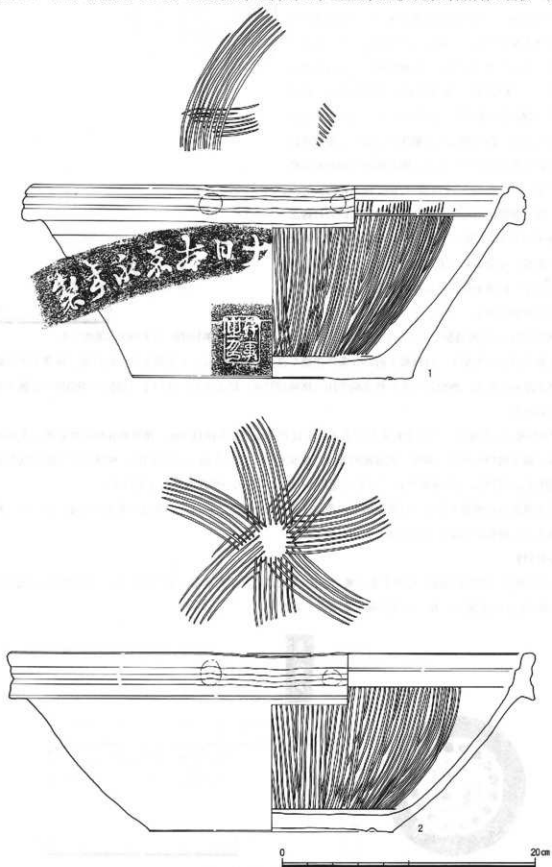
外面底部は未調整で離れ砂が付着する。内外面に金雲母、内面に煤が付着する。12は、口縁部が低く、断面が三角形を呈するタイプである。口径(推)33.2cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整、外面底部は未調整である。貼り付けによる耳が遺存する。内外面に煤が付着する。13は、口縁部が低く、口縁端部が平坦なタイプである。口径38.2cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整、外面底部は未調整で離れ砂が付着する。外面の口縁部と底部の境目を面取りしている。貼り付けによる耳が遺存する。内外面に金雲母、外面に煤が付着する。難波洋三氏の分類によると、11・12は、G類に属すると考えられるが、13は、どの分類にもあてはま



第323図 SE04出土物(1)

らない。

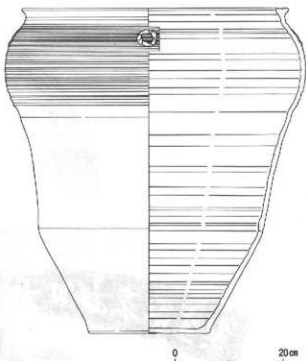
第324図-1は、堺焼摺鉢である。口径38.6cm、器高15.1cm、底径21.8cmを測る。外面体部の回転ヘラ削



第324図 SE04出土遺物(2)



りは、底部際から口縁部外縁帯の直下まで施している。口縁部内外面は回転ナデ調整、外面底部は輪状の凹みがあり、重ね焼痕が残存する。内面体部の播目は10本単位である。見込みの播目は、ウールマーク形になると考えられる。外面体部に「大日本嘉永年製」、一重枠内に「好事之印」を刻印する。嘉永年間（1848年～1853年）に作られたのではないかと考えられる。白神典之氏の編年によると、Ⅲ型式に属すると考えられる。2は、明石焼かと思われる播鉢である。口径40.8cm、器高14.1cm、底径19.2cmを測る。外面体部の回転へら削りは、底部際から口縁部外縁帯の直下まで施している。口縁部内外面は回転ナデ調整、外面底部は未調整で輪状の凹みがある。播目は7～10本単位、見込みの播目は、真中が交わらず放射状に施す。



第325図 SE04出土遺物 (3)

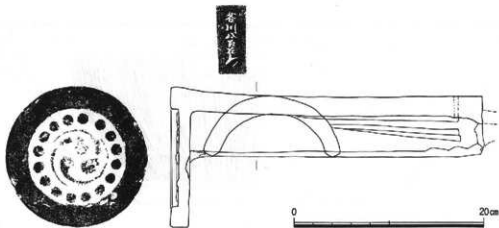
第325図は、丹波焼甕である。口径49.2cm、器高60.4cm、底径21.6cmを測る。口縁部上面に3条の沈線を巡す。肩部には、不遊環を貼り付ける。体部下半に輪轆み痕が認められる。檜崎彰一氏の丹波編年図（檜崎1977年）によると、江戸Ⅰ（1615～1623年）に属すると考えられる。

第326図は、左巻き三ツ巴文軒九瓦である。全長32.8cm、瓦当径14.8cm、連珠数16個を数える。九瓦部凸面は、縦方向のへらナデ調整、九瓦部凹面は、横位平行のコビキ痕（コビキB）、棒状タキ痕が残存する。直径0.5cmの釘穴が2カ所穿たれている。九瓦部凸面に「谷川八郎左衛門」と刻印する。

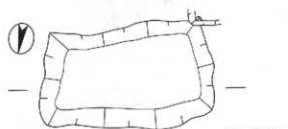
出土遺物から概観すると、17世紀前半の丹波焼甕があるが、これは、伝世品と考えられる。よって、18世紀後半から19世紀中頃までの時期と考えられる。

#### SK159

SK159は、調査区南部に位置する土塚である（第327図）。平面形は、長方形を呈し、長辺2.70m、短辺1.44m、深さ0.32mを測る。Ⅲ-1期に属する遺構である。



第326図 SE04出土遺物 (4)

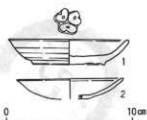


0.P=19,100m

1. 褐色砂質土層10Y R4/4 (炭化物少量、3cm大の礫含む)
2. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4 (炭化物少量、1~3cm大の礫多く含む)
3. 暗褐色粘質土層10Y R3/3 (炭化物多量含む)
4. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8 (炭化物、1cm大の礫含む)

0 2m

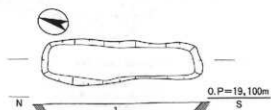
第327図 SK159道横図



第328図 SK159出土遺物(1)



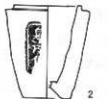
第329図 SK159出土遺物(2)



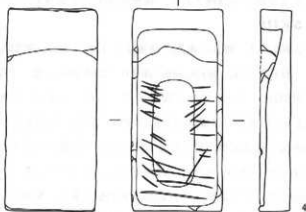
1. 褐色粘質土層10Y R4/4 (元、8cm以下の礫多く含む)

0 2m

第330図 SK175道横図



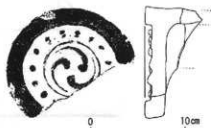
0 10cm



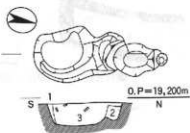
第331図 SK175出土遺物(1)

第328図-1は、瀬戸・美濃焼灰釉丸皿である。口径9.6cm、器高2.0cm、高台径7.6cmを測る。器高がやや低く、体部下方はあまり丸味はなく、上方はほぼ直線的に開く。付高台は、低く小さい。見込みには印花文が押印される。藤澤良祐氏の編年によると、大塚4期に属すると考えられる。2は、土師質土器である。口径(推)8.5cmを測る。

第329図は、唐草文軒平瓦である。中心飾りは菊花文で、唐草は1列となっている。上弦幅(推)24.2cm、瓦当部の厚さ5.0cmを測る。瓦当部上外区上縁の面取りは深い。



第332図 SK175出土遺物(2)



1. 褐色砂質土層10YR4/5  
(炭化物含む)
2. におい黄褐色粘質土層10YR5/4  
(炭化物, 0.5cm大の礫含む)
3. におい黄褐色粘質土層10YR4/3  
(炭化物多い, 断面褐色粘質土層10YR6/8L;  
0.5cm大の礫含む)

第333図 SK180遺構図

出土遺物から概観すると、16世紀後半の時期と考えられる。

#### SK175

SK175は、調査区南部に位置する土壌である(第330図)。平面形は長方形を呈し、長辺2.54m、短辺0.6m、深さ0.22mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第331図-1・3は、土師質土器である。1は、灯明皿である。口径11.8cm、器高2.6cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整、内面底部は不定方向のナデ調整、外面底部に指頭圧痕が見られる。口縁端部内外面に灯芯痕が残る。3は、焙烙である。口径(推)29.2cmを測る。口縁部がほぼ直立している。口縁部内外面は横ナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整である。難波洋三氏の分類によると、E類に属すると考えられる。2は、薄焼地焼壺である。口径(推)5.4cm、器高7.4cm、

底径(推)3.8cmを測る。型づくり成形。口縁部に蓋受けの段を有し、端正なきれいな作りである。一重枠内に「泉湊伊織」と押印がある。小川望氏の編年(小川1990年)によると、V期に属すると考えられる。4は、石製碗である。全長16.0cm、幅7.2cm、高さ2.4cmを測る。花崗石質の石材で、におい黄褐色10YR7/3を呈する。愛媛県伊予市の虎間石か。海は深い。全面に墨が付着する。

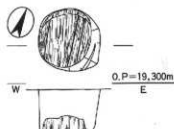
第332図は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当径14.0cmを測る。

出土遺物から概観すると18世紀後半の時期と考えられる。

#### SK180

SK180は、調査区北部に位置する土壌である(第333図)。平面形は不整形円形を呈し、長辺は1.48m、短辺は0.58m、深さ0.36mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第336図-2は、肥前磁器染付碗である。口径9.9cm、器高5.25cm、高台径4.1cmを測る。外面は草花文を



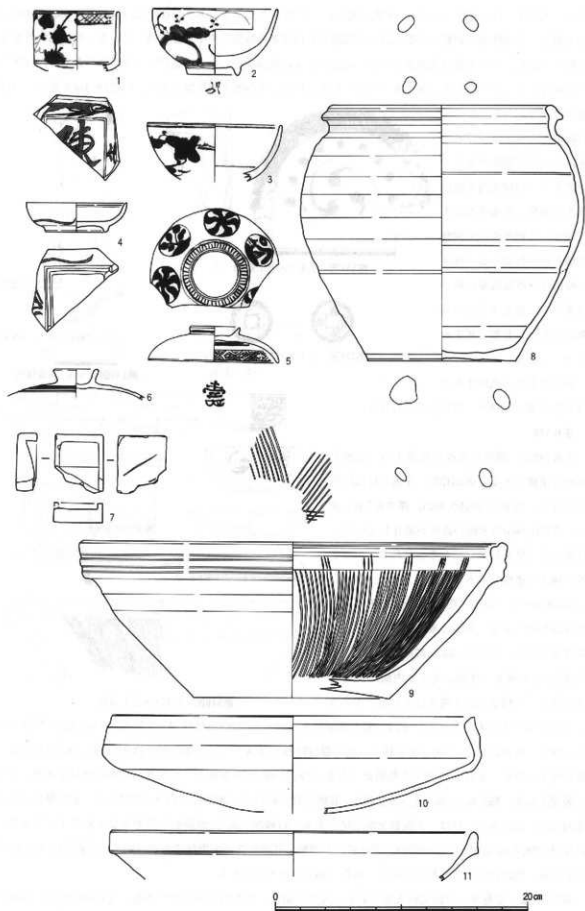
第334図 SK146遺構図

1. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4  
(炭化物若干含む)
2. におい黄褐色粘質土層10YR5/4  
(炭化物)
3. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6  
(炭化物若干含む)
4. 黄褐色砂質土層10YR5/6  
(6cm大の礫・瓦含む)
5. 褐色砂質土層10YR4/4  
(炭化物若干含む)
6. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3  
(炭化物若干含む)
7. 暗褐色粘質土層10YR3/4  
(炭化物若干含む)
8. におい黄褐色粘質土層10YR4/3  
(炭化物若干含む)
9. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3
10. 黒褐色粘質土層2・5Y3/2



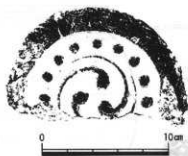
第335図 SK185遺構図

1. 黒褐色粘質土層010YR2/3  
(炭化物, 3-5cm大の礫含む)



第336圖 SK146 (1・4~7・11)・SK180(2・9・10)・SK185 (3・8)出土遺物(1)

描く。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属する。9は、堺焼摺鉢である。口径33.2cm、器高12.4cm、底径15.4cmを測る。外面体部の回転へら削りは、底部際から口縁部外縁帯のやや下まで施している。口縁部内外面は回転ナデ調整、外面底部は未調整である。見込みに重ね焼痕が見られる。摺目は9本単位である。白神典之氏の編年によると、Ⅰ型式に属すると考えられる。10は、土師質土器焙烙である。口径28.4cmを測る。口縁部はゆるやかな段をなし、口縁部から底部にかけて、丸みをおびて屈曲するタイプである。口縁部内外面は横ナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整で難れ砂が付着する。外面口縁部及び内面底部に煤が付着する。難波洋三氏の分類によると、E類に属すると考えられる。

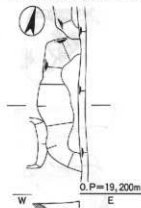


第337図 SK146出土遺物(2)



第338図 SK146出土遺物(3)

(S=1/2)



1. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4

第339図 SK156遺構図

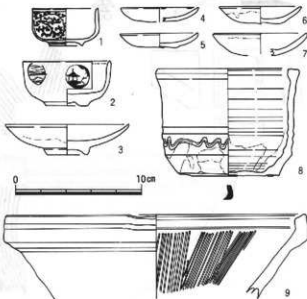
出土遺物から概観すると、18世紀中頃から後半の時期と考えられる。

#### SK146

SK146は、調査区北端に位置する。木桶を埋めた遺構である(第334図)。平面形はほぼ円形を呈し、掘形の直径0.98m、深さ0.7mを測る。直径0.86mの木桶の底板が遺存していた。便所として使われていたと考えられる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第336図-1・5は、肥前磁器である。1は、染付筒型碗である。外面に草花文を描く。5は、染付蓋である。口径10.3cm、器高2.75cm、つまみ径3.9cmを測る。外面に丸文、内面に福寿字文を描く。大橋康二氏の編年によると、1・5はⅤ期に属すると考えられる。4は、関西系赤絵角皿である。口径(推)8.0cm、器高2.3cm、高台径(推)4.8cmを測る。内面に魚文、「陳」字を描く。高台皿付は軸をはぎとっている。胎土は灰白色7.5Y8/1を呈し、鉄分を多く含む。6は、京焼系灰釉鍋蓋である。つまみ径3.6cmを測る。天井部に12本の挿目を施す。7は、石製碗である。幅3.8cm、高さ1.5cmを測る。花崗石質の石材で、淡黄色2.5Y8/3を呈する。愛媛県伊予市の虎間石か。海は深い。11は、土師質土器焙烙である。口縁部が低く、断面が三角形を呈するタイプである。口径(推)28.8cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整、外面底部は未調整である。胎土は浅黄褐色10Y R8/3を呈する。難波洋三氏の分類によると、G類に属すると考えられる。

第337図は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。丸瓦凸面は、縦方向のへらナデ調整、丸瓦部凹面は、棒状タキ痕が残存する。



第340図 SK156出土遺物

第338図は、「寛永通寶」の銭貨である。直径2.2cm, 厚み0.1cmを測る。大阪高津新地鑄造銭で、背郭上に「元」字を配してあり、新寛永である。

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### SK185

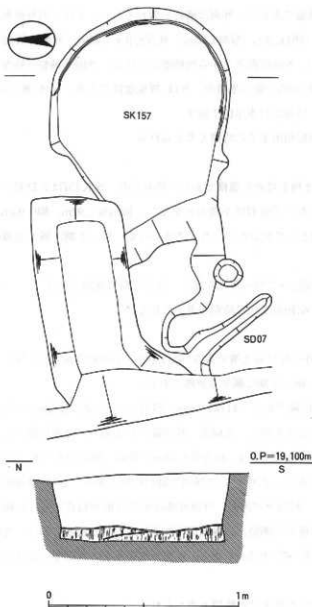
SK185は、調査区北部に位置する土壌である(第335図)。平面形は、円形を呈し、直径0.58m, 深さ0.2mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第336図-3は、肥前磁器染付碗である。外面は草花文を描く。8は、丹波焼鉄輪甕である。口径17.2cm, 器高20.3cm, 底径11.6cmを測る。体部断面に輪積み痕が見られる。底部内外面に4カ所の砂目痕が残存する。

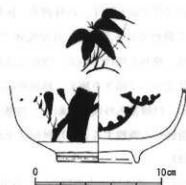
出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### SK156

SK156は、調査区南部の第43次調査Fトレンチの西壁沿いに接する土壌である(第339図)。平面形は不整形を呈し、長辺1.52m, 最深長0.38mを測る。東側は、第43次調査Fトレンチへ延びる。Ⅲ-3期に属す



第341図 SK157遺構図



第342図 SK157出土遺物

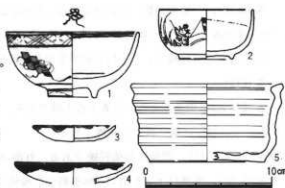


第343図 SK184遺構図

1. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6  
(炭化物, 2cm大の礫含む)
2. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y7/6
3. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3  
(炭化物含む)
4. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2
5. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3
6. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6  
(炭化物, 3cm大の礫含む)
7. 黄褐色砂層 2・5 Y5/4
8. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4  
(炭化物, 1cm大の礫含む)
9. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y7/6
10. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4  
(炭化物, 凡, 10cm以下の礫含む)

る遺構である。

第340図-1~3は、肥前磁器である。1は、染付小杯である。口径5.2cm、器高2.9cm、高台径2.7cmを測る。2は、染付蓋物である。口径7.0cm、器高3.5cm、高台径3.4cmを測る。外面の染付は丸文内に格子文・幾何学文・山水文などの5種類を描く。内面口縁端部及び高台畳付は無釉である。3は、白磁皿である。口径9.9cm、器高2.5cm、高台径3.2cmを測る。見込みは蛇ノ目輪ハギ、外面体部下半及び高台は無釉である。4・5は、土師質土器



第344図 SK184出土遺物

皿である。4は、口縁端部に灯芯痕を残すことから灯明皿である。内外面共、回転ナデ調整、底部は糸切り痕が残存する。5は、口径6.3cm、器高1.2cm、底径2.8cmを測る。内外面共、回転ナデ調整、底部は糸切り痕が残存する。6・7は、受けのない柿釉灯明皿である。6は、口径6.5cm、器高1.4cm、底径2.8cmを測る。口縁端部に灯芯痕を残す。内外面共、回転ナデ調整であるが、外面は磨耗が著しい。7は、内外面共、回転ナデ調整である。8は、丹波焼鉢である。口径11.2cm、器高8.45cm、底径8.0cmを測る。外面は灰釉を掛けた後、鉄釉を掛けている。内面は鉄釉を施す。外面体部下半から底部際にかけてへら削り調整、外面体部に波状文のへら描きを施す。外面底部は未調整、判読不能の墨書か。9は、堺焼播鉢である。口径(推)23.8cmを測る。口縁部内外面は回転ナデ調整である。播目は11本単位で施す。

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### SK157

SK157は、調査区中央西壁沿いに位置する。木桶を埋めた遺構である(第341図)。SK157はSD07を切っているが、まちがって同一に掘り下げてしまった。平面形は不整形を呈し、検出長1.92m、幅0.93m、深さ0.36mを測る。側板のみ遺存しており、便所として使われていたと考えられる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第342図は、肥前磁器染付鉢である。外面及び見込みに竹・笹文を描く。高台畳付は露胎である。

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### SK184

SK184は、調査区南壁沿いに位置し、調査区外へ延びる土壌である(第343図)。平面形は長方形を呈し、検出長0.86m、最深長0.5mを測る。Ⅲ-2期からⅢ-3期に属する遺構である。

第344図-1・2は肥前磁器である。1は、染付碗である。口径10.6cm、器高5.2cm、高台径3.8cmを測る。外面口縁部に幾何学文を巡し、外面及び見込みに宝文を描く。大橋康二氏の編年によると、Ⅴ期に属すると考えられる。2は、色絵蓋物である。口径7.45cm、器高4.0cm、高台径4.15cmを測る。外面の花・篆文は赤絵、草文は緑色釉で描く。内面口縁端部は無釉である。3・4は、土師質土器灯明皿である。3は、口径6.25cm、器高1.25cm、高台径3.0cmを測る。内外面共、回転ナデ調整、外面底部は糸切り痕が残存する。口縁端部内外面に灯芯痕が残る。4は、口縁部内外面が横ナデ調整、口縁端部内外面に灯芯痕が残る。5は、丹波焼鉢である。口径(推)12.0cm、器高6.2cm、底径(推)9.2cmを測る。外面体部下半から底部際にかけてへら削り調整、外面底部は未調整である。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃から19世紀初頭までの時期と考えられる。

### 3. 2次面の遺構と遺物

#### SK126

SK126は、調査区のほぼ中央に位置する土壌である(第345図)。平面形は不整形を呈し、一辺0.7m、深さ0.48mを測る。Ⅲ-2期からⅢ-3期に属する遺構である。

第346図は、土師質土器皿である。口縁7.8cm、器高1.5cm、底径3.9cmを測る。浅黄橙色7.5Y R8/3を呈し、内面口縁部は横ナデ調整、内面底部はナデ調整、外面全体に指頭圧痕が見られる。

出土遺物から概観すると、17世紀後半から18世紀前半までの時期と考えられる。

#### SK111

SK111は、調査区北部の第43次調査Fトレンチの西壁沿いに接する土壌である(第347図)。平面形は不整形を呈し、検出長0.92m、幅1.06m、最深長0.3mを測る。東側は、第43次調査Fトレンチへ延びる。Ⅲ-2期に属する遺構である。

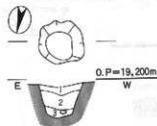
第348図1・2は、肥前磁器である。1は、青磁染付蓋である。口径9.1cm、器高3.0cm、つまみ径3.7cmを測る。内面天井部に五弁花、外面天井部に渦福を描く。2は、青磁御神酒徳利である。肩部に耳を貼り付ける。内面は無釉である。大橋康二氏の編年によると、1・2はⅣ期に属すると考えられる。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃から18世紀後半までの時期と考えられる。

#### SK114

SK114は、調査区北端に位置する土壌である(第349図)。平面形は不整形を呈し、長辺2.48m、最深長0.28mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

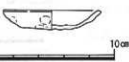
第350図-1は、肥前磁器染付筒型碗である。外面は山水文・折松葉文、内面は幾何学文を描く。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属すると考えられる。2は、土師質土器皿である。口径(推)14.6cm、器高(推)



1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (1~2.5mの層を千分含む)
2. 黄褐色粘質土層 10 Y5/5 (5mの層を千分含む)
3. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3 (7~12mの層を千分含む)



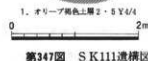
第345図 SK126遺構図



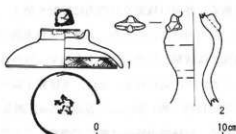
第346図 SK126出土遺物



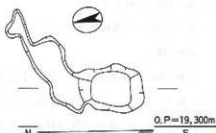
第347図 SK111遺構図



第347図 SK111遺構図



第348図 SK111出土遺物



第349図 SK114遺構図



第350図 SK114出土遺物(1)



3.2cm, 底径(推)11.2cmを測る。外面にはよい橙色5Y R7/4、内面は黒褐色10Y R3/1を呈する。口縁部内外面は横ナデ調整、底部内外面はナデ調整である。

第351図は、道具瓦である。全長27.2cm, 高さ6.4cm, 幅6.7cmを測る。外面はヘラナデ調整、内面は未調整、右側面はヘラで面取りを施す。内外面に金雲母が見られる。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃から18世紀後半までの時期と考えられる。

#### SK117

SK117は、調査区北部の第43次調査Fトレンチ西壁に隣接する土壌である。(第352図)平面形は長方形を呈し、長さ0.8m, 短辺0.6m, 深さ0.32mを測る。Ⅲ-2期からⅢ-3期に属する遺構である。

第353図-1は、肥前系染付碗である。口径(推)7.2cm, 器高5.5cm, 高台径(推)3.2cmを測る。外面に鶴を描いたのち、刷毛で白泥を塗った痕が見られる。2は、染付仏飯具である。口径6.2cm, 器高5.5cm, 底径3.8cmを測る。外面底部は無釉である。3は、ミニチュア土製品輪花鉢である。口径5.5cm, 器高2.3cm, 高台径2.0cmを測る。外面口縁部及び内面に緑釉を施す。型づくり成形、貼り付け高台である。4は、京焼系鍋である。内面体部には灰釉、外面には塗土を施す。外面体部上半にはトビカンナが見られる。5は、土師質土器火消壺の蓋である。口径(推)20.4cm, 器高3.2cmを測る。型づくり成形で、口縁部内外面は横ナデ調整、天井部内面はナデ調整、天井部外面は未調整で離れ砂が付着する。外面口縁部と外面底部の境目をヘラで面取りしている。内面天井部に煤が付着する。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃から19世紀前半までの時期と考えられる。

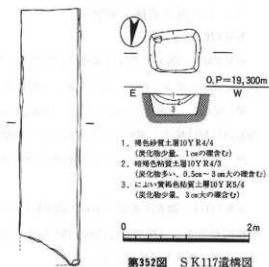
#### SK120

SK120は、調査区中央に位置する土壌である(第354図)。平面形は不整形円形を呈し、直径0.64m, 深さ0.38mを測る。前述したSK157を切っている。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第355図-1は、肥前磁器染付皿である。口径(推)13.6cm, 器高2.65cm, 高台径(推)7.4cmを測る。内面には丸文内に草花文及び流水文を描く。高台畳付は露胎である。2は、石臼の上臼である。直径(推)31.2cm, 高さ8.75cmを測る。花崗岩製で、下面には溝底が見られる。

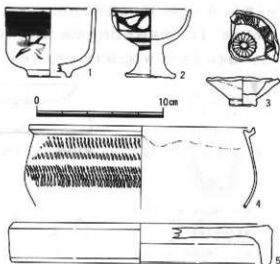
出土遺物から概観すると、18世紀前半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### SP94・93・92・91



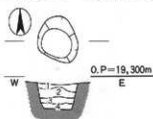
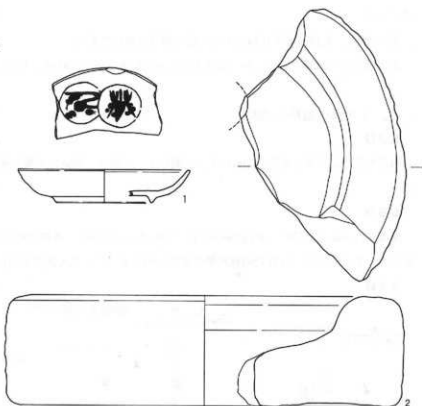
#### 第351図

SK114出土遺物(2)



第353図 SK117出土遺物

S P94・93・92・91は、調査区北端で東西に並ぶ（第356図）。S P94は、平面形が不整形を呈し、一辺0.3m、深さ0.18mを測る。S P93は、平面形が正方形を呈し、一辺が0.28m、深さ0.24mを測る。S P92は、平面形が不整形を呈し、一辺0.28m、深さ0.24mを測る。S P91は、平面形が円形を呈し、直径0.22m、深さ0.06mを測る。S P94からS P92の柱間は、一間（六尺五寸=1.969m）である。S P92からS P91の柱間は、0.75間である。それぞれに杭が遺存していることから、柵列かもしくは建物の柱穴ではないかと考えられる。Ⅲ-2期に属する遺



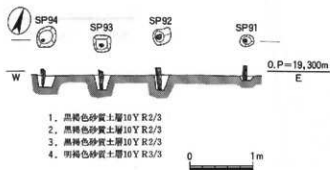
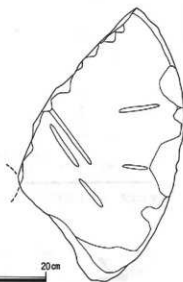
1. 2m×黄褐色砂質土層10Y R4/3  
(2E、5m以下の層、炭化物、焼土、粘性少量含む)
2. 褐色粘質土層10Y R4/6  
(炭化物、焼土少量含む)
3. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6  
(5m以下の層2個、炭化物少量含む)
4. 明褐色粘質土層7・5 Y R5/6  
(炭化物、焼土少量含む)



第354図 SK120遺構図



第355図 SK120出土遺物



1. 黄褐色砂質土層10Y R2/3
2. 黒褐色砂質土層10Y R2/3
3. 黒褐色砂質土層10Y R2/3
4. 明褐色砂質土層10Y R3/3



第356図 S P94・93・92・91遺構図



第357図 S P94出土遺物

構である。

第357図は、肥前磁器染付碗である。高台畳付は露胎である。

出土遺物から概観すると、18世紀前半から18世紀後半までの時期と考えられる。

#### 4. 1次面の遺構と遺物

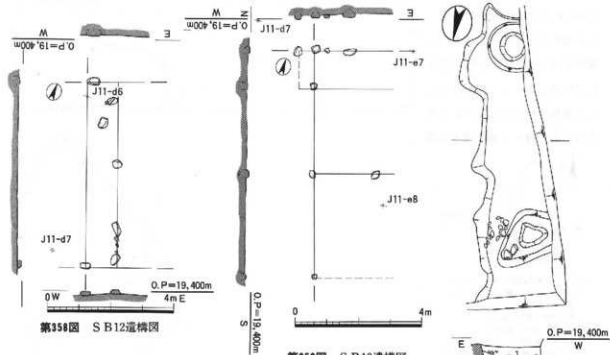
##### S B 12

南北約5.85m(3間)、東西2.30m以上(1間以上)を測り、西側に半間の廂をもっている。西側が間口である。

##### S B 13

南北約7.20m(3.5間)、東西230m以上(1間以上)を測る。西側が間口である。北側の通りが西に半間延びていることから、S B 12同様西側に半間の廂をもっていた可能性が高い。Ⅲ-3期に属する遺構である。

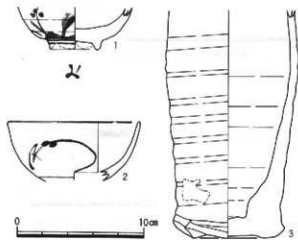
##### S K 52



第358図 S B 12遺構図

第359図 S B 13遺構図

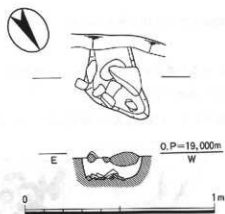
第360図 S K 52遺構図



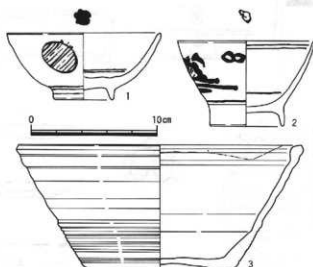
第361図 S K 52出土遺物

1. オリーブ褐色土層2・S Y 4/4  
(少し凹みあり。炭化痕。文。  
1~8cm大の破片)
2. オリーブ褐色土層2・S Y 4/3  
(炭化痕。3cm以下の破多く含む)

第360図 S K 52遺構図



第362図 S K05遺構図



第364図 S K55 (1・2)・S K05 (3) 出土遺物

S K52は、調査区北西隅に位置し、調査区外へ延びる土壌である(第360図)。平面形は不整長方形を呈し、検出長4.64m、深さ0.34mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第361図-1・2は、肥前磁器染付碗である。1は、外面に草花文、高台内に「大明年製」を簡略化した文様を描く。高台皿付は露胎である。2は、外面に折松葉文を描く。大橋康二氏の編年によると、1・2はⅣ期に属する。3は、土師質土器である。器種は不明。明赤褐色2.5Y R5/8を呈する。体部内外面は回転ナア調整、外面底部は糸切り痕が残存する。外面体部と外面底部の境目をヘラで面取りし、指でナタようであるが、欠損している部分もある。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃から18世紀後半の時期までと考えられる。

#### S K05

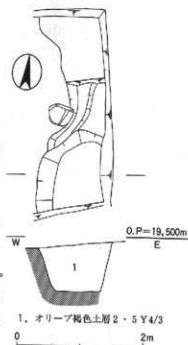
S K05は、調査区南壁沿いに位置し、調査区外へ延びる土壌である(第362図)。平面形は不整長方形を呈し、検出長0.76m、深さ0.2mを測る。0.4m以下の花崗岩製の石が数個集まって検出した。礎石ではないか。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第364図-3は、丹波焼鉢である。口径22.4cm、器高9.9cm、底径12.0cmを測る。内面体部に灰釉を施す。



第363図 S K55遺構図

1. 褐色砂質土層10Y R4/4  
(炭化物、1cm大の糍含む)
2. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/6  
(炭化物、2cm大の糍含む)
3. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3  
(炭化物含む)
4. 明黄褐色粘質土層2・5 Y7/6
5. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/8  
(3cm大の糍含む)
6. 濃い黄褐色粘質土層10Y R5/4  
(炭化物、2cm大の糍含む)
7. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6  
(1cm大の糍多く含む)
8. 濃い黄褐色粘質土層10Y R6/4  
(1cm大の糍多く含む)



第365図 S K49遺構図

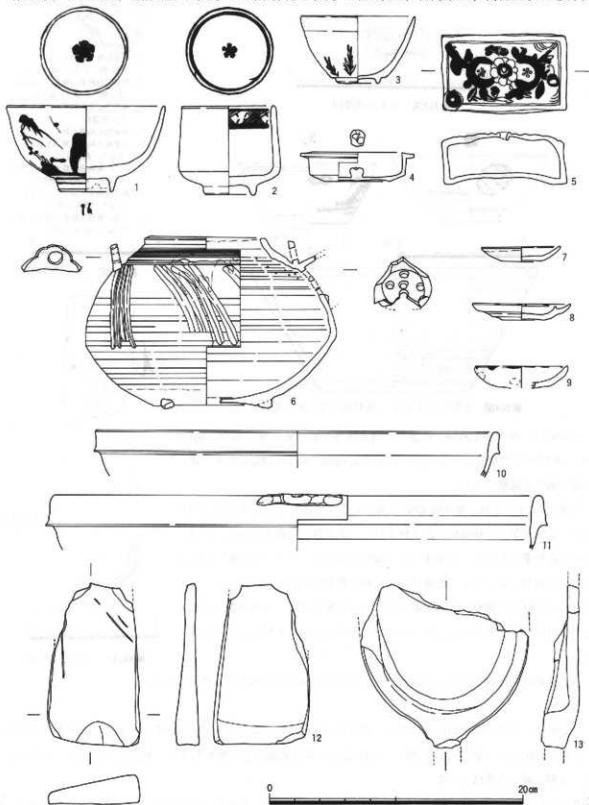
1. オリーブ褐色土層2・5 Y4/3

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

S K 55

S K 55は、調査区南壁沿いに位置し、調査区外へ延びる土壌である（第363図）。平面形は、不整形形を呈し、検出長0.4m、深さ0.54mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第364図-1・2は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径12.2cm、器高5.3cm、高台径4.6cmを測る。



第366図 S K 49出土遺物

丸窓文を外面部部に描く、厚手のいわゆる「くらわんか手」の碗である。見込みの五弁花文はコンニャク印判による。また、蛇ノ目軸ハギが見られる。2は、広東型碗である。口径10.8cm、器高6.7cm、高台径5.7cmを測る。外面に松文を描く。大橋康二氏の編年によると、1はⅣ期、2はⅤ期に属する。

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### SK49

SK49は、調査区東壁沿い及び第43次調査Fトレンチ北壁に接する土壌である（第365図）。平面形は、不整形を呈し、検出長1.2m、深さ0.76mを測る。東側の調査区外及び第43次調査Fトレンチへ延びる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第366図-1・2・5は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径12.6cm、器高6.7cm、高台径4.0cmを測る。外面に草花文、見込みの五弁花文はコンニャク印判による。高台内の染付は、「大明年製」の簡略化した文様か。2は、青磁染付筒茶碗である。口径7.4cm、器高7.0cm、高台径3.9cmを測る。内面口縁部に幾何学文を描く。見込みの五弁花文はコンニャク印判による。5は、染付水滴である。全長10.0cm、幅6.0cm、高さ4.1cmを測る。長方体で、表面には草花文が陽刻されている。直径0.7cmの風穴と水穴の二つの穴があり、風穴を指で押さえて、水穴からする水量を調節する仕組みになっている。水穴は向かって左手前にあり、右利き用に作られている。底部内外面に布目痕が残存する。内面は無軸、外面は右側面のみ無軸である。焼成時に右側面を下にして立てるため、施釉していない。大橋康二氏の編年によると、1・2はⅣ期、5はⅤ期に属する。3・4は、京焼系である。3は、小杉碗である。口径9.0cm、器高5.3cm、高台径3.4cmを測る。外面体部に鉄絵、外面底部は無軸である。4は、灰釉急須落し蓋である。口径9.0cm、器高2.3cm、底径5.2cmを測る。下面は露胎で、胎土は灰色5Y6/1を呈する。6は、瀬戸・美濃焼鉄釉土瓶である。口径9.6cm、器高13.7cm、底径7.9cmを測る。口縁端部は無軸。外面体部下半から底部にかけて無軸であり、煤が付着する。算盤玉形で、胎土はふい橙色5YR7/4を呈する。外面体部にヘラ状工具で4本単位の斜線文様を陰刻する。7・8は、柿軸灯明皿である。7は、受けがない。口径6.4cm、器高1.2cm、底径3.0cmを測る。外面体部及び外面底部は無軸である。8は、受け付きである。口径7.8cm、器高1.3cm、底径3.5cmを測る。全面に柿軸が施されている。7・8共、内面及び外面体部は回転ナデ調整、外面底部は糸切り痕、口縁端部に灯芯痕を残す。9・10・11・13は、土師質土器である。9は、灯明皿である。胎土は浅黄橙色7.5YR8/3を呈する。内面口縁部は横ナデ調整、内面底部はナデ調整、外面は指頭圧痕が見られる。口縁端部に灯芯痕を残す。10・11は、焙烙である。口縁部と底部との境目が突出するタイプである。10は、口径（推）31.6cmである。外面及び内面底部に煤が付着する。11は、口径（推）38.4cmである。外面に煤が付着する。外面口縁端部に耳を貼り付け、指で押さえた痕が残る。10・11共、口縁部内外面は横ナデ調整、外面底部は未調整で塵れ砂が付着する。内外面に金雲母が見られる。難波洋三氏のカテゴリによると、G類に属すると考えられる。13は、十能である。上面はナデ調整、下面は未調整で、煤が付着する。胎土はふい橙色7.5YR7/4を呈する。12は、灰色7.5YR6/1の粘板岩製の仕上げ砥石である。上下面に使用痕が認められる。

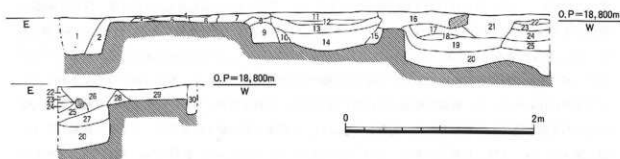
出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

## 第5節 第51次調査A-4区

A-4区は、延宝五年(1677年)伊丹郷町地味委細絵図(第1図)「小屋口村」(昆陽口村)とあり、天保十五年(1844年)伊丹郷町分間絵図(第1図)では、さらに明確に昆陽口村にあたるのがわかる。元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷絵図(第1図)によると、南側を間口とする本百姓の庄左衛門の屋敷地の南側の一部にはほぼ相当することがわかる。

### 1. 基本層序

全体的に遺存状態が悪く、大きく見て1面のみ検出した。南壁土層断面図(第367図)を観察すると、現地表面から約10cm~20cm下で遺構面を検出した。東端の一部では土間を検出した。



- |                       |                                  |                        |
|-----------------------|----------------------------------|------------------------|
| 1. 暗褐色粘質土層10Y R3/3    | 11. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6             | 21. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3 |
| 2. 暗褐色粘質土層10Y R3/4    | 12. 暗オリーブ褐色2・5Y3/3 (炭化物多量に含む)    | 22. 黄褐色砂質土層2・5Y5/4     |
| 3. 褐色砂質土層10Y R4/4     | 13. 黄褐色粘質土層10Y R5/8              | 23. 褐色砂質土層10Y R4/4     |
| 4. オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/4  | 14. 黄褐色砂質土層10Y R3/2 (5cmの硬多量に含む) | 24. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3 |
| 5. 黄褐色粘質土層10Y R5/6    | 15. 黄褐色粘質土層10Y R5/6              | 25. 暗褐色粘質土層10Y R3/4    |
| 6. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6   | 16. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3           | 26. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3  |
| 7. 褐色粘質土層10Y R4/4     | 17. 暗褐色砂質土層10Y R3/4              | 27. 暗褐色粘質土層2・5Y3/2     |
| 8. 黄褐色砂質土層10Y R5/6    | 18. 暗褐色砂質土層10Y R3/3              | 28. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3 |
| 9. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3 | 19. 黄褐色粘質土層10Y R3/2 (炭化物多量に含む)   | 29. 黄褐色粘質土層10Y R5/6    |
| 10. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6  | 20. オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3            | 30. 暗褐色砂質土層10Y R3/4    |

第367図 南壁土層図

### 2. 1次面の遺構と遺物

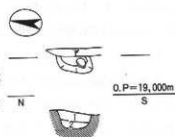
#### SK1313

SK1313は、調査区東側は中程に位置し、東側は調査区外に延びる(第368図)。平面形は方形を呈し、検出長0.18m、幅0.36m、深さ0.20mを測る。III-2期に属する遺構である。

第369図-1は、肥前磁器染付碗である。高台径(推)4.2cmを測る。外面には、コンニャク印柄手法により菊花文が施される。大橋康二氏の編年によるとIV期に属する。2は、丹波焼甕である。口径(推)39.0cmを測る。胎土は、青灰色5B5/1を呈し、2mm以下の白色礫を多量に含む。

口縁部は内弯し、端部は平坦である。内面体部には6条の沈線を有する。内外面共同転圧調整を施す。

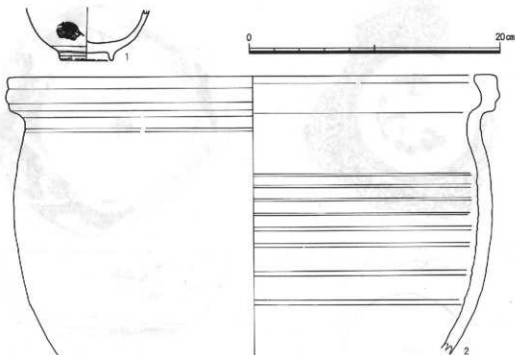
出土遺物から概観すると、18世紀前半の時期と考えられる。



1. 暗灰黄色砂質土層2・5Y5/2
2. 褐色粘質土層10Y R4/6



第368図 SK1313遺構図



第369図 SK1313出土遺物

#### SK1353

SK1353は、調査区北東部に位置する（第370図）。東側は調査区外延びる。南側は、SD46によって切られている。平面形は不整楕円形を呈し、検出長0.93m、幅1.06m、深さ0.64mを測る。Ⅲ-2からⅢ-3期まで存続する遺構である。

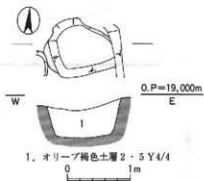
第371図-1・2は、肥前磁器である。1は、染付皿である。口径（推）19.0cm、器高2.2cm、高台径12.8cmを測る。内面に蜻唐草文、見込み部分に松竹梅文、外面体部は、唐草文を挿く。高台内にハリ支え疵及び角形銘歌がみられる。2は、染付鉢である。口径（推）19.6cm、器高6.8cm、高台径10.0cmを測る。内面体部は扇文や葡萄文を、外面体部は唐草文を挿く。見込み部分に、コンニャク印判手法により五弁花文を施す。高台内にみられる銘歌は、渦福文と呼称される「福」の崩し字文である。

出土遺物から概観すると、18世紀中頃から19世紀初頭の時期と考えられる。

#### SK1320

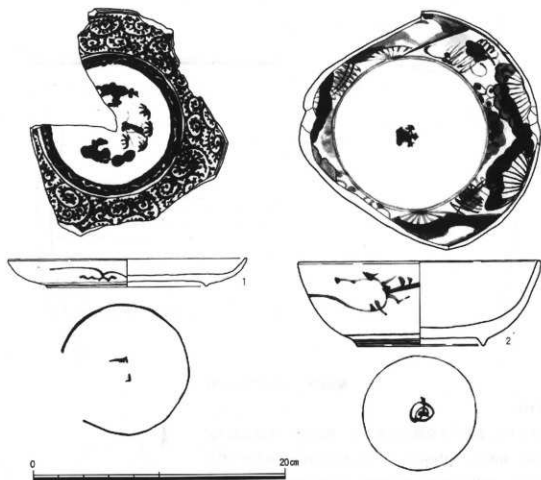
SK1320は、調査区南端に位置し、南端は調査区外に延びる（第372図）。平面形は長方形を呈し、検出長0.57m、幅1.64m、深さ0.30mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第373図-1は、肥前磁器色絵碗である。口径（推）10.4cmを測る。斜格子文と蝙蝠文は赤絵で描く。黄色・緑色・青色も用いられている。2は、伊賀・信楽焼系土鍋か行平の蓋である。口径（推）16.0cm、器高4.9cm、つまみ径4.4cmを測る。外面は、蛇ノ目状に鉄釉を掛け、その間に、とびかん文様を施す。また、いっちゃん掛けもみられる。内面には灰釉を施す。口縁部内外面・つまみ内面・とびかん部分は露胎である。3～5は、土面子である。3は魚・4は女性の顔・5は男性の顔を形取ったものである。6は、ミニチュアの蓋である。上面には、緑釉を施す。7は、銅製煙管の雁首である。羅字の差し込み口の断面は円形で、直径

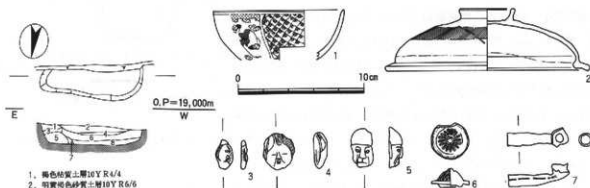


第370図 SK1353遺構図





第371図 SK1353出土遺物



第373図 SK1320出土遺物

1. 褐色粘質土層10Y R4/4
  2. 黄褐色砂質土層10Y R6/6
  3. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
  4. 薄オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3  
【炭化物多く含む】
  5. 濃い黄褐色粘質土層10Y R4/3
  6. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
  7. 黄褐色粘質土層10Y R6/8
- (5cm大の網多く、遺物含む)



第372図 SK1320遺構図

1.0cmを測る。薄板を丸めた時の接合痕がみられる。

出土遺物から概観すると18世紀後半から19世紀前半の時期と考えられる。

#### SK1332

SK1332は、調査区南西部に位置し、南端はSK1331によって切られている(第374図)。平面形は不整長方形を呈し、検出長3.06m、幅1.40m、深さ0.26mを測る。埋土には焼土が多く含まれ、大火後の焼土処理のためのゴミ穴である。Ⅲ-2からⅢ-3期まで存続する遺構である。

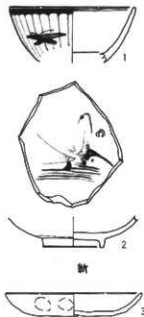
第375図-1は、肥前磁器染付碗である。口径(推)10.0cmを測る。外面に蓮弁文を描き、その中に蝶文

を施す。2は、京焼風陶器碗である。高台径4.8cmを測る。内面には、山水文が描かれ、目痕が残る。高台は露胎で、「新」の印銘が施される。3は、土師質土器皿である。口径(推)10.8cm, 器高1.9cmを測る。口縁部は直線的に延びる。灯芯痕がみられ、外面全体に煤が付着している。口縁部内外面は横ナデ調整、内面底部は一定方向のナデ調整、外面は指頭圧調整である。4は、唐津焼刷毛目文鉢である。口径(推)30.6cm, 高台径(推)12.0cm, 器高8.2cmを測る。見込みに、砂目がみられる。内面の一部には、刷毛目の上から鉄釉を掛けている。外面下半と高台は露胎である。

第376図は、「寛永通寶」の銭貨である。直径2.5cm, 厚み0.1cmを測る。「寛」字はス「寛」である。図に上げたもの以外に、19世紀初頭から下るものが含まれ、出土遺物から概観すると、17世紀後半から19世紀初頭の時期と考えられる。

#### SK1311

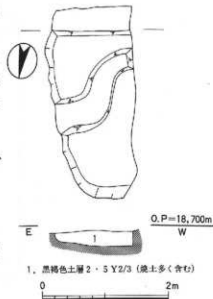
SK1311は、調査区東側のSK1313の北側に位置する(第377図)。平面



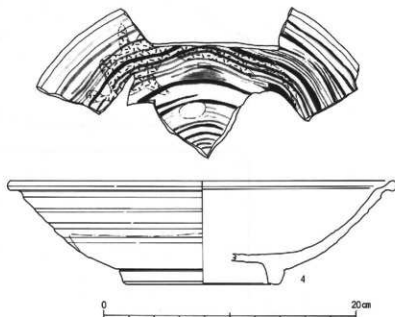
第375図 SK1332出土遺物(1)

形は、円形を呈し、直径0.30m, 深さ0.04mを測る。礎石として転用されていた可能性のある五輪塔が出土した。

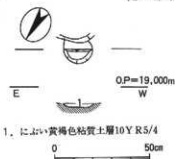
第378図は、五輪塔の火輪部である。花崗岩製で、上部と下部にくり込みを有する。上端長9.0cm, 下端長20.8cm, 軒端高7.0cmを測る。



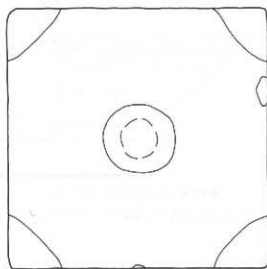
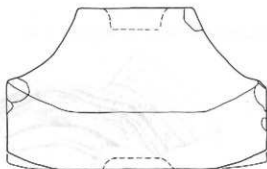
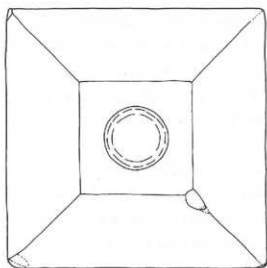
第374図 SK1332遺構図



第376図 SK1332出土遺物(2)  
(S=1/2)



第377図 SK1311遺構図



第376図 SK1311出土遺物

## 第6節 第78次調査A-5区

A-5区は、延宝五年(1677年)伊丹郷町地味委細絵図(第1図)に「小屋口村」(昆陽口村)とあり、天保十五年(1844年)伊丹郷町分間絵図(第1図)では、さらに明確に昆陽口村にあたることがわかる。元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町絵図(第1図)によると、南側を間口とする本百姓の善右衛門の屋敷地にはば相当することがわかる。

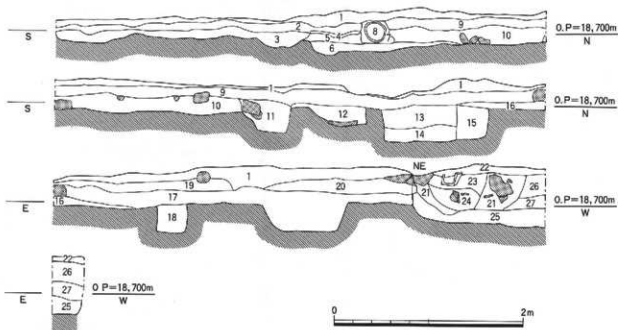
### 1. 基本層序

地山は調査区北端が最も高く、O. P. = 18,700mを測る。北端から南方向へ緩やかに傾斜しており、その高低差は0.1m程度である。地山上面は土層の組成から4層に大別される。下層より

- ①明黄褐色粘質土層(第379図-第16・25層など)
  - ②明黄褐色粘質土層(第379図-第3・10層など)
  - ③黄褐色ないしはオリープ褐色砂質土層(第379図-第2・9層)
  - ④黄褐色砂礫層ないしは砂質土層(第379図-第1・22層)
- ①から③層にかけては伊丹郷町期の肥前磁器の遺物を多量に含有する。④層は表土層である。

### 2. 2次面の遺構と遺物

#### S B17



- |  |  |   |
|--|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 黄褐色砂礫層 2・5 Y5/3</li> <li>2. 濃い黄褐色粘質土層10 Y R6/3</li> <li>3. 明黄褐色粘質土層10 Y R7/8</li> <li>4. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6</li> <li>5. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y7/6</li> <li>6. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6</li> <li>7. オリープ灰色粘質土層10 Y6/2</li> <li>8. 淡黄色粘質土層 5 Y8/3</li> <li>9. 明黄褐色砂礫層 2・5 Y6/6</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>10. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4</li> <li>11. 濃い黄褐色粘質土層 2・5 Y6/3</li> <li>12. 灰白色粘質土層 2・5 Y7/1 (遺物多量を含む)</li> <li>13. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6</li> <li>14. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4</li> <li>15. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/8</li> <li>16. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/6</li> <li>17. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4</li> <li>18. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>19. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4</li> <li>20. 暗オリープ褐色土層 5 Y4/4</li> <li>21. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2</li> <li>22. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/8 (遺物含む)</li> <li>23. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6</li> <li>24. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4</li> <li>25. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8</li> <li>26. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 (遺物含む)</li> <li>27. 黒褐色粘質土層10 Y R2/3</li> </ol> |
|--|--|---|

第379図 西壁土層図

東西400m（2間）、南北15m以上（7.5間）を測る。間口は、南側と推定される。

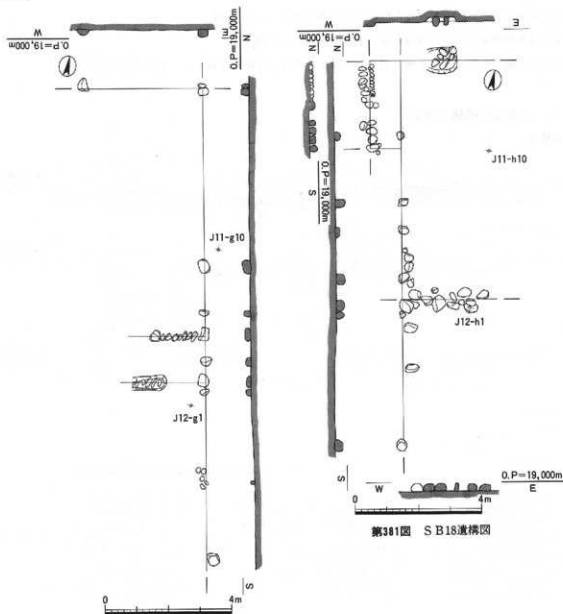
### SB18

東西4m以上（2間以上）、南北12.2m以上（6間以上）を測る。SB20と同様で、北西に東西約1m（1間）×南北約2.75m（1.5間）の張り出しを持つ。間口は南側と推定される。Ⅲ-3期に属する遺構である。

### SI05・06

SI05・06（第382図）は調査区北西隅に位置する。SI06はSI05の北側に隣接する。SI05・06は共に断面形が逆台形の掘形を有している。SI05の掘形は径42.0cm、深さ18.0cmを測る。SI06の掘形は径30.0cm、深さ22.0cmを測り、SI05に比べ規模はやや小さめであるが、2基一組の便槽の可能性はある。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第383図は、大谷焼甕である。底径21.9cmを測る。底部は露胎で、離れ砂が付着し、「上穴」が墨書される。内外面はナデ調整後に鉄軸が施される。また、内面には白色の付着物がある。便槽として使用されたと想定できる。



第380図 SB17遺構図

第381図 SB18遺構図

出土遺物から概観すると、年代は19世紀後半以降に比定できる。

### SK66

SK66 (第384図) は調査区中央より南東寄りに位置する。いびつなL字状を呈す。南西長111.0cm, 南北長93.0cm, 深さ150.0cmを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第385図-1は、唐津焼碗である。高台径(推)4.4cmを測る。胎土に白色砂粒が含まれる。遺物の時期は1600年~1630年代である。2は、肥前磁器染付碗である。口径(推)10.6cm, 高台径4.3cm, 器高6.8cmを測る。高台は削り出し未調整で、無軸である。淡橙色に発色している。体部下方には回転へう削り痕が認められる。外面口縁直下に波文、体部には松葉文を描く。呉須の発色はやや不良である。大橋康二氏の編年によると、記載した2点の遺物は17世紀前半に比定できるが、相伴した遺物から概観すると、主要年代は17世紀前半から18世紀前半までと考えられる。

### SK36

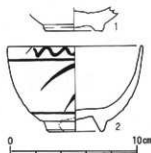
SK36 (第386図) は調査区西端中程より南側に位置する。不整な長方形を呈し、南側をSK97に切られている。検出長0.98m, 幅0.7m, 深さ0.11mを測る浅い土溝である。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第387図-1は、肥前磁器蕎麦猪口である。口径(推)7.4cmを測る。外面には松文の染付が配される。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属する。2は、丹波焼甕である。底部には、12.2cmを測る。内面は灰釉が施され、底部には砂

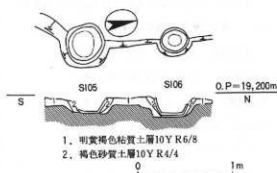


上 突

第383図 SI 05出土遺物

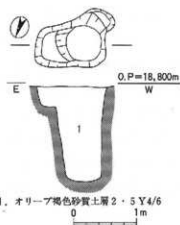


第385図 SK66出土遺物



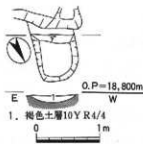
1. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
2. 褐色砂質土層10Y R4/4

第382図 SI 05・06遺構図



1. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6

第384図 SK66遺構図



1. 褐色土層10Y R4/4

第386図 SK36遺構図

目痕がみられる。外面は鉄釉が施される。底部外面は露胎で、その周縁には離れ砂が付着する。

出土遺物から概観すると、18世紀後半に比定できる。

#### S K 51

S K 51 (第388図)は調査区南東に位置する。径1.2m、深さ0.39mを測る不整形円形を呈す。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第389図は、肥前磁器青磁染付駄足折縁大皿である。口径(推)28.8cm、高台径11.0cm、器高8.2cmを測る。畳付けは鉄泥によって化粧掛けされ、直径8.3cmのチャツの痕が明瞭に残る。チャツは磁器製のものである。17世紀後半(1660年以降)の波佐見焼三股古窯産である。

この遺物は伝世品と考えられ、他の共伴遺物を観る限りでは、主要年代は18世紀前半から後半に比定できる。

#### S K 52

S K 52 (第390図)は調査区南西に位置する。全長1.44m、幅0.97m、深さ0.39mを測る長方形を呈する。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第391図-1・2・4は、肥前磁器である。1は、染付筒型碗である。

口径(推)7.5cm、高台径(推)3.4cm、

器高6.4cmを測る。2は、蕎麦猪口

である。口径(推)6.8cm、高台径(推)

4.9cm、器高5.6cmを測る。1・2の

外面には蔓文が描かれる。4は、染

付皿である。口径(推)14.2cm、高

台径8.4cm、器高3.5cmを測る。見込

みはコンニャク印判による五弁花が

施される。内面器壁には一重網目文

が描かれる。3は、柿輪灯明皿で

ある。口径(推)6.7cmを測る。外面口

縁直下から内面にかけて透明釉が施

される。外面には煤は認められない。

底部外面は右回りの糸切り痕が顕著

にみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀前

半から後半の年代を示すものと考え

られる。

#### S K 105

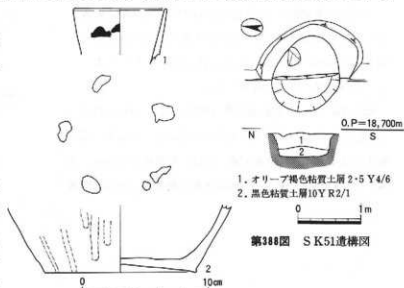
S K 105 (第392図)は調査区北東

隅に位置する。北側は調査区外に延

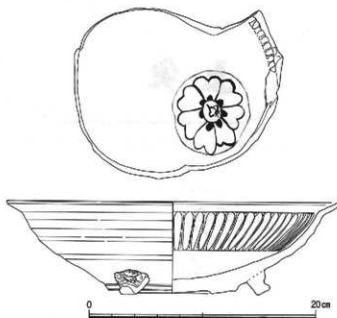
び、不整形円形を呈するものと思われ

る。径0.86m、深さ0.61mを測る。

Ⅲ-2期に属する遺構である。



第387図 S K 36出土遺物



第389図 S K 51出土遺物

第393図は肥前磁器染付碗である。口径(推)9.8cm, 高台径4.0cm, 器高5.7cmを測る。半陶胎である。内外面には貫入が認められる。外面は雪輪に松竹梅文が呉須で描かれる。高台内には渦槓が一重円内に銘款される。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属する。

共伴した遺物から概観すると、主要な年代は18世紀後半に比定できる。

#### SK99

SK99(第394図)は調査区南東に位置する。SK38に西側を切られているが、長方形を呈するものと思われる。検出長0.94m, 幅0.86m, 深さ0.22mを測る。埋土中には人頭大以上の礫が数個含まれる。Ⅲ-3期に属する遺構である。

第395図は、京焼系灰釉皿である。口径(推)11.8cm, 底径(推)4.4cm, 器高2.3cmを測る。5 Y7/2灰白色の釉が外面口縁直下から内面全体に施される。

共伴遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀前半の年代に比定できる。

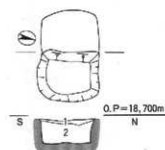
#### SK57

SK57(第396図)は調査区南西隅に位置する。L字状を呈し、東西長3.3m, 幅0.4~0.87m, 深さ0.7mを測る。東よりの出入口を有する地下室の可能性がある。Ⅲ-2期から3期にかけて存続する遺構である。

第397図は、肥前磁器青磁染付蓋である。口径4.7cm, つまみ径4.2cm, 器高2.6cmを測る。外面(高台内以外)に青磁が施される。文様はつまみ内には二重方形枠内の渦槓が銘款され、内面には四方繡文と蛸唐草文が呉須によって描かれる。大橋康二氏の編年によると、Ⅳ期に属する。

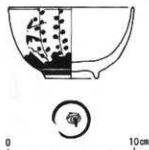
共伴遺物から概観すると、18世紀前半から明治にかけての年代が比定できる。

#### SD84

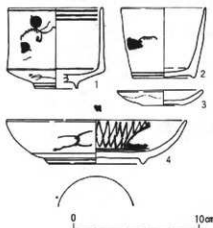


1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
2. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4  
(4cmの顕多量に含む)

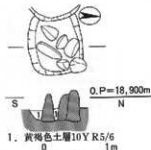
第390図 SK52遺構図



第393図 SK105出土遺物



第391図 SK52出土遺物

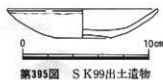


第394図 SK99遺構図



1. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y5/2
2. におい-黄色砂質土層 2・5 Y6/4
3. 洗紫色砂質土層 2・5 Y7/4
4. におい-黄色砂質土層 2・5 Y4/3
5. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/8
6. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
7. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8

第392図 SK105遺構図



第395図 SK99出土遺物



SD04 (第398図)は調査区西北を東西に延びる溝である。検出長9.6m、幅1.26m、深さ0.33mを測る。溝は調査区外西方向へ延びる可能性がある。Ⅲ-1期か？

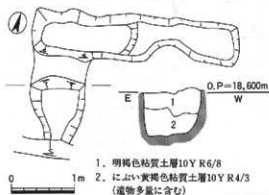
第399図-1は、軟質施釉陶器碗である。高台径(推)4.4cmを測る。2・3は、関西系陶器である。2は、菊花皿である。口径(推)12.7cm、高台径(推)6.7cm、器高2.7cmを測る。内面はへら彫りによって成形される。高台は貼り付けによる。外面体部から内面全体にかたって灰白色釉が施される。3は、皿である。口径(推)12.0cmを測る。外面体部から内面にかけて灰釉が施される。なお、2・3については大橋康二氏に御教示を賜った。

相伴した遺物の中には、雷文のある龍泉系青磁碗が含まれるが伝世品と考えられる。主要な年代は2・3が瀬戸・美濃焼や唐津焼を模したものとすれば、16世紀後半から17世紀前半であるが、確定するに至らない。

### 3. 1次面の遺構と遺物

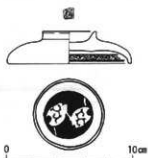
#### SB19

礎石の残存状況が悪く、下層のSB17を利用した推測の域を出ない。東西3.1m以上(1.5

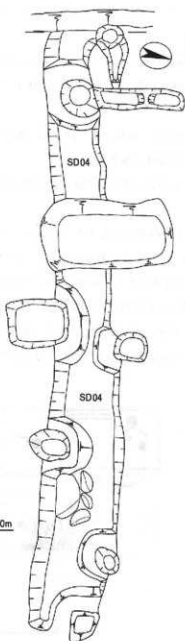


1. 明褐色粘質土層10Y R6/8  
2. 1. 明褐色粘質土層10Y R4/3 (遺物多量を含む)

第396図 SK57遺構図

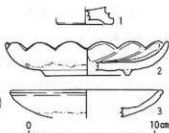


第397図 SK57出土遺物

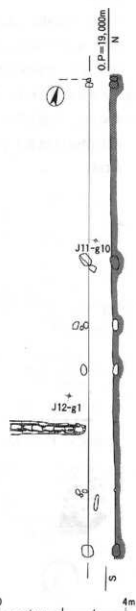


1. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3 (表土)  
2. 明褐色砂質土層2・5 Y6/8  
3. 明褐色砂質土層2・5 Y6/6 (粘土、炭化物含む)  
4. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4  
5. 明褐色粘質土層10Y R6/6  
6. 明褐色粘質土層10Y R6/8

第398図 SD04遺構図



第399図 SD04出土遺物



第400図 SB19遺構図

間以上)、南北14.88m以上(7.5間以上)を測る。間口は、南側と推定される。

### SB20

東西2.86m以上(1.5間以上)、南北12m以上(6間以上)を測る。北西に東西約95m(0.5間)×南北約220m(1間)の張り出しを持つ。間口は、南側と推定される。

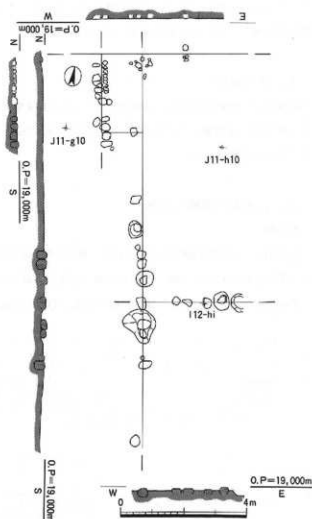
S B18の上面に位置する建物で、S B18の時期より下る。

### SK31

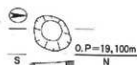
SK31(第402図)は先述のSD04の上面に位置する。長径0.64m、深さ0.35mを測る不整形円形を呈す。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第403図は、大谷焼甕である。底径28.4cmを測る。底面は、未調整で離れ砂が付着する。また、先述のS I 05の甕と同様の墨書「上允」が認められる。内外面はナア調整後鉄釉が施される。内面に白色の付着物がみられる。便槽に使用されたものと考えられる。

出土遺物から概観すると、19世紀後半から20世紀前半の年代に比定できる。



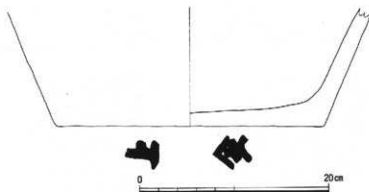
第401図 SB20遺構図



1. オリーブ褐色砂質土層  
2・5 Y4/4
2. オリーブ褐色粘質土層  
2・5 Y4/6
3. 黒色粘質土層10 Y R2/1  
(炭化物多量に含む)
4. 暗黄褐色砂質土層2・5 Y6/8



第402図 SK31遺構図



第403図 SK31出土遺物

## 第7節 第78次調査B-8区

B-8区は、延宝五年(1677年)伊丹郷町地味委細絵図(第1図)に「小屋口村」(昆陽口村)とあり、天保十五年(1844年)伊丹郷町間絵図(第1図)では、さらに明確に昆陽口村にあたることがわかる。元禄七年(1694年)柳沢吉保領伊丹郷町絵図(第1図)によると、屋敷主の市郎右衛門・借家人の市兵衛及び日用(日やとい)で生活している佐兵衛及び主人を失った後家で承引き(糸つむぎ)を職業としている六右衛門の屋敷地の一部には相当することがわかる。

### 1. 基本層序

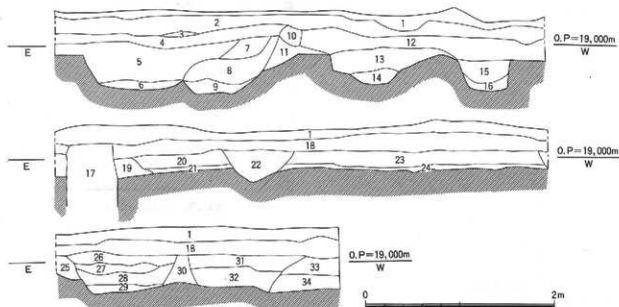
遺構面は、発掘区全面で3面検出した。南壁土層断面図(第404図)を観察すると、現地表面より約14cm下(第2層・第18層)で1次面を、1次面より約12cm下(第4層・第12層)で2次面を、2次面より約16cm下で3次面を検出した。

### 2. 3次面の遺構と遺物

#### SD04

SD04は、調査区西側を南北に走り、調査区外へ延びる溝である(第406図)。検出長8.64m、最長幅1.16m、深さ0.18mを測る。Ⅲ-1期からⅢ-2期へ存続する遺構である。

第407図-1は、土師質土器灯明皿である。口径7.2cm、器高1.3cmを測る。内外面共、煤が付着している。

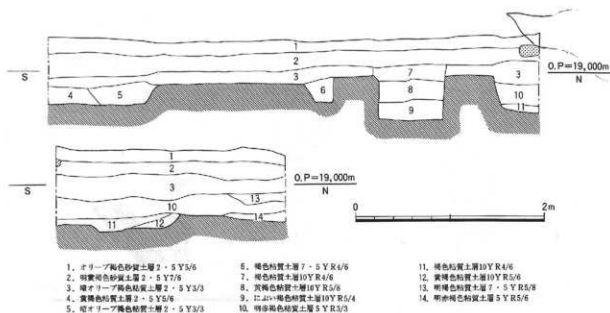


1. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y5/6
2. 明黄褐色砂質土層2・5 Y7/6
3. 褐色砂質土層7・5 Y R4/6
4. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3
5. 灰褐色砂質土層2・5 Y3/1 (炭化跡多量を含む)
6. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3
7. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
8. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4 (遺物含む)
9. 明褐色粘質土層7・5 Y R5/6
10. 褐色粘質土層10 Y R4/4 (2~5mmの礫多量を含む)
11. 1. 暗オリーブ褐色粘質土層10 Y R5/6
12. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6

13. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4
14. 黄褐色砂質土層2・5 Y3/4
15. 明褐色粘質土層7・5 Y R5/8
16. 暗オリーブ褐色粘質土層5 Y4/2
17. 灰褐色砂質土層2・5 Y5/3
18. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3
19. 灰オリーブ褐色粘質土層5 Y4/2
20. 灰褐色砂質土層2・5 Y6/2
21. 褐色粘質土層5 Y R6/8
22. オリーブ褐色粘質土層10 Y R3/2
23. 灰黄色砂質土層2・5 Y6/2
24. 褐色粘質土層5 Y R6/8

25. 灰オリーブ色砂質土層5 Y4/2
26. オリーブ色砂質土層5 Y5/6
27. 灰色砂質土層5 Y4/1
28. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
29. 明褐色粘質土層2・5 Y4/2
30. 暗オリーブ色砂質土層5 Y5/3
31. 1. 暗オリーブ褐色粘質土層10 Y R5/3
32. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
33. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
34. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4

第404図 南壁土層図



第405図 西壁土層図

2・3は、肥前磁器である。2は、一重網目文碗である。3は、初期伊万里の染付皿である。高台には、離れ砂が付着する。4は、丹波焼摺鉢である。外面体部は指頭圧調整ののち、横ナア調整をしている。外面体部の底部付近に、へう削り調整が見られる。外面底部は、剥落している。内面に自然釉が付着している。楕目は8本単位である。

大橋康二氏の編年によると、2はⅢ期、3はⅡ-2期に位置付けられる。

出土遺物から概観すると、16世紀末から17世紀後半の時期と考えられる。

#### SK120

SK120は、調査区西南端に位置し、調査区外へ延びる土壌である(第408図)。平面形は不整形を呈し、検出長0.78m、深さ0.20mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第409図は、浅焼壇壺である。口径6.7cm、器高9.7cm、底径6.1cmを測る。外面口縁部は横ナア調整、外面胴部は粘土板巻きつけたのち、ナア調整を施している。底部は粘土板でふさいでいる。内面胴部は布目痕が見られる。外面胴部には、一重の長方形の枠内に、銘文「御壺師、栗湊伊織」と2行に分けて押印されている。小川 望氏の編年によると、Ⅲ期(17世紀後半)に属すると考えられる。

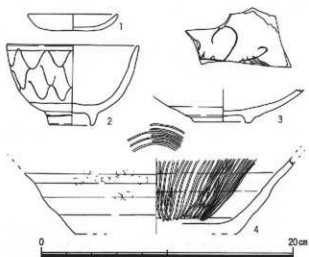
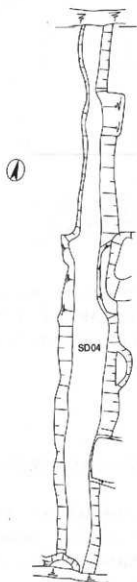
出土遺物から概観すると、17世紀後半から18世紀前半までの時期と考えられる。

### 3. 2次面の遺構と遺物

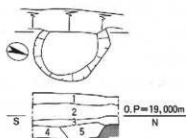
#### SK67

SK67は、調査区東側に位置する土壌である(第410図)。SK67は、SK68に切られていて、前後関係がある。平面形は不整形長方形を呈し、検出長0.88m、深さ0.08mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第411図-1は、京焼陶器碗である。口径(推)9.0cm、器高5.7cm、高台径5.0cmを測る。外面には山水文、高台は露胎である。外面底部に、「木下弥」と印銘を施している。2は、土師質土器培塔である。口径(推)25.8cmを測る。口縁部は直立している。口縁部内外面は横ナア調整、外面口縁部と外面底部の境目がへう削り、外面底部は未調整である。難波洋三氏の分類によると、D類に属すると考えられる。



第407図 SD04出土遺物



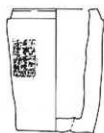
1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
2. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/6
3. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3
4. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y2/3 (炭物含む)
5. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6

第408図 SK120遺構図



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
2. 黄褐色砂質土層 10 Y R5/8 (炭化物含む)
3. 褐色砂質土層 10 Y R4/6
4. 褐色粘質土層 10 Y R4/6
5. 黄褐色砂質土層 10 Y R5/6
6. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8
7. 褐色粘質土層 10 Y R4/6

第406図 SD04遺構図



第409図 SK120出土遺物

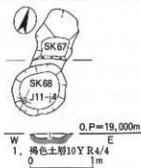
第412図は、「寛永通寶」の銭貨である。直径2.5cm、厚み0.1cmを測る。ス「寛」字はハ「寶」字である。背文をもたない新寛永である。

共伴遺物を含めて概観すると、17世紀後半から18世紀後半までの時期と考えられる。

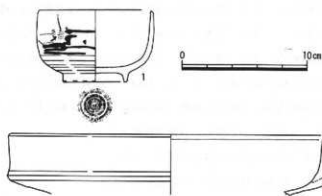
### SK88

SK88は、調査区南壁沿いに位置し、調査区外へ延びる土壌である（第413図）。検出長1.54m、深さ0.44mを測る。Ⅲ-2期に属する遺構である。

第414図-1は、ミニチュア土製品碗である。口径（推）5.2cm、器高2.1cm、高台径（推）2.6cmを測る。内外面共、回転ナデ調整。貼り付け高台である。内外面にキララ雲母が付着している。2は、唐津焼刷毛目文碗である。見込みを蛇ノ目輪ハギしている。高台畳付及び見込み部分に離れ砂が付着している。大橋康二氏の編年によると、Ⅲ期に属すると思われる。3は、土師質土器皿である。口径10.0cm、器高2.7cm、底径5.7cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は指頭圧痕が見られる。4は、塚焼播鉢である。口径19.3cm、器高7.3cm、底径9.5cmを測る。外面体部の回転ヘラ削りは、底部際から口縁部外縁帯の下まで施している。口縁部内外面は回転ナデ調整、外面底部は輪状の凹みがあり、未調整である。内外面底部に重ね焼の痕が残っている。内外面体部の播目は6本単位、見込みの播目は5本単位で中央がまじ



第410図 SK67遺構図

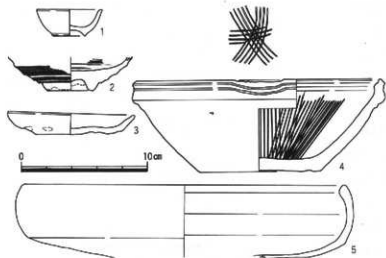


第411図 SK67出土遺物(1)

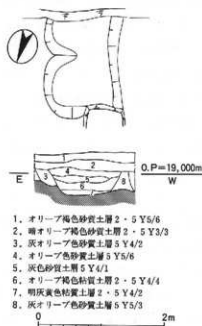


第412図 SK67出土遺物(2)

(S=1/2)



第414図 SK88出土遺物



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y5/6
2. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3
3. 灰オリーブ色砂質土層 5 Y4/2
4. オリーブ色砂質土層 5 Y5/6
5. 灰色砂質土層 5 Y4/1
6. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
7. 明灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2
8. 灰オリーブ色砂質土層 5 Y5/3

第413図 SK88遺構図

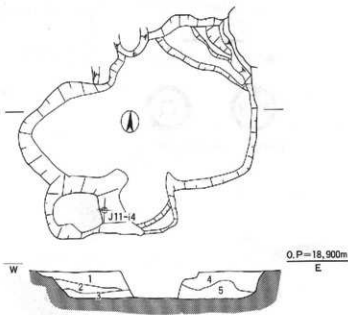
わる。白神典之氏の編年によると、I型式に属すると考えられる。5は、土師質土器焙烙である。口径25.4cmを測る。口縁部内外面は横ナテ調整、内面底部はナテ調整、外面底部は未調整である。内面口縁部はへら削りののち、横ナテ調整している。外面に煤が付着している。難波洋三氏の分類によると、E類に属すると考えられる。

出土遺物から概観すると、17世紀後半から18世紀中頃までの時期と考えられる。

#### SK43

SK43は、調査区中央に位置する土壌である(第415図)。平面形は不整形を呈し、東西最長3.78m、南北最長3.52m、深さ0.42mを測る。Ⅲ-2期からⅢ-3期へ存続する遺構である。

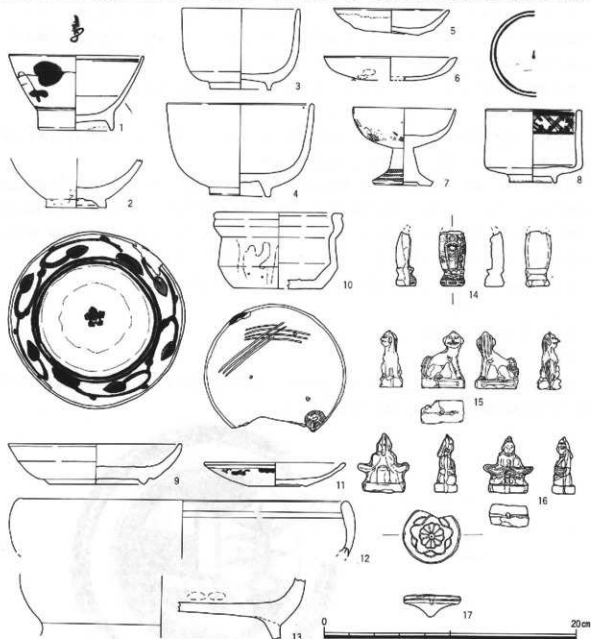
第416図-1・4・7-9は、肥前磁器である。1は、広東型碗である。口径10.8cm、器高5.95cm、高台径6.0cmを測る。草花文の染付を施す。見込みに「寿」字を染付した銘がある。4は、陶胎染付碗である。口径11.4cm、器高7.4cm、高台径4.8cmを測る。7は、赤絵仏飯具である。口径8.2cm、器高6.1cm、底径4.6cmを測る。脚底部は露胎である。8は、青磁染付筒茶碗である。口径7.4cm、器高5.8cm、高台径3.6cmを測る。内面口縁部に幾何文の染付が巡らしている。9は、染付皿である。口径13.8cm、器高3.2cm、高台径7.5cmを測る。内面口縁部に唐草文の染付、見込みは蛇ノ目雅ハギ、五弁花文はコンニャク印判による。2は、焼野焼青緑釉碗である。外面高台部は露胎である。大橋康二氏の編年によると、1・7はV期、2・8・9はIV期に属する。3は、京焼系灰釉碗である。口径9.0cm、器高6.4cm、高台径4.8cmを測る。内外面に細い貫入が見られる。5は、受けのない柿輪灯明皿である。口径9.2cm、器高1.9cm、底径4.2cmを測る。外面底部に、糸切り痕が存在する。6・12・13は、土師質土器である。6は、灯明皿である。口径(推)10.4cmを測る。口縁部内外面は横ナテ調整、外面底部に指頭圧痕が見られる。内外面に煤が付着している。12は、焙烙である。口径26.0cmを測る。口縁部内外面は横ナテ調整、外面に煤が付着している。13は、火鉢である。体部内外面は横ナテ調整、底部内外面はナテ調整、内面体部に指頭圧痕、内面底部に煤が付着している。10は、丹波焼鉢である。口径(推)10.0cm、器高6.1cm、底径7.0cmを測る。体部内外面は回転ナテ調整、外面体部と底部の境目付近はへら削り、外面底部は未調整である。口縁部内外面に鉄釉が施される。11は、京焼系灰釉灯明皿である。口径11.2cm、器高1.9cm、高台径4.6cmを測る。口縁端部分内外面に灯芯油痕が付着する。見込みに3本単位の櫛目と3カ所のピン痕が認められる。内面口縁部に菊花文が貼り付けられている。外面体部に重ね焼痕が認められる。14は、土人形の不動明王立像である。合掌印を組み、まわりに火焰を表現する舟形光背であることから不動明王立像と思われる。台座は蓮華座を有する。中実の合わせ目による成形である。側面と底面の合わせ目は、



1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y/6
2. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y/4/6
3. ぶい質褐色砂質土層 10 Y R3/4
4. 黄褐色砂質土層 2・5 Y/4
5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y/4/4

第415図 SK43遺構図

ヘラ削り調整、表表面にはドロキヤが残存する。15は、土人形の狛犬である。阿形で台の上で前肢を伸ばし後肢を折り曲げて腰を降ろしており、全面にドロキヤが残存する。中実の合わせ型成形であり底面に2カ所



第416図 SK43出土遺物



1. 暗オリーブ色砂質土層 5 Y 4/3
2. オリーブ灰色粘質土層 10 Y 6/2
3. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/1 (粘土含む)
4. 黄色粘質土層 5 Y 7/8
5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6

第417図 SK45遺構図



の直径0.4cmの穿孔を有する。側面と底面の合わせ目は、へら削り調整である。16は、土人形の天神である。中実の合わせ型成形であり底面に直径0.4cmの穿孔を有する。側面と底面の合わせ目はへら削り調整、全面にドロキヤが残存する。台座を有する土人形は、樺環濠都市遺跡出土遺物と共通するものが多い。17は、土師質独楽である。上型と下型の合わせ型により成形し、合わせ目をへら削り調整し、上部外面より棒状土具による直径0.5cmの穿孔を有する。上部外面には型により菊花を描く。

出土遺物から概観すると、17世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### S K 45

S K 45は、調査区中央の前述したS K 43の南西に位置する土壙である（第417図）。平面形はほぼ円形を呈し、直径0.94m、深さ0.54mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。

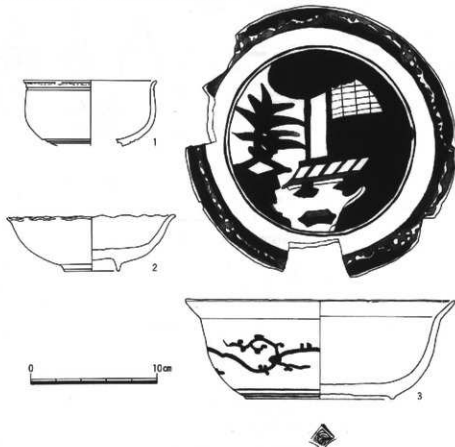
第418図-1は、瀬戸・美濃焼碗である。外面は鉄釉、内面は灰釉が掛けられている。外面の沈線部分は、鉄釉をぬぐっている。2-3は、肥前磁器である。2は、白磁輪花皿である。口径13.2cm、器高4.4cm、高台径4.4cmを測る。見込みは蛇ノ目釉ハギを施している。3は、青磁染付鉢である。見込みに縁側、外面に唐草文が描かれている。蛇ノ目凹型高台で、高台内には湯福の銘款がみられる。

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

#### 4. 1次面の遺構と遺物

##### S K 01

S K 01は、調査区中央に位置する土壙である（第419図）。平面形は不整長方形を呈し、長辺6.36m、短辺0.72m、深さ0.58mを測る。Ⅲ-3期に属する遺構である。



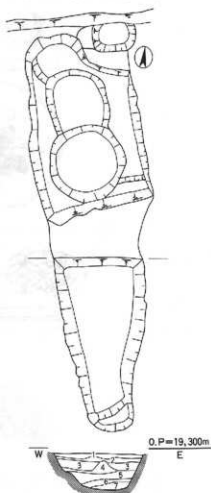
第418図 S K 45出土遺物

第426図-1は、土師質土器灯明皿である。口径8.0cm、器高1.9cmを測る。口縁端部内外面に灯芯痕、外面に指頭圧痕が残存する。2・4・5・7・8は、肥前磁器である。2は、青磁染付碗である。口径11.2cm、器高6.2cm、高台径4.4cmを測る。見込みに五弁花、高台内に溝福が見られる。4は、広東型碗である。口径10.4cm、器高6.3cm、高台径4.8cmを測る。外面に草花文を描く。5は、仏銀具である。口径6.8cm、器高6.3cm、底径3.8cmを測る。外面は蛸唐草文、脚底部は露胎である。7は、染付端反鉢である。口径18.2cm、器高8.1cm、高台径9.2cmを測る。内面は蔓草文、外面は宝相文を描く。蛇ノ目凹形高台である。8は、染付皿である。口径20.5cm、器高3.9cm、高台径12.8cmを測る。内面体部は唐草文と山水文、外面体部は唐草文、高台内に天明成化年製の銘款がみられる。焼継ぎが残存する。大橋康二氏の編年によると、2・8はⅣ期、4・5・7はⅤ期に属する。3は、肥前系染付碗である。口径10.6cm、器高5.6cm、高台径4.2cmを測る。外面は笹文、見込みに舟の銘が描かれた後、刷毛で白泥を塗った痕が見られる。1820年から1860年までの時期と考えられる。6は、ベトナム産鉄絵花文（印版手）碗である。体部内外面及び見込みは、透明釉を掛けた後、白釉を掛け、菊花状文様のスタンプを押す。見込みに菊花状文様のスタンプの痕が見られ、蛇ノ目轆ハギを施す。9は、髹焼指鉢である。口径（推）24.8cm、器高8.7cm、底径（推）12.0cmを測る。外面体部のへら削りは、底部際から口縁部外縁帯の直下まで施している。口縁部内外面は回転ナブ調整、外面底部は未調整で離れ砂が付着する。指目は7～8本単位、見込みの指目は放射状に施す。外面体部に2行にわたって墨書があり、片側が「四八」もう片側は判読不能の墨書である。白神典之氏の編年によると、Ⅱ型式に属すると考えられる。10は、丹波焼徳利である。口径3.0cm、器高12.2cm、底径6.8cmを測る。外面及び内面口縁部は、鉄釉を施す。外面底部に4カ所の砂目痕が残存する。

第421図-1～11は、土面子である。1は、ヒラメである。2は、貝である。3・4は、頭巾をかぶった女性の顔面である。表面にくばみを持ち、指頭圧痕が残存する。5は、長方形を呈し、大小の輪（幾何学文）を表現する。両面にドロキアが残存する。6は、草履である。7は、和太鼓である。表面に指頭圧痕が残存する。8は、提灯である。9は、長方形を呈し、「梵」字を表現している。10は、円盤形を呈し、「小柳」を表現している。両面にドロキアが残存している。11は、筆を模倣したものか。12は、土師質独楽である。上型と下型の合わせ型により成形し、合わせ目をへら削り調整し、上部外面より棒状工具による直径0.3cmの穿孔を有する。上部外面には型により車輪文を描く。全面にドロキアが残存する。13は、土人形の燈籠である。型に合わせて直径1.3cmの空気孔を有する。14は、肥前磁器人形である。団扇を持ち、正座をした男子か。直径0.2cmの空気孔を有する。底部は、無釉である。黒色・金色・緑色・黄色の絵付を施している。

1～9・11のような、人面・動物面・道具等を型抜きしたものを「芥子面子」とも呼称する。10のような、円盤状を呈し、上面に文字・文様等を型抜きしたものを「面打」とも呼称する。

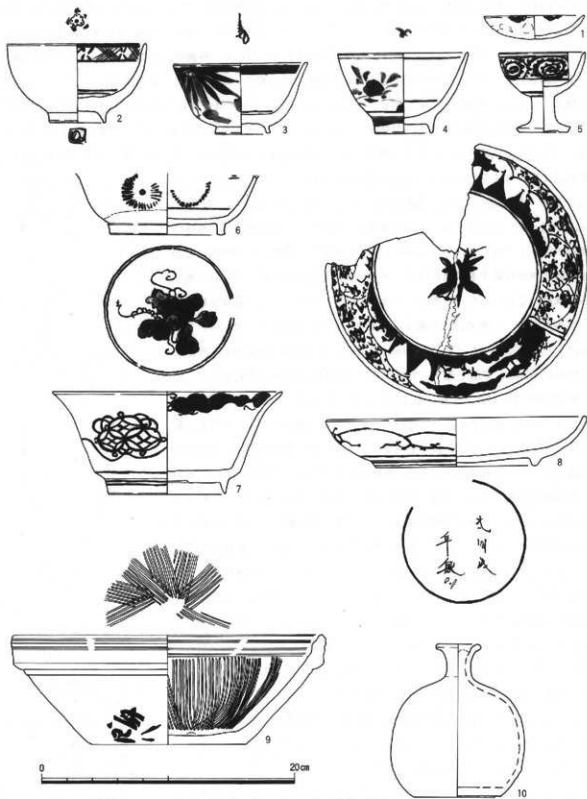
芥子面子は小児が指の腹につけて遊ぶとされていることから、3・4のように表面にくばみをつけていると考えられる。



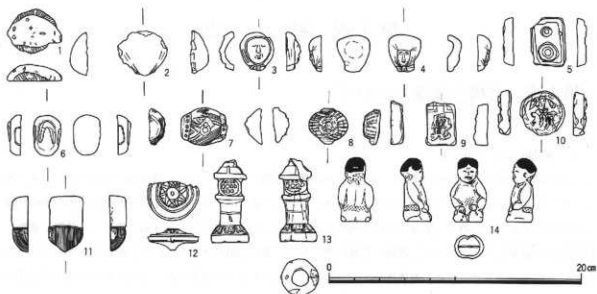
1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
2. 暗オリーブ色砂質土層 5 Y4/2
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4  
(産物含む)
4. 黄オリーブ色砂質土層 5 Y4/2  
(産物、灰化層、2～3cmの礫含む)
5. 黄オリーブ色砂質土層 5 Y4/2
6. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/2
7. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/2  
(灰化層、粘土含む)

第419図 SK01遺構図

第422図-1・2は、滋賀県高島石製碗である。1は、黒褐色10Y R3/1を呈する粘板岩製の石材を用いる。表面陸部に「大極上本高鳴虎斑石」と線刻している。裏面に挟りが見られる。この挟りは碗を安定させる働きを持つと考えられる。後、砥石に転用している。2は、オリーブ灰色5GY5/1を呈する粘板岩製の石材を用いる。全長11.2cm、幅5.0cmをし測る。裏面に挟り、「上上吉高鳴」「原久保？」と線刻している。



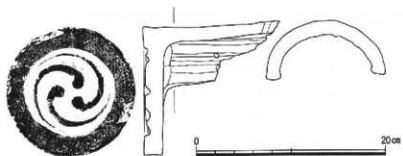
第420図 SK01出土遺物(1)



第421図 SK01出土遺物(2)



第422図 SK01出土遺物(3)



第423図 SK01出土遺物(4)

第423図は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当部直径13.4cmを測る。丸瓦部凸面は、縦方向のヘラナデ調整、丸瓦部凹面は、棒状タタキ痕が残る。釘穴が穿たれている。

出土遺物から概観すると、18世紀後半から19世紀初頭までの時期と考えられる。

## 第4章 結 語

### 第1節 遺構の変遷について

#### 1 時期区分について

今回の調査地区では、地区によって1～3面の遺構面を検出した。しかし、遺構面の間層が5～15cmと薄いうえ、上部が攪乱されている地区が多く、場所によっては最上面に第2次面や時には第3次面の遺構が顔を出すこともあった。調査の関係上これを同時に掘削せざるをえないため、同一面に異なった時期の遺構が図示される結果となった。また、遺構の重複が激しくて一度に掘削できなかつたり、近似した埋土であったために上面でとらえ切れなかった遺構を下面で調査したこともしばしばあった。古代の遺跡に比べて格段に複雑な近世の遺跡の調査では、このような調査上の難点はなかなか排除しえない。したがって、この不都合を是正するために、出土遺物の年代を基準に新たに遺構を整理する必要が生じる。この作業は同時に各時期の遺構の変遷をつかむことにも役立つ。このような理由で、主な遺構で時期が確定できるものを選んで整理したのが第4表および第424～430図である。同表作成にあたっては、遺構出土遺物の年代観は各生産地での編年案を用いた。また、遺構によっては廃絶時期（下限年代）より古い遺物が含まれているが、明らかに伝世品と判別できるもの以外は意図的に排除せずにその上限を造営時期として扱い、その間を存続期間として扱った。

ところで、さきのJR伊丹駅前地区の調査（伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ』1992年）では、遺跡全体の時期区分を以下のように大きく区分した。

I期 中世の在地主豪伊丹氏の伊丹城の時代（～天正2年・1574年）

II期 近世移行期の戦国大名荒木村重の有岡城の時代および池田之助（元助）の伊丹城時代（天正2年・1574年～天正11年・1583年）

III期 近世の在郷町・伊丹郷町の時代（天正11年・1583年～明治時代中頃）

IV期 近代（明治時代中頃以降）











これは、それぞれの時期で遺跡の様相が大きく変化することを踏まえたものであるが、遺跡の性格の変化とも符号していることが言える。今回の調査でも、この大きな時期区分を変える必然性は認められず、これを踏襲することとした。ただ、III期は、前回の調査では18世紀後半以降の遺構しか検出されず、これを調査地区の遺構変遷よりA・B・Cに細分したが、今回の調査では16世紀後半から近代に至るまで連続して営まれており、新たな時期区分が成り立つことが予想された。

さて、第4表を一瞥すると、出土遺物の時期幅すなわち遺構の存続年代が共通するものがあることに気付く。それは、大きくは17世紀前半以前（第51次調査A-1区SF01・SE13・14など）、17世紀後半～18世紀後半（第51次調査A-1区SD46～SD11・SE20～SK1107など）、18世紀後半以降（51次調査A-1区SX04～SK1214など）の3時期にまとまりをもっている。この現象は、当該地区での遺構の廃絶や造営に同時性があることを示している。その理由については様々な事象が考えられるが、それはともかく、これが当該地区の遺構の大きな変化の画期であることが指摘できる。したがって、この事実にもとづいてIII期を算用数字で次のように細分する。III-1期 17世紀前半以前、III-2期 17世紀後半～18世紀後半、III-3

期 18世紀後半以降。

また、それ以外にそれぞれの小期の中でも廃絶や造営の時期がいくつか重なるものが認められる。Ⅲ-1期では16世紀末(廃絶 第51次調査A-3区SD08-SK159、造営 第51次調査A-1区SE13-SK1262など)、Ⅲ-2期では18世紀中頃(廃絶 第51次調査A-1区SD46-SD11、造営 第51次調査A-1区SE19-SK1279など)、Ⅲ-3期では19世紀初頭(廃絶 第51次調査A-1区SK670-SD40、造営 第51次調査A-1区SK1264-SK1269-SX10-SX14-SK701-SK915など)がそれである。これを更なる小画期としてとらえることができよう。したがって、これをa・bで表すこととする。一方、これを区別するとすれば、Ⅲ-1期などのそれぞれの大画期を通じて存続する遺構と小画期で区切られる遺構とも区別して表記する必要がでてくる。このため、大画期を通じて存続するものは小画期記号をつけずにⅢ-1期・Ⅲ-2期と称し、図では斜線で表すこととする。したがって、当該地区のⅢ期の区分は、以下ようになる。

図中の区別

Ⅲ-1期	16世紀後半～17世紀前半	.....		その他.....	
a	16世紀後半～末	.....			
b	16世紀末～17世紀前半	.....			
Ⅲ-2期	17世紀後半～18世紀後半	.....			
a	17世紀後半～18世紀中頃	.....			
b	18世紀中頃～18世紀後半	.....			
Ⅲ-3期	18世紀後半～19世紀後半	.....			
a	18世紀後半～19世紀初頭	.....			
b	19世紀前半～19世紀後半	.....			

## 2 各調査区の遺構の変遷

次に、これにもとづいて各時期の遺構を図示した第424～430図から読み取れる事実を指摘したい。

### 第51次調査 A-1区 (第424・425図)

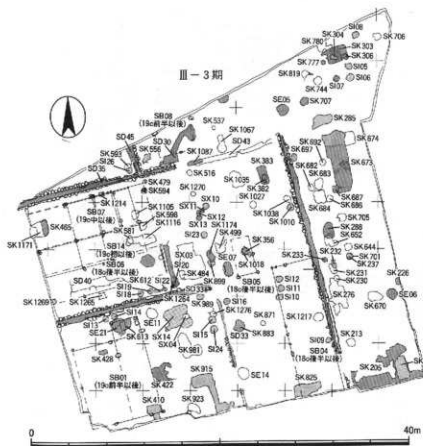
ここでは、Ⅱ期の有岡城時代およびⅢ-1期(16世紀後半～17世紀前半)の遺構として、西端に南北に延びる浅い堀SF01(溝と考えてもよい規模である)があげられる。これは、現在の調査区西側の南北道路に沿って設けられており、その点でJR駅前地区の有岡城時代の堀と同様の有り方を示す。しかし、この浅い堀(溝)は16世紀末以降に再度利用されている。それ以外にこの時代の遺構はない。

Ⅲ-1b期(16世紀末～17世紀前半)には、井戸SE13・14、SK1262が営まれる。また、SF01が再利用される。しかし、ほかに遺構はない。地山直上には、第43次試掘調査G-1、G-2、Fトレンチでみられるような褐色砂質土がみられる。このようなことから、この時期までこの地区は耕作地であったと考えられる。井戸は耕作に伴うものであろう。このような様相は、「延宝5年(1677)伊丹町地味委細絵図」(第1図)からも傍証できる。

Ⅲ-2期(17世紀後半～18世紀後半)には、遺構が急増加する。このうち17世紀後半に上限が求められる遺構はそれほど多くないが、18世紀前半以降～後半にかけての遺構はSX18-SK922の6遺構を数える。

Ⅲ-2b期(18世紀中頃～18世紀後半)には、さらに増えてSE19-SK1107の22遺構<sup>(1)</sup>を数える。この時期には、屋敷境の溝SD33・SD46が設けられている。このうち、SD46は18世紀中頃までの遺物を含むが、SD33はこの時期の最末期からのものである。この2本の溝は、この段階では素掘りで、のち石組みに造り





第425図 第51次調査A-1区遺構変遷図(2)

のは少ない。

#### 第51次調査 A-2区(第426図)

ここでは、Ⅲ-2期より以前の遺構はみられなかった。こども、A-1区とはほぼ同様の変化を示す。Ⅲ-2 a期の初期、すなわち17世紀後半から、SK 82・104など少数の土壌が営まれる。18世紀前半には、遺構は急に増える。屋敷境の溝SD 03・06はこの段階で造営されているが、これもA-1区SD 46のような早い段階に部分的に成立する溝の例のひとつとみられる。当初素掘りで、SD 06はⅢ-3期に石組みに造り替えられているが、SD 03はそのまま造り替えられなかった。Ⅲ-2 b期には井戸SE 01・便槽SI 02など、確実に居住地として利用されたことを証する遺構が存在する。

Ⅲ-3 b期には建物SB 11が建てられ、こどもでも墓地の利用が進む。

#### 第51次調査 A-3区(第427図)

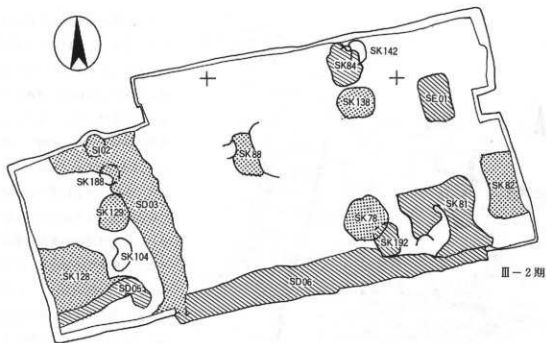
こども、A-1区とはほぼ同様の変化を示す。Ⅱ期からⅢ-1 a期(16世紀後半～末)にかけての遺構SD 08が、南側(昆陽口道側)で検出されたことは、注目して良い。Ⅲ-1期にもSK 159や試掘調査FトレンチSD 01が営まれ、土地利用がなされていたことがわかる。しかし、建物などは認められず、耕作地としての利用に止まっていたと考えられる。

Ⅲ-2期には遺構が増え、特に18世紀前半に上限があるものが多い。「元禄7年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図(第1図)では、ひとつの屋敷地として描かれており、調査区内に屋敷境の溝がみられないのもそのためと考えられる。

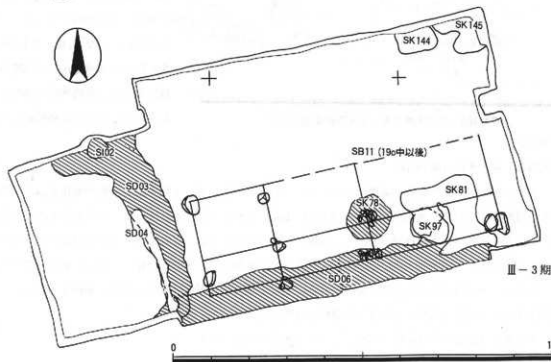
Ⅲ-3期には、調査区全体が宅地として利用されていることが確実である。「天保15年(1844)伊丹郷町分間絵図」では、西側に「山行道」があり、ここを地口とする3つの屋敷区画として描かれている。しかし、

なる。位置は屋敷地の中程か奥である。なお、この時期の土壌はⅢ-3 a期(18世紀後半～19世紀初頭)の末にはほぼ同時に廃絶しているものが非常に多い。また、この時期の便槽も木桶(木樽)が多いが、SK 593のように木桶(木樽)から、Ⅳ期(明治時代中頃以降)に大谷焼甕に造り替えられる例が多い。位置は建物の奥か屋敷地の奥端で、屋敷境の溝に接している場合が多い。胞衣壺は、この時期には数を増す。位置は地口に近い場所(建物入口SK 1269など)や裏庭(SK 1264など)などの例がみられる。なお、Ⅲ-3 b期(19世紀初頭～19世紀後半)以降の遺構は多いが、遺物選別の過程で主なものにはよったため掲載したも





Ⅲ-2期



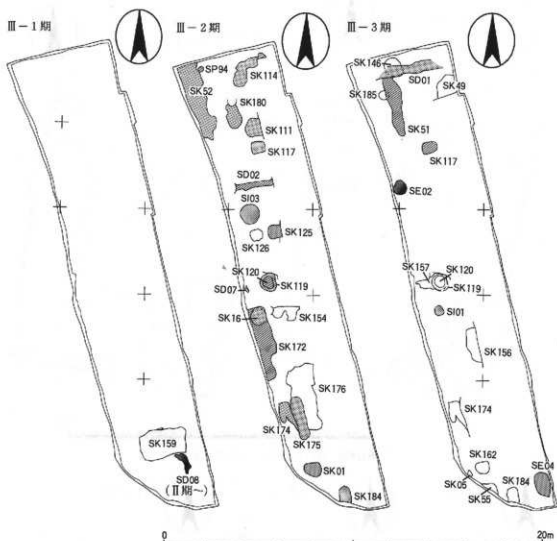
Ⅲ-3期

第426図 第51次調査A-2区遺構変遷図

SD 01・02とは位置が異なり、屋敷境を特定することはできなかった。なお、この「山行道」は「文化(1804～1817) 改正伊丹之図」(八木哲浩1982年)から認められる小道である。また、井戸はSE 04だけであり、数軒の家があったとしても共同利用していたことが考えられる。

#### 第51次調査 A-4区 (第428図)

Ⅱ期・Ⅲ-1期の遺構はない。Ⅲ-2期には遺構が増える。Ⅲ-3 a期には、火災の焼土処理土壌SK 132が廃絶している。SD 46は建物に関係する溝かと思われるが、断定できない。全体にⅢ-2 a期の初頭、すなわち17世紀後半に上限が求められる遺構が他の調査区より多いことが特徴である。これは、この調査区が尾陽口道に面しており、宅地化が早かったことを示すものであろう。



第427図 第51次調査A-3区遺構実測図

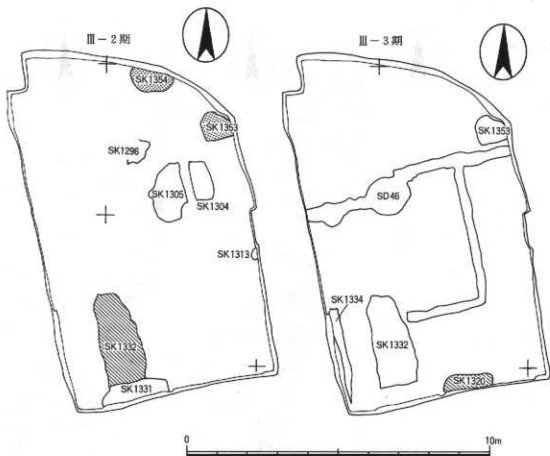
第78次調査 A-5区(第429図)

Ⅲ-1 a~1 b期の遺構と推定されるものにSD04があるが、居住地となっていたことを積極的に示すものはない。それ以外にSK66があるが、この時期の遺物は伝世品の可能性が高く、主要な時期はⅢ-2 a期(17世紀後半~18世紀前半)にある。Ⅲ-2 a期には、SK52・64などA-4区と同様に南側の見降口道に近い場所で遺構が増える。Ⅲ-3期からⅣ期には北側に便槽が並ぶ。

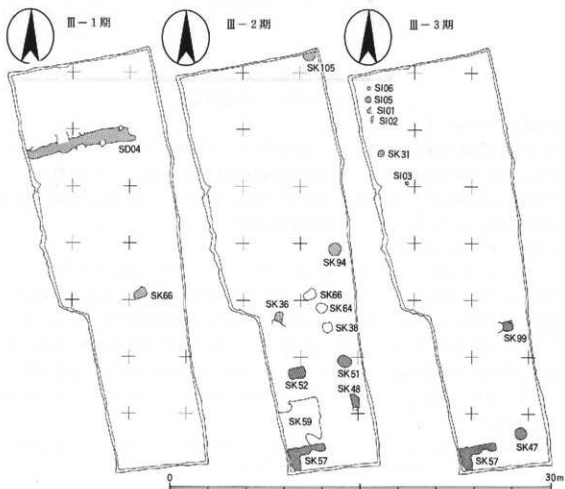
第78次調査 B-8区(第430図)

ここでは、Ⅱ期からⅢ-2 a期まで続く溝SD04がある。この溝は北側の調査区でも検出しており、やはり南北方向の現行道路の東に沿って延びる。すなわち、A-1区SF01と同様の計画性のある溝である。Ⅱ期以降再利用されて存続する。なお、「元禄7年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図」(第1図)から「寛政8年(1796)伊丹細見図」(第1図)までは、この地区とA-5区との間に南北方向の道路が描かれており、当初はこの溝に沿って見降口道であったものと考えられるが、文化(1804~1817)改正伊丹之図ではなくなっている。調査では確認できなかったが、この間に付け替えがなされたと考えられる。ただ、溝は17世紀のうちに廃絶している。

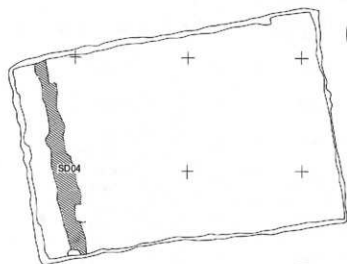
Ⅲ-2期には遺構が増えるが、特にここでは17世紀後半に上限が求められる遺構が多い。調査地は見降口道から北に入ったところであるが、西側の地区より早く宅地化されたからであろうと考えられる。



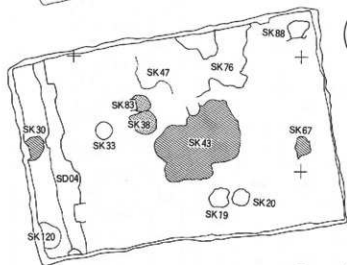
第428図 第51次調査A-4区遺構変遷図



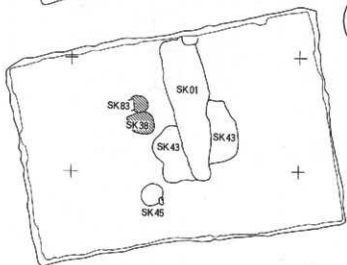
第429図 第78次調査A-5区遺構変遷図



Ⅲ-1期



Ⅲ-2期



Ⅲ-3期

0 10m

第430図 第78次調査B-8区遺構変遷図

Ⅲ-3期にも引き続き遺構は数多く営まれる。

### 3 まとめ

以上、各地区の遺構の変遷の概要を略述した。このように、この地域はⅡ期には南北道路に沿って溝が計画的に設けられる。しかし、宅地はなく、耕作地であった。Ⅲ-2期の17世紀後半からしだいに宅地化していき、18世紀前半には急速に宅地化が進んだようである。Ⅲ-3期には、裏地まで宅地利用が及ぶ。この傾向は東側の町を中心に近いほど早かった。

また、Ⅲ-2 a期と2 b期、およびⅢ-3 a期と3 b期とを分ける出来事として、各調査区で検出した焼土処理土壌の存在が目される。すなわち、享保14年(1729)の隣接する北少路村を火元とする大火災および記録に現れない19世紀初頭の火災が、その出来事である可能性が高い。

### 注釈

(1) 川口宏海「近世在郷町における屋敷地利用の変遷—摂津国伊丹郷町を中心として—」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第11号』(大手前女子学園 1991年)において、筆者が指摘した事実と符号する。

第3表 主要遺構年代表

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長さor直径 or一辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	断面形	時代	備考
CITSI A-1	SK1056	I11-i7	2	1	長方形	84以上	80	8		17C後半	
A-1	SK1109	I11-f9	2	5	円形	108		45		18C前半	
A-1	SD46	I12-h2	2	1	長方形	880以上	70	34		17C後 ~18C中頃	
A-1	SD12	J12-a1	1	5	不整形	1030以上	86 以上	19		17C後 ~18C後半	
A-1	SX18	I11-f10	2	17	円形	76		16		18C前 ~後半	電
A-1	SK212	J12-b2	1	1	正方形	120以上		25		18C前 ~後半	
A-1	SK484	I11-h10	1	1	長方形	104	60	23		18C前 ~後半	
A-1	SK770	I11-j6	2	1	円形	24		12		18C前 ~後半	
A-1	SK681	I11-a9	2	1	円形	68		17		18C中 ~後半	
A-1	SK1108	I11-f9	2	1	円形	50		14		18C中 ~後半	
A-1	SK1193	I11-j8	2	1	長方形	284	100	75		18C中 ~後半	
A-1	SK1279	I11-g8	2	1	円形	98		30		18C中 ~後半	桶
A-1	SD24	I11-i10	1	3	長方形	450	48	25		18C中 ~後半	
A-1	SE08	I12-g2	1	6	円形	90		90 以上		18C後半	
A-1	SE18	I11-f10	2	3	円形	68		141 以上		18C後半	
A-1	SE23	I11-i7	1	1	正方形	120		183 以上		18C後半	
A-1	SI25	I11-f8	1	1	円形	内矩一 掘形 58		内矩一 掘形11		18C後半	
A-1	SK869	I11-i1	2	6	円形	50		27		18C後半	桶
A-1	SK990	I12-h1	2	3	円形	73		38		18C後半	桶
A-1	SK738	I11-j7	2	1	半円形	68		21		18C後半	
A-1	SK988	I12-h1	2	1	円形	56		7		18C後半	桶
A-1	SK1004	I12-h1	2	3	円形	54		32		18C後半	桶

地区	造構名	グリット	道構面	土層	平面形	長辺or直径 or一辺(cm)	短辺(cm)	深さ(m)	断面形	時 代	備 考
A-1	SD18	I12-j2	1	1	長方形	350以上	26	18		18C後半	
A-1	SD32	I12-i3	1	1	長方形	1140	28	18		18C後半	
A-1	SE14	I12-i2	2	1	円形	118		376 以上		18C後 ~19C初	
A-1	SK1038	I12-h1	2	2	楕円形	96	60	42		18C中 ~19C初	橋
A-1	SK1276	I12-h1	2	1	円形	62		34		18C中 ~19C初	橋
A-1	SX04	I12-h1	2	1	円形	20				18C後 ~19C初	
A-1	SE11	I12-g1	1	1	円形	120		44 以上		18C後 ~19C初	
A-1	SK276	J12-a1	1	1	不整形	340以上	150 以上	48		18C後 ~19C初	
A-1	SK682	I11-a9	2	2	楕円形	78	58	46		18C後 ~19C初	
A-1	SK683	I11-a9	2	4	楕円形	122	88	51		18C後 ~19C初	
A-1	SK684	I11-a9	2	6	長方形	140	100	33		18C後 ~19C初	
A-1	SK686	I11-a9	2	3	円形	70		49		18C後 ~19C初	
A-1	SK692	I11-a8	2	1	円形	68		29		18C後 ~19C初	橋
A-1	SK819	I11-j6	2	1	円形	80		17		18C後 ~19C初	
A-1	SK825	I11-j2	2	1	長方形	294	98	45		18C後 ~19C初	
A-1	SK981	I12-h2	2	9	長方形	270	108	117		18C後 ~19C初	
A-1	SK1105	I11-f9	2	1	円形	80		42		18C後 ~19C初	
A-1	SK1270	I11-f8	2	1	円形	72		30		18C後 ~19C初	水琴窟
A-1	SD40	I11-e10	2	1	長方形	560以上	72	25		18C後 ~19C初	
A-1	SK516	I11-h8	1	2	長方形	64	48	32		19C初	橋
A-1	SI06	J11-a6	1	1	不整形	内矩 40 掘形 60		内矩38 掘形-		19C前半	
A-1	SK410	I12-g3	1	1	不整形	150以上	144 以上	126		19C前半	

地区	道構名	グリッド	道標面	土層	平面形状	長辺or直径 or一辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	断面形	時代	備考
A-1	SK899	I11-h10	2	1	楕円形	126	64	48		19C前半	
A-1	SD43	I11-h8	2	1	長方形	900	40	10		18C中 ~19C初	
A-1	SI20	I12-g1	1	1	長方形	内矩 38 掘形 80	内矩- 掘形64	内矩12 掘形-		18C中 ~19C後半	
A-1	SI07	J11-a6	1	3	円形	内矩 - 掘形 70		内矩- 掘形20		18C後 ~19C後半	
A-1	SK205	J12-b2	1	2	不整形	700以上	380 以上	30		18C後 ~19C後半	
A-1	SK233	J11-a10	1	1	正方形	44		41		18後 ~19C後半	
A-1	SK303	J11-a6	1	3	長方形	210	125	9		18C後 ~19C後半	
A-1	SK306	J11-a6	1	1	楕円形	64	40	25		18C後 ~19C後半	
A-1	SK382	I11-i8	1	2	長方形	62	40	25		18C後 ~19C後半	
A-1	SK697	I11-j8	2	2	円形	62		25		18C後 ~19C後半	橋
A-1	SK1010	I11-j9	2	1	円形	72		43		18C後 ~19C後半	橋
A-1	SK1018	I11-i10	2	2	円形	80		27		18C後 ~19C後半	橋
A-1	SD34	I11-j10	1	6	長方形	236以上	60	14		18C後 ~19C後半	
A-1	SD41	I11-h10	2	1	長方形	440	42	10		18C後 ~19C後半	
A-1	SK687	I11-a9	2	1	長方形	72	56	29		18C後 ~19C後半	
A-1	SI113	I12-f1	1	1	円形	内矩 45 掘形 64		内矩25 掘形		19C前 ~後半	
A-1	SI122	I12-g1	1	1	円形	内矩 36 掘形 44		内矩13 掘形-		19C前 ~後半	
A-1	SI123	I11-h9	1	1	円形	内矩 50 掘形 60		内矩26 掘形-		19C前 ~後半	
A-1	SK612	I12-g1	1	1	長方形	90	24	31		19C前 ~後半	
A-1	SK232	J11-a10	1	5	長方形	90	40 以上	14		19C中 ~後半	
A-1	SK701	I11-a9	2	1	円形	70		27		19C中 ~後半	
A-1	SK915	I12-h3	2	2	長方形	438	64	65		19C中 ~後半	

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長辺or直径 or-辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	断面形	時代	備考
A-1	SI09	J12-a2	1	1	円形	内径 58 掘形62		内径27 掘形30		19C後半	
A-1	SI12	I11-j10	1	1	円形	内径 55 掘形 62		内径38 掘形-		19C後半	
A-1	SI14	I12-f1	1	1	円形	内径 52 掘形 64		内径35 掘形37		19C後半	
A-1	SI15	I12-h1	1	1	正方形	内径 51 掘形 68		内径30 掘形-		19C後半	
A-1	SK989	I12-h1	2	1	円形	72		32		19C後半	補
A-1	SE05	I11-j7	1	1	円形	92		46 以上		18C後 ~20C前半	
A-1	SE07	I11-i10	1	4	長方形	150	90	90 以上		18C後 ~20C前半	
A-1	SI18	I12-g1	1	1	正方形	内径 25 掘形 50		内径13 掘形-		19C中 ~20C前半	
A-1	SI11	I11-j10	1	1	円形	内径 50 掘形 66		内径32 掘形-		19C後 ~20C前半	
A-1	SK304	J11-a6	1	1	長方形	68	44	10		20C前半 以降	
CIT51 A-2	SK142	J11-c6	3	1	長方形	62	34以上	18		18C前半	
A-2	SK84	J11-b6	2	1	楕円形	110	82	21		18C前 ~後半	
A-2	SK138	J11-c6	3	3	長方形	100	80	48		18C後半	
A-2	SK144	J11-c6	3	1	長方形	100	60 以上	18		18C後 ~19C初	
A-2	SD03	J11-b7	1	1	長方形	500以上	280	26		18C前 ~19C後半	
A-2	SI02	J11-a6	1	1	半円形	内径 53 掘形 56		内径21 掘形-		18C中 ~19C後半	
CIT51 A-3	SD08	J11-e9	3	1	長方形	120	40	19		16C中 ~後半	
A-3	SK154	J11-e7	3	1	不整形	160以上	86	34		17C後 ~18C前半	補
A-3	SK176	J11-e8	3	1	長方形	400以上	160 以上	45		17C後 ~18C中頃	
A-3	SK01	J11-e9	1	1	長方形	98	34	23		17C後 ~18C後半	
A-3	SK125	J11-d6	2	9	正方形	76以上		41		18C前 ~後半	
A-3	SK172	J11-e7	3	1	長方形	436	106 以上	32		18C前 ~後半	



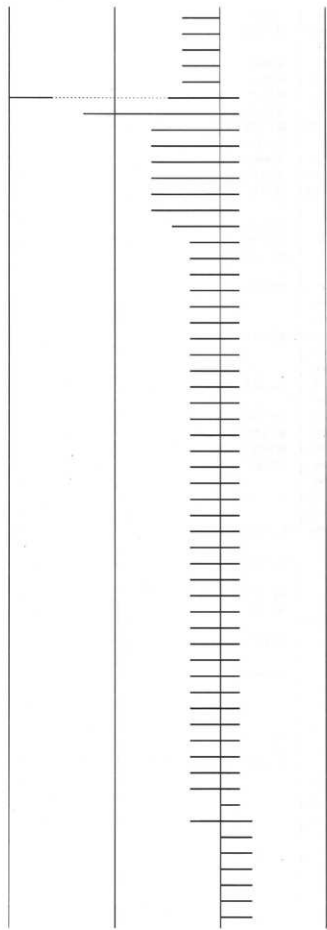
地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長辺or直径 or-辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	断面形	時代	備考
A-3	SD02	J11-d5	1	2	長方形	216	44	8		18C前 ~後半	
A-3	SD07	J11-e7	3	1	長方形	154	14	4		18C前 ~後半	
A-3	SI03	J11-d6	2	1	円形	内径86 掘形114		内径85 掘形-		18C中 ~後半	
A-3	SK16	J11-e7	1	1	円形	106		37		18C中 ~後半	
A-3	SK119	J11-d7	2	5	円形	100以上		6		18C中 ~19C初	
A-3	SK174	J11-e8	3	2	不整形	182	64 以上	53		18C中 ~19C初	
A-3	SK162	J11-e9	3	1	楕円形	84	66	19		18C後 ~19C初	
A-3	SK51	J11-d5	1	1	楕円形	355	90	20		18C後 ~19C後半	
A-3	SD01	J11-d5	1	1	長方形	406	70	14		19C前 ~後半	
A-3	SI01	J11-e7	1	1	円形	内径57 掘形-		内径36 掘形-		19C後半	
A-3	SE02	J11-d6	1	1	円形	92		53 以上		20C前半 以降	
CITSI A-4	SK1296	J12-e1	1	1	長方形	138	82	11		17C後半	
A-4	SK1304	J12-f1	1	1	長方形	124以上	66以上	29		17C後半	
A-4	SK1305	J12-e1	1	1	楕円形	190以上	92	28		17C後 ~18C前半	
A-4	SK1331	J12-d2	1	1	長方形	220	72 以上	51		17C後 ~18C前半	
A-4	SK1354	J11-e10	1	1	楕円形	136以上	70 以上	69		18C中 ~後半	
A-4	SK1334	J12-d2	1	1	長方形	320	22	26		18C後 ~19C初	
A-4	SD46	J12-d1 J12-d2	1	1	長方形	722以上	28	30		18C後 ~19C初	
CITSI A-5	SK59	J12-g1	2	2	不整形	内径60 掘形90	内径- 掘形88	内径34 掘形-		17C後 ~18C前	
A-5	SK64	J11-g9	2	1	円形	内径55 掘形90		内径15.2 掘形28.7		17C後 ~18C前	補
A-5	SK38	J11-g9	2	1	不整形	内径55 掘形80	内径- 掘形75	内径8.2 掘形9.8		17C後 ~18C中頃	補
A-5	SK48	J11-g10 J12-g1	2	3	正方形	280		20		18C前 ~後半	

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長さor直径 or一辺(cm)	短辺(cm)	深さ(m)	断面形	時代	備考
A-5	SK94	J11-g8	2	2	長方形	220	150	26		18C中 ～後半	桶
A-5	SK47	J12-g1	2	2	円形	130		60		18C後 ～19C後半	桶
A-5	SI01	J11-e5	1	3	不整形	内矩 34 掘形 50		内矩16 掘形-		19C後 ～20C前半	
A-5	SI02	J11-e5	1	1	不整形	内矩 44 掘形 48		内矩16 掘形-		19C後 ～20C前半	
A-5	SI03	J11-e6	1	1	円形	内矩 - 掘形 34		内矩- 掘形58		19C後 ～20C前半	
CIT78 B-8	SK19	J11-i4	2	1	正方形	内矩 80 掘形 85		内矩20 掘形32		17C後 ～18C前半	桶
B-8	SK20	J11-i4	2	2	円形	内矩 - 掘形 76		内矩- 掘形25		17C後 ～18C前半	桶
B-8	SK33	J11-b3	2	2	円形	内矩 70 掘形108		内矩48 掘形-		17C後 ～18C前	桶
B-8	SK76	J11-i3 J11-i2	2	3	不整形	250以上	250 以上	44		17C後 ～18C前	焼土処理土填
B-8	SK47	J11-h3	2	1	不整形	200以上	160 以上	45		17C後 ～18C中頃	焼土処理土填
B-8	SK30	J11-g3	2	1	半円形	内矩 90 掘形130		内矩42 掘形8		17C後 ～18C後半	桶
B-8	SK38	J11-h3	2	1	円形	内矩 70 掘形130		内矩23 掘形44		18C中 ～19C前半	桶
B-8	SK83	J11-h3	2	5	不整形	内矩 - 掘形 76		内矩- 掘形63		18C中 ～19C前半	桶

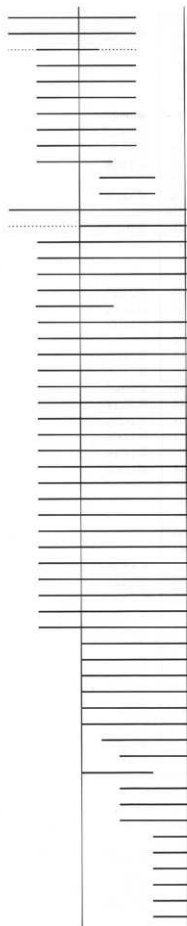
## CIT51 A-1区

	16C	17C	18C	19C	20C
遺構番号	押図番号				
SK1262	第115図				
SE13	第80図				
SK606	第223図				
SK1056					
SK229	第225図				
SK1109					
SI27	第101図				
SK949	第117図				
SD11	第188図				
SD46					
SF01	第66図				
SE20	第82図				
SK271	第227図				
SK329	第229図				
SD12					
SX18					
SE22	第85図				
SK212					
SK282	第231図				
SK484					
SK770					
SK823	第127図				
SK916	第129図				
SK922	第132図				
SE19	第94図				
SK350	第235図				
SK611	第241図				
SK665	第119図				
SK680	第121図				
SK681					
SK725	第123図				
SK733	第125図				
SK1108					
SK1151	第137図				
SK1193					
SK1279					
SD24					
SX15	第68図				
SX16	第68図				
SX17	第68図				
SE08					
SE18					
SE23					
SI25					
SI30	第111図				
SI31					
SK869					
SK990					
SK1107	第134図				
SK738					
SK528	第237図				
SK988					
SK334	第233図				

S K1004  
 S K604 第220図  
 S K605 第220図  
 S D18  
 S D32  
 S E14  
 S K780 第160図  
 S X03 第200図  
 S K670 第147図  
 S K705 第139図  
 S K1038  
 S K1067 第141図  
 S K1276  
 S K871 第107図  
 S X04  
 S E11  
 S I 29  
 S K213 第243図  
 S K230 第247図  
 S K231 第247図  
 S K276  
 S K499 第261図  
 S K537 第264図  
 S K581 第266図  
 S K593 第220図  
 S K598 第267図  
 S K644 第143図  
 S K652 第145図  
 S K674 第151図  
 S K682  
 S K683  
 S K684  
 S K686  
 S K692  
 S K744 第154図  
 S K796 第162図  
 S K819  
 S K825  
 S K923 第165図  
 S K981  
 S K1027 第109図  
 S K1035 第167図  
 S K1105  
 S K1110 第171図  
 S K1171 第173図  
 S K1217 第179図  
 S K1265 第76図  
 S K1270  
 S D40  
 S K516  
 S K226 第245図  
 S I 06  
 S K237 第272図  
 S K410  
 S K556 第280図  
 S K594 第270図  
 S K899



S E 16	第90図
S K 883	第103図
S D 43	
S E 21	第96図
S K 613	第207図
S K 747	第156図
S K 777	第158図
S K 1179	第177図
S D 30	第237図
S K 479	第269図
S K 1264	第74図
S K 1269	第78図
S I 20	
S X 11	第70図
S E 06	第202図
S E 12	第205図
S I 07	
S I 16	第208図
S K 205	
S K 233	
S K 288	第249図
S K 303	
S K 306	
S K 356	第251図
S K 382	
S K 383	第278図
S K 422	第253図
S K 428	第256図
S K 465	第258図
S K 697	
S K 1010	
S K 1018	
S K 1087	第169図
S D 34	
S D 35	第284図
S D 41	
S X 12	第70図
S X 13	第70図
S K 687	
S I 08	第212図
S I 13	
S I 19	第216図
S I 22	
S I 23	
S K 612	
S K 614	第181図
S X 10	第70図
S X 14	第72図
S K 232	
S K 701	
S K 915	
S I 09	
S I 10	第214図
S I 12	
S I 14	
S I 15	
S I 24	第218図



S I 26	第220图								
S K 989									
S K 1214	第186图								
S D 45	第287图								
S D 33	第282图								
S K 285	第276图								
S E 05									
S E 07									
S K 673	第151图								
S I 05	第210图								
S I 18									
S I 11									
S K 304									

C I T 51 A-2 区

	16C	17C	18C	19C	20C
S K 142					
S K 188	第297图				
S K 104	第301图				
S K 84					
S K 192	第299图				
S D 05	第307图				
S E 01	第314图				
S K 128	第291图				
S K 82	第317图				
S K 88	第303图				
S K 129	第293图				
S K 138					
S K 81	第316图				
S K 97	第305图				
S K 144					
S K 145	第295图				
S D 04	第309图				
S D 06	第311图				
S D 03					
S I 02					
S K 78	第319图				

C I T 51 A-3 区

	16C	17C	18C	19C	20C
S D 08					
S K 159	第327图				
S K 126	第345图				
S K 154					
S K 176					
S K 01					
S K 125					
S K 172					
S D 02					
S D 07					
S P 94	第356图				
S I 03					
S K 16					

S K 52	第360图				
S K 111	第347图				
S K 114	第349图				
S K 180	第333图				
S K 175	第330图				
S K 120	第354图				
S K 119					
S K 174					
S K 184	第343图				
S K 05	第362图				
S K 49	第365图				
S K 55	第363图				
S K 146	第336图				
S K 156	第339图				
S K 157	第341图				
S K 162					
S K 185	第335图				
S K 117	第352图				
S E 04	第322图				
S K 51					
S D 01					
S I 01					
S E 02					

C I T 51 A-4 区

	16C	17C	18C	19C	20C
S K 1299					
S K 1304					
S K 1305					
S K 1331					
S K 1313	第368图				
S K 1354					
S K 1332	第374图				
S K 1353	第370图				
S K 1334					
S D 46					
S K 1320	第372图				

C I T 78 A-5 区

	16C	17C	18C	19C	20C
S D 04	第398图				
S K 66	第384图				
S K 59					
S K 64					
S K 38					
S K 51	第388图				
S K 48					
S K 52	第390图				
S K 94					
S K 36	第386图				
S K 105	第392图				
S K 99	第394图				
S K 57	第396图				

SK47								
SI01								
SI02								
SI03								
SK31	第402图							
SI05	第382图							
SI06	第382图							

CIT78 B-8区

	16C	17C	18C	19C	20C
SD04	第406图				
SK19					
SK20					
SK33					
SK76					
SK120	第408图				
SK47					
SK88	第413图				
SK30					
SK67	第410图				
SK43	第415图				
SK01	第419图				
SK45	第417图				
SK38					
SK83					



## 第2節 遺物計測方法および分析結果について

### 1. 目的

調査を重ねるごとに出土する遺物は膨大な数に上るが、各遺物については個々に事実報告を行ってきた。しかし今回新たな試みとして、出土遺物の大半を占める土器・陶磁器・土製品について、一括遺物を対象として1. 遺物の種類、2. 生産地、3. 器種・器形の分類基準を定め、破片計測方法及び集計方法についても独自の方法を用い、計測、数量化を行った。

これにより、同時期の種類・器種構成、伊丹における当時の土器・陶磁器の流通動向の把握、生活空間の状況復原が、ある程度可能になると考えられる。

但し、その基準については、編年作業の進展や生産地での調査成果により今後さらに精密にしてゆきたい。

### 2. 対象

この分類の対象とするのは、有岡城跡・伊丹郷町遺跡から出土したすべての土器・陶磁器である。

### 3. 対象地域

対象とする地域は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡に含まれるすべての地域である。

### 4. 対象年代

対象とする年代は、17～19世紀を中心として、有岡城以前の伊丹城の時代から近代までを含んでいる。

### 5. 種類と分類基準

種類—土器・陶器・磁器・玩具（ミニチュア品を含む）

基本的な種類は、大きく4項目に分けた。分類基準については、細かく規定すると、かえって正確さを欠くと考えたため下記に示す大枠に従った。

- A. 土器—素地は陶土、原則として軟質で、無軸である。
- B. 陶器—素地は陶土、土器よりも硬質である。釉薬の有無は、原則的には問わず、焼締陶器・施釉陶器共に含む。
- C. 磁器—素地は陶石、原則として硬質である。
- D. 玩具・ミニチュア—他の遺物とは異質であり、単独に別置した。よって分類基準としては、他とは異なる（土器・陶器・磁器と分類せず、玩具・ミニチュア品として一括した）。

### 6. 生産地と分類基準

生産地は種類ごとで、分類は最小限に留めた。消費地の場合、生産地を特定することは甚だ困難であり、且つ、安易な特定は混乱を招くと考えたからである。そこで、断定はせずに「～系」とし、さらに生産地を明確にし得ないものは、その他とした。

#### A. 土器

在地系①—いわゆる土師質土器である。製作地・窯は、伊丹市教育委員会によって調査された有岡城跡・伊丹郷町遺跡において、焙烙や土師皿を焼成した窯が検出されている。その他にも伊丹市近郊において生産され、購入されたものと考えられる。土師皿など。

在地系②—いわゆる瓦質土器である。

泉州系—焼塩壺・火消し壺・炬炬など淡焼と称される土器は大阪府堺市西湊町周辺及び和泉において生産されたものと考えられる。

その他一栴輪が施された製品は、施輪されている点で、陶器に含むべきものであるが、焼成温度が低く、軟質であるという点からその他の土器に含めた。

#### B. 陶器

備前系、明石・堺系、丹波系、大谷系、万古系、瀬戸・美濃系①（太白手）、瀬戸・美濃系②（その他）、唐津系①（京焼風陶器）、唐津系②（嬉野焼）、唐津系③（献上唐津手）、唐津系④（その他）、京焼系（伊賀信楽焼を含む）、萩焼系、中国系、その他

#### C. 磁器

肥前系一有田、波佐見を中心とする肥前磁器、肥前磁器の製作技法をまねた、あるいは工人が移動して製作したと思われる肥前系磁器とあるが、肥前系以外の磁器と区別して肥前系とした。

瀬戸・美濃系（新製焼）、三田系、京焼系、中国系、その他

#### D. 玩具（ミニチュア品も含む。）

### 7. 器種と器形の分類基準

器種はその形状から大きく15種類に分類した。近世の土器・陶磁器の器種は多様化するため、細分すればきりが無く、器形に関しては尚一層この傾向が顕著なため、使用法が明確なものに関しては、これを重点に分類した。それ以外は細分化を避けた。個々の分類基準に関しては、以下に掲げた。

#### ①碗

小杯—口径5cm未満、小碗—口径5～9.0cm未満、中碗—口径9～12.0cm未満、大碗—口径12～15.0cm未満、鉢との相違点としては、口縁裝飾が華美でないもの。

紅猪口—白磁の小杯のみを選んだ。白磁以外の小杯のなかにも、紅猪口として用いられた製品があるかも知れないが、特定の製品に規定した。

薄手酒杯—幕末から明治にかけて現れるもので、器壁が1mm前後の小杯である。清酒用に用いられたと考えられる。

#### 仏銀器

#### ②皿

極小皿—口径7.0cm未満、小皿—口径7～14.0cm未満、中皿—口径14～26.0cm未満、大皿—口径26.0cm以上

灯明皿—口縁部に煤の付着しているもの。

叩皿—内面底部に叩目が認められるもの。

#### その他

#### ③鉢

最初に皿との違いを明記しておきたい。1) 器高と口縁の比が三分の二以下 2) 主文様が器の外面にある。

次に碗との違いを明記しておきたい。1) 高台径が広い 2) 口縁部の裝飾が華美である。

小鉢—口径15.0cm未満、中鉢—口径15～24.0cm未満、大鉢—口径24.0cm以上

水鉢（手水鉢を含む）、餌鉢（餌猪口、鳥鉢を含む）、餐盤、植木鉢、猪口（そば猪口を含む）、蓋物、段重、片口、搥鉢、練鉢（こね鉢）、香炉、灰吹、火入、火鉢（手あぶり）、火消し壺、根炉、七厘（火力調整窓がある）、風炉（火窓や脚の形態に工夫が凝らされている物）、匣鉢、建水

#### ④壺

小壺－器高12,0cm未満、中壺－器高12～30,0cm未満、大壺－器高30,0cm以上

お歯黒壺（口縁の一方所が葛口で、肩に耳が付く壺）、水指、焼塩壺

⑤甕

小甕－器高12,0cm未満、中甕－器高12～30,0cm未満、大甕－器高30,0cm以上

⑥瓶類

小瓶－器高10,0cm未満、中瓶－器高10～15,0cm未満、大瓶－器高15,0cm以上、神酒徳利、香油壺、燗徳利、花瓶

⑦水注

小水注－器高6,0cm未満、中水注－器高6,0cm以上、急須（火に掛ける）、土瓶（火に掛けない）、水滴、

⑧釜

釜、茶釜

⑨鍋類

焙烙、土鍋、行平

⑩鐘類

瓦鐘（傘部・皿部とも）、火もらい、灯籠、手焙り

⑪杓子類

散蓮華、十能

⑫ひょう燭類

ひょう燭、カンテラ

⑬器台類

灯明皿、有脚灯明受皿

⑭蓋類

小椀蓋、中椀蓋、合子蓋、蓋物蓋、段重蓋、焼塩壺蓋、火消し壺蓋、七厘窓蓋、壺蓋、水注蓋、急須・土瓶蓋、土鍋・行平蓋、ひょう燭・カンテラ蓋、

⑮その他

## 8. 集計・表記方法

今回報告した遺構から、時代・出土量・種類共まとまった遺構を10選び、上記の分類基準に従い計測を行った。

計測方法は、計測の際の正確さを求め、口縁部換算値のみから推定個体数を求めた。口縁部の無い破片は0個体と換算し、体部から底部がほぼ完全に残り、口縁部もほぼ欠損の無いものは1個体と換算した。

口縁部の破片は、「口縁部半径チャート」を用いて小数第一位までを記録した。その値を合計したものが推定個体数である。

## 9. 分析結果

今回の入力方法としては、『桐・Ver5.0』を利用して、基礎データ（番号・遺構名・器種・破片数・個体数）を入力し（第432図）、遺構ごとに産地別構成比と用途別構成比をグラフ化した（第431図）。産地別構成比の凡例については個々のグラフに付した。用途別構成比の凡例については、A－食膳具（食べ物を盛る器ex. 椀、皿、鉢、猪口など）、B－調理具（食べ物を加工する道具ex. 搗鉢、焙烙、土瓶、急須など）、C－貯蔵具（物を保存する容器ex. 甕、壺、瓶、水注、手水鉢など）、D－調度具（暖房・灯明・喫煙・化

粧などに使用された器具ex. 香炉、火鉢、火入れ、瓦灯、灯明皿、積木鉢、香油壺など）、E-その他とした。

#### 〈遺構年代について〉

10の遺構を上限の年代順に並べると、SK43(B-8区)(17世紀後半～19世紀初頭)、SE22(A-1区2次面)(18世紀前半～18世紀後半)・SD06(A-2区)(18世紀中頃～19世紀前半)、SE16(A-1区2次面)(18世紀中頃～19世紀前半)と続き、その他はすべて18世紀後半以降のものである。SK145(A-2区)(～19世紀初頭)、SK49(A-3区)(～19世紀初頭)、SK1179(A-1区2次面)(～19世紀前半)、SK1171(A-1区2次面)(～19世紀前半)・SK285(A-1区1次面)(19世紀中頃～後半)、SK614(A-1区2次面)(19世紀中頃～後半)である。よって遺構の時期区分としては、Ⅲ-3期の遺物組成である。

#### 〈破片数と個体数について〉

破片数と個体数について、全体における比率には大差無いが、土師質土器などは破片数のほうが比率的には高くなる。これは土師質土器の場合、廃棄されるとき細かく割れる場合が多く、硬質な陶磁器の破片数と個体数が比較的同率あるいは個体数の方が上回ると対照的である。

#### 〈用途別構成比について〉

遺構の性格を知る上で、廃棄された遺物の用途別の傾向を把握しておくことは必要であり、用途別の数量化は産地別の数量化にも影響を与えたと考えられる。

各遺構における割合については大きな相違は無く、似た割合を示す。つまり、全体の50%前後を食膳具が占め、残り40%前後は調理具・調度具、10%は貯蔵具およびその他という配分である。

しかし、SE22とSK191はやや様相を異にする。つまり、SE22は食膳具が全体の90%を占め、調理具・貯蔵具はほとんど出土していない。これに対しSK191は調理具のみで37%を占め、これに貯蔵具の19%を合わせると食膳具の34%を超える値を示す。

#### 〈産地別構成比について〉

①全体的に多くの割合を占めるのが波佐見系の製品である。今回取り上げた遺構は主に18～19世紀を中心としたため、この傾向はさらに顕著である。

②存続年代が19世紀初頭で取まる遺構については在地系Ⅰ(土師質土器)が20～30%に近い値を占め、京焼系製品は15%以下と極めて少ない。

これに対して19世紀前半まで存続する遺構については、在地系Ⅰの割合は10%以下に落ち込むのに対して、京焼系製品は17～40%に近い値を示す。

この在地系Ⅰ(土師質土器)と京焼系製品の19世紀前後の変化は、同時期、波佐見系の製品が30～40%の定量を示すのに対して対照的である。

③18世紀中頃～19世紀の遺構においては土器組成に柿輪皿と称される産地は特定できないが、軟質釉が施された皿が一定含まれることも特徴である。今回計測を行った遺構ではその出現、盛行を示す時期を特定し得なかったが、18世紀後半～19世紀初頭の年代を与えられるSK49と19世紀中頃の年代が与えられるSK614において10～11%と占有率が高いことから、18世紀後半～19世紀中頃を中心をもつと考えられる。

これは伊丹郷町J R伊丹駅前の18世紀後半頃に急激に増えるという事実とも整合する。<sup>(註1)</sup>

④特定の産地が他を陵駕している例が4遺構認められるので少し触れておきたい。

#### S K1171・S K1179

全体の43～53%を京焼系製品が占める。これに伴い波佐見系製品の比率が激減している。両遺構の場合用途別構成比と対応させると他と比べて調理具の比率の高さが認められる。よって、土鍋・行平・土瓶などの調理具における京焼系製品の台頭が認められる。

#### S E22

18世紀代に存続年代が収まる遺構であるが、約95%を波佐見系製品を含む肥前系陶磁器で占める。これは用途別構成比と対照させると、食膳具が91%を占めていることに対応する様相と考えられるが、18世紀の食膳具の産地構成の一例である。

#### S D06

在地系I（土師質土器）が44.8%を占める。器種としては出土遺物中の焙烙の比率が他の遺構と比べて高い値を示すためである。用途別分類においても調理具が34.4%と他に比べて高い値を示す。

### 10. まとめ

今回の計測作業の成果として、特徴的なことを列記してきたが、伊丹郷町において、19世紀前半には京焼系製品が増加し、土師質土器が減少すること、これは調理具の産地に関わる可能性が指摘され、18世紀における食膳具が肥前系陶磁器に占有される事例も認められた。しかし、19世紀中頃～後半にかけてこの様相が改めて変化し、瀬戸・美濃焼製品の食膳具における占有率が増加すると考えられるが、今回はその時期に相当する遺構はS K285とS K614のみであったため、明確にはし得なかった。また、瀬戸・美濃焼製品の選別も限られた分類基準の中で行ったので、正確さを欠いたと思われる。しかし、今回の土器・陶磁器の計測、分類は初めての試みであり、今後の資料整理の進展に伴い18～19世紀にかけての遺物組成はより明確になると思われる。

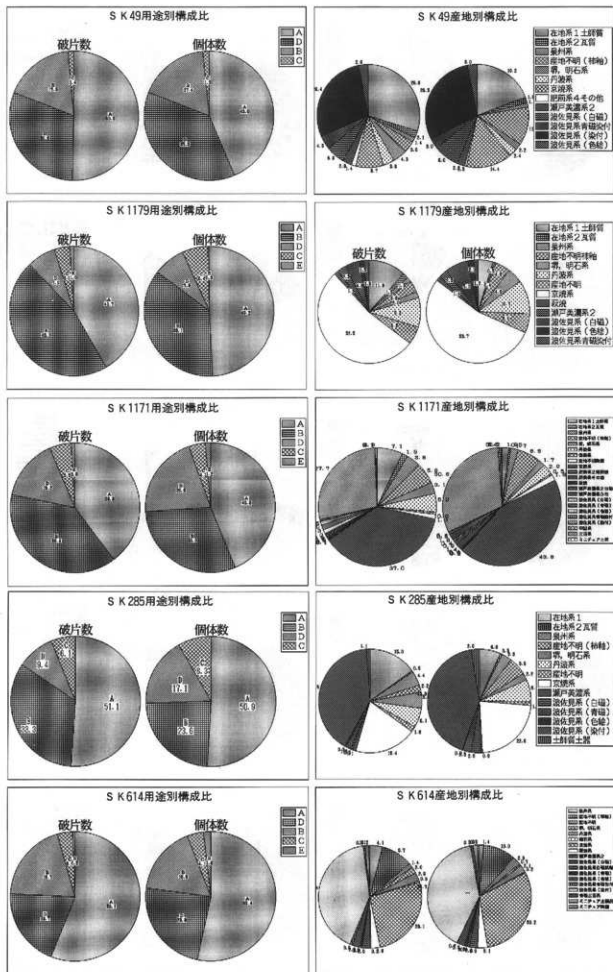
19世紀前半は、遺構についても礎石建物が認められるようになるなど、伊丹郷町期における大画面の一つであり、遺構・遺物両方の様相が合致している。

(註1) J R伊丹駅前の調査報告書において、口縁部破片数をカウントする方法を用いて計測を試みている。

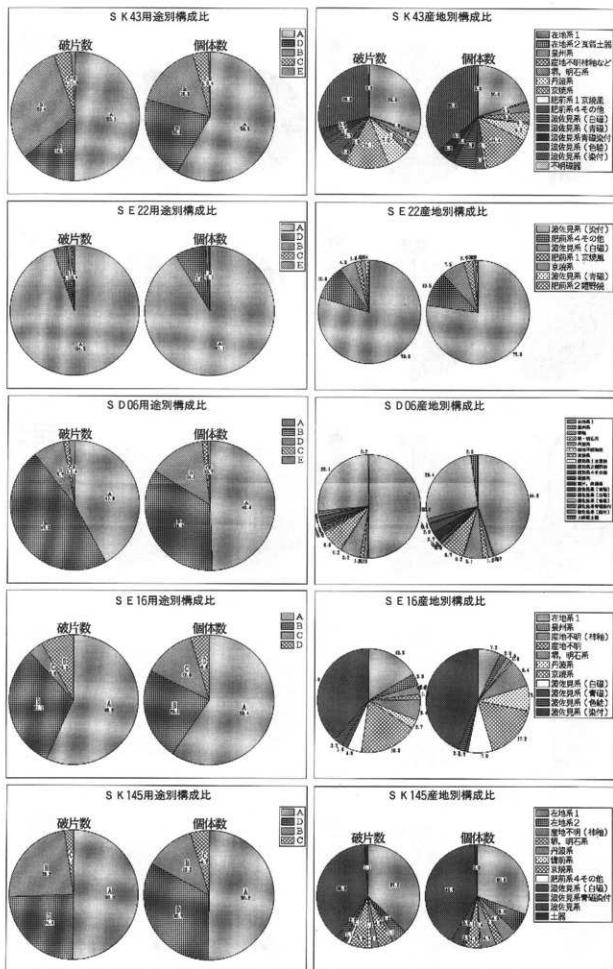
その成果の中の灯明具組成において、棒軸灯明具が伊丹郷町では18世紀後半頃に急増する事実が看取される。

川口宏海「第2章 結語」『有岡城跡・伊丹郷町II 第2分冊』大手前女子大学史学研究所 1992年

<付記> データー入力には、富山大学人文科学研究科 鈴木和子氏の協力を頂いた。記して感謝する次第である。



第431図 産地別構成比・用途別構成比グラフ(1)



第431図 産地別構成比・用途別構成比グラフ(2)

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
1	S D06	ほうらく	在地系 1	B	138	11.06
2	S D06	小皿	在地系 1	A	16	2.58
3	S D06	灯明皿	在地系 1	D	14	3.26
4	S D06	焔炉	泉州系	B	2	0.11
5	S D06	灯明皿	柿釉	D	4	0.57
6	S D06	摺鉢	堺・明石系	B	4	0.63
7	S D06	摺鉢	丹波系	B	10	0.6
8	S D06	小壺	丹波系	C	1	0.13
9	S D06	中甕	丹波系	C	2	0.11
10	S D06	小甕	丹波系	C	1	0.2
11	S D06	中鉢	丹波系	A	5	0.66
12	S D06	香炉	丹波系	D	1	0.31
13	S D06	小鉢	丹波系	A	1	0.3
14	S D06	不明	産地不明陶器	E	1	0.11
15	S D06	小椀	京焼系	A	1	0.09
16	S D06	中椀	京焼系	A	5	0.35
17	S D06	中皿	京焼系	A	4	0.2
18	S D06	小鉢	京焼系	A	3	0.3
19	S D06	不明	京焼系	E	1	0.03
20	S D06	土鍋	京焼系	B	1	0.05
21	S D06	土瓶	京焼系	B	2	0.04
22	S D06	灯明皿	京焼系	D	3	0.59
23	S D06	急須、土瓶蓋	京焼系	B	1	0.41
24	S D06	行平	京焼系	B	1	0.09
25	S D06	小杯	京焼系	A	1	0.4
26	S D06	中椀	肥前系 1 京風焼	A	2	0.19
27	S D06	中皿	肥前系 1 嬉野焼	A	3	0.22
28	S D06	中椀	肥前系 4 その他	A	1	0.16
29	S D06	中鉢	肥前系 4 その他	A	1	0.11
30	S D06	中皿	肥前系 4 その他	A	1	0.09
31	S D06	中椀	萩焼系	A	1	0.1
32	S D06	片口	瀬戸、美濃系	A	3	0.24
33	S D06	中椀	瀬戸、美濃系	A	1	0.81
34	S D06	小椀	波佐見系 (青磁)	A	1	0.34
35	S D06	中皿	波佐見系 (青磁)	A	2	0.45
36	S D06	火入	波佐見系 (青磁)	D	1	0.18
37	S D06	不明	波佐見系 (青磁)	E	1	0.04
38	S D06	小皿	波佐見系 (白磁)	A	1	0.17
39	S D06	中椀	波佐見系 (色絵)	A	1	0.03
40	S D06	小杯	波佐見系 (色絵)	A	1	0.04
41	S D06	小椀	波佐見系青磁染付	A	2	0.35
42	S D06	中椀蓋	波佐見系青磁染付	A	1	0.1
43	S D06	中椀	波佐見系 (染付)	A	53	5.44
44	S D06	大椀	波佐見系 (染付)	A	2	0.17
45	S D06	小皿	波佐見系 (染付)	A	12	1.44
46	S D06	小杯	波佐見系 (染付)	A	4	1.29
47	S D06	中椀蓋	波佐見系 (染付)	A	1	0.03
48	S D06	小壺	波佐見系 (染付)	C	1	0.05

第432図 伊丹町遺物計測基礎データ (1)



	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
49	SD06	小椀	波佐見系(染付)	A	9	0.97
50	SD06	蓋物	波佐見系(染付)	A	1	0.12
51	SD06	火入	波佐見系(染付)	D	3	0.37
52	SD06	不明	波佐見系(染付)	E	2	0.1
53	SD06	鉢形	土師質土器	A	1	0.9
54	SK191	植木鉢	産地不明	D	1	0.38
55	SK191	灯明皿	産地不明(柿釉)	D	4	
56	SK191	土鍋	京焼系	B	3	0.44
57	SK191	行平	京焼系	B	2	0.11
58	SK191	土鍋、行平蓋	京焼系	B	5	0.74
59	SK191	小杯	京焼系	A	1	0.25
60	SK191	小椀	京焼系	A	1	0.1
61	SK191	小椀	波佐見系(染付)	A	1	0.22
62	SK191	中椀	波佐見系(染付)	A	3	0.48
63	SK191	小鉢	波佐見系(染付)	A	2	0.15
64	SK191	大皿	波佐見系(染付)	A	1	0.03
65	SK191	小皿	波佐見系(染付)	A	2	0.33
66	SK191	仏飯具	波佐見系(染付)	D	1	0.11
67	SK191	摺鉢	堺、明石系	B	1	0.09
68	SK191	中甕	丹波系	C	1	0.05
69	SK191	中壺	中国製	C	1	0.78
70	SK191	ほうらく	在地系1	B	1	0.08
71	SK191	小皿	在地系1	A	1	0.15
72	SK191	火消葺	泉州系	C	1	0.1
73	SK191	焜炉	泉州系	B	5	0.38
74	SK1241 (SE22)	土鍋、行平蓋	京焼系	B	1	0.01
75	SK1241	急須、土瓶蓋	京焼系	B	1	0.18
76	SK1241	不明	京焼系	E	1	0.04
77	SK1241	中椀	肥前系1京焼系	A	4	0.74
78	SK1241	中皿	肥前系2糖野焼	A	1	0.08
79	SK1241	中椀	肥前系4その他	A	5	0.75
80	SK1241	中皿	肥前系4その他	A	5	0.82
81	SK1241	中鉢	肥前系4その他	A	10	0.96
82	SK1241	大鉢	肥前系4その他	A	2	0.17
83	SK1241	中壺	肥前系4その他	C	1	0.05
84	SK1241	火入	肥前系4その他	D	1	0.08
85	SK1241	中椀	波佐見系(白磁)	A	4	0.65
86	SK1241	小椀	波佐見系(白磁)	A	1	0.31
87	SK1241	小皿	波佐見系(白磁)	A	2	0.28
88	SK1241	中鉢	波佐見系(白磁)	A	1	0.17
89	SK1241	小杯	波佐見系(白磁)	A	2	0.3
90	SK1241	紅藩口	波佐見系(白磁)	D	1	0.33
91	SK1241	火入	波佐見系(青磁)	D	1	0.11
92	SK1241	中鉢	波佐見系(青磁)	A	1	0.05
93	SK1241	小椀	波佐見系(染付)	A	22	3.33
94	SK1241	中椀	波佐見系(染付)	A	133	13.39
95	SK1241	小皿	波佐見系(染付)	A	7	1.6
96	SK1241	小杯	波佐見系(染付)	A	2	0.34

第432図 伊丹町遺物計測基礎データ(2)

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
97	SK1241	紅猪口	波佐見系 (染付)	D	1	0.68
98	SK1241	仏花瓶	波佐見系 (染付)	D	1	0.1
99	SK1241	香油壺	波佐見系 (染付)	D	1	0.62
100	SK1241	火入	波佐見系 (染付)	D	2	0.19
101	SK1241	中鉢	波佐見系 (染付)	A	1	0.02
102	SK1241	大皿	波佐見系 (染付)	A	6	0.51
103	SK43	小皿	在地系1	A	25	3.55
104	SK43	ほうらく	在地系1	B	51	2.9
105	SK43	灯明皿	在地系1	D	13	1.94
106	SK43	火鉢	在地系2 瓦質土器	D	2	0.19
107	SK43	焼炉	泉州系	B	7	0.59
108	SK43	十能	泉州系	B	1	0.59
109	SK43	不明	産地不明柿釉など	E	1	0.04
110	SK43	灯明皿	産地不明柿釉など	D	4	1.15
111	SK43	灯明受皿	産地不明柿釉など	D	1	0.2
112	SK43	摺鉢	堺、明石系	B	4	0.3
113	SK43	摺鉢	丹波系	B	6	0.27
114	SK43	お南黒壺	丹波系	D	1	0.18
115	SK43	中甕	丹波系	C	6	0.6
116	SK43	小壺	丹波系	C	1	0.29
117	SK43	中鉢	丹波系	A	2	0.16
118	SK43	小甕	丹波系	C	5	0.69
119	SK43	火入	京焼系	D	2	0.28
120	SK43	灯明皿	京焼系	D	3	0.94
121	SK43	灯明受皿	京焼系	D	1	0.18
122	SK43	土鍋、行平蓋	京焼系	B	2	0.13
123	SK43	小椀	京焼系	A	11	1.88
124	SK43	土瓶	京焼系	B	8	0.84
125	SK43	土鍋	京焼系	B	12	1.27
126	SK43	中椀	京焼系	A	2	0.5
127	SK43	不明	京焼系	E	1	0.05
128	SK43	中椀	肥前系1 京焼風	A	1	0.31
129	SK43	火入	肥前系4 その他	D	1	0.15
130	SK43	中鉢	肥前系4 その他	A	3	0.17
131	SK43	大鉢	肥前系4 その他	A	1	0.04
132	SK43	中椀	肥前系4 その他	A	2	0.83
133	SK43	不明	肥前系4 その他	E	1	0.1
134	SK43	中壺	瀬戸美濃系	C	1	0.07
135	SK43	中椀	瀬戸美濃系	A	1	0.05
136	SK43	紅猪口	波佐見系 (白磁)	D	8	2.24
137	SK43	中椀	波佐見系 (白磁)	A	4	0.27
138	SK43	小杯	波佐見系 (白磁)	A	2	0.37
139	SK43	火入	波佐見系 (青磁)	D	2	0.62
140	SK43	香炉	波佐見系 (青磁)	D	2	0.53
141	SK43	中椀	波佐見系 (青磁)	A	1	0.05
142	SK43	小椀	波佐見系青磁染付	A	5	0.91
143	SK43	中椀	波佐見系青磁染付	A	5	0.44
144	SK43	仏飯具	波佐見系 (色絵)	D	1	0.03

第432図 伊丹町遺物計測基礎データ (3)

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
145	S K43	猪口	波佐見系 (染付)	A	1	0.49
146	S K43	小杯	波佐見系 (染付)	A	1	0.47
147	S K43	蓋物	波佐見系 (染付)	A	3	0.37
148	S K43	小皿	波佐見系 (染付)	A	6	0.47
149	S K43	中皿	波佐見系 (染付)	A	6	1.75
150	S K43	香炉	波佐見系 (染付)	D	1	0.07
151	S K43	小碗蓋	波佐見系 (染付)	A	2	0.33
152	S K43	中碗蓋	波佐見系 (染付)	A	8	2.37
153	S K43	中碗	波佐見系 (染付)	A	50	7.03
154	S K43	小碗	波佐見系 (染付)	A	7	1.66
155	S K43	中碗	不明磁器	A	1	0.13
156	S K1179	灯明皿	在地系1 土師質	D	3	0.25
157	S K1179	小皿	在地系1 土師質	A	1	0.06
158	S K1179	ほうらく	在地系1 土師質	B	19	0.75
159	S K1179	釜	在地系2 瓦質	B	2	0.07
160	S K1179	火鉢	在地系2 瓦質	D	1	0.05
161	S K1179	焜炉	泉州系	B	3	0.1
162	S K1179	灯明受皿	産地不明柿釉	D	1	0.39
163	S K1179	灯明皿	産地不明柿釉	D	5	0.58
164	S K1179	土鍋	産地不明柿釉	B	1	0.07
165	S K1179	摺鉢	堺、明石系	B	4	1.04
166	S K1179	大甕	丹波系	C	3	0.81
167	S K1179	中甕	丹波系	C	3	0.21
168	S K1179	小甕	丹波系	C	3	0.41
169	S K1179	小皿	丹波系	A	1	0.23
170	S K1179	摺鉢	丹波系	B	6	0.58
171	S K1179	中鉢	丹波系	A	1	0.08
172	S K1179	小鉢	丹波系	A	1	0.08
173	S K1179	急須、土瓶蓋	産地不明	B	4	0.5
174	S K1179	中鉢	産地不明	A	6	0.77
175	S K1179	不明	産地不明	E	1	0.08
176	S K1179	茶入	京烧系	C	1	0.11
177	S K1179	土瓶	京烧系	B	26	3.29
178	S K1179	土鍋	京烧系	B	16	1.6
179	S K1179	行平	京烧系	B	18	1.93
180	S K1179	灯明受皿	京烧系	D	2	0.11
181	S K1179	蓋物蓋	京烧系	A	1	0.85
182	S K1179	土瓶蓋	京烧系	B	6	0.61
183	S K1179	鍋類蓋	京烧系	B	23	2.53
184	S K1179	小碗	京烧系	A	3	0.13
185	S K1179	灯明皿	京烧系	D	5	0.85
186	S K1179	不明	京烧系	E	1	0.02
187	S K1179	小碗	萩烧	A	3	0.33
188	S K1179	瓶拵火鉢	瀬戸美濃系2	D	1	0.35
189	S K1179	火鉢	瀬戸美濃系2	D	1	0.05
190	S K1179	中碗	瀬戸美濃系2	A	1	0.06
191	S K1179	小碗	瀬戸美濃系2	A	1	0.1
192	S K1179	不明	瀬戸美濃系2	E	1	0.02

第432図 伊丹町遺物計測基礎データ(4)

	遺構番号	器 種	産地別	用途別	破片数	個体別
193	S K1179	小杯	波佐見系 (白磁)	A	2	0.06
194	S K1179	薄手酒杯	波佐見系 (白磁)	A	1	0.15
195	S K1179	紅猪口	波佐見系 (白磁)	D	1	0.21
196	S K1179	中皿	波佐見系 (白磁)	A	4	0.39
197	S K1179	小瓶	波佐見系 (白磁)	C	1	0.8
198	S K1179	中碗	波佐見系 (色絵)	A	1	0.08
199	S K1179	小鉢	波佐見系 (色絵)	A	1	0.13
200	S K1179	蓋物蓋	波佐見系 (色絵)	A	1	0.25
201	S K1179	小碗	波佐見系青磁染付	A	3	0.27
202	S K1179	小坏	波佐見系 (染付)	A	3	0.55
203	S K1179	小碗	波佐見系 (染付)	A	24	5.71
204	S K1179	中碗	波佐見系 (染付)	A	26	3.14
205	S K1179	小皿	波佐見系 (染付)	A	3	0.78
206	S K1179	中皿	波佐見系 (染付)	A	4	0.23
207	S K1179	小鉢	波佐見系 (染付)	A	5	0.72
208	S K1179	中鉢	波佐見系 (染付)	A	8	0.75
209	S K1179	猪口	波佐見系 (染付)	A	1	0.11
210	S K1179	中碗蓋	波佐見系 (染付)	A	8	1.07
211	S K1179	小碗	波佐見系 (染付)	A	1	0.47
212	S K1179	中碗	産地不明	A	1	0.25
213	S K145	ほうらく	在地系 1	B	16	2.11
214	S K145	灯明皿	在地系 1	D	16	4.62
215	S K145	火鉢	在地系 2	D	2	0.55
216	S K145	瓦火傘	在地系 2	D	1	0.78
217	S K145	灯明皿	産地不明 (柿釉)	D	1	1
218	S K145	摺鉢	梨、明石系	B	4	0.56
219	S K145	中甕	丹波系	C	1	0.04
220	S K145	中瓶	丹波系	C	1	1
221	S K145	小鉢	備前系	A	1	0.1
222	S K145	中碗	京焼系	A	4	0.34
223	S K145	小碗	京焼系	A	1	0.66
224	S K145	中鉢	肥前系 4 その他	A	1	0.04
225	S K145	小皿	波佐見系 (白磁)	A	1	0.12
226	S K145	中碗	波佐見系青磁染付	A	1	0.29
227	S K145	小碗	波佐見系青磁染付	A	1	0.54
228	S K145	中碗蓋	波佐見系	A	2	0.81
229	S K145	小碗	波佐見系	A	8	3.72
230	S K145	中碗	波佐見系	A	23	4.34
231	S K145	ミニチュア土瓶	土器	D	1	0.21
232	S K614	灯明皿	泉州系	D	1	0.05
233	S K614	ほうらく	泉州系	B	10	1.05
234	S K614	焼塩壺蓋	泉州系	C	1	0.2
235	S K614	火酒壺	泉州系	C	2	0.29
236	S K614	灯明皿	産地不明 (柿釉)	D	19	6.4
237	S K614	鉢型容器	産地不明 (柿釉)	A	1	0.62
238	S K614	灯明受皿	産地不明 (柿釉)	D	12	4
239	S K614	土鍋蓋	産地不明 (柿釉)	B	1	0.1
240	S K614	小碗	産地不明	A	2	1.29

第432図 伊丹郡町遺物計測基礎データ (5)

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
241	SK614	急須、土瓶蓋	産地不明	B	1	0.33
242	SK614	小壺	産地不明	C	1	0.3
243	SK614	植木鉢	産地不明	D	1	0.9
244	SK614	摺鉢	堺、明石系	B	7	0.87
245	SK614	摺鉢	丹波系	B	1	0.05
246	SK614	大瓶	丹波系	C	2	1.11
247	SK614	植木鉢	丹波系	D	3	0.87
248	SK614	中瓶	丹波系	C	3	0.33
249	SK614	小壺	備前系	C	1	0.15
250	SK614	火入	備前系	D	1	0.18
251	SK614	小瓶	京焼系	C	1	1
252	SK614	中水注	京焼系	D	1	0.35
253	SK614	小水注	京焼系	D	3	0.3
254	SK614	土瓶	京焼系	B	13	2.22
255	SK614	土鍋	京焼系	B	2	0.4
256	SK614	行平	京焼系	B	13	3.66
257	SK614	灯明皿	京焼系	D	9	5.79
258	SK614	灯明受皿	京焼系	D	2	1.18
259	SK614	急須、土瓶蓋	京焼系	B	5	3.02
260	SK614	鍋類蓋	京焼系	B	13	5.67
261	SK614	蓋物蓋	京焼系	A	4	1.29
262	SK614	カンテラ水注蓋	京焼系	D	2	2
263	SK614	小椀	京焼系	A	3	0.96
264	SK614	中椀	京焼系	A	10	1.84
265	SK614	蓋物	京焼系	A	1	0.17
266	SK614	急須	京焼系	B	1	1
267	SK614	植木鉢	京焼系	D	2	0.25
268	SK614	烏鉢	京焼系	D	1	0.98
269	SK614	花瓶	京焼系	D	1	0.06
270	SK614	中壺蓋	京焼系	C	2	1.2
271	SK614	小椀	萩焼系	A	7	2.82
272	SK614	中鉢 (片口鉢)	萩焼系	A	3	0.65
273	SK614	中鉢	瀬戸美濃系 2	A	1	0.01
274	SK614	小椀	波佐見系 (白磁)	A	5	1.59
275	SK614	大瓶	波佐見系 (白磁)	A	1	0.13
276	SK614	中鉢	波佐見系 (白磁)	A	1	0.12
277	SK614	合子	波佐見系 (白磁)	A	1	0.3
278	SK614	紅皿	波佐見系 (白磁)	D	1	0.76
279	SK614	中椀	波佐見系白磁鉄箱	A	1	0.74
280	SK614	香炉	波佐見系 (青磁)	D	1	0.9
281	SK614	小椀	波佐見系 (色絵)	A	5	0.92
282	SK614	大椀	波佐見系 (色絵)	A	1	0.6
283	SK614	段重	波佐見系 (色絵)	A	1	0.28
284	SK614	蓋物蓋	波佐見系 (色絵)	A	1	0.77
285	SK614	小椀	波佐見系青磁染付	A	1	0.1
286	SK614	中椀	波佐見系青磁染付	A	2	0.19
287	SK614	小杯	波佐見系 (染付)	A	2	1.5
288	SK614	小椀	波佐見系 (染付)	A	42	13.87

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
289	S K614	中椀	波佐見系 (染付)	A	49	15.06
290	S K614	大椀	波佐見系 (染付)	A	1	0.12
291	S K614	極薄手酒杯	波佐見系 (染付)	A	2	0.52
292	S K614	仏飯具	波佐見系 (染付)	D	1	0.19
293	S K614	小皿	波佐見系 (染付)	A	3	0.51
294	S K614	中皿	波佐見系 (染付)	A	9	1.72
295	S K614	中鉢	波佐見系 (染付)	A	8	1.56
296	S K614	蓋物	波佐見系 (染付)	A	2	0.96
297	S K614	御神酒德利	波佐見系 (染付)	D	2	1
298	S K614	中椀蓋	波佐見系 (染付)	A	16	5.38
299	S K614	蓋物蓋	波佐見系 (染付)	A	1	0.52
300	S K614	小椀蓋	波佐見系 (染付)	A	3	0.97
301	S K614	香炉	青磁三田系	D	1	0.13
302	S K614	中鉢	青磁三田系	A	1	0.92
303	S K614	片口	ミニチュア土製品	D	3	1.37
304	S K614	鉢	ミニチュア土製品	D	1	0.12
305	S K614	小壺	ミニチュア陶器	D	1	0.6
306	S K285	小皿	在地系1	A	5	0.72
307	S K285	ほうらく	在地系1	B	18	0.79
308	S K285	灯明皿	在地系1	D	4	0.71
309	S K285	火鉢	在地系2 瓦質	D	1	0.2
310	S K285	焜炉	泉州系	B	7	0.7
311	S K285	器台	泉州系	A	1	0.41
312	S K285	灯明皿	産地不明 (柿釉)	D	3	1.52
313	S K285	灯明受皿	産地不明 (柿釉)	D	1	0.35
314	S K285	摺鉢	堺、明石系	B	9	0.74
315	S K285	小甕	丹波系	C	3	0.27
316	S K285	中甕	丹波系	C	6	0.52
317	S K285	中壺蓋	丹波系	C	1	1
318	S K285	お歯黒壺	丹波系	D	1	0.49
319	S K285	急須	産地不明	B	1	0.05
320	S K285	植木鉢	産地不明	D	2	0.35
321	S K285	土瓶	京焼系	B	1	0.11
322	S K285	土鍋	京焼系	B	13	2.31
323	S K285	行平	京焼系	B	9	1.69
324	S K285	土鍋, 行平蓋	京焼系	B	1	0.58
325	S K285	急須, 土瓶蓋	京焼系	B	1	0.94
326	S K285	灯明皿	京焼系	D	1	0.07
327	S K285	小椀6	京焼系	A	6	0.66
328	S K285	中椀	京焼系	A	1	0.13
329	S K285	中鉢	京焼系	A	1	0.1
330	S K285	蓋物蓋	京焼系	A	1	1
331	S K285	小皿	瀬戸美濃系	A	1	0.13
332	S K285	小椀	瀬戸美濃系	A	1	0.1
333	S K285	大瓶	波佐見系 (白磁)	C	1	1
334	S K285	小椀	波佐見系 (青磁)	A	1	0.13
335	S K285	中鉢	波佐見系 (青磁)	A	1	0.07
336	S K285	中椀	波佐見系 (青磁)	A	1	0.66

第432図 伊丹郷町遺物計測基礎データ (7)

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
337	S K285	中碗	波佐見系 (色絵)	A	1	0.03
338	S K285	中碗	波佐見系 (染付)	A	40	5.66
339	S K285	小碗	波佐見系 (染付)	A	15	3.99
340	S K285	火入	波佐見系 (染付)	D	1	0.15
341	S K285	小皿	波佐見系 (染付)	A	6	1.23
342	S K285	中皿	波佐見系 (染付)	A	1	0.12
343	S K285	蓋物蓋	波佐見系 (染付)	A	2	0.5
344	S K285	中碗蓋	波佐見系 (染付)	A	1	0.25
345	S K285	小杯	波佐見系 (染付)	A	6	1.16
346	S K285	香油壺	波佐見系 (染付)	D	1	1
347	S K285	ミニチュア植木鉢	土師質土器	D	1	0.35
348	S K285	ミニチュア水注蓋	土師質土器	D	1	0.55
349	S K1171	種小皿	在地系1 土師質	A	5	0.3
350	S K1171	ほうらく (無耳)	在地系1 土師質	B	36	2
351	S K1171	火消壺	在地系2 瓦質	C	1	0.07
352	S K1171	羽釜	在地系2 瓦質	B	2	0.13
353	S K1171	焜炉	在地系2 瓦質	B	2	0.13
354	S K1171	火鉢	在地系2 瓦質	D	4	0.33
355	S K1171	火鉢	泉州系	D	3	0.53
356	S K1171	焜炉	泉州系	B	9	0.54
357	S K1171	火消壺	泉州系	C	3	0.39
358	S K1171	火消壺蓋	泉州系	C	2	0.27
359	S K1171	七厘きな	泉州系	B	2	0.26
360	S K1171	急須	泉州系	B	1	0.01
361	S K1171	不明	泉州系	E	2	0.08
362	S K1171	灯明皿	産地不明 (柿軸)	D	27	5.14
363	S K1171	灯明受皿	産地不明 (柿軸)	D	6	2.59
364	S K1171	不明	産地不明 (柿軸)	E	1	0.05
365	S K1171	摺鉢	堺、明石系	B	18	2.01
366	S K1171	小甕	丹波系	C	5	0.64
367	S K1171	中鉢	丹波系	A	1	0.08
368	S K1171	小鉢 (匠鉢)	丹波系	A	3	0.47
369	S K1171	小壺	丹波系	C	3	0.31
370	S K1171	摺鉢	丹波系	B	3	0.24
371	S K1171	植木鉢	丹波系	D	2	0.22
372	S K1171	中甕	丹波系	C	12	1.46
373	S K1171	小壺	備前系	C	2	0.3
374	S K1171	摺鉢	備前系	B	1	0.11
375	S K1171	小甕	備前系	C	1	0.2
376	S K1171	小皿	産地不明陶器	A	2	0.49
377	S K1171	植木鉢	産地不明陶器	D	3	0.4
378	S K1171	不明蓋	産地不明陶器	E	1	1
379	S K1171	小鉢	産地不明陶器	A	2	0.09
380	S K1171	灯明皿	京焼系	D	22	5.41
381	S K1171	灯明受皿	京焼系	D	8	4.25
382	S K1171	灯明台	京焼系	D	3	2.55
383	S K1171	土瓶、急須蓋	京焼系	B	19	10.9
384	S K1171	蓋物	京焼系	A	1	0.16

第432図 伊丹町遺物計測基礎データ (8)

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
385	S K1171	蓋物蓋	京焼系	A	8	4.41
386	S K1171	土鍋、行平蓋	京焼系	B	46	7.49
387	S K1171	土鍋	京焼系	B	20	2.41
388	S K1171	行平	京焼系	B	34	4.82
389	S K1171	土瓶	京焼系	B	26	3.7
390	S K1171	ちろり	京焼系	B	1	0.17
391	S K1171	中水注	京焼系	D	1	0.15
392	S K1171	小鉢	京焼系	A	12	1.77
393	S K1171	中鉢	京焼系	A	2	0.75
394	S K1171	大鉢	京焼系	A	3	0.35
395	S K1171	中壺	京焼系	C	1	0.2
396	S K1171	火入	京焼系	D	3	0.84
397	S K1171	花瓶	京焼系	D	1	0.26
398	S K1171	小杯	京焼系	A	1	0.19
399	S K1171	不明	京焼系	E	1	0.28
400	S K1171	小椀	京焼系	A	1	0.1
401	S K1171	仏飯具	肥前系2 嬉野焼	D	1	0.25
402	S K1171	大鉢	肥前系その他	A	1	0.11
403	S K1171	小椀	萩焼	A	3	0.58
404	S K1171	小皿	瀬戸美濃系2 白磁	A	3	1.73
405	S K1171	水指	瀬戸美濃系3 他	C	1	0.19
406	S K1171	手水鉢	瀬戸美濃系3 他	C	1	0.88
407	S K1171	中椀 (天目茶碗)	瀬戸美濃系3 他	A	1	0.06
408	S K1171	小椀	波佐見系 (白磁)	A	2	0.13
409	S K1171	中椀	波佐見系 (白磁)	A	2	0.14
410	S K1171	極薄手酒杯	波佐見系 (白磁)	A	2	0.3
411	S K1171	小杯	波佐見系 (青磁)	A	2	0.53
412	S K1171	小皿	波佐見系 (青磁)	A	2	0.48
413	S K1171	小鉢	波佐見系 (青磁)	A	1	0.13
414	S K1171	香炉	波佐見系 (青磁)	D	1	0.49
415	S K1171	火入	波佐見系 (青磁)	D	1	0.42
416	S K1171	急須	波佐見系 (青磁)	B	1	0.05
417	S K1171	小杯	波佐見系 (色絵)	A	2	0.29
418	S K1171	中椀	波佐見系 (色絵)	A	1	0.08
419	S K1171	小皿	波佐見系 (色絵)	A	1	0.05
420	S K1171	小鉢	波佐見系 (色絵)	A	2	0.2
421	S K1171	小椀	波佐見系青磁染付	A	2	0.08
422	S K1171	小皿	波佐見系青磁染付	A	1	0.04
423	S K1171	大椀	波佐見系 (染付)	A	1	0.78
424	S K1171	中椀	波佐見系 (染付)	A	55	6.75
425	S K1171	小椀	波佐見系 (染付)	A	22	6.39
426	S K1171	極薄手酒杯	波佐見系 (染付)	A	3	0.42
427	S K1171	小皿	波佐見系 (染付)	A	24	5.75
428	S K1171	中皿	波佐見系 (染付)	A	8	1.82
429	S K1171	大皿	波佐見系 (染付)	A	1	0.1
430	S K1171	小鉢	波佐見系 (染付)	A	7	2.17
431	S K1171	中鉢	波佐見系 (染付)	A	8	2.76
432	S K1171	猪口	波佐見系 (染付)	A	1	1

第432図 伊丹町遺物計測基礎データ(9)



	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
433	S K1171	蓋物	波佐見系 (染付)	A	3	0.68
434	S K1171	段重	波佐見系 (染付)	A	5	0.5
435	S K1171	中碗蓋	波佐見系 (染付)	A	16	4.58
436	S K1171	小碗蓋	波佐見系 (染付)	A	5	2.2
437	S K1171	急須	波佐見系 (染付)	B	1	0.08
438	S K1171	大皿	中国系	A	1	0.47
439	S K1171	中皿 (角皿)	三田系	A	1	0.67
440	S K1171	ミニチュア鉢	ミニチュア土器	D	1	0.1
441	S K1171	鍋	ミニチュア土器	D	1	0.15
442	S K1064 (SE16)	小皿	在地系 1	A	1	0.15
443	S K1064 S E	ほうらく	在地系 1	B	17	1.27
444	S K1064 S E	火鉢	泉州系	D	3	0.36
445	S K1064 S E	炬炬	泉州系	B	1	0.05
446	S K1064 S E	灯明皿	産地不明 (柿釉)	D	1	0.13
447	S K1064 S E	灯明受皿	産地不明 (柿釉)	D	2	0.17
448	S K1064 S E	植木鉢	産地不明	D	2	0.16
449	S K1064 S E	摺鉢	堺、明石系	B	7	1.65
450	S K1064 S E	小甕	丹波系	C	1	0.06
451	S K1064 S E	大甕	丹波系	C	1	0.5
452	S K1064 S E	大甕	丹波系	C	1	1
453	S K1064 S E	中碗	京焼系	A	7	1.13
454	S K1064 S E	小碗	京焼系	A	3	0.69
455	S K1064 S E	土瓶蓋	京焼系	B	2	0.51
456	S K1064 S E	土鍋蓋	京焼系	B	2	0.24
457	S K1064 S E	蓋物蓋	京焼系	A	1	0.01
458	S K1064 S E	土鍋	京焼系	B	2	0.17
459	S K1064 S E	土瓶	京焼系	B	3	0.63
460	S K1064 S E	小碗	波佐見系 (白磁)	A	4	0.6
461	S K1064 S E	大瓶	波佐見系 (白磁)	C	1	0.95
462	S K1064 S E	小碗	波佐見系 (青磁)	A	1	0.05
463	S K1064 S E	香炉	波佐見系 (青磁)	D	1	0.09
464	S K1064 S E	小皿	波佐見系 (色絵)	A	2	0.37
465	S K1064 S E	小杯	波佐見系 (色絵)	A	1	0.08
466	S K1064 S E	小皿	波佐見系 (染付)	A	2	0.49
467	S K1064 S E	極小皿	波佐見系 (染付)	A	1	0.05
468	S K1064 S E	小杯	波佐見系 (染付)	A	1	0.31
469	S K1064 S E	小鉢	波佐見系 (染付)	A	1	0.1
470	S K1064 S E	小碗	波佐見系 (染付)	A	3	0.44
471	S K1064 S E	中碗	波佐見系 (染付)	A	30	5.7
472	S K1064 S E	中鉢	波佐見系 (染付)	A	1	0.3
473	S K1064 S E	中碗蓋	波佐見系 (染付)	A	1	0.05
474	S K1064 S E	合子蓋	波佐見系 (染付)	A	1	0.15
475	S K1064 S E	大鉢	波佐見系 (染付)	A	1	0.96
476	S K49	灯明皿	在地系 1 土師質	D	30	3.64
477	S K49	ほうらく	在地系 1 土師質	B	11	0.83
478	S K49	ほうらく	在地系 2 瓦質	B	2	0.34
479	S K49	火鉢	在地系 2 瓦質	D	1	0.09
480	S K49	火鉢	泉州系	D	1	0.19

第432図 伊丹郷町遺物計測基礎データ (10)

	遺構番号	器種	産地別	用途別	破片数	個体別
481	S K49	火消壺蓋	泉州系	C	1	0.11
482	S K49	灯明皿	産地不明 (柿輪)	D	3	1.86
483	S K49	灯明受皿	産地不明 (柿輪)	D	2	0.92
484	S K49	摺鉢	堺、明石系	B	6	0.52
485	S K49	中壺	丹波系	C	1	0.24
486	S K49	中鉢	丹波系	A	4	0.33
487	S K49	土瓶	京焼系	B	3	1.62
488	S K49	土鍋蓋	京焼系	B	1	0.14
489	S K49	土瓶蓋	京焼系	B	1	0.61
490	S K49	小碗 (色絵)	京焼系	A	2	0.65
491	S K49	小碗 (灰)	京焼系	A	3	0.18
492	S K49	小碗 (白)	京焼系	A	1	0.05
493	S K49	蓋物	京焼系	A	1	0.1
494	S K49	小鉢	肥前系4その他	A	1	0.06
495	S K49	小碗	肥前系4その他	A	1	0.07
496	S K49	小碗	瀬戸美濃系2	A	2	0.24
497	S K49	蓋物	瀬戸美濃系2	A	1	0.19
498	S K49	中碗	瀬戸美濃系2	A	1	0.1
499	S K49	紅猪口	波佐見系 (白磁)	D	4	0.98
500	S K49	中碗	波佐見系 (白磁)	A	1	0.17
501	S K49	蓋物蓋	波佐見系 (白磁)	A	1	0.5
502	S K49	小碗	波佐見系 (白磁)	A	1	0.16
503	S K49	中碗蓋	波佐見系 (白磁)	A	1	0.06
504	S K49	中碗	波佐見系青磁染付	A	3	0.26
505	S K49	中鉢	波佐見系青磁染付	A	2	0.12
506	S K49	小碗	波佐見系青磁染付	A	1	0.34
507	S K49	小杯	波佐見系 (染付)	A	1	0.3
508	S K49	小碗	波佐見系 (染付)	A	8	1.24
509	S K49	中碗	波佐見系 (染付)	A	18	2.65
510	S K49	小皿	波佐見系 (染付)	A	2	0.37
511	S K49	中皿	波佐見系 (染付)	A	3	0.2
512	S K49	小鉢	波佐見系 (染付)	A	1	0.14
513	S K49	中鉢	波佐見系 (染付)	A	2	0.18
514	S K49	中碗蓋	波佐見系 (染付)	A	2	0.51
515	S K49	大碗	波佐見系 (染付)	A	1	0.27
516	S K49	水滴	波佐見系 (染付)	D	1	1
517	S K49	小碗	波佐見系 (色絵)	A	2	0.45
518	S K49	小皿	波佐見系 (色絵)	A	2	0.25

第432図 伊丹町遺物計測基礎データ (11)

### 第3節 遺構から見た近世伊丹郷町のありかた—まとめにかえて—

前章、既に各項目において建物遺構の残存状況の悪さについて記し、推測を交えながらも事実記載を中心に建物復元を行った。確認できたもののみで屋敷地全体を復元することはやや危険であるものの、この節では、それに立脚しながら、解釈を加え総括してみたい。さらに、年代的にもやや不正確な要素も持っている。それは、調査時に分層発掘を試みながら、その後各層の遺構の遺物を検討すると、充分に上面おける遺構の精査が出来ていなかったようであり、かなりの新しい時期の遺構を古い面で調査することになってしまっている。

以下の点を念頭に置きながら、次に考えてみたい。

#### 1 屋敷地利用の方法について（第433～436図参照）

A-1・2・3・5, B-8区は、いずれの面においても屋敷地区画溝や推定屋敷割線の変更は見られない。すなわち、18世紀後半に成立した屋敷割がそのまま踏襲されて現在にまで継続してきたと考えられる。遺構変遷の評価については、前章で既に述べられており、重複を避け、ここではある生活面での分析を中心に行いたい。以下に、各地区ごとに屋敷割を説明し、大きく空間利用の方法について考えてみたい。

##### 〈A-1区〉

1次面=19世紀半ば

2次面=18世紀末から19世紀初頭

とおおよそそのような年代が与えられる。<sup>(注1)</sup>

この調査区では、石組み排水溝で区画された屋敷地が、6個検出されている。18世紀末には成立しており、屋敷割の大幅な変更はなかったと想定される。石組み排水溝は、いずれも、若干掘形を作った後、下部に胴木を敷き、同様の形状の花崗岩切石を使用し、掘形と切り石の間に土を充填するという方法を用いている。部分的には、2次面では、凝灰岩の偏平な石を上部に載せている。充填土の中から部分的ではあるが、18世紀末の土器群が出土しており、設定年代が確定できる。

なお、絵図の分析から、発掘区の南側は、東西の主要幹線道路である昆陽口道が走っており、発掘区の西側の南北には、そこから入る比較的大きな道路があったと考えられている。

##### 屋敷地I

1次面

東西約12.0m, 南北約9.0mを測る。

東西二つに屋敷地が分かれる(a・b)。aでは、東西約7.0m, 南北約9.0mを測る。bでは、東西約5.0m, 南北約9.0mを測る。井戸は2つの建物で共同であったようで、境界の裏に設定されている。便所は、埋裏形式のものが、S B01北側及びS B02東側に2個セットで配置される。

2次面

2次面の残存状況は悪く建物は明確には判らない。しかしながら、3個セットの礎石を中心とした建物(a)、礎石列が確認(b)の大きく二分が可能である。この3個セットで掘形に配置する形式の礎石は、上部に平らな石を載せて上に、酒蔵に代表される大きな建築物を載せた可能性が高い。<sup>(注2)</sup> 建物の北西隅に2連式のカマ

ドが検出されている。

### 屋敷地II

1次面・2次面

東西約12.0m, 南北約9.0mを測る。

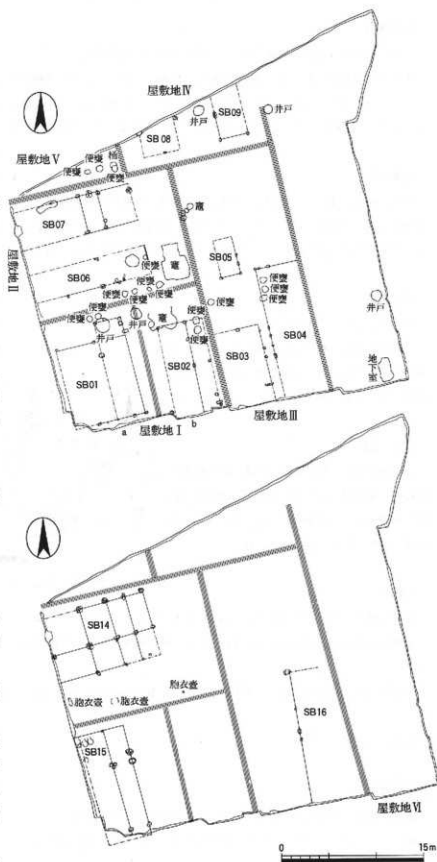
南北二つに屋敷地が分かれる可能性もあるが、ここでは一つのもと想定して考える。

先述した通り、2次面の酒蔵が1次面でも連続して使用されていた可能性があり、その場合、SB06・07が同一の建物となる。便所は、建物南側の石組み溝沿いに、埋甕形式で2個連続で4個検出されている。時期が異なる作り替えの可能性がある。2次面では南東の隅にカマドとその側に大型の井戸が検出された。これらのことから、酒造施設が検出されていないものの、酒蔵の可能性<sup>(注3)</sup>がある。

### 屋敷地III

東西約8.0m, 南北約19.0mを測る。北側半分は別の屋敷地の可能性もある。

南北の排水溝によって、東西に屋敷地が分かれる(a・b)。屋敷地aの裏側に埋甕形式の便所が1つある。屋敷地bの北西には、埋甕形式の便所が3つある。西の排水溝に向かって溝が流れている。屋敷地a・bのどちらに属するかは不明であるが、1間×2間の小規模建物が存在する。



第433図 第51次調査A-1区屋敷制概念図

#### 屋敷地Ⅳ

東西約8.0m, 南北約28.0mを測る。北側の屋敷境は不明瞭である。

礎石の残存状況が良くなく、建物の復元は不可能である。しかし、遺構の少ない個・東側との多い個・西側の二つに分かれる。この二つの地区について、東側に建物を推定する説もある(川口1989)。2次面で検出されているが、19世紀半ばの遺構であるSK614は、地下室と想定される。これは、建物の下ということになる。

#### 屋敷地Ⅴ

東西約9.0m, 南北約2.5m以上を測る。屋敷地の南東の一角が検出されている。1次面では、埋変形式の便所が2個対で検出されており、2次面では、酒樽を半裁して埋めたものが4個連続で検出されており、それよりやや小さな桶が隣接して検出されている。これらは、内面の付着物から便所と考えられる。

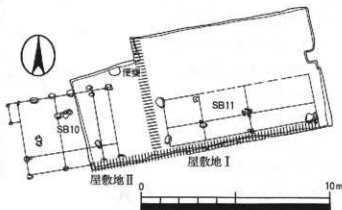
#### 屋敷地Ⅵ

2次面は不明であるので、1次面を考えてみたい。

東西約11.0m, 南北約5.5m以上を測る。東西で屋敷地が2分される可能性が高い。東西の建物の間に、井戸が存在する。

#### <A-2区>

この地区は、「天保15年(1844)伊丹郷町分間絵図」(第1図)の中の「山行道」中ほどの西側に位置する。東3分の2と西3分の1で、屋敷地が分離される(屋敷地Ⅰ・Ⅱ)。



第434図 第51次調査A-2区屋敷割概念図

#### 屋敷地Ⅰ

建物遺構は、1次面のみ明瞭であり、2次面以下は不明である。

東西約6.6m以上, 南北約4.5m以上を測る。屋敷地南側に偏って建物が建てられている。

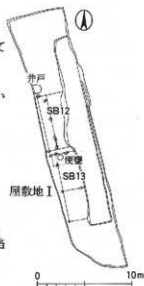
屋敷割溝は、花崗岩の削石を利用してその上に凝灰岩の板石を横に並べて載せている。

地口は、東側と考えられる。

#### 屋敷地Ⅱ

建物遺構は、1次面のみ明瞭であり、2次面以下は不明である。

面積については、不明であるが、絵図を見ると、南北の細長い地割の北部分に相当する可能性がある。



第435図 第51次調査A-3区屋敷割概念図

#### <A-3区>



第436図 第78次調査A-5区  
屋敷割概念図

この地区は、「天保伊丹絵図」の中の「山行道」中ほどの東側に位置する。この建物遺構については、1次面のみ明らかになっている。東西棟2棟が明らかになっているのみである。

〈A-5区〉

この地区は、東西幹線道路に面した北側の地点である。

建物遺構は、1・2次面両方で検出されているが、基本的な屋敷割は変化していない。東西建物を区画する溝が検出されており、大きな屋敷割のなかの小分割である可能性が高い。

## 2 居住空間の利用方法

A-1区は、伊丹郷町の中で従来の調査のうちで最も広い面積を調査したものであり、屋敷地利用の方法などの、遺構どうしの関連性を理解するのに適した発掘調査区である。次に、伊丹郷町の居住空間の利用方法の類型を従来の事例も踏まえて考えてみたい。

まず、大屋敷割を18世紀末頃、石組み溝で実施し、その中を2分割に小屋敷割するという方法である<sup>(注4)</sup>。建物の内部は、2分割され、土間（ウチニワ）と居住部分に分かれる。居住部分の床下には、湿気抜きのためか、焼土処理土壌が掘られ、大量の焼土が捨てられることが多い。カマドは、2連式のものもあるが、4から5連式のものゝ弧状をなして作られる例が多い。便所遺構は、その居住部分の最も奥や建物横の裏側の石組み溝にそって設定される<sup>(注5)</sup>。その中の便槽は、酒樽を半載したのから、大谷焼や一部丹波焼の甕に変化していったものと考えられる。その年代は、19世紀後半と考える意見もあるが（川口1991）、ここでは、旧暦の年代を改め19世紀半ば頃としておく。井戸も基本的には、屋敷裏に存在する。地下室は、間口部分の土間付近に設定される。19世紀初頭までは見られず、19世紀半ば以降のものが多い。今回の地区では水琴窟が検出されなかったことも特徴的である。階層性との関連性が想定される。胞衣壺も今回の調査区では多くなかったが、やや階層の高い階層で良く見られる。

## 3 発掘調査区の位置付け

次に、それぞれの屋敷地の規模からみた、伊丹郷町内における発掘調査地区の屋敷地の階層的位置付けを考えてみたい。

筆者は以前、元禄絵図を利用して、屋敷地の規模と職業の相関性をデータベースを利用して分析し、発掘区の階層を推定したことがある（伊丹市教育委員会1994）。その際のグラフを利用して、今回のA-1区の屋敷地の階層を考察したい。前提として、「元禄7年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図」に描かれている個別の屋敷割が小屋敷割に比定されると考え、元禄年間の相関性と19世紀が、ある程度同様であると考へた。

『伊丹市史』第2巻（伊丹市1969）では、町場職業構成について、同じく「元禄絵図」の数量的分析から、1多くの村村において四割を越える家が日用（日やとい）で生活していること。2後家はほとんどが糸引き（糸つむぎ）を職業としていること。3その他酒造関係、米・綿・木綿の取引関係、馬借関係の職業が多いこと。などが挙げられている。

第437図は、それぞれの職業別の屋敷地規模の散布を示したものである。1は、日用、2は、糸引、3は、

庄屋である。1の分布は、間口が1間と2間にある程度かたまり約1.0~8.0m、奥行が12間半にピークをもって約4.0~50.0mと広がっている。2の分布は、間口が約1.0~6.0m、奥行約10.0~30.0mと1の分布よりさらに小規模になっている。1や2に対して、3は、間口が約8.0~21.0m、奥行が24.0~40.0mと全く異なる大規模な領域を示す。

第437図の2中に記した黒三角形が、A-1区の屋敷地の規模である。以上のように考えると今回の検出遺構はいずれも、日用から糸引きクラスということで、かなりの下層に位置すると考えられる。

## 第4節 本調査の意義

### 1 遺物の計量的分析の結果について

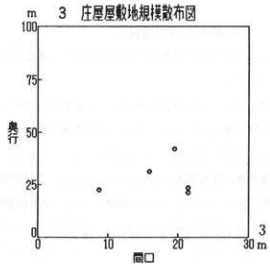
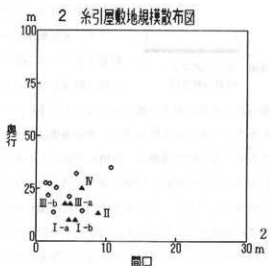
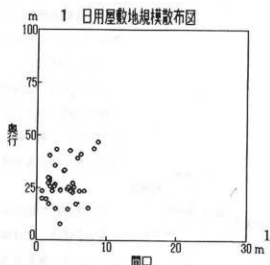
前節における遺物分析の新しい方法は、伊丹郷町の遺物分析を大きく前進させたといえる。すなわち、口縁部換算値から推定個体数を求める方法である。既に、宇野隆夫やクリーブ・オルトンによって、破片数から器種別構成比を求める危険性については、指摘されているところである(宇野1992、クリーブ・オルトン1987)。そして、近世遺跡では、新宿区内藤町遺跡報告書で詳細に述べられている方法である(東京都建設局ほか1992)。

今回の整理作業では、底部計測法は、同心円の上で計測しづらいし、個体識別法は、慣れが必要である。調査補助員クラスでは、正確な識別が不可能である。

われわれは、今回の新しい方法によって、用途別構成比については、食器類が極端に多い遺構や調理具が多い遺構が抽出できた。さらに、産地別構成比については、19世紀前半に在地系土器から京焼製品に転換していくことや18世紀後半から19世紀半ば頃に柿種製品が<sup>(2P6)</sup>盛行することの2点の事実が新たに明らかあるいは確認された。これらの点は重要である。

### 2 おわりに

今回の報告書において、遺物の計測方法を新たに



第437図 職業別屋敷地規模散布図  
(1日用、2糸引、3庄屋、三角印は検出遺構)

提示し、町家の類型を推測しながらも、ある程度表せたと考えている。

伊丹郷町の発掘調査は、現在も進行中であり、今後かなりの新しい事実が明らかになってくることあるかと思われる。現在未だ、コンテナに換算して1000箱以上の遺物が整理中であり、全ての作業が終了するのは、5年後頃である。総合評価については、その折に、伊丹市教育委員会とも協議の上、実施するとして、ある程度の見通しを付け、仮説を公表することが調査者の責務であると考えている。今後、こうした機会に批判を受け、訂正されていくことになると思うが、このような基礎的作業を継続していきたいと望んでいる。大方のご批判を戴きたい。

<註>

(註1) 筆者による前稿では、この1次面の時期比定を18世紀末から19世紀初頭としたが、ここで年代を訂正しておく(前川1991)。

(註2) この形式の礎石は、伊丹郷町では酒蔵に通用であるが、その建設技術が町家にも影響を及ぼした可能性もある。

(註3) この地点の場合、削平を受けているため、酒造関係遺構も本来は存在した可能性もある。しかし、後述するように、屋敷規模から見れば、屋敷地Ⅱは比較的小さく、単なる町家とも考えられる。

(註4) 花崗岩石組み溝の上に、板石の礎灰岩を載せる例が多く見られるが、それは年代をやや下げて、19世紀前半頃と考えている(前川1991)。

(註5) 勿論、この類型のみではなく、酒蔵のような3つの基礎石を配石するものや土間をもたないものなど、いくつか存在する。今後検討していきたい。

(註6) 柿種製品の出現については、大阪や堺では、18世紀代に遡上する可能性があり、明らかに、地域性が存在する。

<参考文献>(50音順)

伊丹市『伊丹市史』第2巻伊丹市役所 1969

伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所『有岡城跡・伊丹郷町』 1994

宇野隆夫「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992

川口宏海「関西における住空間」『江戸の住空間とその周辺』江戸遺跡研究会第2回大会、発表要旨 1989

「近世在郷町における屋敷地利用の変遷—摂津国伊丹郷町を中心として—」『大手前女子短期大学・大手前栄堂文化学院・大手前ビジネス学院研究集録』第11号 1991

クリーブ・オルトン著、小沢一雄・及川昭文訳『数理解考古学入門』雄山閣 1987

東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会『内藤町遺跡』 1992

前川要『都市考古学の研究—中世から近世への展開—』柏書房 1991

#### 参考・引用文献

井汲隆夫他『東京都新宿区内藤町遺跡—放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』新宿区内藤町遺跡調査会 1992年

井上光貞監修『図説歴史散歩事典』山川出版社 1979年

大橋康二他『国内出土の肥前磁器』佐賀県立九州陶磁資料館 1984年

大橋康二『肥前磁器』ニュー・サイエンス社 1988年



- 大平 茂「下相野窯址—近世丹波焼の調査—」『近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1992年
- 小川 望「刻印からみた焼塩壺の系統性について」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室 1990年
- 小長谷正治「伊丹郷町発見の焙烙窯（兵庫県伊丹市）」『関西近世考古学研究』II 1991年
- 川口宏海「胎衣壺考」『大手前女子学園研究集録第9号』大手前女子学園 1989年
- 川口宏海「大谷焼探訪記」『いな文化財調査室だよりNO. 5』大手前女子大学史学研究所文化財調査室 1990年
- 川口宏海・前川 要「右岡城跡・伊丹郷町II—JR駅前市街地再開発に伴う調査報告書』大手前女子大学史学研究所 1992年
- 関西近世考古学研究会編「近世陶磁器の諸様相—消費地における18・19世紀の器種構成—」関西近世考古学研究会 1994年
- 建築資料研究所「水琴窟アラルクト」『庭別番庭の水景』 1986年
- 古泉 弘『江戸の考古学』ニュー・サイエンス社 1987年
- 佐々木達夫『日本史小百科陶磁』近藤出版社 1991年
- 堺市博物館編『博多と堺』堺市博物館 1993年
- 嶋谷和彦「堺環濠都市遺跡発掘調査報告—宿院町東4丁SKT14地点・調御寺跡—」『堺市文化財調査報告第20集』堺市教育委員会 1984年
- 白神典之「堺摺鉢について」『堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告堺市文化財調査報告第37集』堺市教育委員会 1984年
- 白神典之「堺摺鉢と明石摺鉢」『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編江戸遺跡研究会 1990年
- 鈴木重治「京焼と京焼写し—生産と流通—」『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編江戸遺跡研究会 1990年
- 鈴木裕子「江戸遺跡出土の瓦灯について—ラフスケッチ—」『江戸在地系土器の研究I』江戸在地系土器研究会 1991年
- 田口昭二『美濃焼』ニュー・サイエンス社 1985年
- 富樫雅彦他『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会 1988年
- 豊田 進「阿波のやきもの」『日本やきもの集成10』平凡社 1988年
- 中川信作他『難波宮址の研究第8』大阪市文化財協会 1984年
- 長崎県窯業試験場編『波佐見古陶磁文様集』肥前波佐見焼振興会 1985年
- 中村 浩他『大阪府文化財調査報告30陶器3』大阪府教育委員会 1978年
- 中村 浩『和泉陶器窯の研究』柏書房 1981年
- 檜崎彰一編『丹波』『日本陶磁全集11』中央公論社 1977年
- 檜崎彰一他『萩焼古窯』日本工芸会山口支部 1990年
- 難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究第九』大阪市文化財協会 1992年
- 長谷川 真「丹波系摺鉢について」『中・近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会 1988年
- 藤井直正・川口宏海・藤本史子・前川要「大坂城三の丸跡III」大手前女子大学史学研究所 1988年
- 藤沢良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要5』瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤沢良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要6』瀬戸市歴史民俗資料館 1987年

- 藤本史子「伊丹郷町における出土陶磁器の様相」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 前川 要「有岡城惣構の再検討」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 前川 要「近世城下町発生に関する考古学研究」『ヒストリア第121号』大阪歴史学会 1988年
- 前川 要「伊丹郷町の都市構造の変化とその歴史的背景」『いな文化財調査室だよりNO. 2』大手前女子大学史学研究so文化財調査室 1990年
- 前川 要「都市考古学の研究—中世から近世への展開—」柏書房 1991年
- 前川 要「有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ—三軒寺前プラザ建設に伴う発掘調査報告書—」大手前女子大学史学研究so1994年
- 間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社 1991年
- 水野正好「江州高島産石硯資料瞥見録」『滋賀考古学論叢第2集』滋賀考古学論叢刊行会 1985年
- 森田克之他「摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会 1984年
- 八木哲浩編『伊丹市史』第1～5巻伊丹市役所 1968～1972年
- 八木哲浩編『伊丹古絵図集成伊丹史料叢書6』伊丹市役所 1982年

## 〈表紙図版解説〉

表紙の図版に使用したのは、第51次調査区A-1区のSK1171から出土した染付の中鉢で、中国清朝の作品であり舶載された可能性のある磁器である。

器壁の外面一ばいに、「赤壁賦」として、一行8字で19行、計152字の文字が記されているが、中国宋代の詩人として有名な、蘇軾（蘇東坡）作の「赤壁賦」の冒頭の部分である。全文は次の通り（太字の部分は欠失）であるが、読みと共に掲げておく。

壬戌之秋七月既望	壬戌の秋、七月既望
蘇子与客泛舟遊於	蘇子、客と舟を泛べて
赤壁之下清風徐來	赤壁の下に遊ぶ、清風徐ろに來りて
水波不興舉酒屬客	水波興らず、酒を舉げて客に屬め
誦明月之詩歌窈窕	明月の詩を誦し、窈窕の章を歌う
之章少焉月出於東	少焉にして、月、東山の上に出で
山之上徘徊於斗牛	斗牛の間に徘徊す
之間自露橫江水光	白露、江に横たわり、水光
接天縱一苇之所如	天に、接す、一苇の如く所を縦にして
凌萬頃之茫然浩浩	万頃の茫然たるを凌ぐ、浩浩
乎知馮虛御風而不	乎として虚に馮り、風に御して
知其止所飄飄乎如	其の止まる所を知らざるか如く、飄飄乎として、
遺世獨立羽化而登	世を遺れて独り立ち、羽化して登仙するか如し
仙於是飲酒樂甚扣	是に於て酒を飲んで楽しむこと甚し
舷而歌之歌曰桂棹	舷を扣いて之を歌う、歌に曰く、桂の棹
兮蘭槳擊空明兮明	蘭の槳、空明に撃ちて
流光滂沱兮予懷望	流光を沅る、滂沱たる予が懐い
美人兮天一方客有	美人を天の一方に望むと、客に
吹洞簫者倚歌而和	洞簫を吹く者有り、歌に倚りて之に和す

器面に記された文面はこれだけであり、以下は省略するが、「赤壁賦」はなお延々とつづく長文の詩である。詩の題材であり、舞台となった赤壁とは、岸の名で、中国湖北省嘉魚県の北東、長江（揚子江）の南岸に所在している。三国時代、呉の孫権の武将であった周瑜（175～210）が、兵船の焼き討ち作戦によって、魏の曹操の大軍を打ち破った場所として有名である。

「赤壁賦」はこの故事と古跡をふまえているが、作者である蘇軾が訪れたのは、湖北省黄冈県の城外で、誤って曹操の敗れた古戦場としたのである。

蘇軾（1036～1101）は、北宋期の政治家、文豪、唐宋八代家の一人として著名である。字は子瞻、号は東坡居士。現在の四川省眉山の人で、22才で進士となり、試験官の歐陽修に文才を認められた。多くの作品をのこしているが、中でも「赤壁賦」「後赤壁賦」は名作として親しまれた。

中国明代・清代の染付や、それを模倣した日本の肥前磁器には、中国の景勝地や古跡が描かれ、漢詩文が記された作品が多い。陶磁器への関心が高まり、器形の変化やうつりかわりについては、細部にわたって研

究が進められているのにくらべると、文様・図柄についての関心は決して高いとはいえない。とくにそこに選ばれた題材は当時の人びとや、陶磁器を受した人びととの嗜好が反映しているであり、文化の側面を物語っているといっても過言ではない。そうした意味において本資料は貴重な遺例である。

(藤井直正)

なお、本文を書くに当たっては、石川忠久氏監修、NHKグループ編の『NHK漢詩紀行(三)』(NHK出版協会発行)を参照した。